岩 波 文 庫
33-805-6

アウグスティヌス

神　の　国

（四）

服部英次郎 訳

岩 波 書 店

Aurelius Augustinus

DE CIVITATE DEI

目次

はしがき

この訳書は、つぎにかかげる『トイブナ書店版、ギリシア・ローマ著作家文庫』に依るものである。

S. Aureli Augustini Episcopi De Civitate Dei Libri XXII ex recensione B. Dombart, quartum recognovit A. Kalb. Vol. I, Lib. I–XIII, Vol. II Lib. XIV–XXII. Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMXXVIII, MCMXXIX.

各巻の各章の見出しは、読者の参考のために訳者がつけたものである。

本書は、全五分冊からなり、第一分冊は原著第一—第五巻を、第二分冊は第六—第十巻を、第三分冊は第十一—第十四巻を、第四分冊は第十五—第十八巻を、第五分冊は第十九—第二十二巻をおさめ、解説は第一分冊目に、索引、文献目録などは第五分冊目の巻末につける。

なお、本分冊は、本訳書の協力者である藤本雄三君を共訳者としたことを付記する。

神の国
（四）

第十五巻

第一章

人類の起源と終極にかんする二種の秩序について

楽園における幸福について、楽園そのものについて、そして、楽園における最初の人間たちの生、その罪と罰について、多くの人びとがさまざまなことを考え、さまざまなことを主張し、さまざまなことを文字に託してきたのであった。わたしたちもまた、先の諸巻において(一)、これらのことがらにかんして、聖なる書にもとづいて、その中にわたしたちが読んだところのものやそこからわたしたちが理解することのできたところのものを述べたのであったが、その際、わたしたちはその書の権威を遵守するよう努めたのであった。しかしながら、いっそう詳細にそれらのことが訊ね求められるばあいには、当面の仕事が要求し、そのための時間が許すより以上の多くの巻をもって展開されねばならぬような、きわめて多くの、そして種々様々なる議論を招くことになるであろう。わたしたちは、閑暇をもてあまして微に入り細に入り知りたが

って、自分の理解力をこえたことまで訊ねようとする人びとが問い求めるであろうようなあらゆることにまでかかずらわねばならぬほどの時間のゆとりを持ち合わせてはいないのである。

とはいえ、わたしは、わたしたちがすでに宇宙や魂の、そして人類そのものの始まりにかんする重要かつ紛糾をきわめた問題をかなり論究したと思っている。その際、わたしたちは人類を二つの種類に区分したのであった。そのひとつは人間にしたがって生きる者たちから成り、他方は神にしたがって生きる者たちから成るのであって、わたしたちはまた、これら二つのものを、象徴的な意味で二つの国とよぶのである。これは人間の二つの社会のことであるが、そのひとつは神と共に永遠に統治するよう予定されており、他方は悪魔と共に永遠の罰を引き受けるよう予定されているのである。けれども、それはこれらの社会の終極のことなのであって、それについてはのちに語らねばならない(三)。

さて、その数はわたしたちには未知であるところの天使たち、および、二人の最初の人間における二つの国の起源にかんしては、十分に述べられたのであるから、いまやわたしたちは、最初の一対の者たちが子孫を設けることをはじめたときから、人間が子孫を設けることを止めるであろうときまでのこれらの国の経過の記述に着手せねばならないときに至っていると思われるのである。というのは、わたしたちが論ずるところの二つの国は、この全時間もしくは全時代——この全時代をつらぬいて、死んでいく者はその場所を明け渡し、それに代って生れる者はその場所を占めていくのである——にわたって拡がっているのだからである。

こうして、人類のあの二人の祖から、人間の国に属するカインがまず生れ、そのあとで神の

国に属するアベルが生れたのであった。すなわち、わたしたちが個人としての人間において、使徒が「先にあるのは霊のものではなく、動物的な(生きた)ものであって、そののち霊的なものがくるのである」(三)と語ったところのことを経験するのであるが(そしてそれゆえにそれぞれの者はすべて、その者が罰に定められた子孫から出てくるのであるからには、アダムからして必然的に悪しく、肉的である。しかし、もしもキリストにおける再生をとおして進歩するなら、のちに善き者、霊的な者となるであろう)、それと同じように人類全体においても、これら二つの国が、出生と死の連続をとおして進行しはじめたとき、まずはじめに生れたのはこの世の民であって、そのあとで、神の国に属する者でありながらこの世を旅する者が現れたのであった。この者こそは、恩寵によって予定され、恩寵によって選ばれ、恩寵によって地上を旅し、恩寵によって天上の民なのである。もちろん、この者自身にかんするかぎり、もともと全体として罰をうけている同じ塊から出ているのであるが、神は、いわば陶工のように(この比喩を使徒は無分別に用いたわけでなく、深い考えにもとづいて用いたものである)(四)、その同じ塊から、ひとつを貴いことに用いる器として、いまひとつをいやしいことに用いる器として、おつくりになったのである。それというのも、すでに述べたように、個人としての人間においてまずはじめにくるのは粗悪なものであって、それはすなわち、わたしたちがそこから出発しなければならぬのであるが、かならずしもそこにとどまっておらねばならぬわけではないところのものであり、そしてそののちに良質のものがくるのだからである。良質のものとは、わたしたちが進歩したならそれへと到達し、また、それへ到達した者はそこにとどまるところのもので

ある。だからして、たしかに、すべての悪しき人間が善き者となるというわけではない。善き者であっても、もともと悪しくなかったというような者はだれもいないということなのである。けれども、ある者がより善き者へと変化するのがはやければはやいほど、それだけすみやかにかれが達成するところのものにしたがって命名されるようになるのであって、それまでの呼び名はあとの呼び名の下に隠されてしまうであろう。

このようなわけで、聖書はカインについて、かれがひとつの都市を創設したと記しているのである。(五) 他方、アベルは旅する者として都市を創設することはなかったのであった。というのは、聖徒たちの国は、その民をこの地上で得るのではあるけれども、天にあるからである。その国は王国の時が到来するまではその民において旅をつづけるのであって、その時には、その身体において復活せしめられたすべての者を集めるであろう。それは、約束された王国がかれらに与えられるときなのであって、かれらはその王国において、かれらの君主である「万世の王」(六) と共にいかなる時間の終極もなく支配するであろう。

(一) とくに第十四巻。
(二) 第十九巻—第二十二巻。
(三) 「コリント人への第一の手紙」一五の四六。
(四) 「ローマ人への手紙」九の二一。
(五) 「創世記」四の一七。
(六) 「テモテへの第一の手紙」一の一七参照。

第二章

この世の都がもっている二つの性格、および肉の子どもと約束の子どもについて

たしかに、この国についての一種の影、預言的な像が存在したのであって、この像は、その国を現実に描き出すためのものというよりは、むしろ象徴的な仕方で暗示するためのものなのであった。それは、そのような暗示が差し出されるべきであった一定の時期に、この地上においてその国のために仕えるものであった。それはまた聖なる都とよばれたのであるが、しかし、未来におこる真理を明瞭に示す像であったわけではなく、あくまで象徴的に暗示する像であった。この仕えるものとしての像と、それが暗示しているところのかの自由の都とについては、使徒がガラテヤ人たちにあてでつぎのようにいっているのである。——「律法の下に服していようと思う人たちよ、わたしにいうがよい。あなたたちは律法のいうところを聞かないのか。アブラハムには二人の子があったが、その一人は奴隷女から、他の一人は自由女から生れたと記されているのである。奴隷女の子は肉によって生れ、自由女の子は約束をとおして生れたのであった。この事実は比喩的にいわれているのである。すなわち、この女たちは二つの契約のことである。一つは、シナイの山から出て奴隷となる者を生む。これはアガルである。ところで、シナイはアラビアにある山であって(アガルは、アラビアではシナイの山をさすのであって)、それはいまのエルサレムにあたるのである。というのは、それは子たちと共に奴隷とな

っているからである。しかし、上なるエルサレムは自由の女であって、かの女はわたしたちの母である。すなわちこう記されているのである。『石女(うまずめ)で子を生まぬ者よ、よろこべ。産みのくるしみを知らぬ者よ、声をあげてよろこべ。ひとり住まいの女の子どもの数は、夫のある女の子どもより多い』(一)と。さて、兄弟たちよ、あなたたちはイサクにしたがって約束の子である。けれども当時、肉によって生れた者が霊によって生れた者を迫害したように、いまも同様である。しかし、聖書は何といっているか。『奴隷女とその子を追い出せ。奴隷女の子は自由女の子と一緒に遺産を相続することがないのだから』(二)とある。兄弟たちよ、わたしたちは奴隷女の子ではなく自由女の子なのである。自由を得させるためにキリストはわたしたちを解放してくださったのである(三)」。

使徒の権威から出てわたしたちのもとに届けられているこのような解釈の仕方は、わたしたちが二つの契約、すなわち新約と旧約の書をどのようにうけとるべきであるかを開示している。すなわち、この世の都のある部分が、それ自身とは別の都を暗示することにより、天上の国の像としてもたらされたのであって、したがってそれは仕えるものなのである。というのは、それは、それ自身のために建設されたわけではなく、他の都を象徴的に暗示するために建設されたからなのである。そして、それもまたそのものとは別の先行する象徴をもって暗示されたのであるから、予示する象徴がそれ自身、すでに予示されていたのである(四)。なぜなら、サラの下女であったアガルとその息子は、この像のある種の像であったからである。しかし、影は光の到来によって立ち去るべきものであるから、自由女サラは自由の都を暗示したのであって、こ

の都は、かの影であるアガルがふたたび他の仕方によっても暗示されるために仕えたところの都なのである。すなわち、サラは「この奴隷女とその子を追い出してください。奴隷女の子は、わたしの子イサクと一緒に(使徒はここのところを「自由女の子と一緒に」といっているのである)遺産を相続することがないのですから」といったのであった。このようなわけで、わたしたちはこの世の都に二つの性格を見出すのであって、その一つは、そのものの現実の存在を示すのであり、他の一つは、そのものが現実に存在することによって天上の国が象徴的に暗示されるため仕えるのである。

しかしながら、この世の都の民は、罪によって破壊を蒙った自然本性において生れるのに対し、天上の都の民は、自然本性を罪から解き放つ恩寵によって生れるのである。だからこそ、前者が「怒りの器」とよばれ、後者が「あわれみの器」とよばれるわけである。そしてこのことがアブラハムの二人の息子においても象徴的に暗示されているのである。その一人は、アガルとよばれた奴隷女の子であるイスマエルであり、かれは肉にしたがって生れたのであったが、他方は、自由女サラの子であるイサクであって、かれは約束にしたがって生れたのであった。もちろん、両者ともアブラハムの種子から出た者たちなのであるが、しかし、一方は慣習に即して生れたのであり、それは「自然」を明示しているのに対し、他方は約束によって与えられたのであって、それは「恩寵」を暗示しているのである。前者においては人間的な習性が示されており、後者においては神の慈悲深さがあらわに示されているのである。

(一)「イザヤ書」五四の一。

(二)「創世記」二一の一〇。
(三)「ガラテヤ人への手紙」四の二一以下。
(四) アガルは地上のエルサレムを予示しており、そしてまた、このエルサレムが天上の都のある象徴である。アガルは奴隷女であり、エルサレムも奴隷の状態となった。したがってそれは、サラによって象徴される自由の都、天上のエルサレムを預言するものとして仕えるのである。

第三章

アブラハムの妻サラについて――その不妊と懐妊

周知のごとくサラは石女(うまずめ)であった。かの女は子どもを得るというのぞみを放棄していたのであった。そこで、すくなくとも自分の下女から、自分自身にはゆるされていないと悟っていたところのものを得ようと熱望したのである。かの女は自分の下女を受胎させるために夫に与えたのであった。(一) かの女自身は夫から子どもを産みたいとのぞんでいたが、それが不可能であったからである。したがってかの女は、他人の胎を借りてまでして自分の権利を行使してその負債を夫から回収したわけである。こうして、人間が両性の交接によって自然の通常の法則にしたがって生れるように、イスマエルが生れたのである。そのために「肉にしたがって(二)」といわれているのである。ただし、このことが神の恵みではなかったというのではない。あるいはま

たそれらのことが、そのかたの制作者としての知恵にかんして「世界の果てから果てまで力をおよぼし、すべてのものを甘美な仕方で司られる」(三)と記されているところの神の御業のなすところではないというのでもない。しかし、その自由な恩寵によって——義務によるのではなく——人間に与えられる神からの贈り物が示されねばならなかったところでは、自然の経過に帰属せしめられないような仕方で子どもが与えられねばならなかったのである。

なぜなら、自然は、すでにあの年齢に達していたアブラハムとサラのような男女の結合にたいしては子どもを拒否するのだからである。ことに、妻のほうには不妊性が付加されていたのであって、懐妊に適した年齢でなかったときでなく懐妊に適した年齢であったときでさえ、その可能性から閉ざされていたのであるから、あの当時、かの女が子どもを産むことは到底ありえなかったわけである。それゆえに、そのような状態にある自然に、子孫の果実を結ぶことがゆるされなかったという事実は、つぎのことを意味しているのである。すなわち、罪によって壊敗せられて、したがって正当にも罰を受けたところの人類の自然本性は、その将来において真実の幸福を得るに値しなくなっていたということである。

したがって、約束をとおして生れた人、イサクは、恩寵の子すなわち自由の国の民、永遠の平和に与る者を象徴しているのである。そこには、何らかの意味で利己的で私的な意志の愛は存在せず、同じ一つの共同の不可変の善をよろこび、多くの者から一つの心を生ずる(四)——それは愛(カリタス)の完全で一致した従順である——愛が存在するのである。

(二)「創世記」一六の一以下参照。

(二) 「ガラテヤ人への手紙」四の二三。
(三) 「知恵の書」八の一。
(四) 「使徒行伝」四の三二参照。

第四章

この世の国の争闘と平和について

他方、この世の国——それは永久に存続することはないであろう(というのは、最後の罰に定められるとき、それはもはや国ではないであろうからである)、——この国は地上にその善をもっており、その善に関与することによってそのような地上的事物から得ることのできるようなよろこびを味わうのである。このような善は、それを愛する者たちにいかなる不足もひきおこさぬような性質のものではけっしてないのであるからには、この国は一般に、不和や争闘や戦争によって勝利を追求し、それ自身の内部で反目しあって分裂するのである。まさにこの勝利こそは致命的な害をおよぼすものであり、また、すぐに死滅してしまうようなものなのである。

じっさい、その国のどんな部分であろうとある部分が他の部分に対して戦闘に立ちあがったなら、それ自身が悪徳の捕虜であるのに、他の民族の征服者となることを求めるのである。そ

して、勝利をおさめたとき、その傲慢がいよいよ高められるなら、たしかにその勝利は死を招くものとなるのである。しかし、成功する者には人間的条件や偶然というものが共通して付いていることを熟慮し、その順境ゆえに高慢に膨れあがるよりも、むしろいずれ起こるかもしれない逆境ゆえに不安にさせられるとするなら、この勝利もただ死すべきものであるにすぎない。というのも、勝利によって軛の下につないだ者たちを永久に支配しつづけることなど不可能であるからである。

しかしながら、その国自身もまた、それ自身が擁している人間の類にしたがってより善い国であるからには、この国が熱望するところの諸々のものが善ではないと主張するのは正しくないであろう。いずれにしてもその国も、最も低次のもののためにある種のこの世的平和を熱望するのである。もちろん、戦闘によってそれを獲得しようと欲しているのであるが——。なぜそれもまた善であるかといえば、一つの部分が勝利を占めてもはや抵抗する者がだれもいなくなったときには、そこには、たがいに反目しあう両者がそれまでもっていなかった平和が存するであろうからである。その平和は、相反目しあう両方の部分が、かれらが同時に所有することのできなかった事物についての不幸な欠乏ゆえに争っていたときにもつことのなかったものである。これが、労苦にみちた戦闘が求めるところの平和なのである。これが、いかにも栄光あるもののごとくに思われている勝利が手に入れるところの平和なのである。

けれども、いっそう正しい理由によってたたかった者が勝利をおさめるときには、その勝利が歓迎されるべきものであり、かつ望ましい平和の出現であることをだれも疑わないであろう。

それらのことが善であって、神の贈り物であることは疑いのないところである。とはいえ、上なる国に属しているより高次の善——そこにあっては勝利は永遠であって、最高の平和が確保されるであろう——が無視されて、これらの善が、唯一のものであると信じられるまでに切望されたり、あるいは、より高次の善と信じられるところのもの以上に愛されたりするなら、そのときには悲惨が伴うことは必然である。そして、すでにそこに存していた不幸が増大するばかりとなるであろう。

第五章

この世の国の創設者について——その兄弟殺しはローマの創設者によって再現されたのであった

さて、このようなわけで、この世の国の最初の創設者は兄弟殺しであったのである。すなわち、この者は、ねたみによって打ち負かされた結果、この世にあって巡礼の旅をいとなむ永遠の国のひとりの民であった弟を殺害したのだからである。だからして、それからずっとのちに、かの都市——すなわち、わたしたちが語っているこの世の国に属する首都となるべきところの、そして、きわめて多くの民族にたいして支配力を揮うものとなるべきところのかの都市が建設されるとき、最初の先例——それはギリシア人が「原型（アルケテュポン）」(一)とよぶものであるが——に、それ

と同類の一種の模像が対応して現れたのもおどろくにはあたらないであろう。なぜなら、そこにおいても、かれらの詩人のひとりが、ほかならぬその罪業に言及していっているように、

　これら最初の城壁は、

　したたる兄弟の血をもって汚された(三)

のだからである。

　このようなやりかたでローマが建設されたのであるが、それは、ローマの歴史が証言しているように、レムスがその兄であるロムルスによって殺害されたときであった。ただ、このばあい、二人ともこの世の国の民であったという点で異なっているのである。二人はともにローマ国家創設の栄誉を求めたのであったが、それは一人だけが享受するものであったから、二人がそれをもつことは不可能であったのである。たしかに、支配力をもって栄誉を得ようとのぞんだ者は、その力が生存する協同者によって減ぜられるなら、かれはいっそう小さい支配力を享受することになるであろう。そこで、一人の者だけが独占権のすべてを得るために協同者が除去されたのである。潔白によってより小さくかつより善くなるところのものが、邪悪によってより強大にかつより悪しくなったわけである。

　それにたいして、カインとアベルの兄弟にかんしては、両者はたがいにこの世的な事物について同じ欲望をもっていたのではなかった。そして、一方が他方を殺害したのは、もしも二人がともに支配力をもったなら一方の力が狭められるということによる他方にたいするねたみからではなかったのである(たしかにアベルは、兄によって建設されたその都における支配力を

求めたわけではなかった)。カインのねたみはまさに悪魔的なものなのであった。すなわち、そのねたみは、それによって悪しき者たちが善き者たちをねたむようなものであって、そこには、善き者たちは端的に善き者であり、悪しき者たちは端的に悪しき者であるという理由以外に何もないのである。というのも、善性の所有は、共同者が近づいたり、いつまでもとどまったりすることによって減少するものではけっしてないからである。むしろその反対なのであって、善性というものは、かれらのあいだに一致があればあるだけ協同者を分かつことのない愛(カリタス)によって、いよいよ広大なものになるような所有なのである。

要するに、この所有を共通のものとしてもとうとしない者は、この所有をもつことはないであろう。そしてその者は、そこにおいて協同者をより愛することができればできるだけ、所有をいっそう広い範囲において見出すであろう。したがって、レムスとロムルスとのあいだにおこったことは、この世の国がどのようにそれ自身に反目して分裂せられるのであるかを明示したのであったが、他方、カインとアベルとのあいだにおこったことは、二つの国すなわち神の国と人間の国とのあいだに存する敵対関係を証明したのであった。それゆえに、悪しき者たちと悪しき者たちとのあいだにたたかいがあるのであるが、それと同じく、悪しき者たちと善き者たちとのあいだにもたたかいが存するのである。しかしながら、善き者たちは、かれらが完成された者であるかぎり、たがいのあいだでたたかうということはありえない。とはいえ、それぞれの善き者は、その者を自己自身に反抗してたたかわせているところのその部分にもとづいて他の者とたたかうというようなことがありうるのである。たしかに、一人の人間において

も、「肉ののぞむところは霊に反し、霊ののぞむところは肉に反する」[三]のだからである。それゆえ、善き者と悪しき者とがたがいにたたかいあうように、霊的な欲は他の者の肉的欲にたいしてたたかい、また、肉的な欲は他の者の霊的な欲にたいしてたたかいあうのである。さらに、悪しき者と悪しき者とがたがいにたたかいあうように、二人の善き者たちのあいだにあっても、かれらが明らかに完成に至っていないときには、たたかいに陥ることがあるのである。病から回復された者たちの健康が最後の勝利へと導かれるまでは――。

(一) ἀρχέτυπον.
(二) ルカヌス『ファルサリア』一の九五。
(三) 「ガラテヤ人への手紙」五の一七。

第六章

神の国の民も、この世の旅の途上においては罪の結果としての弱さを負っているのであるが、しかしそれは神によって癒されていくのである。

じっさい、この種の弱さ、すなわちかの不従順――それについてはわたしたちは第十四巻において論じたのであった[一]――は、最初の不従順に対する罰なのである。したがってそれは、自然本性ではなく、欠陥なのである。このゆえに、この世の巡礼の旅にあって信仰にもとづいて

進歩しつつ生きる善き者にたいして、「たがいに重荷を負いなさい。そうすればあなたたちはキリストの法をまっとうできるであろう(二)」と諭されるのである。同じく他の箇所では、「規律を守らぬ者を正し、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に寛容であるように。だれも他者にたいして悪に悪を返さぬよう気を付けなさい(三)」、さらに他の箇所では、「もしもある人の過失を認めたなら、霊の人であるあなたたちは柔和な心をもってそのような人をあらためさせなさい。そして自分も誘われぬよう気を付けなさい(四)」、また別の箇所では、「日が暮れるまで怒りを保つことがあってはならない(五)」といわれており、そして福音書には、「もしもあなたの兄弟が罪を犯すことがあったなら、行ってその人とだけ相対して諫めるがよい(六)」といわれているのである。同様に、罪にかんしては、それが他の者たちにつまずきをおよぼすことを警戒して使徒は、「罪を犯した者をみなの前でとがめて、他の者たちをおそれさせよ(七)」と語っているのである。

　このようなわけで、相互の思いやりについてかくも多くの勧めがきわめて綿密に与えられているのであるが、それは、それなくしてはだれも神を見ることができないであろうような平和が保持されるためなのである(八)。かの僕にかんする恐るべき判決も、まさしくこれに関連するものである。すなわち、その僕は、すでに免ぜられていた一万タラントの負債を返済するよう命ぜられたのであったが、そのとき、かれは自分の仲間の百デナリの負債を免除してやらなかったからであった。主イエスはこのたとえ話に加えていわれたのであった。「あなたたちひとりひとりも、心から兄弟をゆるさないなら、あなたたちの天の御父もまたあなたたちにたいして

そのようになさるであろう」と。(九)

このような仕方で、神の国の民は、この地上の巡礼の旅をつづけ、上なる故国の平安を慕いあえぎながら癒されていくのである。けれども同時に、聖霊は内的にはたらかれるのである。それは、外的に適用される医薬に効き目をもたらさんがためなのである。そうでないなら、たとえ神ご自身がみずからに服従せしめられた被造物をお用いになって、何らかの人間のかたちによって人間の感覚にたいして――身体の諸感覚にたいしてであっても、あるいは、それにまったく似たものであってわたしたちが夢を見るときにもつようなものにたいしてであっても――語りかけてくださるとしても、内なる恩恵をもって精神を導き動かしてくださらないかぎり、真理の告知も人間には何の効力も奏さぬであろうからである。しかし、神はその配剤によって怒りの器をあわれみの器から区別しつつ、(一〇)いま述べたことをなさるのであって、この配剤は、神ご自身のみに知られたものであり、かつまた、深く秘められたものであるが、にもかかわらず公正なものなのである。じつにこのかたこそは、おどろくべきそして隠れた仕方で助けの手を差し出してくださるのである。そして、わたしたちの肢体のうちに住む罪――というよりも、それはいまでは罪にたいする罰なのであるが――が、使徒の戒めのことばにもあるように「その(罪の)欲にしたがうことのないよう死すべきあなたたちのからだを支配しない」とき、そしてまた、わたしたちが「自分の肢体を不義の道具として罪にゆだねることのない」(一一)とき、神の助けによって、人間は精神へと身を転じて、神の導きのもとにもはや悪に同意することはないであろう。このような精神の指導力によって、いまのこの世にあってもいっそうの静穏さ

へと至るであろう。けれども、そののちに、完全な健康と不死へ到達したときには、人間は何らの罪もなくして永遠の平安のうちに統治することであろう。

(一) 第十四巻第一章、第十一章他。
(二) 「ガラテヤ人への手紙」六の二。
(三) 「テサロニケ人への第一の手紙」五の一四、一五。
(四) 「ガラテヤ人への手紙」六の一。
(五) 「エペソ人への手紙」四の二六。
(六) 「マタイによる福音書」一八の一五。
(七) 「テモテへの第一の手紙」五の二〇。
(八) 「ヘブル人への手紙」一二の一四参照。
(九) 「マタイによる福音書」一八の二三―三五参照。
(一〇) 「ローマ人への手紙」九の二三参照。
(一一) 同上、六の一二以下。

第七章

カインの供え物の特質およびかれの罪の行為の原因について

しかし、神が、ご自身に服属する被造物のかたちをお用いになって、あたかも最初の人間た

ちと同類であるかのように、かれらによくわかるすがたで語られたのと同じような仕方——それについては、わたしは力のおよぶかぎり記述したのであった——によってカインに向かって語られたとき、カインにとってどのような益があったであろうか。かれは、神が警告のことばを発せられたあとであったのに、弟を殺害し、かねてより抱いていた犯行を実行したのではなかったであろうか。すなわち、神はこの兄弟の供え物を、その一方のものをかえりみられ、他方のものを見下されて、それぞれ区別なさったのであったが、そのとき、この区別は可視的なしるしをもって明らかに認められうるものであったことは疑えない。神がこのことをなさったのは、カインの行為は悪しきものであったがその弟の行為は善きものであったからである。カインははなはだしく憤り、その顔を伏せたのであった。つぎのように記されているのである。「そして主はカインにおおせになった。『なぜ憤っているのか。なぜ顔を伏せたのか。あなたの供え物が正しく差し出されていても、正しく配分されていないのなら、あなたは罪を犯しているのではないのか。中止しなさい。罪はあなたの方を向く。あなたはそれを支配しなければならない』[一]」。

神がカインにお示しになったこの促しと警告において[二]、「あなたの供え物が正しく差し出されていても、正しく配分されていないのなら、あなたは罪を犯しているのではないのか」といわれているところのことが、いったいいかなる理由で、そしてまた、いかなる根拠にもとづいてそのようにいわれているのかが明らかではないゆえに、その不明瞭さはいろんな解釈を生み出したのであった。聖書の注釈者はいずれも、その言葉を信仰の規準[三]とするところにしたがっ

て説明しようと努めているのである。たしかに、供え物というものは、ただひとりそのかたにのみ供えられねばならない真実の神にたいして供えられるときこそ、正しい仕方で供えられているのだからである。

しかしながら、供え物の場所や時、あるいは供えられる物そのもの、供え物を供える者、それを受けとる存在、そして供えられた物を食するために分け前にあずかる者たち、――これらが正しく区別されていないときには、「正しく配分されていない」ことになるのであって、したがってそのばあい、わたしたちは、「配分(デイウイシオ)(四)」を「区別(デイスクレテイオ)(五)」の意味に解することになるのである。つまり、本来供えられてはならない場所で供えられるばあいもあるであろうし、その場所で供えられてはならないが他の場所で供えられねばならないような物が供えられるばあいもあるであろう。また、供えられてはならない時に供えられているばあいもあるであろうし、その時に供えられてはならないが他の時に供えられねばならないような物が供えられるばあいもあるであろう。あるいは、どんな場所であってもどんな時にもけっして供えられてはならないような物が供えられているばあいもあるであろう。また、神にたいして供えられる物と同じ種類のもののうち、その選りすぐった部分は(神にたいして供えずに)人間が自分自身のために取ってしまっておくばあいもあるであろうし、不敬虔な者が供えられた物の分け前にあずかっているばあいもあれば、もともとそれにあずかる資格をもたぬ者が分け前にあずかるばあいもあるであろう。

さて、いま述べたうちのいずれの理由によってカインが神の不興を買うことになったのかを

知るのは容易ではない。けれども使徒ヨハネは、この兄弟にかんして述べている箇所でつぎのようにいっているのである。「カインのようであってはならない。かれは邪悪な者から出てその兄弟を殺したのである。なにゆえに兄弟を殺したのか。かれのわざが悪しく、その兄弟のわざは正しかったからである」(六)。――これは、なにゆえに神はカインの供え物をかえりみられなかったのか、その理解を得させてくれるものである。すなわち、カインは自己自身に属している物を神に与えはしたのであるが、しかし、かれは自己自身を自己自身に与えたという意味において、悪しき仕方で配分したのだからである。

　これは、神の御意志に従うことをせずに自己自身の意志に従う者たちすべてがおこなうところのことである。かれらは、まっすぐな心をもつかわりに転倒した心をもって生きながら、それにもかかわらず、神に贈り物を提供するのであって、それによってかれらは神を買収して、自分たちのよこしまな欲望を治療することによってでなく充たすことによって助けてもらえるのだと思っているのである。これがこの世の国の特質なのである。すなわち、神や神々を礼拝するのではあっても、人びとのため配慮せんとする愛（カリタス）からではなく、支配力を振おうとする欲望（クピディタス）からそうするのであって、神や神々の援助を得て、勝利とこの世的な平和とのうちに統治するためである。じっさい、善き者たちは、神を享受するためにこの世界を使用するのであるが、それに反して悪しき者たちは、神を使用することをのぞんでこの世界を享受するのである。もっともこのことも、それらの者が、すくなくとも神が存在し人間的な諸々の用件に関心をもっていると信じていてのはなしである。というのは、それさえも信じないところのいっそ

うはなはだしく劣悪な者たちが存在するからである。

そういうわけであるから、カインは、神が兄弟の供え物をかえりみられたのに自分の供え物をかえりみられなかったことを知ったとき、いずれにしても、みずからを改めて善き兄弟を見倣うのでなければならなかった。高慢になって嫉妬してはならなかったのである。ところがかれは、はなはだしく憤り、その顔を伏せたのである。これこそが、神がとくにおとがめになった罪なのであって、その罪は、他者の善性についての、とりわけ兄弟の善性についての不機嫌（トリスティティア）なのである。たしかにこれは、神が「なぜ憤っているのか。なぜ顔を伏せたのか」とおたずねになったときとがめられたところのことである。それというのも、神はカインが弟をねたんだのをご覧になったからであって、そのことをとがめられたのである。

もちろん、人間には他者の心は知られないのであって、その意味からすれば、カインの不機嫌がかれの悪意――それによって明らかに神の不興を買ったのであるが――なのであるか、それとも、弟の善性――その供え物をかえりみられたとき神はその善性をおよろこびになったのであるが――にたいする腹立たしさなのであるか、いずれとも決めがたく、まったく不確実なことである。けれども、神は、なぜカインの犠牲を受けいれようとなさらなかったか、その理由を与えられたのであって、それは、カインが不正にその弟にたいして不満をおぼえるかわりに、むしろ、正しく自己自身にたいして不満をおぼえるためであった。神はつぎのことをお示しになったのである。すなわち、カインは、正しい仕方で配分しない――これは正しく生きないということである――ことによって正しくない者であって、したがってその犠牲がかえりみ

られなかったのであるが、弟を理由もなく憎んだことによって、いっそうはなはだしく正しくない者なのだ、ということである。

それにもかかわらず神は、聖なるそして正しく善き命令を与えずしてカインを立ち去らせるようなことはなさらなかったのであった。「中止しなさい。罪はあなたの方を向く。あなたはそれを支配しなければならない」といわれたのであった。「それを支配する」という「それ」とは弟のことなのであるか。もちろんそうではない。罪のことでなくて何であろうか。なぜなら神は、「あなたは罪を犯しているのではないか」といわれ、それにつづけて、「中止しなさい。罪はあなたの方を向く。あなたはそれを支配しなければならない」と付け加えられたからである。罪がその人間自身に向くということは、人間が罪を犯すとき、その罪をその者以外の他のだれにも帰せしめてはならないということをその者が知るべきであるという意味に解されるであろう。すなわち、これは、悔い改めの健全な医薬ともなり、また、赦しを求める嘆願として適切なものともなるのである。したがって、神が「罪はあなたの方を向く」といわれるとき、そこでは、「であろう」ということばを補って理解するよりは、「べきであろう」ということばを補って理解するのであって、明らかにそれは予告の意味でいわれるのではなく、訓令の意味でいわれるのである。というのは、人間は、罪を擁護して自己自身の上にその罪を立てるようなことをせず、罪を悔い改めて自己自身の下にその罪を服従せしめるなら、罪を支配するであろうからである。そうでなく、罪が起こったときにその罪に保護者をあてがうなら、人間はかえってその罪の奴隷となるのである。

しかし、罪は、肉的な欲そのものと解されるのである。それについては使徒が「じつに肉ののぞむところは霊に反する」(七)といっているのであるが、その際かれは、肉の諸々の果実のうちに嫉妬をも数えているのであって、それこそまさしくカインをして刺激し煽り立ててその弟を滅ぼさせたところのものである。そのように解するなら、「であろう」ということばを補って理解してもよいであろう。すなわち、「罪があなたの方を向くであろう。あなたはそれを支配しなければならない」となるのである。このことは、かの肉的な部分が刺激されたときに起こるであろうところのことであるが、使徒はこの部分を「罪」という名で呼んでいるのである。すなわち、「こうするのはわたしではなく、わたしのうちに住む罪である」(八)と述べている箇所にあるものである(この部分のことを哲学者たちは魂の欠陥的部分であると主張している。かれらの主張するところによれば、この部分が精神を引っぱるのであってはならず、精神がこの部分に命令し、この部分が理性によって不法なわざから抑止されていなければならないのである)。——それゆえに、この部分が何らかの不正な行為を犯すよう刺激されたとき、それが鎮められて、使徒の「あなたたちの肢体を罪に与えて不義の道具としてはならない」(九)という戒めに従わせられるなら、この部分は支配され克服されて精神へ向かって転ぜられ、その結果、理性は服従させられたものを支配するようになるのである。

このことをこそ神はカインにたいしていましめられたのであった。カインは、弟への嫉妬の火に燃え立たせられて、弟に見倣うべきであったのにかれを滅ぼそうと熱望していたのである。「中止しなさい」と神はいわれた。——「その手を罪の行為から引きなさい。あなたの死すべ

きからだを罪に支配させてその欲望に自分を従わせてはならない。あなたの肢体を罪にゆだねて不義の道具としてはならない。『罪はあなたの方を向くであろう』。手綱をゆるめて罪を助長することをせず、それを鎮めて手綱をかたく引くかぎり、『あなたは罪を支配するであろう』。そのようにして罪が外部にはたらくことが許容されないかぎり、支配力と情深さにみちた精神の主権のもとに、内部においてもそれは刺激されることはないであろう」。

これにいくらか似たようなことが、同じ神的な書のなかで女についていわれているのである。罪ののちに、神がお訊ねになり、裁きのことばを発せられて、罪を犯した者たち——悪魔は蛇の姿で、女とその夫とはそれ自身の姿で——が罰の宣告を受けとったときである。すなわち、神は女に向かって、「わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたはくるしんで子を産むであろう(一〇)」といわれたのであったが、それにつづけて、「あなたはあなたの夫の方へ向き、かれはあなたを支配するであろう」といわれたのであった。カインにたいしては、罪ないしは肉の欠陥的な欲についていわれているところのことが、この箇所では罪深い女についていわれている。そしてここでは、夫は妻を支配することによって肉を支配する精神に似ているのでなければならない、という意味に解されるのである。そのために使徒は、「妻を愛する人は自分自身を愛する人である。かつてだれも、自分の肉(からだ)を憎んだ者はない(一一)」といっているのである。

わたしたちは、肉の欲がわたしたちに無関係なものであるかのようにそれを断罪すべきではなく、わたしたち自身のものとしてそれからの癒しを求めるのでなければならない。しかしカ

インは、罪を犯した者として神のあの訓令を受けとったのであった。じっさい、かれは嫉妬の悪徳が強まったあげく弟を待ち伏せ殺したからである。これがこの世の国の創設者であった。しかし、かれはまた、人間という羊の群れの羊飼いであられるキリストを殺したユダヤ人たちを暗示しており、そしてそのかたを、羊という動物の群れの飼主であったアベルが予示しているのであるが、これは、預言的比喩にかんする問題であるので、ここで述べることは差し控えようとおもうのである。それについてはわたしは、いくらかのことを『マニ教徒ファウストゥス論駁』の書のなかで触れたと記憶している。(一二)

(一)「創世記」四の六以下。
(二) 神のこの警告についてアウグスティヌスが引用している句は七十人訳のものにしたがっている。ヘブライ語聖書で、「……あなたの行いが悪ければ、罪は(敵のように)門の前で待ち伏せしている。そしてあなたを求めるが、あなたはそれを支配しなければならない」という意味であるとみられる。
(三) 聖書の正統な解釈のこと。
(四) divisio.
(五) discretio.
(六)「ヨハネの第一の手紙」三の一二。
(七)「ガラテヤ人への手紙」五の一七。
(八)「ローマ人への手紙」七の一七。
(九) 同上、六の一三。
(一〇)「創世記」三の一六。

（一一）「エペソ人への手紙」五の二八以下。
（一二）アウグスティヌス『マニ教徒ファウストゥス論駁』一二の九。

第八章

カインが人類の歴史のはじめに一つの都市を創設した理由は何であったか

しかし、わたしにはここで、つぎのことについての聖書の記述の信頼性が失われてはならぬため、その歴史叙述を弁護しておかねばならぬようにおもわれるのである。それは、この地上に四人、というよりはむしろ三人――すなわち、すべての者の父祖である最初の男、カイン自身、そしてカインの息子であるエノクである――の男たちしか存在しなかったとき、カインが弟を殺してのち、ただ一人の人間によって都市が建設されたと報じていることである。(一)その都市の名はエノクの名からとられているのであるが。

しかし、このことに悩ませられる者は、この聖なる歴史の記述者が、当時存在することができたであろうすべての人間の名を一一あげる必要はなく、かれが意図した仕事の計画が要求するだけの人間の名をあげさえすればよかったのだということを、あまりにも考慮していないのである。なぜなら、かの記述者の意図したところ――じつは、聖霊がその記述者をとおしてその意図を成し遂げつつあったのであるが――は、ただ一人の人間から増えていった諸世代につ

いて明確に示された継続を経てアブラハムにまで至ること、次いで、アブラハムの血統から神の民にまで至ること、であったからである。まさにこの民が他の諸々の民族から区別されて、その支配が永遠であるような国について、そしてその国の王にして創設者であられるキリストについて、すべてのことが、聖霊によって未来に起こるべきこととして予見されるかぎり、その民のうちに予示され予告されることになっていたのである。そして、そのようにして、わたしたちがこの世の国と呼んでいる他の人間社会についても語られないままで済まされなかったのである。その国のことは、神の国がその対立物との比較対照によっても照らし出されるために必要なかぎり十分に言及されねばならなかったのである。

そのようなわけで、聖なる書物が、これら最初の人間たちが生きたその年数を述べるとき、このようなことばで——「そしてその者は多くの男子と女子を生んだ」、そして、この者やあの者が生きた「生涯」は、ひじょうに長い歳月「であった。そして死んだ」——というように締めくくって表現しているのであるが、(三)そのばあい、これら男子や女子の名前を一一あげていないゆえに、だから、当時のこの時代の最初の時期を生きたかくも長い歳月のうちに、多くの人間が生まれ、その人間たちの集結によって多くの都市が建設されることもありえたのだと理解してはならない、ということにはならないであろう。けれども、これらのことは神の霊感をうけて書き上げられたのであって、神が目差されたのは、はじめから、これら二つの社会をそれらの異なった血統において指示し、かつ区別するということなのであった。したがって、一方に、人間にしたがって生きる人間たちの諸世代があり、他方に、神にしたがって生きる人間た

ちの諸世代があって、それらは洪水までずっと混交していったのであるが、洪水のときに二つの社会の区別および濃縮が語られるのである。

まず区別であるが、それについては二つの社会の血統が別々に描かれているのである。そのひとつの血統は弟殺しのカインから出ており、いまひとつの血統はセツと呼ばれた者から出ている。セツ自身もアダムから生れた者ではあるが、兄によって殺されたあの弟の代りなのである。[三] 他方、濃縮については、善き者がより劣悪な方向へ傾斜して、かれらすべてが洪水によって流されてしまうようなものとなったということに描かれているのである。しかし、ノアという名であった一人の義人とその妻、三人の息子たちとその嫁たちは例外であった。この八人の人間は、箱舟によって、あらゆる死すべきもののあの沈没から逃げるに値したのであった。

したがって、最初の都市について、「カインはその妻を知った。妻はみごもってエノクを生んだ。カインはひとつの都市をつくって、その子エノクの名をその都市につけた[四]」と記されているのであるが、しかし、エノクが最初の息子として生れたのだと考えねばならないということにはけっしてならない。というのは、かれはその妻を知ったといわれていることから、あたかもそのときにはじめて妻と交わったかのように見なさねばならないわけではないからである。じっさい、このことは、すべての者の父祖であるアダム自身についても、かれの初子であったように見えるカインの懐胎のときに語られているのみでなく、そのあとのところにおいても、同じ書が「アダムはその妻エバを知った。するとかの女はみごもって男子を生み、セツと名づけた[五]」といっているのである。

だからして、つねにそうであるというわけではないけれども、人間の懐胎について読まれるところでは、聖書はそのように表現する習わしであると解されるのであるが、だからといって、それが両性の最初の交わりの意味にのみ限定されるわけではないのである。そしてまた、かの都市がエノクの名によって名付けられたという事実が、わたしたちにエノクがその父の初子であると見なすように強いる論拠となるものではないのである。というのは、その父が、他の息子たちもあったのに、何らかの理由があってエノクを他の息子たち以上に愛したということも不可能ではないからである。ユダも初子ではなかったが、ユダヤとかユダヤ人という名前はかれの名から付けられたのであった。

けれども、たとえその都市の創設者にとってこの息子が最初に生れた者であったとしても、そのゆえに、エノクが生れたまさにそのときに、その名が建設された都市に父によって与えられたのだと見なさねばならぬわけでもないのである。なぜならその当時、ひとつの都市――それはある共同の絆によって結び合わされた多数の人びとにほかならない――が、たった一人によって建設されることはできなかったのであって、その人間の家族の数がひじょうに増大してひとつの住民数の規模を得るに至るなら、そのときには、ひとつの都市を建設し、建設された都市に自分の初子の名を付けるということもたしかに可能であった。じっさい、その箇所で言及されているのであるが、その当時の人間たちの寿命はひじょうに長いものであって、それについて明らかにされているのである。洪水以前、もっとも短い寿命の者でも七百五十三歳に達したのであった(六)。だれも千歳にまで達することはなかったけれども、かなりの者が九百歳をこ

えたのであった。

それゆえに、人類がただ一人の人間の生涯のうちにこれほどに増大することが可能となり、そこからして一つの都市だけでなく多くの都市が建設されるようになったということをだれが疑うであろうか。わたしたちはこのことを、アブラハムのばあいからもまったく容易に推量することができるであろう。それというのは、一人のアブラハムから、四百年をすこしこえる歳月のうちにヘブライ人の民の数はひじょうに増大して、(七) エジプトからの退去のときには六十万人の若い戦士がいたと報ぜられているからである。(八) そして、そこではなお、イドマヤ人の種族を、それがイスラエルの種族には属してはおらずイスラエル(ヤコブ)の兄エサウの系統をひいているゆえに、(九) そしてまた、アブラハム自身の孫から出たのではあるがその妻サラをとおして出たのではない他の諸種族を、(一〇) 度外視しているのである。

(一)「創世記」四の一七。
(二) 同上、五の四以下。
(三) 同上、四の二五参照。
(四) 同上、四の一七。
(五) 同上、四の二五。
(六) 同上、五の三一参照。ラメクの生涯のこと。七十人訳聖書にしたがっているが、ウルガータ訳では七百七十七年生きたことになっている。
(七)「出エジプト記」一二の四〇参照。
(八) 同上、一二の三七参照。

（九）「創世記」三六の一以下参照。
（一〇）同上、二五の一—四、一二—一五参照。

第九章

洪水以前の人間の長寿および身体の大きさについて

このようなわけで、これら歴史的なことがらを思慮深く評価する者は、死すべき人間の寿命がかくも大きな年齢にまで伸長されていたときに、カインがある種の都市を建設することができたというだけでなく、大きな都市をも建設することができたということを疑いはしないであろう。しかし、あるいはもしかして不信仰な者たちのなかのだれかが、わたしたちの権威ある書のうちに当時の人間がそれを生きていたと記されているような大きな年数そのものについて、問を投げかけるかもしれない。そしてその信頼性を否定するかもしれない。

じっさい、ある者は、当時の人間の身体は今日のわたしたちのそれよりもはるかに大きなものであったということさえ信じないのである。だからして、異教徒たちのもっとも高名な詩人ウェルギリウスも、それについて、巨大な石にもとづいて語っているのである。その石は土地の境界を示すために据えられていたものであるが、かの時代の強力な戦士がそれをつかみあげて走って行き、振り回して投げたというのである。

当節に大地が産出しているごときからだをもてる選り抜きの男たち、
その数六人の二倍もかけて、
かろうじて持ち上げぬ。(二)

これは、あの当時、大地はもっと大きな身体を生み出すのをつねとしていたことを意味している。そうであるなら、ましてあの有名な、そして悪名高き洪水の以前、世界がまだ新鮮な時期にはなおさらのことであったであろう。

しかし、それを信用しない者は、老朽化や潮の影響、あるいはさまざまな偶発事によって露(あらわ)にされた墓によって、しばしばあの当時の身体の大きさについて納得させられるであろう。死人たちの信じられないような大きな骨が、そこに現れたり、そこから投げ出されたりしたのであった。(三) わたし自身、そしてそれもわたしが一人であったのでなく幾人かの者と一緒に、ウティカの海岸で人間の臼歯を見たのであるが、それはあまりにも大きなものであったので、もしもそれをいまのわたしたちの歯の寸法にしたがって切り刻むなら、百個の歯がつくり出されるであろうとおもわれたほどであった。しかし、それはある巨人のものであったと考えるほうがよいかもしれない。というのは、あの当時、人間の身体は一般に、今日のわたしたちのそれよりもずっと大きかったということを別としても、巨人たちは他の者たちを凌いではるかに大きかったであろうからである。それはちょうど、それからのちも、そしてわたしたちの時代にも、他の者たちの規準を凌いではるかに大きな身体を持つ者があったのと同じことである。けれども、そのような者が存在しないようなときはほとんどなかったのであった。

このうえもなく博学な人であった大プリニウス・セクンドゥスは、諸世紀の経過がすすんで古くなっていくにしたがって、自然はいよいよ小さな身体を生み出すようになるということを証明している。(四)かれは、ホメロスもその詩のなかでこのことをいたく嘆いたと述べているのであるが、(五)しかし、かれはその嘆きを詩的虚構として嘲笑せず、自然の諸々のおどろくべきことがらにかんする記録者として、歴史的事実の確かな証言に用いているのである。しかしながら、わたしがすでに述べたように、太古の人びとの身体のひじょうな大きさについては、それからはるかのちの時代になっても、頻繁に発見された人骨が明らかに示している。骨というものは朽ちないで残存するものだからである。他方、このような証拠によっては、あの時期に与えられていた人間寿命の長さを証明することはできない。しかし、だからといって聖なる歴史にたいする信頼を遠ざけるようなことがあってはならない。その報ずるところをわたしたちが信頼しないことは、諸々の預言が成就されるのをいよいよ確実にわたしたちが認めれば認めるだけ、(六)それだけ僭越なことになるであろう。それはそれとしても、同じプリニウスはまた、いまもなお二百年も生きる種族が存在するといっている。(七)それゆえ、わたしたちの経験するところとはならない人間寿命のこのような長さが、今日もなお、わたしたちの知らない地方に起こっているということが信用されるのなら、いったいなにゆえに知られない過去の時期に同じようなことが起こったと信じられないのであろうか。それとも、ここでは起こらないがどこかあるところで起こることは信用されて、いま起こってはいないがかつてあるときに起こったことは信用されないというのであろうか。

(一)　ウェルギリウス『アエネイス』一二の八九九以下。
(二)　同上、『農耕詩』一の四九三―四九七参照。
(三)　ウティカはカルタゴ西北にある都市で、ヒッポからも遠くない。小カトの自殺したところである。
(四)　プリニウス『自然誌』七の一六の七三―七五参照。
(五)　ホメロス『イリアス』五の三〇二以下、一二の三七八以下参照。
(六)　アウグスティヌスは預言の成就をキリスト教の真理の証明として強調している(本書第四巻第三十四章参照)。
(七)　プリニウス『自然誌』七の四八参照。

第十章

ヘブライ語にもとづく聖書とわたしたちの聖書とのあいだに見られる寿命年数の食い違いについて

この点については、ヘブライ語にもとづくテキスト(一)とわたしたちの用いている訳(二)とのあいだに、寿命年数そのものにかんしてかなりの食い違いがあると見られるのであって、それがいかなる理由によるのか、わたしは知らないのであるが、しかし、すくなくともあの当時の人間たちがひじょうな長命であったという事実に矛盾を来たすほどのものではないのである。たとえば、わたしたちの用いているテキストでは、最初の人アダムは、セツと名づけられている息子

を生むまでにすでに二百三十年生きたと見出すのであるが、ヘブライ語にもとづくテキストでは百三十年であったと述べられているのである。ところが、わたしたちの書では、かれはその息子を生んでのち七百年生きたと読むのであるが、それにたいして、ヘブライ語にもとづくテキストでは八百年となっている。(三)このように、いずれのテキストにおいてもその全体としての年数では一致しているのである。

またそのあと、これにつづく諸世代を通じて、それぞれの父親について息子の出生が述べられているのであるが、父親の息子を生むまでの年にかんして、ヘブライ語にもとづくテキストでは百年少なく生きたことになっている。しかし、息子を生んでのち、当の父親は、わたしたちのテキストにおいてはヘブライ語にもとづくテキストにおけるよりも百年少なく生きたとあるのである。このように、どちらのテキストにおいても全体としては一致しているのである。六番目の世代については二つのテキストには何の食い違いもない。ところが、七番目の世代——そこでは、エノクが生れ、かれが「死んだ」という代りに、かれは神に気に入られたので「運び去られた」と報じられている——においては、言及されている息子が生れるまでに、さきの五つの世代のばあいと同様、百年の食い違いがあり、そして全体としては同じように一致しているのである。(四)というのは、両方のテキストによれば、エノクが運び去られるまでに三百六十五年生きたとあるからである。

第八番目の世代は、たしかにいくらかの食い違いを見せてはいるが、しかし、他の世代と比較すればそれは僅かであり、また事情が異なっている。すなわち、エノクが生んだメトセラは、

それにつづく次の世代としての息子を生むまでに、ヘブライ語にもとづくテキストにしたがうなら、わたしたちのテキストにおけるよりも百年少なく生きたというのではなく、逆に二十年長く生きているのである。(五) そしてこの二十年が、わたしたちの書では、息子を生んだのちの年数にあらためて加えられているのを見るのであって、したがって、いずれの書においても、全体の年数としては一致しているのである。

第九番目の世代、すなわちメトセラの息子であり、またノアの父親であったラメクの年齢においてはじめて全体の年数に食い違いが見られるのであるが、しかし、それはあまり大きなものではない。(六) というのは、ヘブライ語にもとづくテキストでは、わたしたちのテキストにおけるよりも二十四年長く生きたとあるからである。ノアと呼ばれた息子の生れるまでに、かれは、ヘブライ語にもとづくテキストでは、わたしたちのテキストにおけるよりも六歳若いのであるが、しかし、ノアが生れたあと、ヘブライ語にもとづくテキストでは、わたしたちのものにおけるよりも三十年長く生きているのである。それゆえ、その六年を差し引くなら、すでに述べたとおり、二十四年が残るわけである。

(一) ヘブライ語からのラテン語訳を意味しているが、ヒエロニュムスのラテン語訳(ウルガータ)ではない。ヒエロニュムスの訳はアウグスティヌスが本書の執筆に着手する以前にすでに完成されてはいたが、まだ標準のテキストにはなっていなかった。

(二) 七十人訳からのラテン語訳のこと。

(三) 「創世記」五の三以下参照。

(四) 同上、五の二一以下参照。
(五) 同上、五の二五以下参照。
(六) 同上、五の二八以下参照。

第十一章

洪水ののち、なおも十四年間生きたとおもわれるメトセラの寿命年数について

さて、ヘブライ語にもとづくテキストとわたしたちの用いているものとのあいだに見られるこの食い違いから、あまりの評判となったあの問題、すなわち、わたしたちの計算では、メトセラは洪水ののち、なお生きたとされる十四年の問題が生じるのである。聖書は、あの当時地上にいたすべての者のうち、ただ八人だけが箱舟によって洪水の破滅から免れたと述べているのであるが、メトセラはそれらの者のうちにはいっていなかったのであった。わたしたちのテキストにしたがえば、メトセラは、ラメクと呼ばれた息子を生むまでに百六十七年生きていた。(一) 次いで、このラメクは、かれからノアが生れるまえに百八十八年生きていたのである。(二) これを合計すれば三百五十五年となる。そしてそれにノアの六百年——洪水のときかれはこれだけの年になっていた(三)——が加えられて九百五十五年となる。これがメトセラが生れてから洪水までの期間である。

しかし、メトセラの生涯の全年数は九百六十九年と数えられる。というのは、ラメクと名づけられた息子が生れたとき、かれは百六十七年生きてきたのであり、そしてその息子を生んでのちなおも八百二年生きたのだからである。(四) つまり、わたしがいったように、全部で九百六十九年となるわけである。ここからメトセラが生れてから洪水までの九百五十五年を差し引くなら、洪水ののちにも生きていたとおもわれる十四年が残ることになる。

このことのゆえに、ある者たちは、かれがこの地上に生きていたのではないが――じっさい、地上では自然本性からして水中で生きることがゆるされなかったすべての肉は滅亡してしまったということは確かである――とにかく生きていたのだと考えている。すなわち、すでに移されていたかれの父と共にしばらくいたのであって、洪水が去るまでそこに生きていたというのである。かれらは、称揚された権威によって教会が受けいれているこのテキストの信頼性が否認されることを欲せず、真実でないのはこのテキストよりもむしろユダヤ人たちの用いたもののほうだと信じているのである。かれらは、ここでは聖書がそこからしてギリシア語訳を経てわたしたちの言語へと移されたところのあの原典に誤った陳述があるというよりも、むしろ、訳をおこなった者たち自身の側に誤りがあるのではないかということを容認しないのである。かれらはつぎのように主張するのである。――同じ時に、同じ意味に解釈した七十人の訳者たちが誤ったかも知れないとか、あるいは、訳者たちがまったく関心をもたなかった箇所で故意にまちがえることを欲したのだとかいうことは信じられない。そうではなく、律法や預言が、翻訳をとおしてわたしたちのもとへ伝えられるのをユダヤ人たちが妬んで、わたしたちの用い

るテキストの権威が低下するようかれら自身のテキストにいくらかの変更を加えたのだ、と。

ひとは、このような見解や疑念を、自分のおもうように受けとればよろしかろう。けれども、まちがいなくいえることは、もしも年数にかんしてヘブライ語の写本に見いだされるところのことが真実であるのなら、メトセラは洪水ののちには生きていなかったのであって、同じ年には死んでいたということである。しかしながら、あの七十人の訳者についてわたしがどのように考えているかということは、この仕事の基本的構想が必要とするかぎりにおいて、神の助けを得て、あの期間そのものを取り扱わねばならぬところにきたとき、適切なところで(五)、もっと詳細に説明しなければならない。

わたしたちの当面している問題にとっては、二つのテキストにしたがって、当時の人間たちがひじょうに長命であって、一人の者――すなわち、あのとき地上に住んでいた唯一の一組の両親から最初に生れた者のことであるが――の存命中にすでに人類は増加して、ひとつの都市を創設することが可能であった、ということで十分である。

(一) 「創世記」五の二五参照。ウルガータでは百八十七年。
(二) 「創世記」五の二八参照。ウルガータでは百八十二年。
(三) 「創世記」七の六参照。
(四) 同上、五の二六参照。ウルガータでは七百八十二年。
(五) 本書第十八巻第四十二章―第四十四章。

第十二章

初期の人間の長命を疑う者らの見解について

あの時代には年はちがった仕方で数えられていて、当時の年はずっと短い期間のものであって、今日の一年があの頃の十年に当たるのであると考える者に耳を傾ける必要はない(一)。かれらはそのような理由から、つぎのようにいうのである。ある者が九百年も生きていたと聞いたり読んだりするばあい、それは九十年と解すべきであって、それというのは、あの当時の十年は今日の一年のことであり、また、今日の十年は当時の百年のことである、と。

この考えによるなら、アダムはセツを生んだとき二十三歳であったのであり、また、セツ自身についていえば、かれからエノスが生れたとき、二十歳と六箇月を生きていたのである。聖書はかれを二百五歳と呼んでいるからである。わたしたちがいま説明している意見の持ち主は、つぎのように考えていたと推測されるのである。――当時、人びとは、今日わたしたちが持っている一年を十分割したのであった。そして、それらの部分の各々は六の自乗の数を持っているのであって、それというのは、神は、七日目に休息なさるために六日でご自身のわざを完了なさったからである(このことについては、わたしは第十一巻で、できるかぎり論じたのであった(二))。ところで、六の六倍すなわち六の自乗の数は三十六となる。そしてそれの十倍は三百六十となって、これはすなわち十二太陰月である。しかし、太陽年を充たすのに必要な残りの

五日、および四分の一日――そのために四年目ごとに一日が付加されて閏年(ビスセクストウス)とよばれる年が導入された(三)――のために、古代人たちはのちに、年数がうまく符合するように、ローマ人が「閏(うるう)の」(挿入されるべきという意味)とよんだところの日を加えたのであった。したがって、セツの息子であるエノスも、その息子カイナンが生れたときは、聖書は百九十歳と報じているのであるが、十九歳であったということになる。(五)そして、それに続くすべての世代を通じて洪水までの人びとの年数が述べられているところでは、わたしたちの写本においては、百歳かそれ以下、あるいは百二十歳かそれより少し上の年齢で息子を儲けた者はなく、最も若くして子どもを生んだ者も百六十歳かそれ以上であったと記されている。というのは、かれらのいうのには、だれも十歳という年齢で――それは当時の人びとによって百歳とよばれたであろうが――子どもを儲けることなどできないからである。若者は十六歳になってはじめて成熟し子どもを生むことができるようになるのであって、それをあの当時には百六十歳とよんだというわけである。

ところで、あの当時年はちがった仕方で数えられていたということが信頼に足るものとするため、かれらは、多くの歴史記録に、エジプト人たちは四箇月を一年とし、(六)アカルナニア人たちは六箇月を、ラヴィニウム人たちは十三箇月をそれぞれ一年としたと記されているという例証を付け加えるのである。プリニウス・セクンドゥスは、諸文献のなかに、ある者は百五十二年、他の者はそれよりも十年多く生きたこと、さらに別の者は二百年あるいは三百年の寿命をもっていたこと、またある者は五百年、他の者は六百年、そしていくらかの者は八百年にまで

達したことが記されているのであるが、(七) かれは、すべてこれらは、年の算定にかんする無知にもとづいて生じたことであると考えたのであった。かれはつぎのようにいうのである。「そのある者たちは、夏をもって一年を区切り、また、冬をもって別の一年を区切ったのだった。さらに、他の者たちは、アルカディア人のように三箇月の年をもっていた」。かれはまた、エジプト人たちは――かれらの年が四箇月という短いものであったということは上に述べたが――ときとして各月の終わりをもって年を区切った、と付け加えている。かれはつづけていう。「したがって、かれらのあいだでは、ある者たちは一千年生きていたと伝えられている」。

このようないわばもっともらしい論拠によって、ある人びとは、この聖なる歴史への信仰を傷つけようとしないで、かえってそれを支えようと努力して、古代の人間たちがこれほど長命であったと報じられていることも信じられないわけでないと確信し、そして、当時、かくも短い時間間隔が年とよばれたのであって、そのため、その十年がわたしたちにおける一年にあたり、わたしたちにおける十年がかれらにおける百年にあたるのだと説得することを恥ともおもわないのである。

けれども、これがまったくの誤謬であるということはきわめて明白な証拠によって示されるのであるが、(八) しかし、それをおこなうまえに、いっそう信頼に足るであろう推測について黙して通りすぎてはならないとおもわれるのである。

すくなくともわたしたちは、ヘブライ語写本に拠って、この主張を反駁し、否認することが

できたのであった。それは、アダムは、その三番目の息子を生んだとき、二百三十歳ではなく百三十歳であったと見出される箇所である。(九) もしもこれが、わたしたちの年齢の十歳を意味するのであれば、疑いもなく、最初の息子を生んだとき、かれは、十一歳もしくはそれ以上の年ではなかったわけである。いったいだれが、わたしたちが慣例としているこの周知の自然の法則によって、この年齢で子どもを生むことができるであろうか。

けれども、わたしたちはアダムを見すごすことにしよう。かれは、創られたときにはすでに子どもを儲けることができたであろうからである。というのも、かれが創られたとき、わたしたちの幼児たちのような小さい者であったなどとは信じられないからである。かれの息子セツは、エノスを生んだとき、わたしたちが読むように二百五歳ではなく百五歳であった。(一〇) そうすると、かれらの算定にしたがえば、かれはまだ十一歳にもならなかったということになるであろう。その息子カイナンについては何といえばよいのであろうか。かれは、マハラレルの父親となったとき、わたしたちの写本では百七十歳であったと見られるのであるが、ヘブライ語写本では七十歳であったと読まれるのである。(一一) もしもあの当時、七十歳とよばれる者が七歳のことを意味したのなら、だれが七歳で子どもを儲けるであろうか。

(一) アウグスティヌスの時代にこのような説を唱える者がいたのであろうが、しかし誰によって主張されたのか不明である。
(二) 本書第十一巻第八章。
(三) bissextus: ——ローマ人の暦では、二月二四日(すなわち三月一日の六日前の日)は、四年目ごとに

二日間つづいた。そこから、その二日目は、二度の(bis)第六日目(sextus)とよばれた。

(四) intercalaris.
(五)「創世記」五の九参照。
(六) 本書第十二巻第十一章参照。
(七) プリニウス『自然誌』七の四八の一五五。
(八) 第十四章参照。
(九)「創世記」五の三参照。
(一〇)「創世記」五の六参照。
(一一)「創世記」五の一二参照。

第十三章

年の数え方についてはギリシア語写本よりもヘブライ語写本がより信頼されるべきであるか

しかし、わたしがこのようにいったら、ただちに答えが返ってくるであろう。これは、ユダヤ人たちの虚偽――それについてはさきに十分論じたのであった(一)――である、と。すなわち、七十人の翻訳者たちは、立派な、有名な人たちであって、かれらが偽るなどということはありえないということである。そこで、もしもわたしが、つぎのいずれがより信用できるものであ

るか、たずねるとすればどうであろうか。ユダヤの民はすでに久しく拡散していたが、このような偽りの記事を書き上げようという合意のもとに一つとなり、共謀することができたのであって、そのようにして自分たちの権威が他の者らに共有されるのをねたんで自分たち自身から真理を取り去ったということであるか、それとも、それ自身ユダヤ人でもあったあの七十人の人間が、エジプト王プトレマイオスがこの作業のためにそれらの者を集めたので、一つの場所に集結したとき[二]、ほかならぬこの真理が異国の民に渡されるのをねたんで共謀し合い、そのようなことを実行したということであるか、――そのいずれがより容易に信用されうるものであるか、だれが知らないであろうか。

しかし、思慮深い者ならだれでも、ユダヤ人たちの邪悪と悪意がどのようなものであれ、かれらが、これほど多くの、そしてこれほど長いあいだ広く分散した写本に、これだけのことを成し遂げることができたとか、あるいは、あの有名な七十人の者らが、異国の民に真理が引き渡されるのをねたんで合意のもとに共謀した、などと信じるわけがないであろう。それゆえに、プトレマイオスの図書館に収集されたものから最初に筆写されはじめたそのときに、何かこのようなことが一つの写本におこったのかもしれないというほうが、いっそう信用できるであろう。さて、それが最初につくられた写本であるなら、そこからひろく普及していく元のものなのであって、そこに、たしかに筆写をおこなった者の誤りもありえたのである。

けれども、このようなことが、メトセラの寿命にかんする問題および二十四年の超過を示して総計の一致しないような他の例[三]にあたって推測されるのは不合理ではない。しかしながら、

同じ不正確がつづけられて、系図に挿入されている息子が生れるまえに一方では百年超過しているのに、他方ではそれだけ少なくなっており、生れてのちには少なかったところでは超過し、超過していたところでは少なくされてそのつど総計では一致し、これが第一番目、第二番目、第三番目、第五番目、第七番目の世代に見いだされるような例においては、その誤りそのものがある種の首尾一貫性をもっているのであって、このようにいってよければ、それは、偶然ではなく故意になされたことをにおわせているようにおもわれるのである。

したがって、はじめに付加されのちに減じられて、多くの世代を通じて一貫した等しさを保っているようなばあいは別であって、そのほかのばあいにおいては、ギリシア語写本およびラテン語写本とヘブライ語写本とのあいだに見られる数の相違は、ユダヤ人たちの悪意や七十人の翻訳者たちの入念な術策のせいにすべきでなく、上述の、王の図書館から筆写のために最初に原本を受けとった筆記者の誤りのせいにすべきであろう。じっさい、今日においても、数というものは、それが容易に理解されることがらや、学んで有益であることが明らかであるようなことがらに注意を向けさせないときには、不注意に書き写されたり、よく吟味されぬままに修正されたりするのだからである。たしかに、イスラエルの支族の各々が何千人の人間を擁することができたかというようなことを学ばねばならないなどとだれが考えるであろうか。そのようなことが何か役に立つとは考えられないからである。そしてまた、このようなことに有益な意義を見るひとがどれほどあるであろうか。

他方、連続している多くの世代を通じて、百年が一方では加えられ、他方では欠け、そして、

そのつど指摘されねばならなかった息子が生れたのち、それが加えられていたところでは欠け、欠けていたところでは加えられて、結果として総計において一致するというばあいは問題がちがってくる。すなわち、そのようなことをおこなった者は、疑いもなく、昔の人間がひじょうに長い年数を生きたと知らされているのは、じつはその年がきわめて短いものであるがゆえであるということを説得しようとしたのである。そしてそのことが、子どもを儲けるにふさわしい性的成熟期という点から説明しようとこころみられたのである。それゆえにまた、かれは、これほどに長く生きたということを人びとが信仰において受けいれるのを拒むことのなきよう、不信仰な者にあの百年はわたしたちの十年に等しいものであると理解させねばならないと考え、子どもを儲けるにふさわしい年齢を見いださないところでは百年を加え、総計として一致させるため、息子の誕生のあと同じ分だけ減じたのである。

かれは、たしかに、年齢を、子孫を生むのに適したもの、信頼されうるものにしようと欲したのではあるが、しかしすくなくとも、それぞれの生きた全年数を偽らなかったのであった。しかしながら、第六番目の世代ではそれをおこなわなかったという事実は、まさにそのこと自体、わたしたちが示唆しているような事情がそれを要請したところにおいてのみ、それをおこなったということをむしろ示している。というのは、それが要請されなかったところではそれをおこなってはいないからである。すなわち、この世代には、かれは、ヘブライ語写本に、ヤレドはエノクを生むまえには百六十二歳であったと見いだしたのであって(四)、それは、あの短い年の数え方にしたがうなら十六歳と二箇月足らずということになり、すでに子どもを儲けるの

に適した年齢である。それゆえにかれは、その年齢を、わたしたちの年齢における二十六歳とするためになお短い百年を加える必要もなかったのである。また、エノクが生れるまえに加えていないのであるから、生れたのちにその数を減じる必要もなかった。このように、両方の写本のあいだには何の食い違いもないということになったわけである。

しかし、ふたたびつぎのことに悩まされることになる。——第八番目の世代では、メトセラは、かれがラメクを生むまえには、ヘブライ語写本に百八十二歳であったと読まれるのはどういうことなのであろうか。(五) 他方、わたしたちの写本では、百年を加えるのをつねとしているところでかえって二十年少なくなっており、そして、ラメクが生れてのちに、両方の写本のあいだで食い違わないような総数を満たすため、それがあらためて取りもどされているのである。もしも性的成熟期を与えるために百七十年を十七年と解するよう意図されたものであれば、何らの付加も何らの削減もおこなわれる必要がなかったわけである。なぜなら、子どもを生むのに適した年齢が見いだされなかったところでこそ百年が加えられねばならなかったのであるが、ここでは、すでにその年齢が見いだされているのだからである。

しかしながら、この二十年については、さきに削減しただけの分をあとで取りもどしてその総数が完全なかたちで一致するために配慮されたものでないのなら、偶然にそのような誤りもおこりえたのだと見なしてもよいであろう。それとも、もしかして、もっと狡猾な策があったと見なされるべきであろうか。つまり、百年をさきに加えてのちにそれを削減するといういつもおこなっている故意の計画を、必要でないところにおいてもそのようなことをおこなったと

きに隠そうとしたのであろうか。——なるほど、いまのばあいは百年ではなかったが、しかし、たとえそれがどれほど小さな数であっても、さきに削減し、のちに取りもどすというようなことをおこなって。

しかしながら、このような解釈がどのようにうけとられるとしても、そのようなことが事実であると信じられるとしても信じられないとしても、あるいは、最終的にはそれが真実であるとしてもそうでないとしても、つぎのことを疑うのはけっして正当なことではないであろう。すなわち、両方の写本に何らかの相違が見いだされて、両方にことがらの真実があると信じられないとき、むしろ、翻訳者によって他の言語へと移し置かれるその元となった言語に信頼が置かれるべきであるということである。じっさい、三つのギリシア語写本と一つのラテン語写本においても、そしてまた一つのシリア語写本においても、メトセラが洪水の六年まえにはこの世の生を終えたと示している点で一致しているのである。(六)

(一) 本巻第十一章。
(二) プトレマイオス二世(在位紀元前二八五年—二四六年)は、アレクサンドリアのムーサイ学園の付属大図書館のためにパレスティナから七十二人の長老たちを招いて、旧約聖書のモーセ五書をギリシア語の翻訳に当たらせたという伝承があるが、その事実については論議が多い。
(三) 本巻第十章参照。
(四) 「創世記」五の一八参照。
(五) 同上、五の二五参照。ヘブライ語写本では百八十二歳ではなく、百八十七歳である。

（六） アウグスティヌス『モーセの七書について』一の二参照。

第十四章

年の長さはあの当時もいまも同じである

さて、いまや、あの人びとのひじょうに長い寿命において数えられる年が、わたしたちの一年がかれらの十年に当たるというような短いものではなく、現在わたしたちのものとしている（とにかく、太陽の運行がわたしたちのものをつくり上げているわけであるが）のと同じだけの長さをもつものであったということが、いったい、どのようにしてはっきりと示されうるのであるか、見ることにしよう。たしかに、ノアの生涯の第六百年目に洪水がおこったと記されているのである。それでは、もしもその年が、わたしたちの年の十分の一という短いものであってわずか三十五日しかないのであるなら、「洪水の水はノアの生涯の第六百年目、第二の月、月の第十七日目に地上をおそった」と読まれるのはどういうわけであろうか。それほど年が小さいものなら、たとえ昔の慣習にしたがって年という名前をうけとったとしても、それは、月というものをもたなかったか、それとも、十二の月をもつためには一箇月は三日であったということになるであろう。

それゆえに、月があの当時もいまと同じようなものでなかったのなら、この箇所で「第六百

年目、第二の月、月の第十七日目に」[一]などということがどうしていわれるであろうか。じっさい、他のどのような仕方で第二の月の第十七日目に洪水がはじまったといえるのであろう。次いでそのあと、洪水の終りに「第七の月、月の第二十七日目に、箱舟はアラトの山脈の上にとまった。しかし水は、第十一の月まで減っていった。第十一の月の、月の第一日目に、山々の頂きが現われた」[二]と読まれるのである。

したがって、月が現在のわたしたちのそれと同じであるなら、当然年も現在のわたしたちのものと同じであったであろう。じっさい、三日間から成る月が二十七日をもつことはできないからである。あるいは、すべてのことがこの比率で縮小されて三日の三十分の一があの当時の一日とよばれてよいとすれば、四十日昼夜つづいたと記されている大洪水は[三]、全体でわたしたちの四日間もなかったということになるであろう。だれがこのような無意味な虚言に我慢できようか。それゆえ、虚偽の推測でもって聖書にたいするわたしたちの信頼を建てようとして、その結果、別のところでそれを倒壊してしまっているようなこの誤謬からは離れなければならない。

まったく、あの当時も、日はいまと同じ長さであったのであって、一日の昼夜の行程は二十四時間で区切られたのであった。月もいまと同じ長さであった。それは月の満ち欠けのはじめと終りを含むものであった。年はいまと同じ長さであって、それは、十二の太陰月と、太陽の運行のゆえに付加された五日と四分の一とを一緒に数えたものであった。そして、これがノアの生涯を形成する一年の長さであったのであり、洪水がおこったときは、そのような年の第六

百年目、第二の月、その月の第二十七番目の日であった。そこでは、大雨が休みなく四十日間降りつづいたと記されているのであるが、それらの日は、二時間と少しから成るものではなく、一昼夜を含む二十四時間から成るものであった。

このようなわけであるから、九百年以上もの生涯を生きた昔の人びとの一年は、百七十年生きたアブラハムの一年、(四)かれのあと寿命が百八十年に達したその息子のイサクの一年と同じであり、(五)また、百五十年近く生きたイサクの息子ヤコブの一年、(六)そしていくらか間隔をおいて、百二十年生きたモーセの一年と同じである。(七)さらにまたそれは、七十年ないし八十年、あるいはそこまで生きることのない現在の人びと――かれらの齢(よわい)については「その長き間(ま)は労苦と悲しみ」(八)といわれているのであるが――の一年とも同じなのである。

たしかに、ヘブライ語写本とわたしたちの写本とのあいだに見られる数の食い違いは、昔の人びとのこのような長寿にかんして意見の不一致をもたらすものではない。そして、もしもその不一致が、両方の写本が真実であるという可能性を排除するようなものなら、じっさいの史実については、わたしたちが手にしている写本がそこからして翻訳されたその元の言語にこそ信頼を求めねばならないわけである。そして、どこの国にあっても欲する者にはその機会が与えられるにもかかわらず、だれも、七十人の訳者たちが何か相違したことをいっているとおもわれる多くの箇所をヘブライ語写本にもとづいてあえて修正をほどこそうとはしなかったという事実を考えるのも無益なことではないであろう。すなわち、それらの不一致が誤謬とは見なされなかったということである。わたしもそのように見なされるべきだとは考えない。かえっ

て、それが筆記者の誤謬ではなく、意味が真理に一致しておりかつ真理を明らかにしているところでは、あの七十人は、神の霊にみたされて、翻訳者としての任務をはたすためではなく預言者としての自由をはたらくため、その意味を、ちがった流儀で表現しようとしたのだと信じなければならない。

だからして、使徒の権威が、聖書(旧約)から証言を引くばあいに、正当にも、ヘブライ語写本のみでなく七十人訳をも用いているのが見られるのである。けれどもこれについては、神の御助けが得られれば、もっと適切な場所で、より詳細に論ずることをわたしは約束したのであった。[九] いまは、当面している問題を解きたいとおもうのである。すなわち、人びとがこれほど長く生きていたときには、第一の人間から最初に生れたその人物によって国が建てられるのも可能であったということは疑えないということである。もちろんそれはこの世の国のことであって、神の国とよばれるあの国のこと――その国について記述するためにわたしはかくも大きな仕事に労力を費してきたのであるが――ではない。

(一) 「創世記」七の一〇、一一。
(二) 同上、八の四、五参照。
(三) 同上、七の一一参照。
(四) 同上、二五の七参照。
(五) 同上、三五の二八参照。
(六) 同上、四五の二八参照。

（七）「申命記」三四の七参照。
（八）「詩篇」九〇の一〇。
（九）本書第十八巻第四十二章―第四十四章。

第十五章

最初の時代の人びとの、子どもを生んだと記されている年齢について

そこで、ある者はいうであろう。「息子を生むことができて、同時に節欲の決心をしていない人間が、百年以上も、あるいはヘブライ語写本にしたがえばそれより少なく、すなわち八十年、七十年、六十年も性交を控えていたということ、また、それを控えたわけではないにしても、まったく子どもを生めなかったということが、ほんとうに信じられるであろうか」と。この疑問は二通りの仕方で解かれるであろう。ひとつは、全生涯のきわめて高い年齢に相応して、それだけ性的成熟がおそかったのだということである。いまひとつは、そしてわたしにはこちらのほうがより信憑性があるとおもわれるのであるが、ここに挙げられているのは最初に生れた息子ではなく、ノアにまで至るために系図の列が要求しているところの者に限られているのであって、このノアからさらにアブラハムまで、次いで、時代の一定の節目にまで達しているのであるが、それは、これら諸世代を並べることをもとおして、この世においては巡礼の旅を

つづけつつ天上の祖国を求めていくもっとも栄光にみちた国の行程が、必要とされるかぎり、暗示されなければならないのだということである。

カインが男と女との結合によってだれよりも先に生れたということは否定できない。というのは、アダムが「わたしは神によってひとりの人間を得た」(一)といったと読まれるのであるが、もしもカインがあの夫婦に最初に加えられた人間でなかったなら、そのようなことはいわなかったであろうからである。かれにつづいて出たアベルは、兄によって殺されるのであるが、それは、巡礼の旅をつづける神の国についての一種の予示——その国が、不信仰な、そしてある意味で地から生れた者たちによって、すなわち、この世からの出生をたのしみ、この世の国のこの世的なしあわせをよろこぶ者たちによって不当な迫害を被るであろうという——を最初に明らかにしているのである。けれども、アダムがこれらの者たちを生んだのが何歳のときであったのかは明白でない。

ここからして諸世代は、カインの系統と、兄によって殺された者の代りにアダムが生んだあの息子の子孫の系統とに分けられるのである。アダムはその息子の名をセツと名付けたのであった。かれは、聖書に記されているように、「神は、カインが殺したアベルの代りに、別の種を起こしてくださった」(二)と語っている。このようにして、諸世代には二つの系列があることになるのであり、ひとつはセツから、他はカインから出るわけである。これらは、その系列の区別により、わたしたちが論じている二つの国、すなわち、ひとつはこの世にあっては巡礼の旅をつづけている天の国であり、他はこの世のよろこびを渇望して、あたかもそれが唯一のよろ

こびであるかのようにそれに固執している地の国を象徴的に示している。そして、カインの子孫については、アダムを含めて第八番目の世代までくわしく数え上げられているけれども、それぞれがそのあとに挙げられているところの者を生んだのが何歳のときであったかということについては何ら明瞭に述べられてはいない。

すなわち、神の霊は、洪水前の時代を書き留めるにあたって、この世の国の系統によることをおのぞみにならず、天の国の系統によることを、いわばそのことがより価値の高い記録であるとして、おのぞみになったのである。さらに、セツが生れたとき、たしかにその父親の年齢については黙されたままではなかった。[三] しかし、それ以前にすでに子どもが生れていたのであって、それがカインとアベルだけであったのかどうか、あえて言明しようとする者があろうか。言及しておかねばならなかった系図のゆえに、それらの者の名前が挙げられたにすぎないという理由から、だから当時アダムから生れたのはかれらだけであったと見られてよいのだという帰結にはならない。というのも、他の者たちの名前はすべて、まったく沈黙に覆われているのに、かれは男の子や女の子を生んだと読まれるからである。軽率のそしりを避けようとするほどの者なら、だれが、これらの子どもたちがどれだけの数であったか、あえてわがもの顔で言明しようとするであろうか。

アダムが、セツの出生ののち、神の力に促されて、「神は、アベルの代りに、別の種を起こしてくださった」と語ることは、たしかに可能であった。なぜかといえば、セツこそ兄の聖性を実現すべき者として存在したからであって、かれ自身が時間的順序において兄のあと最初に

生れたからではない。次いで、「セツは二百五年(ヘブライ語写本にしたがえば百五年)生きた。そしてエノスを生んだ」(四)と記されている。思慮を欠く者でなければだれが、このエノスが長子であった、などと主張するであろうか。それはひとをおどろかせるものである。そして、わたしたちにつぎのような問いを発せしめるであろう。いったいどのようにして、節欲をまもろうという決意なくしてこれほどの年月を女との交接を避けることができたのであろうか、また、結合をもったのなら、なぜ子どもを生まなかったのであるか、と。ことに、かれについても、「かれは多くの男の子と女の子とを生んだ。セツの一生は九百十二年であった。そしてかれは死んだ」(五)と読まれるのだからである。

同じことは、それにつづいて年齢が示されている者に見られるのであって、かれらが息子たちや娘たちを生んだことも隠されてはいないのである。それゆえに、名前があげられている子どもが、じっさいに長子であったかどうか、けっして明らかではないということである。むしろ、これら父親たちがかくも長い歳月にわたって性的に未成熟であったとか、妻や子孫をもたなかったとかいうことは信じられないことであるがゆえに、この息子たちが、かれらにとって最初に生れた者であったというのも信じられないことである。とにかく、聖なる歴史の記者が意図したところは、世代を順次たどって時代を記しながら、ノアの出現と生涯——かれの時代に洪水がおこったのであった——にまで至ることであったのであるから、記者が名前をあげているところの者は、いずれにしても、その両親にとって最初に生れた者であるのではなく、ただ血統の系列のなかにはいってきている者なのである。

そのことがいっそう明瞭となるための例として、わたしはあることを挿入しようとおもう。それによって、わたしがいっていることがありえたということをだれも疑わないであろう。福音史家マタイは、わたしたちの主の系図を、その肉に即して祖先の系列をたどって記録に留めようと欲して、まずはじめに、父祖アブラハムからはじまってダビデにまで至るために系列を示そうとして「アブラハムはイサクを生んだ」(六)といっているのである。なぜかれは、最初に生れたイシマエルの名をあげなかったのであるか。そしてつぎに「イサクはヤコブを生んだ」といっている。なぜかれは、イサクの長子であったエサウの名をあげなかったのであるか。いうまでもなく、それらの者をたどってはダビデにまで至ることができないからである。

さらに、「ヤコブはユダとその兄弟たちを生んだ」とつづいている。これはユダが長子であったことを意味しているのであるか。「ユダはパレスとザラを生んだ」といっている。これら双生児のいずれもユダの長子ではない。かれらのまえにはすでに三人の子どもが存在したのである。したがってマタイは、諸世代の系列を書き留めるにあたって、それを経てダビデにまで、そしてさらにそこからかれの目ざしたところにまで到達するであろうところの者たちのみを保持したのであった。このことから理解されるのは、洪水前のいにしえの人びとはいずれも、最初に生れた者として掲げられているのでなく、諸世代の系列を順次たどることによって族長であったノアにまで導かれるような者たちを掲げたということである。それゆえにわたしたちは、その人びとの性的成熟が遅れていたのではないかというようなあいまいで不必要な問題に悩まされてはならない。

(一)「創世記」四の一。
(二)同上、四の二五。
(三)同上、五の三参照。
(四)同上、五の六。
(五)同上、五の七。
(六)「マタイによる福音書」一の二以下。

第十六章

最初の人びとの婚姻法はのちの時代のそれとは異なっていたこと

このようなわけで、人類は、塵からつくられた男とその男の脇腹からつくられた女との最初の結び付きののち、子孫を生み増やすために男性と女性との結合を必要とすることになったのであるが、この二人から生れた者のほかには人間は存在していなかったわけであるから、男たちはその姉妹を自分の妻としたのであった。もちろん、このことは、時代が古ければ古いだけ必要に迫られておこなわれたのであるが、そののち、宗教をとおして禁じられていよいよ非難さるべきこととなっていったのである。すなわち、愛(カリタス)がきわめて正しく考慮されるようになって和合の有益性と尊さがかえりみられるようになり、人びとはさまざまな親戚関係のつなが

りをとおして結ばれることとなったのである。そして、一人の者が一人のうちに多くの親戚関係をもつというのではなく、それぞれの関係が個々の者に分配され、そのようにして社会的生活がより緊密に結び合わされるために多数の者が多数の関係を保有するのである。たとえば、父と義父とは二つの親族関係を表わす名称であるというわけである。

それゆえ、ある者が父と義父とを別々にもつばあいには、愛(カリタス)はいっそう多くの者へ拡がっていくのである。しかし、アダムは一人で、その息子たちや娘たちにたいしては、父でもあり義父でもあらざるをえなかったのであって、それというのは、兄弟と姉妹が結合されたのだからである。同じく、かれの妻エバは、どちらの性の子どもたちにとっても義母であり母であった。もしも二人の女性が、ひとりは母としてひとりは義母として存在していたなら、社会的な愛情(ディレクティオ)はもっと豊富に結合力を見せていたことであろう。さらに、妻ともなった姉妹自身も、自分一人のうちに二つの近親関係を同時に保有していたわけであるが、その関係が分離されていて、ひとりは姉妹でありひとりは妻であるというように別々であったなら、人びとの社会的な親族関係の数は増えたことであろう。

しかし、それにたいして、人間存在が最初のあの二人から出た兄弟と姉妹のほかにはなかったときには、これはありえなかった。それゆえに、これが可能となったときには、存在している多数のなかから、すでに姉妹ではなくなっている妻を娶るということがおこらなければならなくなり、兄弟と姉妹の結合はその必然性を失っただけでなく、そのようなことがあれば禁じられることになったのである。じっさい、最初の人間の孫たちがすでにその従姉妹たちを妻と

することができたのに姉妹と結婚によって結合したなら、そこにはもはや、一人の人間のなかに二つではなく三つの近親関係が生じることになるであろう。それらは、愛（カリタス）がいっそう多くの近親関係によって結ばれるために、それぞれの個人のあいだに拡散されるべきなのであった。

というのは、同一の人間が、その子どもたち、すなわち結婚した兄弟と姉妹たちにとって、父でもあり義父でもあり叔父ともなるであろうからである。同様にかれの妻は、夫と共有している子どもたちにとって、母でもあり叔母でもあり義母でもあるということになろう。そしてその子どもたちは、たがいに兄弟姉妹であり配偶者であるというだけでなく、従兄姉でもあるということなのである。なぜなら、かれらは兄弟姉妹である者たちの子どもだからである。しかし、もしも、一人の人間に三人の人間を結び付けていたこれらの近親関係のすべてがそれぞれ個別的に別々の人間に分け与えられていたなら、九人の人間をつなぎとめたことであろう。つまり、一人の人間が、姉妹、妻、従姉妹、父、叔父、義父、母、叔母、義母を別々にもつことになるわけである。このようにして小さな集団に限定するのではなく、親戚関係の連鎖をいっそう多くの者にひろめることによって社会的な絆は拡散されるのである。

さて、このことが、のちに人類の増加によって多くの虚偽の神々を不敬にも崇拝する者らが出てきたのであるが、かれらのあいだでさえ遵守されたことをわたしたちは知っている。そこでは、転倒した法によって兄弟姉妹の結婚が許されたにもかかわらず、(二)その法よりもすぐれた習慣がその認可をはなはだしく嫌悪させるよう人びとを導いたのであった。姉妹を妻として娶るということは人類の最初の時期においてはまったく自由に許されていたのに、のちには、そ

のようなことがけっしてゆるされなかったことであるかのように退けられるのである。

すなわち、習俗というものは、人間的な感覚を誘なうためにも反撥させるためにもきわめて有効なはたらきをなしうるものである。いまのばあい、節度を欠いた欲望を抑止するものとして作用するので、ひとは、習俗を抹殺したり破壊したりすることは正当に冒瀆的なことであると判断するのである。じっさい、所有への貪欲から田地の境界を侵すことが不正であるなら、まして、官能の欲情から習俗の限界を倒壊することはなおさら不当といわねばならぬであろう。わたしたちの時代においても、従兄妹間の結婚は、従兄妹が兄弟姉妹にもっとも近い血縁関係であるということのゆえに、法によってそれが許されていたけれども——じっさい、神の法はそれを禁じはしなかったし、また、人間の法律もまだ禁じていなかった——習俗の力でまったくまれにしかおこらなかったということは、わたしたちの経験してきたところである。

それにもかかわらず、許されていたこの行為も、不法な行為に接したものであるがゆえにひどく嫌われ、従姉妹との結合は姉妹との結合とほとんど同じことであるかのように見られたのであった。それというのも、従兄妹は、そのひじょうに近い血縁関係ゆえにたがいに兄弟姉妹とよばれたのであり、事実また、ほとんど本当の兄弟姉妹のようでもあったからである。昔の父祖たちのもとでは、世代がつぎつぎとつづいていくうちに親戚関係が分岐し拡散して徐々に分解してついにその関係がまったく消散してしまうことがないよう、まだそれほど距たりが出るまえにふたたび結婚の絆によって結び付きを復原し、ある意味で逃げ去る者を呼び戻すということは、宗教的な配慮に属することであった。だからして、すでにこの地上の世界が人間た

ちで充ちていたにもかかわらず、なるほど異母姉妹でもなければ同父母姉妹でもなかったけれども、しかし、自分の属している種族から妻を娶ることを好んだのであった。

しかしながら、いまの時代においても従兄妹間の結婚が禁じられていることがいっそうすぐれたことであるということをだれか疑う者があろうか。そしてそれは、わたしたちが指摘したところのこと、すなわち親近関係が増すために一人の人間が二重の親戚関係をもつことのないようにする――二人の人間がそれをもつときには親戚関係の数は増大されうるのであるから――という理由によるだけではない。他の理由にもよるのである。すなわち、人間の畏敬心には、わたしにはいったいそれがどうしてであるかはわからないのであるが、自然本性的で賞賛にあたいするある感覚が内在しているのであって、それが、親戚関係にあるということゆえにひとりの女性に敬意がはらわれねばならないばあい、かの女にたいしては、結婚の貞淑においてさえわたしたちが知っているようなあの欲情――それは子どもを生むためにおこるものであるとはいえ――を抑止するのである。

このようなわけで、男性と女性との結合は、死すべき人間の類にかんするかぎり、国の一種の苗床とでもいうべきものである。ただし、この世の国がただ出生だけを必要とするのにたいして、天上の国は、出生に伴う罪を免れるために再生を必要とするのである。しかし、洪水以前に、のちにアブラハムに課せられた割礼のような[二]、再生の身体的で可視的な何らかのしるしがあったのかどうか、そして、もしもそれがあったのならどのようなものであったかという点については聖なる歴史は黙したままである。

しかしながら、あのもっとも古い時代の人びとが供え物を捧げたということについては黙してはいないのであって、そのことは、最初の二人の兄弟においても明らかであり、[三] また、ノアが洪水ののちに箱舟から出たときに神に犠牲を捧げたことが記されている。[四] このことについては、わたしはすでにさきの巻で述べたのであった。すなわち、みずから神性を僭称し、神と見なされることを切望するダエモンらが、自分に犠牲が捧げられることを要求し、かつそのような栄誉をよろこぶのは、ただ、かれらが真の犠牲は真の神に帰せられるべきであるということを知っているからであって、それ以外の理由からではないということであった。

(一)　マヌキウス・フェリクス『オクタウィウス』九の二参照。このような結婚は、ペルシア、エジプト人のあいだで、そしてギリシア人のあいだでも是認されていた。のちに、ローマにおいて、テオドシウスによって禁じられた。
(二)　「創世記」一七の一〇以下参照。
(三)　同上、四の三以下参照。
(四)　同上、八の二〇以下参照。

第十七章

一組の夫婦から出た二つの系統の父祖たちについて

したがってアダムは、両方の系列すなわちこの世の国につらなる系列と天上の国につらなる系列との父祖なのであったが、しかし、おどろくべき秘義が表わされたアベルのあの殺害[一]ののちには、二人の者がそれぞれの系列の父祖となったのであった。それはカインとセツであった。そして、名前が挙げられねばならなかったかれらの息子たちのもとで、死すべき人間という類におけるこれら二つの国の目印がいっそう明瞭に現れはじめたのであった。たしかにカインはエノクを生み、エノクの名において国を建設したのであった。もちろん、それはこの世の国であって、地上にあって巡礼の旅をつづける国ではなく、無常なる平和と幸福に休らう国であった。

さて、カインの名は「所有」という意味に訳される[二]。だからして、かれが生れたとき、その父または母によって、「わたしは神によってひとりの人間を得た」[三]と語られたのである。他方、エノクの名は「奉献」という意味に訳される[四]。というのは、この世の国は、それが志向し熱望するところの目的を地上にもつものである以上、この世に奉献されるのだからである。さらに、セツの名は「復活」の意味に訳され[五]、その息子エノスの名は「人間」の意味に訳されるのであるが[六]、しかしこれはアダムと同じ意味においてではない。というのは、アダムは「人間」という意味に訳されるのであるが[七]、しかしそれは、あの言語すなわちヘブライ語においては男性にも女性にも共通に語られるのだからである。

なぜなら、聖書には「神はかれらを男と女におつくりになり、かれらを祝福して、かれらの名をアダムという名でおよびになった」[八]と記されているからである。だからして、女はエバと

よばれ、それはかの女の固有の名前であったけれども、しかし「人間」を意味するアダムはかれら双方の名であったことは疑えないのである。他方、エノスは、同じように「人間」の意味に訳されるのではあるが、それは女の名としてよばれることが不可能な意味においてであって、この言語に精通した人がそのことを保証しているのである。それは「復活の子」という意味に等しいのであって、そのときには「結婚することもなければ妻を娶ることもないであろう」(九)というのも、再生がそこへと導いたところにおいては、もはや出生ということはないであろうからである。

それゆえに、つぎの点を指摘しておくのは無益ではないとわたしは考える。すなわち、セツとよばれたあの人物からつづいて出ていく諸世代のもとでは息子や娘たちが生れたと述べられているけれども、そこでは、生れた女性の名前がどこにも明らかに示されていないということである。ところが、カインからつづいて出ていく者たちのもとでは、それらが到達する終極において、最後に生れた女性の名前が挙げられているのである。すなわちつぎのように読まれる。「メトサエルはレメクを生んだ。そしてレメクはふたりの妻を娶った。ひとりの名はアダといい、もうひとりはチラといった。アダはヤバルを生んだ。かれは天幕の下に住む家畜を飼う者らの父祖となった。かれの弟の名はユバルといった。琴と笛を伝えたのはかれであった。チラもトバルを生んだ。かれは青銅と鉄を鍛える者となった。トバルの妹をナアマンといった(一〇)」。

カインから出た諸世代はここまで伸びている。それらはアダムから出発して、アダムを含めて全部で八つの世代である。二人の妻の夫であったレメクまで七つの代が存在し、かれの子ど

もたちが第八代になるのであるが、それらの者のうちに女性について言及されているのである。ここでは、この世の国がその終極に至るまで男と女との結合からおこるところの肉的な出生をもつであろうことが、いかにも微妙な仕方で暗示されている。それゆえにこそ、ここで最後に父親としての名前が挙げられているあの人物（レメク）の妻たちがその固有の名前をもって明白に語られているわけである。これは、洪水以前にはエバを除いてはけっして見られないことであった。

さて、「所有」という意味に訳されるカインはこの世の国の建設者であり、また、その息子で「奉献」の意味に訳されるエノクは、この国そのもの――それは、その始めと終りとを地上にもち、この世において見られるもののほかにいかなる望みも置かない国である――を明らかに指示している。同じような仕方で「復活」の意味に訳されるセツは、別の系列として述べられる諸世代の父祖なのであるから、わたしたちは、この聖なる歴史がかれの息子について何を語っているのか、吟味しなければならない。

（一）　本巻第七章参照。
（二）「カイン」はヘブライ語の「得ること」「所有すること」の類音語である。
（三）「創世記」四の一。
（四）このように訳される可能性はある。
（五）アウグスティヌスの解釈の正当な根拠はない。
（六）　個別的な意味での人間というよりも、むしろ類的な存在としての人間を意味する。

(七)「アダム」がヘブライ語で普通「人間」を意味することは真実である。
(八)「創世記」五の二。
(九)「ルカによる福音書」二〇の三五。
(一〇)「創世記」四の一八―二二。

第十八章

アベル、セツ、エノスのもとに暗示されているところのもの

「そしてセツにも」といって聖書は「男の子が生れ、その名をエノスといった。そのときかれは主なる神の名をよぶことを望んだ(一)」と語っている。まさに、真理の証しが高らかにひびいているのである。じっさい、人間は「復活の子」として生きるのを希望するのであって(二)、キリストの復活の信仰から生じる神の国も、この世にあって巡礼の旅をつづけるあいだは希望のうちに生きるのである。たしかに、あの二人の人間、すなわち「悲嘆(三)」の意味に訳されるアベルおよびその兄弟であって「復活」の意味に訳されるセツをとおして、キリストの死とその死者からの生命とが予示されている。

この信仰から、この世に、神の国すなわち主なる神の名をよぶことを望んだ人間が生れるのである。「まことに、わたしたちが救われたのは希望においてである」と使徒はいっている。

「目に見える希望はもう希望ではない。見えるものをどうして希望することができよう。しかし、わたしたちが、もしも見えないものを希望しているのなら、忍耐をもってそれを期待しよう」(四)。このことばが深遠な秘義に触れていないとだれがおもうであろうか。すなわち、アベルは、かれの捧げ物が神にたいへんよろこんで受けいれられるものであったと聖書が記しているとおり、主の御名をよぶことを希望しなかったであろうか。また、セツ自身も主なる神の御名をよぶことを希望しなかったであろうか。じっさい、かれについて「神は、アベルの代りに、別の種をわたしに起こしてくださった」(五)といわれているのだからである。

それでは、すべての信仰深い人びとについて共通であると解されるところのことが、とくにエノスに適用されたのはなぜであろうか。それは、かれが、よりすぐれた部分すなわち上なる国へ到るよう選別されるべき子孫たちの父祖から最初に出た者として記述されているからである。そして、それは、この世の現実の幸福に生きる人間にしたがって予示されるためではなく、永遠の浄福を希望しつつ神にしたがって生きる「人間」――この「人間」とは、このような人びとの「社会」を意味するものであるが――が予示されねばならなかったのである。そして、「かれは主なる神に希望をおいた」とか「かれは主なる神の名をよんだ」とかいわれているのではなく、「かれは主なる神の名をよぶことを望んだ」といっている。この「よぶことを望んだ」というのは、恩恵による選びによってひとつの民がおこり(六)、主なる神の御名をよぶであろうことを預言的に示そうとしているのでなければ何であろうか。これは、使徒が、別の預言者のことばに見出して、それが神の恩恵に属しているこの民について語っているのだと解したと

ころのことである。すなわち「主の名をよぶ者はだれでも救われるであろう(七)」ということばである。さて、「そしてかれはその子をエノスと名づけた。それは人間という意味である」といわれていることばと、それにつづいて「かれは主なる神の名をよぶことを望んだ」と付け加えられているまさにこのことは、人間は自分自身に希望をおくべきではないということを十分に明らかにするものである。というのは、(他の箇所で読まれるように)「自分の望みを人間におく者はだれでも呪われる(八)」からであって、それゆえに、あの別の国の民となるためには自分自身に希望をおいてはならないのである。——その国とは、カインの息子にならってこの時代すなわち揺れ動いて死滅していく世の成り行きに献げられている国のことではなく、永遠に存続する至福のあの不滅性に献げられている国のことである。

(一)「創世記」四の二六。
(二) なぜならエノスは「人間」を意味し、セツは、アウグスティヌスによれば、「復活」を意味しているからである。
(三) アベルはヘブライ語において「悲嘆」を意味する。
(四)「ローマ人への手紙」八の二四以下。
(五)「創世記」四の二五。
(六)「ローマ人への手紙」一一の五参照。
(七)「ヨエル書」二の三二、「ローマ人への手紙」一〇の一三参照。
(八)「エレミア書」一七の五。

第十九章

天に移されたエノクによって暗示されていることがらについて

セツが父祖となっているあの子孫の系列も「奉献」を意味する名前をもっている。それは、アダム自身をも含めるとすれば、アダムから第七番目の世代に現れている。というのは、エノクは「奉献」の意に訳されるのであって、それはアダムから第七番目の世代だからである。けれども、かれは、神に気に入られたので運び去られた当の者であり、(一)そして、子孫の序列においてアダムから第七番目という数は、安息日として聖別された特別な数なのである。さらにかれは、カインの子孫たちから区別されるあの諸世代の父祖――すなわちセツ――から数えて第六番目である。人間がつくられて神がそのすべての御業を完了なさったのは第六番目の日であった。しかし、エノクが天に移されたということは、わたしたち自身の奉献の猶予を予示している。

奉献は、たしかに、わたしたちの頭であられるキリストにおいてすでにおこなわれたのであった。かれはもはや二度と死ぬことのないかたとしてよみがえられたのであるが、このかたも天へ移されたのであった。しかし、別の奉献が残っているのである。キリストご自身がその礎であられる家全体の奉献である。(二)それは、それ以上死ぬことのない人びとすべてが復活するであろう終末のときまで猶予されているのである。「神の家」「神の宮」あるいは「神の国」とい

われるのであるが、これらは同じものであり、また、ラテン語の慣用に合致していないわけではない。

たとえばウェルギリウスは、帝国の最も強大な都市のことを「アッサラクスの家」とよんでいる。[三] それによってかれは、トロヤを経てアッサラクスから出てきたローマ人のことを意味しようとしているのである。かれはまた、そのローマ人のことを「アエネアスの家」といっているのであるが、それは、トロヤ人がアエネアスに導かれてイタリアへやってきたとき、かれらによってローマが建設されたのだからである。[四] つまり、この詩人は聖なる書に見習ったわけである。聖なる書において、ヘブライの民は、その数がすでにきわめて大きなものになったときにも「ヤコブの家」とよばれているのである。[五]

（一）「創世記」五の二四。
（二）「エペソ人への手紙」二の二〇参照。
（三）ウェルギリウス『アエネイス』一の二八四。
（四）同上、三の九七。
（五）とくに「ヤコブ書」においてよく用いられている。

第二十章

セツの系列が第十代目のノアにまで至っているのに、カインの系列が第八代目で終結しているのはなにゆえであるか

ある者はいうかもしれない。「この歴史の記者が意図したところは、アダムからはじまってその息子のセツを経由して続いた子孫たちを記録することによって洪水がおこったときに生きていたノアにまで至ることであった、そしてさらにノアから新しい系図を立てて、アブラハム——このアブラハムによって福音書記者マタイは、神の国の永遠の王であられるキリストに至る系図をはじめているのであるが——にまで接合することであった。そうであるなら、カインから出ている諸世代によって何を意図したのであろうか、また、それをどこで終局させようとしたのであろうか」と。これにたいしてはつぎのように答えられるであろう。「洪水のときまでである。洪水によってこの世の国の全種族が取り去られたのである。しかしそれはノアの子どもたちから再生されたのであった」と。

すなわち、この世の国、あるいは人間にしたがって生きる者らの社会は、この世の終りまで消え去ることがないからであって、それについては主が「この世の子らは生み、生れる」といっておられるのである。(一)他方、神の国は、この世にあっては巡礼の旅をつづけて、再生によって別の世界へ導かれるのである。その子らは生みもしなければ生れもしない。それゆえ、生ん

だり生れたりすることは、これらいずれの国にも共通しているのである。もっとも、神の国は、この世においても生殖のわざをみずから制している多くの民を擁しているのではあるが――。この世の国も、誤謬によってではあるが、なにか真似をしようという気持からであろうが、禁欲する者たちを擁している。

それというのも、この国に属する者らのうちには、真正な信仰から迷い出て、種々の邪説を編み出した者もいるからである。もちろん、それらの者は人間にしたがって生きるのであって神にしたがって生きるのではない。インドの人里離れたところで裸で哲学の修練をおこなうといわれているインドの神秘哲学者たちも、(三)この世の国の民であって、子どもを生む行為を遠ざけている。このようなことは、神がそれであられる最高善にたいする信仰にしたがってなされるときにのみ善となるのである。しかしながら、わたしたちは、洪水以前にこのことを実行した者を見いださないのである。じっさい、アダムから数えて第七番目の世代にあたり、死んだのではなく天へ移されたと伝えられるエノク自身でさえ、移されるまえに息子や娘を生んだのであった。これらの子どもたちのうちにメトセラがいるのであって、記録されるべき子孫の系列はかれを経由している。

それでは、カインから出た諸世代について、もしもそれが洪水にまで導かれねばならず、また、それらが性的成熟に達するのにそれほど長い年月をもつこともなく百年あるいはそれ以上かかるというのでなかったのなら、なにゆえ、これほど僅かの子孫しか記されていないのであろうか。じっさい、セツの種から出ている子孫については、この書の記者は、それがノアにま

で至り、そしてノアからさらに必要とされる系図をつづけることを意図していたのである。それと同じように、カインから出た諸世代の系列がどうしてもそれへと至らねばならぬような誰かを目ざすのでなかったのなら、いったいどんな必要があってレメクにまで至るために最初に生れた息子たちを省略したのであろうか。レメクの息子たちでこの一連のつながりは終結しているのである。すなわち、アダムから数えて第八番目、カインから数えて第七番目の世代である。それはあたかも、そこから出てそのあとにつづいてイスラエルの民——この民において地上のエルサレムもまた天上の国の預言的な形姿を予示したのであったが[三]——にまでであるか、あるいは、「肉にしたがっては(かれらから出たかたであり)、万物の上にあって世々にほめたたえられる神であられる」[四]キリスト、すなわち上なるエルサレムの建設者、支配者であられるかたにまで、連結されていくべきところの何かがあるかのように見えるのである。しかし、カインの全子孫は洪水によって抹消されたので、このことはありえなかったのである。

このようなわけから、この諸世代の系列に長子たちが記されたことが知られよう。それにしてもどうしてこんなに少ないのであろうか。じっさい、洪水のときまでに僅かこれだけしかなかったはずがないからである。もしもあの当時の長寿に相応して性的成熟も遅れていたというわけではなかったのなら、これら父祖たちが、百歳になってはじめて性的成熟に達するそのときまで生殖のわざを抑制しているということもなかったであろう。かれらが子どもを生みはじめたときが等しく三十歳のときであったと考えてみよう。そのばあいには、三十の八倍(アダムとレメクが生んだ子どもたちとを含めて八世代となるのであるから)で二百四十年となるので

あろう。そうすると、そのときからのち、洪水のときまでの全期間を通じて、かれらは子どもを生まなかったのであろうか。

いったい、どのような理由で、これを記述した人物は、それにつづく諸世代を記そうとしなかったのであろうか。わたしたちの写本にしたがえば、アダムから洪水まで二千二百六十二年が数えられるのであるが、それにたいして、ヘブライ語写本にしたがえば千六百五十六年である。そこで、わたしたちが少ない数のほうをより正しいものと見なして、千六百五十六年から二百四十年を差し引いてみよう。洪水まで残る全年数は千四百年余であるが、その年月を通じて、カインの子孫は子どもを生むのを止めることができたなどと信じられるであろうか。

けれども、このことによって心を煩わされるひとがあるなら、そのひとは、昔の人間がかくも多くの年月にわたって子どもを生むのを止めることができたといかにして信じられうるかということについてわたしが論じたとき、この問題にたいする二様の解決があることを想いおこすべきであろう。ひとつは、かれらの長寿に比例して性的成熟が遅れたというものであり、いまひとつは、この系列に記されている息子たちは長子なのではなく、かえって、この書の記者が意図していた人物――セツから出る系列ではノアがそれであったように――へ至ることができるよう、経由しなければならなかった者たちであったというものである。

したがって、カインの系列において、もしも、その者のために長子を無視してとくに意図して挙げられなければならぬような者が誰も現れなかったとするなら、残される解釈としては、性的成熟の遅れだけである。つまり、当時の人間たちは百歳余りになってはじめて子どもを生

むことができるようになったのであり、そして、この世代の系列は、長子を経由してたどられ、洪水のときまでにかくも多くの年数がかかったというわけである。

つぎのこともおこりうるであろう。すなわち、わたしには隠されている知られざる何らかの理由によって、わたしたちが「この世の国」とよぶところのこの国が、レメクとその子どもたちまでの系図のみによって記述されたのであって、それからあとは、この書の記者は、洪水のときまで存在しえたであろう他の諸世代の記述を中止してしまったのではないかということである。けれども他方、諸世代の系図が長子たちを経由してたどられなかったのであって、そのばあい、その時代の人間たちにおいて性的成熟がそれほど遅れていたのだとはかならずしも考える必要もないような別の理由もありえよう。すなわち、カインがその息子エノクの名を付けて建設したこの国は、ひじょうに広い範囲にわたって支配することができて、そして、複数の王を同時にもつことがなく、それぞれの時期に単独の王をもち、その王は、自分の生んだ息子たちのなかからただ一人を後継者として支配していったのだということである。

これらの王のうち最初の者はカインその人であったであろう。第二代目はその息子エノクであって、かれの名によってこの国は統治されるべき都として建設されたのであった。第三代目はエノクが生んだイラデであり、第四代目はイラデが生んだメホヤエル、第五代目はメホヤエルが生んだメトサエル、第六代目はメトサエルが生んで、アダムから出てカインを経由する第七代目の世代にあたるレメクである。とはいっても、それは、長子たちがその父親たちのあとを継いだということにはならない。この世の国にとって有益な資質をもっていたために支配権

を獲得したのであるか、あるいは、何かのめぐりあわせがそうせしめたのかもしれないのであ
る。あるいはまた、その父親から他の息子にまさって特別に愛情をかけられることによって王
位の継承権を授けられた息子が継いだということも大いにありうることである。
　ところで、洪水はレメクがまだ生きていて王位にあったときにおこったのではなかろうか。
洪水は、箱舟の中にいた人びとを除いて他のすべての者たちと共にかれを滅ぼすべきだと見た
のであろう。じっさい、アダムから洪水までのあいだに存在したあれほどの長い期間において、
個々の生涯の年数がさまざまであることを考えるなら、子孫たちの二つの系列についてそれら
の世代の数が等しくないのも何らおどろくにあたらない。カインの系列は七つの世代を、セツ
の系列は十の世代をもっているのである。すなわち、すでに述べたように、(カインの系列に
おいて)レメクはアダムから数えて第七番目であり、(セツの系列において)ノアは第十番目で
あった。そして、レメクは、かれ以前の者たちのようにただ一人の息子しかもっていなかった
というのではなく、複数の息子をもっていたと記されているのはなぜかといえば(五)、それは、も
しも、かれと洪水とのあいだに統治の期間が残っていたのであれば、かれの死後、息子たちの
うちの誰がかれのあとを継いだのか、明確でなかったからである。
　しかしながら、カインから出ている世代の系列が、長子を経由するのであるか、あるいは、
王たちを経由するのであるか、そのいずれにしても、わたしはつぎのことを黙して通りすぎる
ことはけっしてよいこととはおもえないのである。すなわちレメクがアダムから数えて第七代
目であることが明らかとなったとき、かれの多くの息子たちが、罪を意味する十一の数に達す

るまで数えあげられているということである。つまり、三人の息子たちおよび一人の娘が加えられているのである。妻たちは別のことを表示しているのかもしれない。そしてそれは、いま論じられねばならないとはおもえない。というのも、わたしたちはいま子孫たちのことを語っているのだからである。他方、その妻たちが誰から出たかということについては黙されたままなのである。

さて、律法は十の数で示されるのであるから(そこからしてあの記憶されるべき十戒が存在する)、そして、十一というこの数は、十を踏みこえているがゆえに律法にたいする違反ないしは罪を表示している。ここからして、神の民は、旅の途上にあるあいだ、一種の移動用の神殿であった証しの天幕のため十一枚の山羊の毛から成る幕をつくるよう指示されたのであった。(六) 事実、山羊の毛皮には罪を想起させるものがあったのであって、それというのは、小山羊たちは左手に置かれるべきものとされていたからである。(七) わたしたちは、罪を告白するときに、『詩篇』に記されている「わたしの罪はつねにわたしの前にある」(八) ということばをいうかのように山羊皮の衣にみずからを投げ伏すのである。

それゆえに、アダムから出て不敬虔なカインを経由する子孫たちは、罪を表示する十一の数で終わっているわけである。この数は女性によって閉じられているのであるが、それは、この性が、わたしたちすべての者がそれによって死すべき者となった罪のはじめであったからである。さらに、それと結び付いて、霊に反抗する肉の快楽が随伴する。(九) じっさい、レメクの娘はナアマとよばれるのであるが、それは「快楽」の意に訳されるのである。これに対して、アダ

ムから出てセツを経由してノアにまで至る系列は律法の数である十という数を示しているのである。

このノアに三人の息子たちが加えられるのであるが、(一〇) そのうちの一人は転落し、二人は父から祝福を受けるのである。そのため、罪責のある者を除いて是認された息子たちを加えるなら、十二という数も現れ出てくるわけである。まさにこの数は、族長たちの数にも使徒たちの数にも示される特別なものであるが、それというのは、「七」の二つの部分の積によって生じるものだからである。すなわち、三の四倍あるいは四の三倍がこの数になるのである。

このような状況であるから、わたしは、はっきり区別された世代をとおして二つの国——そのひとつはこの世に生れた者の国であり、いまひとつは再生した者の国である——を暗示しているこれら両方の子孫たちが、そののち、どのような仕方で混合し混同されて八人の人間を除く全人類が洪水によって滅ぼされるに値いするものとなったのか、考察し吟味しなければならないとおもう。

(一) 「ルカによる福音書」二〇の三四参照。
(二) 本書第八巻第九章、第十巻第三十二章、第十四巻第十七章参照。
(三) 本巻第二章参照。
(四) 「ローマ人への手紙」九の五。
(五) 「創世記」四の一九以下、五の二八以下。
(六) 「出エジプト記」二六の七参照。なお数の意味については第十一巻第三十章参照。

(七)「マタイによる福音書」二五の三三参照。
(八)「詩篇」五一の三。
(九)「ガラテヤ人への手紙」五の一七参照。
(一〇)「創世記」九の二二。

第二十一章

二つの系列の記述の仕方に相違があることについて

さて、まず考察されねばならないのは、つぎのことはどうしてであるかということである。――カインから出ている諸世代が列挙される際、その名によって国が創立されたところの者、すなわちエノクが、そのあとにつづく他の子孫の前に挙げられてのち、わたしたちが語ったあの終局に至るまで、その系列に属する者および後裔の全体が洪水によって消え去るまでのあいだ、他の者たちがつづけて示されたのであった。これに反して、他の系列においては、セツのひとりの息子であったエノスが挙げられたとき、洪水に至るまでに他の子孫たちが加えられていくまでに、ある特別な章句が挿入されているということである。それはつぎのようにいわれている。「これは人間の誕生の書である。神はアダムをおつくりになった日に、神の像にかたどっておつくりになったのである。神はかれらを男と女とにおつくりになり、かれらを祝福し

て、かれらをおつくりになった日にかれらにアダムという名をお与えになった[一]」。

これは、ここであらためて、アダム自身から時代を数えはじめるために挿入されたものとわたしにはおもえるのである。この書の記者は、この世の国にかんしては、あたかも神がその年数を数えることをせず、ただたんにこの国のことを想起されるにすぎない、というのでもあるかのごとく、同じことをしようとはしなかったのである。しかし、なにゆえにこの記者は、主なる神の御名をよぶことを望んだ人であったセツの息子に言及してのち[二]、ここでこのような要点のくり返しへと戻っているのであろうか。それは、これら二つの国を呈示するにあたっては、そのひとつを人殺しで始まり人殺しで終局している事実（というのは、レメクもまた自分が人殺しを果たしたとかれの二人の妻に告白しているからである）[三]により、そして他を主なる神の御名をよぶことを望んだ人により、これをおこなわねばならなかったからにほかならない。

じつにこのことは、神の国がこの世にあって巡礼の旅をつづけるかぎり、この可死性において果たされる務めのすべてであり、また、最高の務めである。そしてそのことは、じっさいに、殺された人間（アベル）の「復活」（セツ）が生んだ一人の人間によってとくに明らかにされねばならなかったのである。たしかに、その一人の人間は上なる国全体の統一をあらわしている。それはまだ完成されてはいないが、成就されねばならないものとしてこの預言的な予示によりあらかじめ知らされたのである。それゆえ、カインの息子すなわち「所有」の息子（それはこの世の所有でなくて何であろうか）は、この世の国において名前をもつべきなのである。というのは、その国は、かれの名前において建設されたのだからである。

『詩篇』において「かれらは、かれらの名をかれら自身の地でよぶであろう(四)」とうたわれているのは、このような者たちのことである。このことゆえに、『詩篇』の別のところで、「主よ、あなたはあなたの国でかれらの像を空しくされる(五)」と記されているところのことが伴ってくるのである。これに反して、セツの息子すなわち「復活の子」は、主なる神の御名をよぶことを望むがよい。じっさい、かれは、「わたしは神の家において果実のみのるオリーブの樹のように、神のあわれみに望みをおいた(六)」という人びとのあの社会を予示しているからである。しかし、かれは名声という地上の空しい栄光を求めないがよい。「主の御名に自分の望みをおき、空しいものや狂気じみた偽りにかかわりをもたぬひとは幸いである(七)」からである。

したがって、ここでは二つの国が呈示されているわけである。一つはこの世に現実に存在するものであり、他は神への希望において存在するものである。そしてそれらは、区分せられてそれぞれに固有なものとして定められた終局へむかって急ぎ、進んでいくために、いわばアダムにおいて開かれた可死性という共通の戸口から出たのであって、そのとき、年代が数えはじめられたのであった。このような枠組みのなかで、アダムからの要点のくり返しがおこなわれて、他の諸世代が付け加えられたのである。罪に定められたかれの出発点から、神は、当然の報いとしての罰にゆだねられたいわば一つの塊りから、ひとつを恥辱によって怒りの器とされ、他のひとつを栄誉によってあわれみの器とされて(八)、前者には定められた罰が報われ、後者には本来それを受けるに値しないところの恩恵が贈られるのである。

これは、この世において巡礼の旅をつづける天上の国も、まさにこの怒りの器との比較によ

って も、自分の自由意志を頼みとするのでなく、主なる神の御名をよぶことを望むべきであるということを学ぶためなのである。というのは、意志はその自然本性においては善であられる神によって善きものとしてつくられているのではあるが、しかし、無からつくられたものであるからには、不変なる存在によって可変的なるものとしてつくられたのだからである。したがって、この意志は善からそれて悪をなすことができるのである。このことは意志の自由な決定力によってなされる。同時にそれは、悪からそれて善をなすこともできるのである。しかし、このばあいは、神の助けなくしてはありえない。

(一) 「創世記」五の一以下。
(二) 同上、四の二六参照。
(三) 同上、四の二三参照。
(四) 「詩篇」四九の一一。
(五) 同上、七三の二〇。
(六) 同上、五二の八。
(七) 同上、四〇の四。
(八) 「ローマ人への手紙」九の二二以下参照。

第二十二章

愛の秩序の転倒による神の子たちの堕落について

そこで、人類の進展と増加にともなって、この意志の自由な決定力は、これら二つの国の混乱をもたらし、不正を分有することによってこれらの国の一種の混成体をつくったのであった。この悪は、ふたたび女性にその起源を見いだすのであるが、もちろんそれは悪の始まりのときと同じような仕方においてではない(というのは、このばあいには、それらの女たちはだれかに誘惑されてその夫たちに罪を犯すよう口説いたわけではなかったからである)。この世の国において——すなわちこの世に生まれた者たちの社会において——歪んだ習慣のうちに前から生きていた女たちが、その身体の美しさのゆえに、神の子たち——すなわちこの世にあって巡礼の旅をつづける他の国の民たち——によって愛されたということなのである(一)。

この美しさはたしかに善きものであって神から贈られたものではあるが、しかし、善き者にとってそれがあまりに大きな善と見られてはならないため、悪しき者にたいしても寛大にお与えになったのである。したがって、善き者たちに固有の大いなる善が棄てられるとき、きわめて小さな善——すなわち善き者に固有のものではなく善き者にも悪しき者にも共通の善——へむかってすべり落ちていくことになるのである。このようにして、神の子たちは人間の娘たちへの愛(アモール)によってとらえられて、かの女たちを妻としてたのしむために、聖なる社会で保持し

ていたところの敬虔を棄ててこの世に生れた社会の習慣へ沈んでいったのであった。

さて、身体の美しさは、たしかに神によってつくられたものであるが、しかしそれは、時間的で肉的な低い善としてつくられたのであった。もしもそれが、永遠にして内的な、そしていつまでも存続する善であられるところの神にまさって悪しき仕方で愛されるなら、それはちょうど貪欲感が公正さを放棄して金を愛するようなものである。つまり、ここでは、罪は金にあるのではなく人間にあるのである。このことはすべての被造物について真実である。それらは善きものであるけれども善くも悪しくも愛されうるのである。いうまでもなく、秩序が守られているときには善き仕方で、秩序が乱されているときには悪しき仕方で愛されるのである。このことをわたしは、「過越しの祝いの蠟燭」のある賛歌のなかでつぎのような詩句をもっていったのであった。

これらすべてのものはあなたのもの。
善でいますあなたが
おつくりになったからこそ
それらは善きもの。
それらのもののうちには
わたしたちから出たものはない、
秩序をなおざりにし
創造主なるあなたの代りに

造られたものを愛して
罪を犯すほかには――。

しかしながら、もしも創造主が真に愛されるなら、すなわち、そのかたご自身が愛されそのかたの代りにそのかたでない他のものが愛されるのでないなら、悪しく愛されるということはありえない。なぜなら、それによって愛されるべきものを正しく愛するところのその愛そのものも秩序ある仕方で愛されねばならないからであって、それは、善き生を送らしめる徳がわたしたちのうちに備わるためである。だからして、徳について簡潔で真なる定義は「愛(アモール)の秩序である」とわたしにはおもわれるのである。聖なる雅歌のなかでキリストの花嫁である神の国は「わたしのうちに愛(カリタス)を秩序づけよ」[二]とうたっているのもこのゆえである。したがってこれは、愛(カリタス)の秩序――それは愛好(ディレクティオ)や愛情(アモール)の秩序である――が乱されたゆえに、神の子たちが神をなおざりにして人間の娘たちを愛したのである。

これら二つの名前(「神の子たち」と「人間の娘たち」)によって二つの国の区別が十分に明らかにされている。すなわち、「神の子たち」は自然本性によって人間の息子たちでなかったわけではないが、恩恵によって別の名前をもちはじめたのである。事実、神の子たちが人間の娘たちを愛したと語られているその同じ記述のところで、かれらは「神の天使たち」ともよばれているのである。[三] だからして多くの人びとは、かれらが人間ではなく天使たちであったと考えている。

(一)「創世記」六の二参照。

(二)「雅歌」二の四(七十人訳)。
(三)「創世記」六の二(七十人訳)。

第二十三章

神の使者たちと人間の娘たちとの結合、およびそこから生れた巨人たちについて

わたしたちはこの問題について、この書の第三巻ですこし触れたのであったが、未解決のまま残したのであった(一)。すなわち、天使たちは霊であるのに肉体的に女性と交わることができるのかどうかということである。さて、「そのかたは霊をご自身の使者となされる(二)」と記されているのであるが、これは、自然本性において霊であるところの存在を、神は、告知の任務をそれらに課すことにより、ご自身の使者となされるということを意味するものである。ギリシア語で「アンゲロス」(ἄγγελος)とよばれるところのものは、ラテン語において語尾変化を来たして「アンゲルス」(angelus)という名詞で示されるのであるが、これはラテン語の「ヌンティウス」(nuntius)——使者、先ぶれ——と訳されるものである。けれども、さきの詩句につづけて、「そのかたは火の炎をご自身の僕となされる」といわれるとき、これはかれらの身体を指していわれているのであるか、それとも、その僕たちがあたかも霊的な火によるごとくに愛(カリタス)によって燃え立つべきであるということを指していわれているのであるか、曖昧である。

それにもかかわらず、天使たちはたんに目に見られるだけでなく触れられもするようなからだで人びとに姿を現したのだということを、他の何よりも真実を伝える書が証言しているのである。[三]また、つぎのようなひろく伝えられている話がある。それは、みずから経験したのであるか、それとも経験したことのある他の者たち——この者たちの信頼性については疑いをさしはさむことはできない——から聞いたのであるか、いずれにしても、多くの人びとが確認しているのであるが、一般に「インクブス」とよばれているシルウァヌスやパーンたちが、[四]しばしば野卑な仕方で女たちに振舞い、かの女らと交接をなしとげたというのである。

また、ガリア人たちが「ドゥシウス」[五]とよんでいるあるダエモンらが、この淫らな行為をこころみいとなんでいるのを実際に見ていたと多くの者たちが主張しており、これを否定することは恥知らずであるとおもわれるのである。だからといってわたしは、ある霊たちが空気の元素から成るからだを持っていて(じっさい、この元素は、扇を動かすときでさえ、身体の感覚や接触によって感じとられるものなのであるから)、[六]この欲情を経験することもでき、かれらに可能な仕方で、この欲情の目ざめさせられた相手の女と交わることができるのかどうか、ここで、あえて断定的に何ごとかをいおうとはおもっていない。

すくなくともわたしは、神の聖なる使者(天使)が、あの当時、これほど堕落することもあったなどとは信じないのである。そしてまた、わたしは、使徒ペテロが、「神は罪を犯した天使たちを赦さず、冥府の闇の淵へ投げ入れ、かれらを罰するためにそこに閉じこめておかれた」[七]と述べているのは、かれらのことであるとも考えていないのである。そうではなく、むしろペ

テロは、嫉妬によって最初の人間を蛇の欺きをもって堕落させたあの首領である悪魔と一緒に転落した者らのことを意味しているのだと考える。

他方、この上もなく信頼されるべきこの聖なる書は、神の人びとも「使者」(アンゲルス)という名でよばれていたことを証言しているのである。たとえば、ヨハネについて、「見よ、わたしはあなたの前にわたしの使者を送る。かれはあなたの道を整えるであろう」(八)と記されている。また、預言者マラキは、ある特別な恵み、すなわち、かれにのみ与えられた恵みによって「使者」とよばれているのである(九)。

しかし、ある人びとはつぎのことで悩まされているのである。神の使者とよばれた者たちとその者たちが愛した女たちとから、わたしたちとは類を異にした人間――つまり巨人――が生れたと記されていることである(一〇)。その人びとは、すでにわたしはさきに触れたことでもあるが(一一)、わたしたちの時代にも普通の身長をはるかに凌ぐ背丈をもった人間が生れている事実を知らないかのように悩まされているのである。数年前、ローマで、ゴート人たちによる町の破壊が迫りつつあったとき、他のすべての住民の背丈をはるかに凌いで、巨人とよばれてもよいような一人の女性がその父母と共に住んでいたのではなかったか。かの女を見ようとして、びっくりするような群衆が集まってきたのであった。

とくに不思議であったのは、かの女の両親はいずれも、わたしたちがよく見かけるきわめて背の高い人間の大きさとそれほどちがわない背丈であったことである。したがって、神の使者ともよばれる神の子たちが人間の娘たち――これは人間にしたがって生きる者たちの娘という

ことであるが――と交わるより以前に、すなわち、セツの子どもたちがカインの子どもたちと交わるより以前に、巨人が生れることもありえたわけである。じっさい、わたしたちがこれらのことを読む正典もそのように語っているのであって、それはつぎのようなことばである。――「人びとが地上に増えはじめたのち、かれらに娘たちが生れた。しかし、神の使者たちは人間の娘たちを見て、かの女たちが善い者であったので、すべての娘たちのなかから望むままに妻として選んだ。すると、主なる神はいわれた。『わたしの霊はこれらの人びとのうちに永遠には留まらないであろう。かれらは肉にすぎないからである。かれらの日かずはなお百二十年であろう』と。さて、その当時、巨人たちが地上にいたのであった。そしてそののちも、神の子たちが人間の娘たちのところに入り、自分たちのために生ませたのであった。かれらは巨人であって、古くからよく知られた人びとであった（二三）」。

神的な書のこれらのことばは、すでにあの当時、神の子たちが人間の娘たちを、かの女たちが「善い者」であったので、すなわち「美しい者」であったので愛したため、妻として迎えたとき、地上に巨人たちが存在していたということを十分に示しているのである。たしかに、形姿において魅力的である者のことを「善い者」とよぶのはこれらの書の慣用である。けれども、このことがあったのちにも巨人たちが生れていたのである。というのは、「さて、その当時、巨人たちが地上にいたのであった。そしてそののちも、神の子たちが人間の娘たちのところに入り」といっているからである。

それゆえ、その時代の以前においても以後においても同じであったわけである。しかし、

「自分たちのために生ませたのであった」といっていることは、以前、神の子たちがこのように堕落するまでは、かれらは自分たちのためにではなく神のために、すなわち、性交の欲情に支配されてではなく子どもを生むという務めにしたがうことによって子どもを生んだということをまったく明らかに示している。かれらは自分たちの一族を誇るために子どもを生むのではなく、神の民を産出するために子どもを生むのである。かれらは神の使者としてその子どもたちに告げ知らせるのである。復活の子として主なる神の名をよぶことを望んだセツの息子のように自分たちの希望を神におくように、と。この希望において、かれらはその子孫たちと共に、諸々の永遠なる善の相続人となるであろう。そして、父であられる神のもとに、その子どもたちの兄弟となるであろう。

ところで、これら神の子たちが神の使者であったのは、ある人びとが想定するように、かれらが人間ではないという条件のもとにそうであったということではないのである。かれらは疑いもなく人間であったのであり、聖書自身が少しの曖昧さもなくそのことを言明しているのである。すなわち、「神の使者たちは人間の娘たちを見て、かの女たちが善い者たちであったので、すべての娘たちのなかから望むままに妻として選んだ」と、あらかじめ述べられたあと、ただちに、「主なる神はいわれた。『わたしの霊はこれらの人びとのうちに永遠には留まらないであろう。かれらは肉にすぎないからである』」と付け加えられているからである。じつに、かれらが神の使者、神の子とされたのは、神の霊によってである。けれども、より低次のものへ傾斜することによって、かれらは「人間」とよばれるのであって、これは自然本性を表わす

名であり、恩恵を表わす名ではない。さらに、かれらは「肉」ともよばれるのであるが、これは、かれらが霊を見捨てた者となったのであり、また、見捨てることによって見捨てられた者となったからである。

七十人の訳者たちは、もちろん、かれらのことを、「神の使者たち」「神の子たち」とよんだのであった。もっとも、すべての写本がこのようないいかたをしているわけではない。というのは、ある写本はただ「神の子たち」とだけよんでいるからである。しかし、ユダヤ人たちが他の訳者にまさってすぐれていると見なしているアクィラ(一三)は、「神の使者たち」とも「神の子たち」とも訳さずに、「神々の子たち」と訳している。いずれも真である。なぜなら、かれらは神の子たちであったのであって、その御父のもとでは、かれらの父親たちの兄弟でもあったからである。そして、かれらは神々から生れたのであるから、「神々の子たち」でもある。『詩篇』において、「わたしはいった。『あなたたちは神々である。あなたたちはすべていと高きかたの子らである』(一四)」と述べているところにしたがって、神々と共にかれら自身も神々であったからである。

七十人の訳者たちが預言の霊を受けていたと考えるのは正当であろう。それで、もしもかれらがその霊の権威によって何かを改変したり、翻訳にあたってちがったふうに表現したとしても、その表現が神的な力によって促されたものであることを疑ってはならないであろう。もっとも、ヘブライ語ではここの表現は曖昧であって、「神の子たち」とも「神々の子たち」とも訳されうるのであるが。

それゆえ、わたしたちは、「外典」とよばれている諸書の物語りを度外視することにしよう。なぜなら、それらの起源は隠されていて、父祖たちには明らかでなかったからであって、真の書の権威というものは、この父祖たちから、まったく確実な、よく知られた伝承によってわたしたちにまで届いているのである。これら外典のうちにも、いくらか真理は見いだされるとしても、それらは多くの誤りを含んでいるため、正典としての権威をもってはいないのである。たしかに、アダムから第七番目の代にあたるエノクが神的な力によっていくらかのことを書いたということを否定することはできない。そのことを使徒ユダがその正典の手紙のなかで述べているのだからである。(一五)

けれども、ヘブライ人たちの神殿において、代々の祭司たちによって注意深く保管されてきた正典の諸書にその記事がないのも理由のないことではない。その理由というのは、これらの書の古さに反してその信憑性に疑問があると判定されて、それがほんとうにエノクによって書かれたのであるかどうか確かめることができないということである。というのは、それらの書が、規定に則って、代々にわたって継承されながら保管されていたと認めるような証人を欠いているからである。

だからして、エノクの名のもとに提出されていて、巨人たちについて、かれらは人間の父親を持ってはいなかったというような物語りを包含している書は、じつはエノク自身のものと考えるべきではないという判定が思慮深い人びとによって下されているのも正当なことなのである。多くの書が同じように、他の預言者たちの名のもとに、また、もっと時代の近い書が、異

端者たちから使徒たちの名のもとに提出されたりする。それらはすべて、慎重な吟味の結果、正典としての権威からは除外されて、外典という名称でもって位置づけられているのである。

このようなわけで、ヘブライ人とキリスト教徒の正典の書にしたがえば、洪水以前に多くの巨人が存在していたこと、そして、かれらがこの世に生れた人間たちの社会の民であったこと、――これらのことは疑えない。しかし、神の子たち――それは肉にしたがえばセツの子孫であった――は、義しさを見捨ててこの社会へ転落していったのであった。かれらからも巨人が生れたとしても不思議ではない。すべての者が巨人であったわけではないけれども、とにかく、その当時は洪水以後の他のどの時代よりもはるかに多くの巨人たちが存在したのであった。

創造者がこのような者たちをつくろうと決心なさったのは、知恵ある者(サピエンス)にとっては、身体の美しさのみならずその大きさや強さも、重要な価値をもつものと見なされてはならないということを、このような例によっても明示されるためであった。知恵ある者は、霊的にして不滅の、そしてはるかにすぐれた堅固な善によって幸福にされるのである。この善は、善き者にも悪しき者にも共通するようなものではなく、ただ善き者にのみ固有のものである。この事実を他の預言者がとくに強調して語っている。「そこには有名な巨人たちがいたのだった。かれらははじめから背丈が大きく、戦いに秀でていた。しかし、主は、かれらを選び出さず、知識の道をかれらに与えようとはなさらなかった。かれらが滅びたのは知恵をもたなかったからであった。かれらはその思慮の無さゆえに滅んでいった」(二六)。

(一)　本書第三巻第五章。

（四）「詩篇」一〇四の四。
（三）「創世記」一九の一―二二、「民数記」二二の二三 他参照。
（四）シルウァヌス、パーンは森や山野の神。本書第六巻第九章参照。インクブスは悪夢の精で、眠っている女たちと交わるといわれた。
（五）Dusius. ケルト族の精といわれる。
（六）本書第八巻第十五章参照。
（七）「ペテロの第二の手紙」二の四。
（八）「マルコによる福音書」一の二。
（九）「マラキ書」二の七。
（一〇）「創世記」六の四参照。
（一一）本巻第九章参照。
（一二）「創世記」六の一―四。
（一三）アクィラは二世紀前半に活躍した小アジアの学者。旧約聖書のギリシア語訳で知られる。もともとユダヤ人であるがキリスト教徒となる。しかし、占星術を用いて破門となり、ユダヤ教へもどったといわれる。
（一四）「詩篇」八二の六。
（一五）「ユダの手紙」一四。
（一六）「バルク書」三の二五―二八。

第二十四章

「あと百二十年であろう」といわれた神のことばについて

ところで、神が「かれらの日かずはあと百二十年であろう」(一)と語られたとき、このことばが、そののち人びとは百二十年をこえて生きることがないということを予告されたものと受けとってはならない。洪水ののちにも人びとはそれ以前と同じように五百年以上も生きたのを見るのだからである。神がこれを語られたのは、ノアがおよそ五百歳に達したとき、すなわち正確には生涯の四百八十年のときであったと理解されねばならない。聖書の習慣では、いくらかの端数があっても全体的な数でよぶため、五百歳といわれるのである。(二)もちろん、洪水がおこったのは、ノアの生涯の第六百年目、第二の月のことであった。そこで、滅亡へ帰せしめられる人びとはなおも百二十年ほど生き、その期間がすぎ去ったとき、かれらは洪水によって抹消されるであろうと予告されたわけである。

そして、洪水がおこったのは、もはや地上に、不信仰な者たちにたいして罰として求められるような死によって死ぬに値しなかった者は見いだされない時点であったと信じられるのも、理由のないことではない。もちろん、その種の死が、いつかはやはり死なねばならない善き者たちにとって、死後害になるような何かを与えることはないのであるが、しかし、それにもかかわらず聖なる書がセツの種から出た者として挙げているところの者たちのうち、だれも洪水

で死んだ者はなかったのである。

しかし、霊感にしたがって記した人は、洪水の原因をつぎのように述べている。「主なる神は、人間の悪意が地上にはびこり、心のなかで思うことすべてがいつも悪にばかり傾くのを見られた。神は、地上に人間をつくったことを熟考され、心のうちで再考された。神はいわれた。『わたしがつくった人間を地のおもてからぬぐい去ろう。人間も、家畜も、這うものも、空の鳥も。わたしはこれらのものをつくったことを悔いる』と(三)」。

(一)「創世記」六の三。
(二) 同上、七の一一参照。
(三) 同上、六の五―七。

第二十五章

神の怒りはご自身の不変の静けさを乱すものではない

神の怒りとは、その精神の動乱のことではなく、それをとおして罪にたいする罰が科せられる裁きである。他方、神の熟考や再考というのは、変化する事物についての不変の秩序立てである。というのは、神には、人間に見られるような自分の行為を悔いるということはなく、ありとあらゆるものについてのその決定は、確実な予知と同じく、揺るぎのないものだからであ

る。けれども、もしも聖書がこのような用語を用いなかったとしたら、どのような種類の人間にとっても十分に近しいものとなって滲透することはないであろう。聖書はすべての人間に助言を与えようとするものなのであって、それは、高慢な者を脅えさせ、怠慢な者を奮いたたせ、求める者を励まし、知解力のある者を養育するためである。このことは、聖書がまず先に身を屈めて、いわば、下に横たわっている者のところへ下降してくるのでなかったら、不可能となるであろう。

ところで、聖書が地上と空の生き物のすべての滅亡を告げるとき、それは、目前に迫っている災いの大きさを示そうとしているのであって、理性を欠いた生き物たちに、それらのものも罪を犯したのであるかのように、壊滅の脅しをもって迫っているのではないのである。

第二十六章

ノアの箱舟によって象徴されていることがらについて

ノアは義しい人であった。真理を告げる聖書がかれについて語っているように、かれは、その同じ時代の人びとのなかで完全な人であった(一)(もちろん、それは、神の国の民がそれによって天使たちに等しくされるあの不死性によって成就される完全性ではなく、この世の巡礼の旅にあって可能であるような完全性である)。このノアにむかって、いまや神は、箱舟をつくる

よう、そしてその箱舟によってかれの親族たち、すなわち、妻、息子たち、その妻たち、および神の指図にもとづいて入ってきた生き物たちと共に洪水の荒廃から救われるよう、お命じになったのであった。疑いもなくこれは、この世にあって旅をつづける神の国――「神と人とのあいだの仲保者、人なるキリスト・イエス」[二] が掛けられる木によって救われる教会――の象徴的な像である。

じつに箱舟の長さ、高さ、幅の寸法そのものが人間のからだを暗示しているのであって、キリストはまさにそのようなからだの現実性において人間のところへ来られるであろうと予告され、そして来られたのである。たしかに、人間の頭の先から足裏までの長さは、一方の脇から他方の脇までの幅の六倍であり、また、横腹における背から腹までの厚みの十倍である。ちょうど、仰向きやうつ伏せになって横たわっている人間を想定してそれを測るとするなら、その者の頭から足までの長さは、右から左への、あるいは左から右への幅の六倍であり、同時に、地面からの高さの十倍であるということである。

このような理由からして、この箱舟は、長さ三百キュビト、幅五十キュビト、高さ三十キュビトでつくられたのであった。また、脇に戸口が設けられたことは、たしかに、十字架に掛けられたかたの脇腹がやりで突き刺されたときのあの傷である。[三] まさしくこれは、あのかたのもとへ近づいてくる者たちが入っていく戸口なのであって、それというのも、信じる者たちの導き手となる秘跡はそこから流れ出るのだからである。[四] そして四角の木材から構築するように命じられていることは、あらゆる面において揺るぎのない聖徒たちの生を象徴している。じっさ

い、四角に組み立てられたものは、あなたがどれほどひっくり返そうとしても堅く立っているであろう。この箱舟の構造にかんして述べられている他のことも、教会の諸々のことがらのしるしとなっているのである。

しかし、これらのことをいま追求することは長たらしくなってしまうであろう。わたしはすでに、マニ教徒ファウストゥスを論駁するために著わした書のなかでこれをおこなったのであった。(五) ファウストゥスは、ヘブライ人の諸書にキリストにかんするあることが預言されているのを否定したのであった。けれども、だれかがわたし以上に、さらに別のだれかがそれ以上により適切に説明してくれるということもありうることである。いずれにしても、これを解釈する者が、これらの記事を記した著者が意味したところのことからかけはなれることをのぞまないなら、ここに述べられていることはすべて、わたしたちがいま語っているところのこの神の国――それは、あたかも洪水のなかにあるようにこの邪悪な世にあって巡礼の旅をつづけているのである――に関連づけられねばならない。

例をあげるなら、だれかあるひとがここの箇所の「あなたは箱舟に、一階と二階と三階の階をつくりなさい」(六) と記されていることについて、わたしが上述の著書で述べたのとはちがったふうに理解しようとすることもあるであろう。わたしは教会を暗示していると解釈したのであって、それというのは、教会はすべての民から集められるのであるが、それは、割礼を受けた者と無割礼の者――使徒はユダヤ人とギリシア人という別の仕方でよんでいる(七)――という二つの種類を含んでいるゆえに二階といわれたのだと述べたのであった。他方、教会が三階といわ

れるのは、洪水ののち、ノアの三人の息子たちからすべての民が再興されたということによるのであるが、ちがったふうに解釈しようとするひとは、「信仰の規準」(八)からそれていない別の解釈を述べるべきである。

たとえば、神は、箱舟が最下の階にだけではなくその上の階(これを二階といわれた)にも、またその上の階(これを三階とおよびになった)にも住む場所を設けるようおのぞみになったのであるが、それは、居住が下から三階へ向かって上方へ高められていくためであった。このばあい、使徒が賞揚しているあの三つのもの、すなわち信仰(フィデス)、希望(スペス)、愛(カリタス)と理解することができるであろう。(九)さらに、これについて、もしかしてもっと適切な説明として、これらは福音書のあの三つの豊かさ、すなわち「三十倍、六十倍、百倍」のことであると理解することもできるであろう。(一〇)つまり、一番下には婚姻の貞潔が、その上には寡婦の貞潔が、そして最上の階には童貞の貞潔が住むのである。もっとすぐれたことが、この国の信仰に合致した仕方で解釈されたり述べられたりすることもありえよう。しかし、同じことを、わたしは他の可能なすべての解釈についてもいっておきたいのである。なぜなら、解釈は多様であるとしても、すくなくともそれらはカトリック信仰に合致した一つの規準に則したものでなければならないからである。

(一)「創世記」六の九。
(二)「テモテへの第一の手紙」二の五。
(三)「ヨハネによる福音書」一九の三四。
(四)洗礼と聖なる交わりを象徴する水と血。

(五)『マニ教徒ファウストゥス論駁』(四〇〇年)、とくに第十二章参照。
(六)「創世記」六の一六。
(七)「ローマ人への手紙」一の一六、三の九、「ガラテヤ人への手紙」三の二八参照。
(八)本巻第七章参照。
(九)「コリント人への第一の手紙」一三の一三。
(一〇)「マタイによる福音書」一三の八参照。

第二十七章

箱舟と洪水の話はどのように受けとられるべきであるか

しかしながら、これらのことが記されているのは無意味であるとか、ここでは、いかなる比喩的意味もないのであってただ実際におこったことの事実のみが求められるべきであるとか、またその反対に、これらのことは実際におこったのではなく、そのことばはまったく象徴的像にすぎないのだとか、あるいは、それがどのようなものであれ、教会についての預言にけっして関連していない、などと考えてはならない。

じっさい、ねじれた心の持ち主でなければ、いったいだれが、数千年を通じてこれほどの敬虔な心をもってこのように秩序正しい伝承によって見守られてきた書が無意味に書かれたもの

であるとか、あるいは、そこではたんに実際におこった事実のみが顧慮されるべきである、などと主張するであろうか。他のことは省略するために一つの点をとりあげよう。箱舟をこれほど大きなものにせざるをえなかったのは、動物たちの数の大きさのゆえであったのなら、清い動物と不浄な動物について、どちらも同数を保護することができたのに、なにゆえ清いものを二つがいずつ、不浄なものを七つがいずつ積み込まねばならなかったのであろうか(二)。あるいはまた、それらの種の再興のために保護を命じられた神が、はじめにそれらのものを創造されたのと同じ仕方であらためてつくることはおできにならなかったのであろうか。

それにたいして、ここには実際におこった事実があるのではなく、ただ象徴的に表示されるべき諸々のことがらについての像だけがあるのだと断言する者たちがいる。かれらはなによりも、水が増えて最も高い山々を十五キュビトもこえたというような大きな洪水はおこりえなかったと考えているのである。オリュンポスの山の頂きは、あまりに高く、それはもはや天のようであって、大気がより濃密となって風や霧や雨が生じるところではないために、頂きの上に雲が集まるのは不可能であるということを引き合いに出すのである。かれらは、あらゆる元素のなかでも最も濃密な元素である土が、その高いところに存在しえたということに注意をしていないのである。

それともかれらは、もしかして、山の頂きが土から成っていることを否定しようとでもしているのであろうか。それではなにゆえに、諸元素について高さを測定したり重さを量ったりするこれらの者たちは、土よりも水のほうがより高くより軽いものであるといっておりながら、

土にはあれほどの高い領域にまで高められることがゆるされて、水にはそれがゆるされなかった、と主張するのであろうか。より重くより低いところに位置する土が、かくも長い年月のめぐりを通じて静穏な天の領域に入り込むことができて、より軽くより上に位置する水には、ごくわずかな時間さえそれがゆるされなかったのはどういうわけであるか、何か理由を示してくれるのであろうか。

かれらはまた、あの箱舟の容量では、雌雄両方の、不浄な種の二つがいずつ、清い種の七つがいずつというかくも多くの種類の動物を収容することは不可能であったというのである。わたしには、かれらがただ長さ三百キュビト、幅五十キュビトだけを勘定に入れて、その上の階にもさらにもう一つ上の階にも同じだけの広さがあるのを考慮に入れていないようにおもわれるのである。つまり、それによって、あのキュビトは三倍になるのであって、長さ九百キュビト、幅百五十キュビトの大きさになるわけである。

さらにわたしたちは、オリゲネスがけっして不適切でない仕方で付け加えたところのことを考慮に入れてよいであろう。(二)そのばあい、「神の人」モーセは、聖書に記されているように、「(幾何学を愛好した)エジプト人の知識をことごとく授けられていた」(三)のであって、したがって、幾何学的キュビトを意味することもありうるというのである。そのことを考えるなら、その箱舟の大きさは、ひじょうに多くの量を収容する力をもっていたことはだれにもわかるのではなかろうか。

他方、これほど大きな箱舟をつくることは不可能であったと反論するなら、それはまったく

無用で不当なことをいっているのである。それは、当時すでに巨大な都市が建設されたということを知っていて、しかも、あの箱舟の建造の期間が百年にわたるものであったことを見落しているからである。ただ、もしかして、石と石とを付着させるのには石灰だけで固めることができるので、城壁は何マイルも張りめぐらされるのであるが、材木と材木とを付着させるのに、締め金や締めくぎ、びょう、瀝青の膠によっては不可能であって、そのため、この箱舟は湾曲したものとしてではなく、長さも幅もまっすぐの線で延ばして建造された、ということがあるかもしれない。この舟は、人間の力によって海へ送り出されるのでなく、大波がやってきたとき、その波自身が重力の自然的な法則にしたがって持ち揚げられるのであって、どこにおいても難破することのないように、人間の分別によってであるよりも、むしろ神の摂理によって航海の操縦がなされるのである。

ところで、微細な点にまで穿って問われるときにつねに出てくる問題は、まったく小さな動物たち――ねずみやとかげのようなものも、また、蝗(いなご)や甲虫(かぶとむし)、さらには蠅(はえ)や蚤(のみ)のたぐいのもの――にかんするものであって、これらの小動物は、神がお命じになったときに限定されていたその数よりも、もっと多くがその箱舟のなかにいたのではなかったか、というのである。このことに問題を感じる人びとにたいしては、なによりもまず、「地面を這うもの」[四]といわれているところのものについて、つぎのように理解されるべきであると指摘しておかねばならない。すなわち、魚のように水中を泳ぐものだけでなく、多くの鳥たちのように水面を泳ぐ動物も含めて、水の中で生きることのできる動物たちは、箱舟に保存される必要がなかったのだという

ことである。

さらに、「それらは雄と雌でなければならない」(五)といわれているのであるが、たしかにそれは、種が再興されるためにいわれたのだと解される。それゆえに、さまざまな物やさまざまな物の腐朽から交尾なしに生じてくる小動物がそこに存在しなければならなかったわけではないのである。あるいは、もしもそれが存在したのであれば、それらが通常家にいるように一定の数に限定されずに存在しえたのである。それとも、ここで問題とされていることはきわめて神聖な秘義であって、これほどの崇高なことがらの象徴的な像が、現実に、本性からして禁じられて水の中に生きることのできないすべての小動物があの一定数だけそこに存在したという仕方以外では実現されなかったとしても、これは、あの人やあの人びとの配慮によるものではなく、神の配慮によるものであった。すなわち、ノアがそれら小動物をつかまえて入れたわけでなく、小動物たちがやって来てそのなかへ入るのを許容したのであった。

「かれらをあなたのところに入れなさい」(六)といわれた意味はここにある。それは人間の行為によるのではなく、神の合図によるのである。そのなかに性別を欠く動物たちが含まれていたと考えるべきではないことは確かである。というのは、「それらは雄と雌でなければならない」と明確に規定されているからである。じっさい、雌雄が交尾することなくしてさまざまな物から生じる他の動物たちがいる。それらは、そののちに交尾し、増殖する。蚊がその例である。他方、蜂のように雌雄の区別のないものがある。さらに、雄と雌のらばのように、子どもを生むことはしないけれども性別を見せている動物がある。それらが箱舟にいたなら不思議なこと

であろう。むしろ、その親たち、すなわち馬とろばの種がそこにいれば十分であろう。同じことは、異なった種の交配によって何か別の種を生むような他の動物についてもいえるであろう。しかし、これも秘義に関連した動物であったのなら箱舟にいたのである。この種も雄と雌をもっているからである。

ある人びとはまた、肉しか食べないと見なされている動物たちが、箱舟のなかでどんな種類の餌をとることができたかということをよく問題にする。肉食動物の餌のためには欠かせないものとしてそこに含めざるをえなかったような動物たちが、神の指図に違反することなしに、定められた数をこえて余分にいたのであるか。それとも、むしろありうると考えられることであるが、すべての動物に適した肉以外に、何か糧食となるものがそこにあったのであるか。事実、わたしたちは、肉を食べ物とする多くの動物たちが、木の実や果実を、とくに無花果や栗の実を食べるのを知っている。それゆえ、あの賢明で義しい人が、それぞれの動物に適したものが何であるかということについて神の指図を受け、肉を用いないでそれぞれの種に合った食べ物を準備し貯えていたとしても不思議ではないのではなかろうか。

しかし、空腹が食べるよう強いることのないようなものが何かあるであろうか。あるいは、神が、美味しくそして体のためによいものとしてくださることの不可能なものが何かあるであろうか。餌をとるということ自体がこの大いなる秘義の象徴像の実現のために適合しないばあいには、じつに神が神的な力の容易さをもって、動物たちに食べ物なくして生きていくことをおゆるしになるのである。しかし、じっさいにおこったこれほど多くのしるしが教会について

の象徴的予示に関連しているものではないなどと考えるのは、ただ論争好きな者のみがおこなうところであって、だれもそのように考えることはゆるされない。じっさい、すでに諸々の民が教会を満たしており、そして、清い者も清くない者も、定められた終極に達するまでのあいだ、教会の一体性という骨組みのなかに共に繋がれているのであって、このじつに明白な事実からして、他のかなり曖昧に示されて仲々認めにくいような象徴についても疑うことはゆるされないのである。

このようなことであるから、いかに頑固な者であっても、これらが何の意図もなく書かれたものであると敢て考えはしないであろうし、また、これらがじっさいにおこったことであるのに何の意味も表示していないとか、記されていることは事実ではなくたんなる象徴的なものであるにすぎないか、それらが教会と関連しているものは何もない、などと、いかにもまことしやかにいうことはできない。そうではなく、むしろわたしたちは、それらが知恵をもって記録に留められたものであり、そして、それらはじっさいにおこったことであって何ごとかを表示しており、その何ごとかは教会の預言的な像と関連しているのだと信じなければならない。いまやこの点にまで達したので、この巻は閉じなければならない。二つの国、すなわち人間にしたがって生きるこの世の国と神にしたがって生きる天上の国の進展を、洪水ののち、さらにそれにつづく時期において吟味するためである。

（一）『マニ教徒ファウストゥス論駁』一二の一五、三八参照。
（二） オリゲネス『創世記にかんする説教』二の二参照。

(三) 「使徒行伝」七の二二。
(四) 「創世記」六の二〇。
(五) 「創世記」六の一九。
(六) 同上、六の二〇。

第十六巻

第一章

洪水ののちアブラハムの時までの聖なる国の進展について

洪水ののち、聖なる国の進展について、それが持続されたのであるか、それとも不信仰の時代が介入してさえぎられて、真実にして一なる神を礼拝する人間が存在しなかったのであるか、――聖なる書の明らかな記述によってその足跡を見いだすことは困難である。それというのも、わたしたちは、正典の諸書に、ノアがその妻や三人の息子たちとそれらの者の妻たちと共に箱舟によって洪水の破滅を免れるにふさわしい者とされて以後、アブラハムの時まで、ノアが、その預言者的な直観と予見とによってはるかな将来におこるべきところのことを知って、二人の息子――セムとヤペテ――を預言的な祝福のことばをもって推賞するという事実を除いては、だれかその信仰深い心が明白な神的証言によって示されたような者を見いださないからである。

ここからしてまた、ノアがその真中の息子すなわち長子よりも年下で末子よりも年上である

息子を呪うということがおこったのである。その息子は父親に対して罪を犯したのであった。ノアは、かれを、かれ自身においてではなく、その息子――ノアにとって孫にあたる――において、「カナンは呪われよ。かれは僕となってその兄弟たちに仕える者となるであろう」[一]ということばをもって呪ったのである。カナンはハムの息子であって、ハムは眠っている父親の裸を覆わず、むしろ顔をそむけてそれを見なかったのであった。だからして、ノアは長子と末子の二人の息子を祝福して、「セムの神であられる主はほむべきかな、カナンはその僕となれ。神はヤペテを大きくされてセムの天幕に住まわせられるように」[二]と付け加えていったのであるが、これらのことは、ノア自身によるぶどう畑の栽培、ぶどうの実によっておこった酩酊、眠っていて裸となったこと、そしてそこでおこったことや記されている他のことと同じように、預言的な意義をはらんでおり[三]、ヴェールで覆われているのである。

(一)「創世記」九の二五。
(二)同上、九の二七。
(三)『マニ教徒ファウストゥス論駁』一二の一四―四一参照。本巻第七章においてくり返される。

第二章

ノアの息子たちについての預言的象徴

しかし、かつて覆われていたところのことは、のちにつづくその子孫において現実的なこととなって成就されたので、いまではまったく明らかとなっているのである。これらのことを注意深くそして知性をもって見る者に、それがキリストにおいて成就されていることに気付かぬ者があるであろうか。じつに、キリストが肉において お生れになったのは、セムの種から出た系列からであるが、このセムという名は「名をよばれた者」と訳されるのである。さて、キリストの御名よりもよく知られた名が何かあるであろうか。その名は、雅歌のなかで預言的に先触れされて「注がれた香油」にたとえられているように、[一] いまや至るところに香気を放っているのである。そしてその家々――すなわち教会――には大きく広がった諸々の民が住んでいる。なぜなら、ヤペテは「広さ」と訳されるからである。

さらに、ノアの真中の息子ハムは「熱い」と訳されるのであって、[二] かれは、いわば他の二人の兄弟たちから離されてそれらの中間に留まりながら、イスラエルの民の初穂のうちにも諸々[三]の民の豊かな収穫のうちにも入れられてはいないのである。[四] かれが、知恵の霊によってでなく不寛容の霊によって熱くなっている異端者たちの種族を意味していないのなら何を意味しているのであろうか。不寛容の霊こそ、つねに異端者たちの心臓を煮え立たせて聖徒たちの平和を乱すところのものにほかならない。けれども、これらのことも、使徒の「あなたがたのなかですぐれた者が明らかにされるためには、分派もなければならない[五]」といっているところにもとづいて、恩恵のうちに成長しつつある者にとっては有益なものとなるのである。

だからして、「教育のある子は賢くなり、無分別なる者を手伝い人として用いるであろう[六]」

とも記されているのである。じっさい、カトリックの信仰に属している多くのことが異端者たちの熱狂的な騒ぎ立てによってさまざまに取り沙汰されているのであるが、そのために、かれらに相対して弁護することができるよう、かれらがいっそう注意深く検討され、いっそうはっきりと理解され、いっそう真剣に公表されて、こうして敵対者によって立てられた問題がかえって学びの機会となるのである。しかもなお、ノアの真中の息子は、まったく公然と分離された者たちだけでなくキリスト教徒の名を誇りにしながらも破滅的な生をおくっている者たちすべてを象徴的に表わしていると考えるのは不当なことではない。じっさい、かれらは、あの人の裸によって暗示されているところの受難を告白し、知らせてはいるが、悪しき行為によってそれを汚しているのだからである。

それゆえに「あなたたちはその実によってかれらを見分けるであろう(七)」といわれているのは、このような者たちのことについてである。そのためにハムは、かれ自身の息子において、いうなればかれ自身の実において――すなわち、かれ自身の「はたらき（オプス）(八)」において――呪われたのであった。だからして、この息子であるカナンという名がかれらの「動き（モトゥス）(九)」と訳されるのも不都合なことではないのである(一〇)。これは、かれらの「はたらき（オプス）」にほかならないのではなかろうか。それにたいしてセムとヤペテは、いわば割礼を受けた者と無割礼の者を、あるいは使徒が別の仕方でユダヤ人とギリシア人とよんだところのものを表わしている。もちろんそれは召された者、義とされた者にのみについていわれるのではあるが――。かれらは、救い主の受難を意味したところの父親の裸を何らかの仕方で知ったとき、着物を取り、自分たちの背中に掛け

てうしろ向きになって進み、父親の裸にかぶせたのであった。かれらは尊敬の念から父親の裸を見なかったのである。(二二)

じっさい、わたしたちはある意味で、キリストの受難において、わたしたちのためにおこなわれたところのことを敬い、そしてユダヤ人たちの過失に対しては背を向けるのである。着物は秘義を意味し、背中は過去の記憶を意味する。なぜなら、教会は、あのとき、すなわちヤペテがセムの家に住み悪しき兄弟がかれらの真中にいたときにすでに完成されたキリストの受難を祝い、もはや未来におこるものを待望しないからである。

しかし、悪しき兄弟は、自分の息子において、すなわち自分の「はたらき」において、善き兄弟たちの奴隷――僕(しもべ)――となるのである。善き者は、忍耐の熟練のためであるか、あるいは知恵の進歩のためであるか、悪しき者を巧みに用いるからである。使徒の証言によるなら、清からぬ理由のためにキリストを宣べ伝える者たちが存在するのであるが、しかし、かれはまた、「それが口実からであっても真実からであっても、いずれもキリストを宣べ伝えているのである」(二三)といっている。じっさい、キリストご自身が「万軍の主のぶどう畑とはイスラエルの家のことである」(二三)と預言者がいっているそのぶどう畑を耕され、ぶどう酒を飲まれるのである(あるいはここでは、キリストが「あなたたちは、わたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか」(二四)そして「父よ、できることならこの杯をわたしから取り去ってください」(二五)といわれたところのあの杯のことが理解されるであろう。キリストはそれによって、疑いもなくご自身の受難を示しておられるのである。

あるいは、ぶどう酒はぶどう畑の産物であるがゆえに、それによってむしろつぎのことが意味されたのかもしれない。つまり、ご自身が苦しみを受けられるために、このぶどう畑すなわちイスラエル人の民族からわたしたちのための肉と血を受けとられたということである）。また「かれは酩酊した[二六]」というのは、苦しみを受けられたということであり、そして「裸になった」のである。裸になったとき、まさにその者の弱さがさらけ出される——はっきりと現れる——ということである。これにかんしては、使徒が「(キリストは)弱さのゆえに十字架につけられたのではあるが[二七]」といっている。だからして使徒はまた、「神の弱さは人間よりも強く、神の愚かさは人間よりも賢い[二八]」というのである。

しかし、「かれは裸になった」といったあとで、「自分の家で[二九]」と付け加えて記されているのであるが、このことは、キリストがご自身の肉の種族とご自身の血のつながった家族から、いずれにしてもユダヤ人から、十字架の死を耐え忍ばれるであろうことを巧みに示している。劣悪な人びとは、キリストのこの受難を外でただ音声を張りあげて知らせる。かれらは自分たちの知らせているところのことを理解してはいないからである。他方、まともな人びとは、かくも大いなる秘義を内なる人において抱き、神の弱さと愚かさとを、それが人間よりも強く賢いがゆえに、心の内奥において敬うのである。これらのことがらの象徴的な像は、ハムが出てノアの裸を外で知らせたのであるが、セムとヤペテはそれを覆うために、つまりそれを敬うために、うちへ入ってきた、すなわち、それをいっそう内面的なものとして性格づけたということに現されている。

神的な書のこのような隠された意味をわたしたちは力の及ぶかぎり探究するのである。それらの探究の適切さについては、人によってその度合を異にするであろう。しかし、すくなくともわたしたちは、おこった出来事が、つねに来たるべきものについての何らかの予示的な像であり、またつねにキリストとその教会――それは神の国である――に関連づけられるべきものであることを、つよく確信しているのである。じっさい、教会についての予告は人類のはじめから欠けることはなかったのであって、わたしたちはその予告があらゆるものにおいて成就されるのを見るのである。したがって、ノアの二人の息子が祝福され、その真中の一人の息子が呪われてのちアブラハムに至るまで、記録は、千年以上もの年月にわたって[20]、敬虔な心をもって神を礼拝しただれか正しい人びとのことについては黙したままとなっているのである。

わたしは、そのような人びとが存在しなかったと考えようとはおもわない。けれども、そのような人びとのすべてについて言及されるなら、ひじょうに長たらしくなってしまうことであろうし、また、預言的な予見よりもこれらの史実的な精密さの著しいものとなってしまうであろう。それゆえに、これらの聖なる諸書の記者、というよりはむしろ記者を媒介とした神の霊は、たんに過ぎ去った歴史が語られることだけでなく、将来におこるべきこと、そして何よりも神の国に関連するところのものが予告されることをも探究しようとしたのである。それというのも、その国の民でない人びとについてここで述べられているところのことはすべて、その国が比較対照されることにより引き立てられ浮き彫りにされるために述べられているのだからである。たしかに、おこった出来事として語られるすべてのことが何かを象徴的に意味してい

ると見なすべきではないが、しかし、とくに象徴的な意味をもたないところのことも、何かを意味することがらのために編み込まれているのである。

じっさい、土地が切り開かれるのはただ鋤べらのみによることではあるが、しかし、そのことがなされるためには鋤の他の諸々の部分も必要である。同じく、音楽については琴やそれに類する楽器の弦のみが音色に合わせられるのではあるが、しかし、それに合わせられるために他の部分もその楽器の構造に含まれているのである。それらは奏者によって打ち鳴らされるのではないが、弦が打たれたときに共鳴するものとしてそれに結合されている。そのように、預言的な史実においては、それ自身において象徴的意味をもたないあるものも語られるのであるが、しかし、象徴的な意味をもつものはそれらに繋がっており、ある意味で固く結び付けられているのである。

(一)「雅歌」一の三。

(二) セムは「名前」(sem)に、ヤペテは「広く開かれた」(pāthāh)の意にそれぞれ結び付けられる。ハムが「熱い」(ham)に由来するというのは可能性として考えられる。

(三)「ローマ人への手紙」一一の一六参照。

(四) 同上、一一の二五参照。

(五)「コリント人への第一の手紙」一一の一九。

(六)「箴言」一〇の五(七十人訳)。

(七)「マタイによる福音書」七の二〇。

(八) opus.

（九） motus.
（一〇） カナンという名は、おそらく「屈めた」「低くした」を意味する kanā からとられたのであろう。そうであれば、アウグスティヌスの解釈は正当とはいえない。
（一一） 「創世記」九の二三参照。
（一二） 「ピリピ人への手紙」一の一八。
（一三） 「イザヤ書」五の七。
（一四） 「マタイによる福音書」二〇の二二。
（一五） 同上、二六の三九。
（一六） 「創世記」九の二一。
（一七） 「コリント人への第二の手紙」一三の四。
（一八） 「コリント人への第一の手紙」一の二五。
（一九） 「創世記」九の二一。
（二〇） この年数は七十人訳に従っている。ウルガータでは二百九十年である。

第三章

ノアの三人の息子たちの子孫の系図について

そこで、つぎにわたしたちは、ノアの息子たちから出た諸世代を考察しなければならない。

そして、それについて述べなければならないとおもわれるところのことを、歴史をとおして二つの国——すなわちこの世の国と天上の国——の進展を示すこの書のなかへ織り込まなければならない。さて、記述は、ヤペテとよばれた一番下の息子からはじめられている。かれの息子については八人の名が挙げられ、さらにその二人の息子から七人の孫——一人の息子から三人の、そして他の一人の息子から四人の孫——が挙げられている。したがって、全部で十五人の名が挙げられているわけである。ノアの真中の息子であるハムの息子たちは四人であるが、その一人の息子から五人の孫が、そして一人の孫から二人の曾孫が挙げられており、全部で十一人の名が挙げられている。

これらの名が挙げられてのち、いわば長たる者へともどって、つぎのように述べられている。「さて、クシはニムロデを生んだ。このニムロデは地上の最初の勢力者となったのであった。かれは主なる神の御前に強力な狩人であった。ここからして『ニムロデのごとき主の御前に強い狩人』ということわざがはじまったのである。かれの王国はシナルの地にあるバビロン、エレク、アカデ、カルネにはじまった。その地からかれはアッスルに出て、ニネベ、レホボおよびカラの都市、そしてニネベとカラとのあいだにある偉大な都市レセンを建設した(二)」。

勢力者ニムロデの父であるこのクシは、ハムの息子たちのなかで最初に名が挙げられている者なのであるが、その五人の息子および二人の孫はすでに数えられたことであった。しかし、クシがこの勢力者を生んだのは、かれの孫たちの誕生ののちであったか、あるいはいっそう信頼できるのは、聖書はこの者の際立った存在ゆえに切り離して語ったということである。じっ

さい、かれの王国について述べられているのであって、その王国のはじまりはかの有名なバビロンの都市であり、また、それと並んで挙げられている都市や地方なのである。

しかし、かの地、すなわちニムロデの王国に属していたシナルの地からアッスルが出て、ニネベおよびニネベに結合された他の諸都市を建設したことはずっとのちにおこったことである。(創世記の)記者は、アッシリア人のこの王国の名声のためにこの機会を利用してこのことに触れて通ったのであった。この王国は、ベルスの息子であり大都市ニネベの創設者であるニヌスのもとにおどろくべき拡張を見せたのであった。その都市の名は、かの創設者に由来するものであって、ニネベはニヌスからそうよばれるのである。他方、アッシリア人の起源となったアッスルは、ノアの真中の息子であったハムの息子たちのひとりではなく、ノアのいちばん年長の息子であったセムの息子たちのうちに見いだされる。(二) だからして、のちにあの勢力者の王国を手に入れ、そこからさらに進んで他の諸都市——その最初のものがニヌスの名にしたがってニネベとよばれた都市である——を建設するに至った者たちが、じつはセムの系列から出たということが明らかとなる。

ここから記事は、ミツライムとよばれたハムの他の息子へともどっている。(三) そしてその子孫たちのことが述べられているのである。しかしそれは個々の人間としてではなく、七つの民として述べられているのである。六番目の民からは、あたかも六番目の息子から出たのであるかのごとくペリシテ族とよばれる民が出たと述べられている。それゆえ八つの民となるわけである。ここであらためてカナンへもどっている。(四) ハムはこの息子において呪われたのであったが、

かれから生れた十一人の者の名が挙げられているのである。それにつづいて、それらの者がどの境界にまで到達したのかということについて言及されており、また、いくつかの都市が示されている。それで、息子たちや孫たちの数が数えられるなら、ハムの子孫は三十一人を擁することになる。

言及されねばならぬものとして残されているのは、ノアの長子セムの息子たちのことである。じっさい、これら諸々の世代の物語りは、一番末の息子からはじめられて順次進んでかれにまで至っているのだからである。けれども、セムの息子たちの列挙がどこからはじまっているのか、不明瞭さをもっている。これは説明を加えることによって明瞭にしなければならない。なぜかといえば、そのことは、わたしたちが探究しているところのことがらにとってひじょうに重要だからである。すなわち、つぎのように読まれるのである。「そしてセムにも子が生れた。セムはヘベルのすべての子孫の父祖であり、ヤペテの兄であった[五]」。このことばの順序は、「セムにもヘベルが生れた。かれにも、すなわちセム自身にもヘベルが生れたのであった。そしてこのセムはその息子たちすべての父祖である」ということになるであろう。それゆえに、記者は、セムが、かれの血統から出て言及されるべきところのすべての者――息子たちや孫たち、あるいは曾孫たち、そしてそののちにそこから出た者たち――の族長として解されることをのぞんだのであった。

もちろんセムがこのヘベルを生んだわけではない。しかし、セムはヘベルの先祖たちの系列のうちに見いだされるのであって、五代まえにあたるのである。じっさい、セムは他の息子た

ちのほかにアルパクサデを生んだのであり、アルパクサデはカイナンを生み、カイナンはシャラを生み、シャラはヘベルを生んだのであった。したがって、ヘベルはじっさいには五番目の世代にあたるのに、かれがセムから出た子孫たちのうちで最初に名が挙げられ、また、息子たちに優先して置かれていることは理由のないことではない。つまり、「ヘブライ人」がかれの名にしたがってそのように名付けられていわば「ヘベライ人」となったと伝承されているところのことが真実であるということにほかならない。もっとも、別の見解もありうるのであって、それは、かれらはアブラハムにしたがって「アブラハイ人」といわれるようになったと見られるというのである。しかし、かれらがヘベルの名にしたがって「ヘベライ人」とよばれるようになり、そしてのちに、一文字(e)が落ちて「ヘブライ人」といわれるようになったということは疑えない真実である。ヘブライ語はひとりイスラエル人のみが保持することのできた言語であるが、この民において神の国は、地上を旅する聖徒たちのうちに実現されたのであり、また、神秘的な仕方によってすべての者のうちに予示されたのである。

したがって、まずセムの六人の息子の名が挙げられ、次いで、その息子たちの一人から四人の孫が生れた。同様に、セムの息子たちの別の一人が一人の孫を生み、さらにその孫から一人の曾孫が生れ、また、その曾孫から玄孫が生れたのであって、これがヘベルである。さて、ヘベルは二人の息子を生んだが、その一人をペレグとよんだのであった。これは「分割者」という意味である。そこで聖書はこの名の理由を説明して、「なぜなら、かれの時代に地(地上の民)が分たれたからである」(六)と付け加えている。

これによって何が意味されているのかは、のちに明らかになるであろう。ヘベルから生れた他の息子は十二人の息子たちを生んだのであった。そこで、セムの子孫はみんなで二十七人となるわけである。したがって、ノアの三人の息子の子孫——すなわち、ヤペテからの十五人、ハムからの三十一人、セムからの二十七人——の合計は七十三人である。次いで聖書はこれにつづけて、「これらはセムの子孫であって、それぞれその氏族とその言語とにしたがってその土地とその民のうちにあった(七)」と述べ、また同じように(ノアの)すべての系図について、「これらは、それぞれの血統と種属とによるノアの子らの氏族である。洪水ののち、これらから地上の諸々の民の島々が分れたのである(八)」といっている。

このことからして、その当時、七十三の民あるいはむしろ(のちに証明されるように)七十二の民が存在したと考えられるのであって、七十三人の人間が存在したというのではない。なぜなら、すでにそれよりまえに、ヤペテの息子たちについて触れられたとき、つぎのように締めくくられているのだからである。「これらの者たちから諸々の民の島々が分れてその地におり、それぞれがその言語にしたがいその氏族にしたがって、その民のうちにあった(九)」。

しかしながら、ハムの息子たちにおいてはすでにわたしがさきに示したように、ある箇所で、その氏族がいっそう明らかな仕方で述べられている。「ミツライムはルデ人とよばれる者たちを生んだ(一〇)」。同じ仕方で他の氏族が挙げられて七つの氏族となっている。これらすべての氏族が枚挙されてのち、締めくくりとして、「これらはハムの子孫であって、それぞれその氏族とその言語とにしたがって、その土地とその民のうちにあった(一一)」といっている。それゆえ、かな

り多くの者についてその子どもたちのことが触れられてはいないのであるが、それは、かれらが生れたときに他の氏族に加えられて、自分たちの氏族をつくることができなかったという理由によるのである。

じっさい、ヤペテの八人の息子たちが列挙されているのに、そのうちただ二人だけについてその生れた子どもが語られていたり、また、ハムの四人の息子たちの名が挙げられているのに、そのうちただ三人だけについて生れた者が付け加えられていたり、セムの六人の息子たちの名が挙げられているのに、その二人だけについて子孫が付け加えられていること、――これは、いま述べた理由のほかにどんな理由があるであろうか。他の者たちは子どもをもたないままであったのであろうか。このように考えるのは止めなければならない。そうではなく、かれらはいずれにしても、言及されるに値する理由となっているところの「氏族」というものをつくらなかったのであって、それというのは、かれらは生れたときに他の氏族に加えられたからなのである。

(一)「創世記」一〇の八―一二。
(二) 同上、一〇の二二。
(三) 同上、一〇の一三、一四。
(四) 同上、一〇の一五―一九。
(五) 同上、一〇の二一。
(六) 同上、一〇の二五。

(七) 同上、一〇の三一。
(八) 同上、一〇の三二。
(九) 同上、一〇の五。
(一〇) 同上、一〇の一三。
(一一) 同上、一〇の二〇。

第四章

言語の混乱とバビロンの始まりについて

それゆえ、これらの諸氏族はそれぞれ固有の言語をもっていたと報ぜられているわけであるが、それにもかかわらず、物語りの語り手は、すべての人間が同じ一つの言語をもっていたあの時代へと還るのである。そしてかれは、そこからどうしてさまざまな言語が生じるようになったかということについて説明しているのである。かれはつぎのようにいう。「全地には同じ一つの言語があった。すべての人間に同じ一つの話し方があった。ときに、人びとは東方から移動して、シナルの地に平原を見出し、そこに住みついたのであった。人びとはたがいに『さあ、れんがを造り、それを火で焼こう』といい合った。こうして、石の代りにれんがが用いられ、しっくいの代りに瀝青が用いられたのであった。そしてかれらは、『さあ、わたしたちの

都市をつくり、塔を建て、その頂きを天にまで届かせよう。そして、わたしたちが全地のおもてに散らされるまでにわたしたちの名前を高くかかげておこう』といった。主は、人間の子らが建てた都市と塔を見ようとして下ってこられた。

　主なる神はいわれた。『なるほど、民は一つであり、みな同じ一つの言語である。かれらはこのことをやりはじめたのだ。いまやかれらは、自分たちのなそうとすることに成功しないことはないであろう。さあ、わたしたちは下って行ってかれらの言葉を乱すことにしよう。そうすればかれらはたがいに相手の言葉を理解することはないであろう。こうして主はかれらをそこから全地のおもてに散らされたので、かれらは町や塔を建てるのを止めた』。このゆえにその町は『混乱』[一]という名でよばれることになったのであって、それというのも、ここで主が全地の言葉を乱されたからである。そして主なる神は、そこからかれらを全地のおもてに散らされたのであった[二]」。

「混乱」とよばれたこの都市はバビロンにほかならないのであって、異教徒の歴史家たちもまた、そのおどろくべき構造を推賞しているのである。たしかに、「バビロン」という名は「混乱」という意味に訳される。だからして、さきに簡単に知らせたことであるが、かの勢力者ニムロデがその建設者であったと推論されるのである。かれについて聖書が語るとき、「かれの王国はバビロンにはじまった[三]」といっているからである。すなわち、それは他の都市にまさってすぐれていたのであって、高慢で不敬虔な人びとが考えていたほどの規模において完成されたものではなかったけれども、そこはいわば首都における王の住家のようであった。

というのは、それが、他の塔のなかでも主要な塔として組み立てられた一つの塔のことであるにせよ、あるいは、すべての塔のことであるにせよ――このばあいは集合的な単数によって表示されるのであって、たとえば「兵士」といわれて千人の兵士らのことが理解されたり、あるいは、エジプト人たちがモーセによって打ち倒されたときのあの災いにおいて「蛙」や「蝗」について語られるとき(四)、蛙や蝗の大群が意味されるごとく――、さきに述べられたように、その計画は「天にまで届く」ほどのおどろくべき高さが工案されていたのだからである。

しかし、人間的な空虚なもくろみは、いったい何をなそうとしていたのであろうか。神はすべての山々を超えておられ、この霧のかかった大気の空間を超脱しておられるというのに、その神に対抗して、どのようなものをどれほどの高さに天にまで揚げようとしたのであろうか。要するに、霊的な上昇であれ物体的な上昇であれ、どれほど高く揚げれば神を損うというのであろう。天に至る確実で真実の道を、謙遜こそが、主に反抗する――かの勢力者が「主に反抗する狩人(五)」といわれているように――のではなく、心を主に向かって上方へ揚げながら、前進させるのである。

ある無分別な人たちはこのことを、ギリシア語の曖昧さによって誤解したのであって、「主に向かって(六)」と訳す代りに「主の御前に(七)」と訳したのである。たしかに「エナンティオン(八)」という語は、「向かって」と「前に」という意味をもっている。すなわち、この言葉は『詩篇』においては「わたしたちはわたしたちをおつくりになった主の御前で嘆こう(九)」とあり、また同じ言葉はヨブ記においては「あなたは主に向かって激怒した(一〇)」と記されているのである。そこで、

あの勢力者については、「主に反抗する狩人」[二]という意味に解されねばならないのである。

ところで、この「狩人」という名称は、地上に生れた動物たちを欺く者、抑圧する者、抹殺する者を意味するのでないなら何を意味するのであろうか。それゆえ、かれは自分の民と共に神に向かって塔を建てたのであって、その塔は不敬虔な高慢を象徴するものであった。悪しき熱望は、それが不成功に終わったときでも罰せられるのは正当なことである。しかし、どんな罰が課せられたのであるか。

言葉は支配者の権力の道具なのであるから、まさにそこにおいて高慢は罰せられたのであった。そのため、神が命じられるときそれに従順であるべきことを理解しなかった者は、その者が人びとに命令を下すとき人びとによってもはや理解されなくなったのである。このようにして、それぞれの者は、自分が理解することのなかった相手から離れ去って、語り合うことのできる者とのみ仲間となったので、かの謀りごとは無に帰することになったのである。そして、諸氏族はその言語によって分たれて各地に散らされていったのであった。それは、わたしたちには秘められかつ把握されない仕方でこれをおこなわれた神の意に適ったことであった。

(一) Confusio.
(二) 「創世記」一一の一―一〇(ここでは七十人訳にしたがっている)。
(三) 「創世記」一〇の一〇。
(四) 「出エジプト記」一〇の一二以下参照。
(五) 「創世記」一〇の九。

（六） contra Dominum.
（七） ante Dominum.
（八） ἐναντίον.
（九） 「詩篇」九五の六。
（一〇） 「ヨブ記」一五の一三。
（一一） venator contra Dominum.

第五章

「神が下ってこられた」ということについて

すなわち、「主は人の子らが建てた都市と塔を見ようとして下ってこられた」と記されているのである。これは神の子らのことではない。わたしたちが「この世の国」とよんでいるところの、人間にしたがって生きるあの社会のことである。神は、つねに、そして到るところに、全体として存在しておられ、場所によって移動されることのないかたであるが、しかし、自然の通常の経過に反しておどろくべき仕方ではたらかれて、ある意味でご自身が現前しておられることを示すところの何ごとかを地上でなさるとき、「下ってこられる」といわれるのである。また、神は何ごとかについて無知であられるということはけっしてないのであるから、神が見

ることによってある時に何かを知るということもないのである。けれども、神がそのものを(他者によって)見られたり認識されたりするようになさったときに、ある時に神が「それを見、かつ認識される」といわれるのである。

それゆえ、あの都市がいかに神のお気に召さないものであったかということが示されたとき、それは、神がそれを(他者に)見えるようになさったようには見られていなかったわけである。神がかの都市へ下ってこられたというのであるが、それは、神の天使たちが下ってきたゆえにそのように理解されうるのであって、神はかれらのうちに住んでおられるのである。そのため、「主なる神はいわれた。『なるほど、民は一つであり、みな同じ一つの言語である云々』(一)」と付け加えられており、さらにそれにつづいて、「さあ、わたしたちは下って行ってかれらの言葉を乱すことにしよう」とあるのは、「主は下ってこられた」といわれているところのことが、じっさいにどのようにしておこなわれたのであるかということを明らかに示すところの要約というべきであろう。

じっさい、神がすでに下ってきておられたのなら、「さあ、わたしたちは下って行って乱すことにしよう」(これは天使たちにたいしていわれたものと解される)といわれたのであるが、これは、天使たちが下って行くとき、神はまさにかれらのうちにおられて、天使たちをとおしてご自身が下って行かれたからそのようにいわれたのであって、そうでなければ何を意味するのであろうか。そして、神が「さあ、下って行って混乱させなさい」とはいわれず、「そこでわたしたちは彼らの言葉を乱すことにしよう」といわれたのはよいことであった。そのように

して神はご自身に仕える者たちをとおしてみずからはたらかれ、それによって、使徒が「じつに、わたしたちは神の共働者である」(二)と述べているように、かれら自身も神と共に働く者であることを明らかにしているのである。

(一)「創世記」一一の六。
(二)「コリント人への第一の手紙」三の九。

第六章

神が天使たちにたいして語りかけられた仕方はいかなるものであったか

人間がつくられたとき、「わたしたちは人間をつくろう」(一)といわれているが、これは天使たちにたいしていわれたものであるとも解されうるであろう。なぜなら、「わたしは人間をつくろう」とはいわれなかったからである。しかし、「わたしたちの像にしたがって」とつづけられているからといって、天使たちの像にしたがって人間がつくられたのだとか、あるいは天使たちと神とは同じ像であるなどと信じてはならない。ここでは三位の複数性と解されるのが正しいのである。にもかかわらず、その三位は一なる神であるがゆえに、「わたしたちはつくろう」といわれてはいても「神は人間を神の像にかたどってつくられた」と語っているのである。「神々はつくった」とか、「神々の像にかたどって」とは語っていないのである。

いま論じている箇所でも、「さあ、わたしたちは下って行ってかれらの言葉を乱すことにしよう(二)」といわれたことが、もしも天使たちにたいしていわれたものと解するのに何か支障があるとするなら、それは、御父が御子と聖霊とにたいしていわれたものとして、同じ三位が理解されうるであろう。しかし、天使たちにとっては聖なる運動によって神のもとにくるというのがむしろふさわしいのであって、これはすなわち敬虔なる思いのことである。その思いによってかれらは、いわばかれらのあの上なる法廷の永遠の法である不変の真理に助言を求めるのである。というのは、かれら自身が自分たちにとって真理なのではなく、創造の真理にあずかる者だからであって、あたかも生命の泉に向かうかのようにそれへと動かされて(三)、かれらが自分自身にもとづいて所有することのないものをそれから汲みとるのである。かれらのこの運動は確固たるものである。その運動によってけっして遠ざかることのないところへ赴いていくのだからである。

　神が天使たちに語りかけられるのは、わたしたちがたがいに語りあったり、あるいは、わたしたちが神や天使たちに語りかけたりするような仕方によるのでもなければ、また、天使たち自身がわたしたちに語りかけたり、神が天使たちを通してわたしたちに語りかけられたりするような仕方によるのでもない。神は、いい表わすことのできない独自の仕方で語られるのである。けれども、これはわたしたちの流儀によってわたしたちに伝えられるのである。たしかに、神のそのはたらきに先立つ語りかけはより崇高なものであって、御自身の行為そのものの不変なる理念である。それは鳴りひびいてやがて消え去っていく音をもつものではないが、しかし、

永遠に留まりながら時間的な仕方ではたらく力をもつのである。神はこのように聖なる天使たちに語りかけられたのであるが、それにたいして、はるかに離れたところに位置しているわたしたちには異なった仕方で語られるのである。

しかしながら、わたしたちもまた内なる耳をもって何かこのような語りかけをとらえるときには天使たちに接近しているのである。したがって、この書において引きつづいて神の語りかけについてこれ以上わたしが説明を与えることもないであろう。というのは、不変の真理は、それ自身によっていい表わすことのできない仕方で理性的被造物の精神に語りかけたり、可変的な被造物をとおして霊的な諸々の像によってわたしたちの霊に、あるいは物体的音声によって身体の感覚に、語りかけたりするのだからである。

「いまやかれらは自分たちのなそうとすることに成功しないことはないであろう[四]」ということばは、たしかに断言としていわれたのではなく、むしろ問いとしていわれたものである。これは、ひとが、

かれらは武器を取って町中から追跡しないであろうか[五]

というように、たとえば脅迫する者によっていわれるものである。したがってこれは、神があたかも「かれらは自分たちのなそうとするすべてのことに成功しないことはないであろうか」といわれたのであるかのように解されねばならない。しかし、そのような意味でいわれたとしても、これが脅迫を表現しているわけではない。わたしは飲み込みのおそい者のために〃ne〃という小辞を付け加えて「ないであろうか」と問いの意味に読むようにしたのである。それと

いうのも、ことばを発する者の声の調子は文字で表わすことはできないからである。
このようなわけで、ノアの息子であるあの三人の人間から、七十三の——あるいは、のちにその理由が明らかにされるであろうが、むしろ七十二の——氏族とそれだけの数の言語が地上に存在しはじめ、それらは数が増大して島々を満たしたのであった。しかし、氏族の数は言語の数よりもはるかに増大したのであった。じっさい、アフリカにおいてさえ、ただ一つの言語をもった多くの野蛮な氏族をわたしたちは知っているのである。そして、人間はたしかに、人類が増加して島々に住みつくために船で渡ることができたのだということを、だれが疑うであろうか。

(一)「創世記」一の二六。
(二) 同上、一一の七。
(三)「詩篇」三六の九参照。
(四)「創世記」一一の六。
(五) ウェルギリウス『アエネイス』四の五九二。

第七章

遠隔の島々はあらゆる種類の動物たちを、箱舟のなかで保護されていたものから受けとったのであるか

しかし、動物たちについては問題が存するのである。それは、人間の保護のもとにもなく、また、蛙のように土から生れるのでもなく、たとえば狼やその種の他のもののように雄と雌との結合からのみ増殖するすべての種類の動物たちのことである。それらは、箱舟のなかに入ってはいなかった動物たちすべてを滅ぼした洪水ののち、いかにして島々にも存在しえたのであろうか。というのも、わたしたちは、動物たちが再興されたのは、ただ箱舟が両方の性でもって保護していた種類のものからのみであったと仮定するのだからである。

たしかに、それらの動物たちは泳いで島々へ渡って行ったと考えることもできよう。けれどもそれは、ひじょうに近接した島々についてのみ可能であろう。大陸からはるか離れたところに位置する島々も存在するのであって、そこへはいかなる動物も泳いで渡ることは不可能とおもわれる。もしも人間がそれをとらえて一緒に連れて行って、狩猟への愛着によって、かれらが住みついた場所にそれらの種類の動物たちを植え付けたとするなら、そのような可能性も考えられないわけではない。他方、神の命令ないしは許しを得て、天使たちの業(わざ)によって移し置かれたという可能性も否定することはできないけれども——。

しかしながら、それらのものが、「地は生きた魂を産み出せ」(一)と神がいわれたとき、最初の起源にしたがって地から出てきたものであるかもしれない。もしも、渡ることができないような島々において地が多くの動物たちを産み出したのなら、それは、動物たちを再興するためというよりは、教会の秘義との関連において、さまざまな氏族を象徴的に予示するために箱舟のなかにすべての種類のものが存在していたということであって、そのことがいっそう明白に知られるであろう。

(一)「創世記」一の二四。

第八章

奇怪な人間の起源について

また、つぎのような問いが出されるのである。すなわち、異教徒の歴史が説明しているのであるが、(一)ある怪物のような人間の種類が存在するのであって、それらは、ノアの息子たちから出てきたと考えられるべきであるか、それともむしろ、息子たち自身も由来したところのあの一人の人間から出てきたと考えられるべきであるか、ということである。これらのある者は額の真中にただ一つの目だけをもつと伝えられる。(二)ある者には足の裏が脚部とは反対の向きになって付いているとか、(三)またある者には男女両性の性質があって、その右胸は男性的、左胸は女

性的で、たがいに交接しあって交互に生ませたり胎んだりするといわれるのである。(四)他の者には口がなく、かれらは鼻孔をとおしてただ息をするだけで生きているのである。(五)身長が一キュビトという者もいる。ギリシア人はかれらのことを、「キュビト」にしたがって「ピュグマエオス」(六)とよんでいるのである。(七)別の処では、女性は五歳で妊娠し、寿命は八年をこえないといわれる。

同様に、両足に一本の脚部しかないという種族も存在すると聞いている。かれらはひざを曲げることはできない。そしておどろくべき速さで走るのである。ひとはかれらのことを「スキオポデス」(八)とよぶのであるが、それは、暑いうちは地面に仰向きになって横たわり、自分の足の影(スキア)で覆いをするからである。(九)ある者には首がなく、肩に目が付いている。また、カルタゴの海岸の遊歩地にモザイクで画かれているような他の人種や人間らしきものは、怪奇物語とよばれてよいような書物から取られている。「キュノケファルス」(一〇)については、わたしは何をいえばよいであろうか。その犬の頭とその吠え声そのものは、かれらが人間であるというよりはむしろ獣であることを明示している。

けれども、述べられた種類の人間が存在すると信じなければならぬわけではない。しかし、それがどこの場所であれ、人間として、すなわち理性的で死すべき生きものとして生れた者はだれでも、その者が身体の形態や色、動きや声、何らかの力や部分や属性の性質においてわたしたちの感覚に異常なものとしてあらわれるとしても、あの一人の最初の人間に起源をもつものであるということを信仰ある人は疑ってはならない。とはいっても、すくなくとも、大多数

のばあいにおいては自然の規準を保持するものが、ごくまれに不思議なものとなるということは明らかである。

ところで、わたしたちのあいだに奇怪な人間が生れることについては、このような説明が与えられるのであるが、そのような説明は何らかの奇怪な氏族についても与えられるのである。すなわち、神は万物の創造者であられるのであるが、どこで、いつ、何がつくられるべきであるか、また、つくられるべきであったか、御自身が知っておられるのである。神は全体の美を、その諸部分について類似性と差異性とによって織り合わせる知恵をもっておられるかたである。けれども、総体を見渡すことのできない者は、いわば部分の醜さとして見られるものによって感情を害されるのであって、それというのも、かれは、その部分が何に適合しているのか、またどのように関係づけられているのか、無知だからである。

わたしたちは、生れつき手や足の指がそれぞれ五本以上もある人間の例を知っている。これはまだ比較的小さな異常である。しかしながら、たとえなにゆえに創造者がそのようになさったのか知らなくとも、だれも、創造者が人間の指の数をそのように誤っておつくりになったと想像するような愚かなことをおこなってはならない。このように標準からの大きな逸脱が現れるとしても、神は御自身のなさることを知っておられるのであって、だれもその御業をとがめる権利をもってはいないのである。ヒッポ・ディアリトス（二二）には、三日月のような形をした足をもち、それぞれの足にはただ二本の指しかなく、手も同じような人間が存在する。もしも何かこのような種族が存在するなら、それらは珍奇で不思議な歴史のなかに入れられるであろう。

だからといってこのことのゆえに、そのようなものが最初につくられたあの一人の人間から出たものであることをわたしたちは否定するのであろうか。

ヘルマフロディトゥス(一二)ともよばれているところのアンドロギュノス(一三)は、たしかに稀にしか出ないのではあるが、しかし、それがまったく存在しないという時代はありえなかった。それらには両方の性が現れるので、どちらの性にしたがって名付けるべきであるかは不確実である。にもかかわらず、慣用的な語法は、よりすぐれた性、すなわち男性にしたがって呼ばれるように傾いていったのであった。なぜなら、いまだかつてだれもアンドロギュナエカスとかヘルマフロディタス(一四)とは呼ばなかったからである。数年前のことであるが、たしかにまだわたしたちの記憶に新しい時期に、東方において、上部の肢体においては二人分、下部の肢体においては一人分の人間が生れたのであった。すなわち、かれは二つの頭、二つの胸、四本の手をもっているのに、一つの腹、二本の足をもって一人の人間のようであった。かれは長く生きていたので、そのうわさを聞いて多くの者たちが見ようと集まってきたのであった。

しかし、それらを生んだ者たち(両親)とは似ても似つかぬことがまったく確かであるような人間の子らをすべて枚挙することなど、だれにできようか。そのようなわけであるから、それらの者たちがあの一人の人間に起源をもつことを否定しえないように、種族についても——すなわち、その身体の相異性によって、多数の、そしてほとんどの者が保持している自然の通常の経路からいわば逸脱してしまっていると伝えられているいずれの種族についても——同じである。もしもそれらの種族が、理性的で死すべき動物という(人間についての)定義によって包

含されるのなら、それらはすべての者の最初の父祖であるあの同一の人間に起源を得ているのだと認めなければならない。もちろん、このことは、それらさまざまな種族について、かれら自身のあいだでの、あるいはわたしたちとのかくも大きな相異を伝えているその話が真実であるという前提においてであるが――。

じっさい、猿や尾長猿、あるいはチンパンジーたちが人間ではなく獣であるということをわたしたちが知らなかったら、怪奇なものを収集して誇っているあの歴史家たちは、それらの獣を人間の一つの種族ででもあるかのように虚偽の記述をするであろうし、その狂気は罰せられないで済まされるであろう。しかし、そこに記述されている不思議なものが、じっさいに人間であるとするなら、神がいくらかの種族をそのようにつくろうと意志されたのであろう。それは、わたしたちのうちに人間を両親として生れねばならなかったこれら奇怪な者たちの例によって、わたしたちが、人間の自然本性を形成するところの神の知恵が、あたかもあまり熟練していない職工の技術のように誤りをおかしたのだ、などと考えないためであったとすればどうであろうか。

したがって、個々の種族のうちにある種の奇怪な人間が存在するように、人類全体のうちにある種の奇怪な種族が存在するとしても、わたしたちはそれを不合理なことと見てはならない。このようなわけで、わたしはこの問題を用心深くかつ慎重につぎのように結論づけねばならない。――いくつかの種族についてこのように記されている記事は、まったく虚偽であるか、それとも、もしも真実であるなら、かれらは人間ではないか、あるいは人間であるとすれば、か

れらはアダムから出たのである。

(一) プリニウス『自然誌』七の二参照。

(二) ヘシオドスによって記されているキュクロープス(『神統記』一四四—五)。

(三) プリニウス『自然誌』七の二の一一、二二参照。

(四) 同上、七の二の一五、三四参照。

(五) 同上、七の二の二五参照。

(六) ホメロスの『イリアス』にピュグマエオス(Pygmaeos)が登場する(三の三—六)。また、アリストテレスも『動物誌』の中で触れている(八の一二)。ピュグマエオスは長さの単位ピュグメー(πυγμή=cubitum)からきている。

(七) プリニウス『自然誌』七の二の三〇参照。

(八) Sciopodas.

(九) σκιὰ ποδῶν(umbra pedum).

(一〇) Cynocephalis——この種族を、ヘロドトスは西アフリカに(『歴史』四の一九一)、プリニウスはエチオピアに(『自然誌』六の二九)おいている。

(一一) 北アフリカのヒッポとして知られた二つの都市があった。一つはアウグスティヌス自身が司教として住んでいたヒッポ・レギウス(Hippo Regius)で、今日のアルジェリアのボナ(Bona)、いま一つは本文に出てきているヒッポ・ディアリトス(Hippo Diaritus)で、今日のチュニスのビゼルタ(Biserta)であるとされる。

(一二) Hermaphroditos.

(一三) Androgynus.

（一四） Androgynaecas, Hermaphroditas——いずれも女性名詞化したもの。

第九章

対蹠人の存在について

他方、「対蹠人[一]」が存在する、などとうわさされている。すなわち、地の正反対の部分にあって、そこでは、わたしたちのもとでは太陽が沈むときに、太陽が昇るのであるが、わたしたちの足取りとは逆向きに足跡を踏む人びとが存在するというのである。このことが信じられるべきいかなる根拠もないのである。これは、何らかの史実的な知識によってそれを学んだと主張するものではなく、いわば推理をこねまわして臆測するものであって、それによれば、この地は天の丸天井の内側に掛っていて、この世界のもっとも低く中心になっているところが同一の場所なのである。このことから、この地の正反対の側——下になっている部分——にも人びとが住んでいないことはありえないと想像しているわけである。

たとえこの世界が球状で円い形をしていると想定されるとしても、あるいは、何らかの理由でそれが証明されるとしても、反対の側の地が水の集積によって覆われていないという結論にはならないし、さらに、たとえ地が水に覆われていないとしても、そのことから直ちに人間がいると結論づけねばならぬわけではないということに気付いていないのである。聖なる書は、

過去の記事について、その預言が成就されるというまさにその事実によってわたしたちに信頼を得させてくれるものであって、けっしてひとを欺くものではないのであるから、いくらかの人びとが広大な大洋を横切り、あちら側へ航海して到達することができて、かくしてそこにおいても人類があの最初の一人の人間から立てられるに至ったと語るのは、あまりにも馬鹿げたことである。

それゆえに、七十二の氏族とそれだけの数の言語とに分けられていたと推測されるあの当時の人びとの民のうちに、この世にあって旅をつづけるかの神の国を見出すことができるのなら、わたしたちはそれを問い求めていくことにしよう。すでにわたしたちは、この神の国を洪水と箱舟のところまでたどってきたのであった。そして、神の国は、ノアの息子たちにおいて、かれらが祝福を受けるという事実をとおして堅持されていたことが示されたのであった。その息子たちのうち、何よりもセムとよばれた息子において堅持されていたのであって、それというのは、ヤペテも祝福されたのではあったが[二]、それは、かれが自分の兄(セム)の住居に住んでいたという関連によるものであったからである。

(一) アンティポダス(antipodas)。——「対蹠地」の説についてはピタゴラス学派にさかのぼるとされる(アリストテレス『天体論』二の一三参照)。ラテン語のこの言葉はキケロ(『アカデミカ』二の三九の一二三)やプリニウス(『自然誌』四の一二の九〇)によって用いられているが、三世紀頃、地が平盤状のものであるとする説は球状のものであるとする説にとって代わられるようになり、教父たちなどによって「対蹠人」という仮定も否定されることになった。

(二) 「創世記」九の二七参照。

第十章

セムの子孫の系列によるアブラハムに至るまでの神の国の進行について

したがって、セツとよばれたあの人物からの諸世代の系列が洪水前の神の国を示したのと同じように、洪水後のこの神の国を示すために、セム自身から諸世代の系列をたどっていかねばならない。だからこそ、神の書は、バビロン——すなわち「混乱」——においてこの世の国を示してのちに、要点をくり返して述べるために族長であるセムへと引き返し、そこからあらたにアブラハムにまで至る諸世代を系統づけているわけである。ここでは、それぞれの者について、その者が、この系図に属するところの息子を生んだ時の年齢、および、それからどれだけの年数を生きたかということも併せて述べられている。ここで、すくなくとも、なにゆえにヘベルの息子たちについて「その一人をペレグとよんだのであった。なぜなら、かれの時代に地が分たれたからである」(一)といわれているのか、明らかにしようとわたしが先に約束したことを思い出さねばならない。(二)地が分たれたというのは、言語がさまざまに異なったことによるのであって、それ以外に何を考えるべきであろうか。

したがって、セムの他の息子たちについては、このことがらには関係していないので省略さ

れ、アブラハムにまで至らしめてくれる人びとが諸世代の系図に結び付けられているわけである。それはちょうど、洪水前において、ノアにまで至らしめてくれる人びとがセツとよばれるアダムのあの息子から出た諸世代の系図に結び付けられたのと同じである。こうして系図の記述がはじまっている。「セムの系図はつぎのとおりである。(ノアの)息子セムは、アルパクサデを生んだとき百歳であったが、それは洪水後二年目のことであった。セムはアルパクサデを生んでのち五百年生きて、息子や娘たちを生んだ。そして死んだ(三)」。

他の人物についても同じように、それぞれがアブラハムへつながっていく諸世代の系図に属する息子を生んだときの年齢、および、そののち何年生きたかということが述べられているが、それには息子や娘たちを生んだということが付記されているのである。これは、人口が増大することができたその根拠をわたしたちが理解するためであろう。つまり、わたしたちが、そこに挙げられている僅かな人間にのみとらわれてしまって、どうしてかくも広大な地と王国とがセムの子孫によって満たされえたのかというような子どもじみた疑念を抱くことのないためである。とくに、このことは、アッシリア人の王国にかんしていえるであろう。かのニヌスは、そこから、東方の諸民族のすべてを征服した者であったが、かれはひじょうな繁栄のもとに統治し、長期間に亘って存続した途方もなく広大で堅固な王国を自分の後裔に遺したのであった(四)。

しかし、わたしたちはここで必要以上に長たらしくかかずらうことのないよう、この諸世代の系図においてそれぞれの者がどれだけの年数を生きたかということではなく、その生涯の何歳のときに息子を生んだかということだけを、その順序にしたがって記されるべきと考えるの

である。そうすれば、洪水が終わったときからアブラハムまでの年数を数え上げることができるであろうし、また、わたしたちがどうしても深くかかずらわねばならないこと以外のことがらについては、簡単に、そして迅速に触れて通ることになるであろう。

このようなわけで、洪水の二年後にセムはアルパクサデを生んだのであった。アルパクサデは百三十五歳のときカイナンを生んだ。カイナンは百三十歳のときシラを生んだ。またシラ自身もヘベルを生んだのは同じ年齢であった。ヘベルが――かれの時代に地は分たれたのであった――ペレグを生んだのは百三十四歳のときであった。ペレグ自身は百三十年生きたときリウを生んだ。そしてリウは百三十二年生きたときセルクを生んだ。セルクは百三十年生きたときナホルを生んだ。ナホルは七十九年生きたときテラを生んだ。テラは七十年生きたときアブラムを生んだのであるが、(五) のちに神はこの呼び名を変えられて、アブラハムとよばれることになったのであった。(六)

したがって、洪水からアブラハムまでは、一般に用いられている訳すなわち七十人訳にしたがえば千七十二年となるわけである。ところが、ヘブライ語写本では、これよりもずっと少ない年数が見出されるとされているのである。それについて根拠は見出されない。また、根拠を見いだすことはまことに困難なことである。

それゆえ、わたしたちがあの七十二の種族のうちに神の国をたずね求めようとするとき、人びとがただ一つの舌すなわちただ一つの言語をもっていたあの時代において、人類がすでにその当時、真の神の礼拝から離れ去ってしまっていて、真の信仰心はセムの血統から出てアルパ

クサデを経てアブラハムへ向かうこの系図のうちにのみ存続したのだと断言することはできない。しかし、不信仰な高揚を象徴しているところのあの天にまで届こうとする塔を建設せんとするあの高慢の結果として、不信仰な者たちの国すなわち社会が現れたのであった。

したがって、この国は、それ以前には存在していなかったか、それとも隠されたまま存在していたか、あるいはむしろどちらの国もつねに存在していたのであろう。すなわち、信仰深い国は祝福を受けたノアの二人の息子たちとその子孫のうちに、他方、不信仰な国は呪われた息子とその系統のうちに――そこには、主に反抗する勢力ある狩人も現れたのであるが――持続されていたのであろう。しかし、決定することは容易ではない。おそらくは、そしてこれはたしかに信憑性のあるものであるが、バビロンが建設されはじめる以前にも、すでに、これら二人の息子たちのうちに神を侮る者たちが存在していたのであり、ハムの息子たちのうちに神を礼拝する者たちが存在していた、ということであろう。しかしながら、このどちらの種類の人間も地上に存在しなかったということはけっしてなかったと信じられるべきである。

じっさい、「かれらはみな迷い、みな等しく無用な者となっていた。善をなす者はいない。ただの一人もいない」といわれるときも、これらのことばが出てくる『詩篇』の二つの箇所のいずれにおいても、「わたしの民をパンのようにむさぼり食らう不正をはたらく者たちは悟らないのか[七]」と読まれるのである。それゆえ、あの当時も神の民は存在していたわけである。だからして、「善をなす者はいない。ただの一人もいない」といわれているところのことは、神の

子らにかんするものではなく、人間の子らにかんしていわれたものである。なぜなら、それに先立って、「神は天から人間の子らをしらべ、悟る者、神を求める者があるかどうかをご覧になった」(八)とあり、それに次いで、人間の子ら、すなわち神にしたがって生きるのではなく人間にしたがって生きる国に属するすべての者は拒絶されることを示すことばがつづいているからである。

(一)「創世記」一〇の二五。
(二) 本巻第三章参照。
(三)「創世記」一一の一〇以下。
(四) 本書第四巻第六章参照。
(五)「創世記」一一の一〇―二六。
(六) 同上、一七の五参照。
(七)「詩篇」一四の二以下および五三の二以下。
(八)「詩篇」五三の三。

第十一章

ヘベルという名にしたがってヘブライ語とよばれるようになった言語は、最初の言語であったことについて

このようなわけで、すべての人間がただ一つの言語をもっていたとき、だからといって破滅の子らが欠けていたわけではなかったが(なぜなら、洪水前には言語はただ一つだけであったが、にもかかわらず、義人であったノアの家族というこの一家族を除いては、すべての者は洪水によって滅びるに値したのであったからである)、それと同じように、諸々の氏族がその不信仰の高慢のゆえに言語がさまざまに分たれるという罰をもって報われ、不信仰な者の国が「混乱」という名を受けとったときも、すなわちバビロンとよばれたときも、(一)そこにはヘベルの家族が現存していたのであって、その家族において、かつてすべての人間の言語となっていたところのものが残されることになったのである。(二)わたしがさきに言及したように、(三)セムの息子たち——かれらはそれぞれ個別の氏族を生み出したのであったが——を列挙しはじめたとき、ヘベルが最初に挙げられねばならなかったのも、そのためである。かれ自身はセムの玄孫すなわちセムから出た者たちの第五番目に見いだされる者であったけれども。

それゆえ、他の諸民族が異なった言語によって分たれたときも、同じ一つの言語がかれの一族のうちに残留したのであって、それが、先立つ時代の人類にとっての共通の言語であったと信じられるとしても、あながち不当なことではないのである。そのような理由で、それ以後はヘブライ語とよばれたのであった。というのは、あの時点において、他の諸言語が固有の名でもってよばれたように、この言語はそれ自身の名によって他の言語から区別される必要があったからである。言語がただ一つだけであったときは、全人類はただその言語によってのみ語られていたわけであって、それは「人間の言語」とか「人間の語り」とかよばれるほかなかった

のであった。

ある者はいうかもしれない。地――すなわちその当時地上に存在した人びと――が諸々の言語によって分たれたのは、ヘベルの息子ペレグの時代であったのなら、そのときまですべての人間に共通であったところのあの言語は、むしろペレグの名にもとづいて名付けられるべきであった、と。しかしながら、ほかならぬヘベル自身が「分たれること」を意味するペレグというような名をその息子に与えたのであって、それというのは、かれに息子が生れたのは、地が諸々の言語によって分たれたとき、すなわち「かれの時代に地(地上の民)が分たれた」(四)と記されているところのことがおこったまさにそのときであったからである、と解さねばならない。じっさい、多くの言語が生じるようになったときまでヘベルが生きていたのでなかったのなら、かれのもとで存続することができたあの言語が、かれ自身の名にもとづいて名付けられることはなかったであろうからである。

それゆえに、言語のあの多様化と変化は罰の結果として生じたのであり、そして、とにかく神の民はこの罰から除外されるべきであったのであるから、あの言語が人びとに共通のものとなっていた最初の言語であったと信じなければならないのである。アブラハムが用いたのはこの言語であり、そして、かれはそれを自分のすべての子孫に手渡していくことができたわけでなく、ただヤコブを経由して生れていき、より明らかでより顕著な仕方で神の民へと結集し、契約とキリストとの血統となりえた人びとにのみ手渡していくことができたということも、意味のないことではないのである。ヘベル自身、この言語を自分の全子孫に引き渡していったわ

けではなく、アブラハムにまで導いてくれる諸世代の系統となった人びとにのみ引き渡していったのであった。

このようなわけで、不敬虔な者たちによってバビロンが建設されていたとき、敬虔な人びとのある氏族が存在していたということは直接的に明示されているわけではないとしても、その不明瞭さが探求者の関心を奪い去ってしまうことはできないのである。かえって、むしろ関心をかきたててくれるものとなるのである。じっさい、はじめにすべての人びとに共通なただ一つの言語が存在したということ、ヘベルはセムから出た者たちのうちで第五番目ではあるけれども、セムのすべての子どもたちに先んじてかれが言及されているということ、また、その言語はヘブライ語とよばれて、族長たちおよび預言者たちの権威が、語りにおいてのみならず聖なる書き物においてもそれを保護していたということ――これらのことをわたしたちは読みとるのである。

そうであるから、たしかに、言語の分化にかんして、それ以前に共通であったあの言語がどこに存続することができたのかと問われるとき(疑いもなく、言語の変化という仕方でもたらされたあの罰が存在しなかったところにあの言語は生き残ったのである)、その言語の名が受けとられることになったところのこの氏族のうちに存続したのだ、と答える以外に何か答えがあるであろうか。また、他の諸氏族が言語の変化によって罰せられたときに、そのような罰がこの氏族には及ぶことがなかったという事実は、この氏族の義しさを少なからず明らかにするしるしではなかったであろうか。

しかし、なおも別な問題が浮かびあがってくるであろう。もしもヘベルとその息子ペレグの両方に一つの言語が残っていたのなら、いかにしてかれらはそれぞれ別個の氏族を形成することができたのであるか。少なくともヘブライの氏族はヘベルから出てアブラハムにまで継続し、そのあとアブラハムを経てイスラエルの大きな民となるまで継続した一つの民族である。そうであれば、もしもヘベルとペレグがそれぞれ民を形成しなかったのなら、その名が示されているノアの三人の息子たちのすべての子孫は、いかにしてそれぞれ別個の氏族を形成したのであろうか。

かの勢力者ニムロデ自身も自分の氏族を形成したということは、たしかにありそうな話ではあるが、しかし、かれの名が挙げられたのは、その支配力と身体の卓越性ゆえであって、氏族と言語の七十二という数はそのままになるわけである。他方、ペレグの名が挙げられているのは、かれが氏族を形成したからではなく(なぜなら、かれの氏族は同じヘブライの民そのものであり、言語も同じヘブライの言語であったからである)、かれの時代に地が分たれたという重要な時のゆえである。わたしたちはまた、勢力者ニムロデが、バビロンが建設されて言語の混乱が生じ、その結果、民が分たれることになったその年までいかにして生きることができたのかという問いに煩わされるべきではない。

ヘベルはノアから数えて六代目に当たるのに対しニムロデは四代目に当たるがゆえに、かれらは共に同じ時代に生きることは不可能であったということにはならないのである。というのは、このようなことは、世代の数が少ないとき人はより長く生き、数が多いときより短かく生

きるからである。あるいは、世代の数が少ないとき人はより遅く生れ、数が多いときより早く生れるのである。地が分たれたときにはノアの息子たちの他の子孫たち——かれらは諸々の氏族の父祖として挙げられているのである——は、すでに生れていたというだけでなく、氏族という名に値するような多人数から成る一族をもつことができるような年齢に達してもいたのだ、と確かに理解されねばならないのである。

だからして、記録されているとおりの順序でかれらが生れたと考えねばならぬわけではけっしてないのである。そうでなければ、ヘベルの別の息子であるヨクタンの十二人の息子たちは、もしもヨクタンがペレグのあとに記されているという事実にしたがって兄弟（ペレグ）のあとに生れたのであれば、いかにしてあのときにすでに諸民族を形成することができたのであろうか[五]。じっさい、ペレグが生れたというのは、地が分たれたあのときであったからである。そこで、たしかにかれは先立って名が挙げられているのであるが、しかしその兄弟ヨクタンのずっとあとに生れたのであって、兄弟ヨクタンの十二人の息子たちはすでにひじょうに大きな家族をもっていたので、それらはそれぞれ固有の言語に分たれることが可能であったと理解されねばならない。

このように、年齢においてはよりあとであった者がより先に言及されることもありえたのであって、それはちょうどノアの三人の息子たちのばあいもそうであったのと同じである。すなわち、最初にいちばん若年のヤペテから出た子どもたちが、次いで真中の息子であるハムから出た子どもたちが、そして最後に長子であり最年長であったセムから出た子どもたちが挙げら

れているのである。ところで、それらの諸氏族の呼び名のうち、いくつかのものは存続していて、今日でもそれがどこから出たものであるかということが明らかとなっている。たとえば、アッシリア人はアッスルから、ヘブライ人はヘベルから出ているのである。けれども、いくつかのものは時代の経過とともに変化してしまって、はるか昔の歴史を探究するひじょうな博学な人も、すべてをその氏族の起こりからたずね求めることは不可能であって、ごく僅かのものに限られているのである。じっさい、エジプト人はミツライムとよばれたハムの息子に由来するといわれているが、ここにはその名の起こりのひびきを伝えるものは何もないのである。エチオピア人のばあいも同様であって、クシとよばれたハムの息子に属するといわれているのである。すべての呼び名について考えられるとするなら、変化しないままに残った名よりも変化した名のほうが多いことが明らかであろう。

(一)　本巻第四章参照。
(二)　一般に教会教父たちはヘブライ語が最初の言語であると考えたようである。
(三)　本巻第三章参照。
(四)　「創世記」一〇の二五。
(五)　同上、一〇の二五―二九参照。

第十二章

アブラハムからはじまる新しい時代について

さて、いまやわたしたちは父祖アブラハムによって印づけられたあの時の節目から神の国の進展を見ていくことにしよう。その時代から、この国の知はいっそう明瞭になりはじめるのであり、そしてそこでは、より明らかな約束——それはキリストにおいて成就されるのを見る——が読まれるのである。そこで、わたしたちが聖なる書が示すところによって学んだように、アブラハムはアッシリア王国に属していた地である「カルデア人の地域」〔一〕に生れたのであった。すでにその当時も、カルデア人のうちには他の諸氏族におけると同様、不敬虔な迷信がはびこっていたのであった。

したがって、一なる真実の神を礼拝するただ一つの家族が存在したのであって、それはテラの一族であった。アブラハムはかれから生れたのであった。そして、その一族においてのみヘブライ語も残存したと考えてもおそらくよいであろう（もっとも、ヨシュアの語るところによれば〔二〕、エジプトにおいて神の民がいっそう明らかに区別されていたときにおこなっていたのと同じように、テラ自身はメソポタミアにおいて他の民の神々に仕えていたとされているのではあるが）。ヘベルの系統から出たほかの子孫たちは徐々に他の言語と他の民族のうちへ流入していったのであった。それゆえに、ノアの一族だけが人類の再興のために洪水においても生き

残ったように、テラの一族だけが全世界をおおう多くの迷信の洪水においても残存したのであって、その家族のうちに神の国の栽園は保護されたのであった。

さて、さきのところでは、ノアに至るまでの諸世代の系図がその年数とともに列挙され、洪水の原因について説明され、そのあとで神が箱舟の建造にかんしてノアに向かって語りはじめられる前に「これがノアの系図である」(三)と述べられているのであるが、それと同じようにいまのところでは、セムとよばれたノアのあの息子からアブラハムに至るまでの諸世代が列挙されて、そのあと、重要な一節が挿入され、つぎのようにいわれているのである。「これがテラの系図である。テラはアブラハムとナホルおよびハランを生んだ。そしてハランはロトを生んだ。ハランはその父テラの面前で(生存中)その生地であるカルデアの地で死んだ。アブラハムとナホルとは妻をめとったが、アブラハムの妻の名はサライといい、ナホルの妻の名はハランの娘ミルカといった(四)」。このハランはミルカの父であり、またイスカの父でもあった。イスカはアブラハムの妻サライ自身でもあると信じられている。

(一)「創世記」一一の二八。
(二)「ヨシュア記」二四の二。
(三)「創世記」六の九。
(四)同上、一一の二七以下。

第十三章

テラ一族の移住にかんして息子ナホルの名が挙げられていない理由

つぎに、いかにしてテラがその家族とともにカルデア人の地域を去り、メソポタミアに来てハランに住みついたかが語られている。しかし、ナホルとよばれたテラの息子の一人については黙されたままとなっていて、あたかもテラがかれを一緒に連れてこなかったかのような印象を与えている。なぜなら、つぎのように語られているからである。「テラはその子アブラムと、ハランの子である孫ロトと、自分の子アブラムの妻である嫁サライとをカルデア人の地域から連れ出してカナンの地へ行こうとした。そしてハランに着き、そこに住んだ(一)」。ここにはナホルとその妻ミルカの名は挙げられてはいないのである。

けれどものちに、アブラハムがその息子イサクに妻を得るため自分のしもべを送ったとき、つぎのように記されているのを見いだすのである。「しもべは主人のらくだのうちから十二頭のらくだを受け取り、主人の貴重な物を各種携えてメソポタミアへ向かって出発し、ナホルの町へ行った(二)」。この一節から、そしてこの聖なる歴史の他の証言からして明らかなのは、アブラハムの兄弟ナホルもまた、カルデア人の地域を去って、アブラハムとその父とともに住みついたメソポタミアに定着したということである。

それではなにゆえに聖書は、テラがその一族とともにカルデア人の民から出て行ってメソポ

タミアに住みついたときに、ナホルについて触れることをしなかったのであろうか。じっさい、そこでは、その息子アブラハムについてのみならず嫁であるサラおよび孫であるロトについても触れられているのである。おもうに、(ナホルは)父や兄弟の敬虔な心から離れてカルデア人たちの迷信に執着していたのであるが、のちに、悔悟によってであるか、それとも嫌疑を受けて迫害を蒙ることによってであるか、かれ自身もまた移住したというのでなければなにゆえであろうか。

というのは、『ユディト』と題する書のなかで、イスラエル人の敵であるホロフェルネスが、その民がどんな民で、その民に対抗してたたかうべきであるかどうか問うたとき、アムモン人の指導者であるアキオルがつぎのように答えているからである。「われらの主人よ、あなたのしもべのいうことをどうか聞いてください。あなたのそばに住んでいるこの山地のその民についてわたしは真実を申しあげます。あなたのしもべはけっして偽りをいいません。この民はカルデア人の子孫です。かれらは昔、メソポタミアに住んでいたのですが、それというのは、カルデア人の地で評判の人びとであったその父祖たちの神々に従うことを拒んだからです。かれらはその父祖たちの道から外れて、かれらの知るようになった天の神を崇めたのでした。それで、カルデア人はかれらをその神々の前から追い出し、かれらはメソポタミアに逃れて長いあいだそこに住みついていました。

さて、かれらの神は、かれらが住んでいるその地を去ってカナンの地へ行くよう、かれらにいいました。それで、かれらはそこに住んだのです[三]」。このようなことなどがさらに語られて

いるのであるが、これはアムモン人アキオルが語っているところのことである。このことから明らかなのは、テラの一族は、かれらが一なる真実の神を礼拝していたその真の敬虔な心のためにカルデア人から迫害をうけたということである。

(一)「創世記」一一の三一。
(二) 同上、二四の一〇。
(三)「ユディト書」五の五以下。

第十四章

ハランで生涯を終えたテラの年数について

さて、テラがメソポタミアで——その地でかれは二百五歳まで生きていたと示されているのであるが——死去したときには、すでにアブラハムになされていた神の約束は明らかなかたちを取りはじめていたのであった。「ハランにおけるテラの日々は二百五年であった。そしてテラはハランで死んだ(一)」と記されている。しかし、これは、このすべての日々をその地で送ったという意味であるかのように解してはならない。というのは、二百五年になっていたその生涯の全日々をその地で完了したのだからである。そうでなければ、かれがその生涯の何歳のときにハランに来たのか記されてはいないのであるから、テラがどれだけの年数を生きていたのか

知られないことになるであろう。

この諸世代の系列において、それぞれの者がどれだけの年数を生きたか、入念に記されているのに、ただこの人物の生涯の年数だけは歴史に記されなかったと考えるのは不合理である。もっとも、この聖書が言及しているいくらかの者たちの年数については黙されたままであることは確かである。それは、生み出す者が退去し、生れた者が継承することによって時間の計算がつなぎとめられているこの系列のうちに属してはいないからである。しかし、アダムからノアに至るまで、そしてそこからアブラハムに至るまで、まっすぐに向かうこの系列は、その生涯の年数の記されていないような者をひとりも含んではいないのである。

（一）「創世記」一一の三二。

第十五章

アブラハムが神の指図にしたがってハランを去った時期について

さて、アブラハムの父テラの死が記されたあと、それにつづいて「主はアブラムにいわれた。『あなたは自分の地、自分の親族、自分の父の家を離れて行きなさい』云々」（一）と読まれるのである。この書の話がこのようにつづけられているからといって、おこった出来事の時間的順序においてもそのとおりにつづいたと考えてはならない。じっさい、もしもそうであるなら解き

のことばのあと、聖書はつぎのように述べているからである。「アブラムは主がかれに語られたとおりに出発した。ロトも一緒に行った。アブラムはハランを出たとき七十五歳であった[三]」と。

もしもかれがその父の死ののちにハランを出たのなら、いかにしてこのことが真実でありうるであろうか。というのも、さきにも示したとおり[三]、テラがアブラハムを生んだのは七十歳のときであって、アブラハムがハランを立ち去ったときに経過していた七十五年を加えるなら、百四十五年となるからである。したがって、アブラハムがメソポタミアのかの都市を立ち去ったとき、テラはそれだけの年齢であったわけである。すなわち、そのときアブラハムは七十五年の年数を経過していたのであって、そのことから、七十歳でかれを生んだその父は、上述のとおり、百四十五年を経過していたのである。

それゆえ、そのことからして、父の死ののち、すなわち、父が生きた二百五年ののちに、アブラハムが出発したのではないのである。かの地から出発したときの年齢は、かれ自身の七十五年目のときであったのであるから、疑いもなく、七十歳のときにかれを生んだ父の百四十五年目であったと推論されるのである。そのゆえに聖書は、いつものように、すでに話が通りすぎた時点にもどっているのだと解さなければならない。それはちょうど、さきのところで、ノアの息子たちの子孫に言及したとき、「かれらはそれぞれのことば、それぞれの氏族によって存在していた[四]」といっていながら、にもかかわらずそのあと、このことがあたかも時間の順序

にしたがってつづいたのでもあるかのように、「全地は同じ言語であり、すべての人にただ一つの声があった[五]」といっているのと同じである。

それゆえ、もしもすべての人にただ一つの言語があったのなら、かれらはそれぞれのことば、それぞれの氏族にしたがって存在していたというのは、すでに通りすぎたところのことへ要約して話をもとにもどしたゆえでなければいかにしてであろうか。それで、ここでも同様に、「ハランにおけるテラの日々は二百五年であった。そしてテラはハランで死んだ[六]」といわれて、そのあと省略していたところのことにもどっているのであるが、それは、さきにはじめられていたテラにかんする話を完成させようとしたからであった。「そして主はアブラムにいわれた。『自分の地を離れて行きなさい』云々[七]」といっているのである。この神のことばのあとに「そしてアブラムは主がかれに語られたとおりに出て行った。ロトも一緒に行った。アブラムはハランを出たとき七十五歳であった[八]」とつづけられている。

したがって、これはかれの父が百四十五歳を数えるときおこったのである。というのは、かれはそのとき七十五歳であったからである。しかし、この問題は別の仕方で解決されよう。すなわち、アブラハムがハランを出て行ったときは七十五歳であったというのは、かれが生れた時点からでなく、「カルデア人たちの火」から解放された時点から[九]、その時点を誕生の日と見なしたのであるかのように、数えられたとするものである。

けれども、至福者ステファノは、使徒たちの行録においてこれらのことを説明したとき、つぎのようにいっているのである。「わたしたちの父祖アブラハムがハランに住むまえ、メソポ

タミアにいたとき、栄光の神はかれに現れ、そしてつぎのようにいわれた。『あなたの地と親族、そしてあなたの父の家を離れなさい。そしてわたしがあなたに示す地に行きなさい（一〇）』。ステファノのこれらのことばによれば、神がアブラハムに語られたのは、かれの父の死のあとではなかった。というのは、かれの父はたしかにハランで死んだからであって、そこで息子自身父とともに住んでいたのであった。それはアブラハムがハランに住むまえのことであった。すでにメソポタミアにはいたのであったが――。

　それゆえ、かれはすでにカルデア人から出て行っていたのである。したがって、ステファノが、「そのとき、アブラハムはカルデア人たちの地を出て、ハランに住んだ」と付け加えているところのことは、神がかれに語られたあとに何がおこったのかということにかんするものでなく（というのは、かれがメソポタミアにいたときに神はかれに語られたとステファノがいっているからには、神のあのことばののちにかれはカルデア人たちの地から離れたというのではないからである）、「そのとき、すなわち、かれがカルデア人から出て行ってハランに住みついたとき」からあとのその全期間にかんするものである。同様に、「そして、かれの父の死後、神はかれをこの地へ、いまあなたがたやあなたがたの父たちが住んでいるところへ定住させられた（一一）」とつづけられているところのことは、「かれの父の死後、ハランを出て行った」という意味でなく、「かれの父の死後、神はかれをここへ定住させられた」という意味である。

　したがって、神は、アブラハムがハランに住む以前、メソポタミアにいたときにかれに語られたのであるが、かれが神の指図を自分の心に留めて父とともにハランに到達し、かれが七十

五歳、父が百四十五歳のときに、そこから出て行った、と解さなければならない。ハランからの出発でなくハランの地への定住がその父の死後おこなわれたといっているのであるが、それは、アブラハムがハランの地を買ってそれを自分のものとして所有しはじめたときには、すでにその父は死んでいたからである。

ところで、かれがすでにメソポタミアに定住していたとき、すなわち、カルデア人たちの地をすでに出ていたとき、神が「あなたの地と親族、そしてあなたの父の家を離れなさい」といわれたことについては、からだをそこから移し出すよう命じられたものではなく――かれはすでにそのことをなし終えていた――、心をそこから引き離すよう命じられたものである。というのは、もしもかれがまだそこへ帰還しようという希望と願望とによってとらえられていたのなら、心はそこから去っていなかったことになるからである。この希望と願望は、神の命令と支えとによって、かれの従順をもって切断されねばならなかったのである。その後、ナホルが自分の父を追ってきたとき、アブラハムが主の命令を実行して、自分の妻サラと兄弟の息子ロトとともにハランを出て行ったと想定することは、たしかに信用されないことではない。

(一)「創世記」一二の一。
(二) 同上、一二の四。
(三) 本巻第十章参照。
(四)「創世記」一〇の三一。
(五) 同上、一一の一。

（六）同上、一一の三二。
（七）同上、一二の一。
（八）同上、一二の四。
（九）ユダヤ教の伝説によれば、アブラハムは、カルデア人たちの火の神の崇拝を拒否したために、火の中へ投げ込まれたといわれる。
（一〇）「使徒行伝」七の二以下。
（一一）「あなたがたの父たちが住んでいるところ」という語句はステファノの語っている箇所にはない。

第十六章

アブラハムにたいしてなされた神の約束について

いまやアブラハムにたいしてなされた神の約束が考察されなければならない。わたしたちの神、すなわち真の神の託宣は、これらの約束においてより明白に現れはじめるのであって、それは、預言者たちの権威があらかじめ告げ知らせていた敬虔な人びとの民にかんするものである。これらの約束の最初のものはつぎのように読まれるのである。「主はアブラムにいわれた。『あなたは自分の地、自分の親族、自分の父の家を離れなさい。そしてわたしがあなたに示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大き

くしよう。あなたは祝福された者となるであろう。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪うであろう。あなたにおいて地のすべての種族は祝福されるであろう(一)』」。

したがって、アブラハムになされた二つのことがらに注意しなければならない。その一つは、「わかれの子孫がカナンの地を所有するようになるであろうということであって、このことは「わたしがあなたに示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる民としよう」といわれているところに表示されている。いま一つは、それよりもはるかにすぐれたことであって、それは肉的な子孫にかんするものではなく、霊的な子孫にかんするものである。霊的な子孫をとおして、かれはイスラエルという一つの民の父であるだけでなく、かれの信仰の足跡にしたがうすべての民の父なのである。これは「あなたにおいて地のすべての種族は祝福されるであろう」ということばをもってその約束がはじまるのである。

エウセビオスは、この約束はアブラハムの七十五歳のときになされたと考えている(二)。この約束がなされてすぐにアブラハムはハランを出て行ったかのように見なしているのである。「アブラハムはハランを出たとき七十五歳であった」と読まれる箇所で、聖書に矛盾したことをいうことはできないからである。けれども、もしもこの約束がその年になされたのなら、たしかにアブラハムはすでに自分の父とともにハランに滞留していたことになる。というのは、さきにそこに住んでいなかったらそこから出ていくことはできないからである。

それではこれはステファノの「わたしたちの父祖アブラハムがハランに住むまえ、メソポタ

ミアにいたとき、栄光の神はかれに現れた」ということばと矛盾しているのであろうか。しかし、アブラハムがハランに住む以前の神の約束も、かれのハランにおける居住も、そこからの出発も、すべて同じ年におこったと解すべきである。これは、エウセビオスがその『年代記』のなかで、この約束の年から数え、そして、エジプトからの脱出と律法が与えられたのが四百三十年のちのことであると示しているからだけでなく、使徒パウロもまたそれを述べているからである。(三)

(一)「創世記」一二の一以下。

(二) エウセビオスの『年代記』は、アブラハムの誕生から出エジプトまでの期間が五〇五年、そしてアブラハムに約束が与えられたとき、その年齢は七十五歳であったとしている。したがって、ここで述べられているように、アウグスティヌスは、エジプトからの脱出と律法が与えられたのが四三〇年ののちのことであるとしたのである。

(三)「ガラテヤ人への手紙」三―一七参照。

第十七章

異教徒たちの優勢な王国の一つ、アッシリアは、アブラハムが生れたとき、すでに強大な支配力をもっていた

この同じ時期に、異教徒たちの顕著な王国が存在したのであった。そこには地に生れた者たちの国、すなわち人間にしたがって生きる人びとの社会が、背離した天使たちの支配のもとに際立ってそびえていた。シキヨン人、エジプト人、アッシリア人の三つの王国のことである(一)。しかし、アッシリア人の国は、それらのうちでももっとも有力であり、高められていたのであった。というのも、ベルスの息子のかのニヌス(二)はインドを除く全アジアの民を支配下においていたからである。ここでわたしが「アジア」といっているのは、この大きなアジアの一領域であるあの部分のことではなく(三)、全アジアとよばれているところのものである。ある人びとはこれを全世界を二分したそのうちの片方であると見なしたのであるが、しかし、きわめて多数の人びとはそれを全世界の第三番目の部分に数えたのであって、アジア、ヨーロッパ、アフリカがそのすべてなのである。もっともこれは平等な区分をなしているとはいえない。

なぜかといえば、アジアとよばれているその部分は南方から東を経て北方にまで至っているが、それに対してヨーロッパは北方から西方に、そこでまたアフリカは西方から南方に至っているのだからである。だからして、ヨーロッパとアフリカがこの世界の半分を占め、アジアが単独で他の半分を占めているようにおもわれるのである。けれども、それら二つ(ヨーロッパとアフリカ)が二つの部分として扱われているのは、それらの間に大洋から水がはいり込んできて陸地の中間に介在したからであって、これがわたしたちの大海を形成しているのである。それゆえ、もしもあなたが世界を東方と西方という二つの部分に分けるとするなら、アジアがその一方に、そしてヨーロッパとアフリカがもう一方にあることになろう。

それゆえ、当時優勢であった三つの王国のうち、シキョン人の王国はアッシリア人の支配下になかったのである。それがヨーロッパにあったからである。しかし、エジプト人の王国は、上に述べられたとおり、インドのみを除いて全アジアを保持していたこれらの者たちの勢力下にどうして服さぬことがあったろうか。このようなわけで、アッシリアにおいては不信仰な都市の支配が優勢であった。この首都はかのバビロンであって、それは地に生れた者たちの都市にとってはこの上もなくふさわしい名、すなわち「混乱」という名をもったのであった。そこにおいて、最初の王として六十五年間その同じところで統治していた父のベルスの死後、いまやニヌスが統治にあたっていたのであった。

さて、父の死によって王位を継承することになった息子ニヌスは、五十二年間統治したのであったが、アブラハムが生れたときは、その四十三年目にあった。それは、西方におけるいま一つのバビロンとでもいうべきローマの創設の約千二百年前であった。

(一) 本書第十八巻第二章参照。
(二) 同上、第四巻第六章参照。
(三) 新約聖書におけるアジア。小アジアの西方の部分。

第十八章

カナンの地についての神の第二の約束

こうしてアブラハムは、その七十五歳のとき、そしてかれの父の百四十五歳のとき、かれの兄弟の息子ロトおよび妻のサラと共にカナンの地へ出発し、シケムにまで到達したのであった。そこにおいてかれはふたたび神のお告げを受けたのであって、それについてはつぎのように記されている。「ときに主はアブラハムに現れ、かれにいわれた。『わたしはこの地をあなたの子孫に与えよう(一)』」。ここでは、かの子孫たち、つまりかれがすべての民の父祖となったところのかの子孫たちについては何もいわれてはおらず、ただイスラエルという一つの民の父祖となったところのかの子孫についてのみいわれている。というのは、この子孫によってその地が所有されたのだからである。

(一)「創世記」七の七。

第十九章

エジプトにあって神によって保護されたサラの貞潔について

さて、アブラハムはそこに祭壇を建設し、神の御名をよび、そののちにその場を去って荒野に住んだのであった(一)。しかし、飢饉のためやむをえずそこからエジプトへ赴かざるをえなくな

ったのであった。ここでは、かれは自分の妻を妹とよんだのであるが、これは虚偽ではない。というのは、かの女は血縁において近い関係にあったからである。(二)同じようにロトも兄弟の息子であったので近い関係にあった。(三)しかし、それを否定したのではなかった。したがって、かれはかの女が妻であることをいわなかった。人間として人間の奸計を警戒したのであった。かれは妻がまもるべき貞節を神に委ね、そして、人の警戒をもってまもらないなら、というのも、もしも危険にたいしてなしうる限りと企てたことになるからである。かれは神に望みをおいたというよりも、むしろ神を試みようこのことがらにかんしては、マニ教徒ファウストゥスの誹謗に論駁して十分に述べたのであった。(四)

けっきょく、アブラハムが主に期待していたことがおこったのであった。なぜなら、かの女を自分の妻として受けいれたエジプトの王ファラオはひじょうな苦しみを受け、かの女を夫に返したのであった。そのばあい、かの女が夫以外の者と同衾して汚されてしまったと想定することがあってはならない。なぜなら、ファラオは苦痛を受けることによって、このことをなすよりは、むしろこれがゆるされなかったと考えるほうがはるかに信憑性があるからである。

(一)「創世記」一二の八。
(二)同上、一二の一一―一九。
(三)「創世記」一四の一四。
(四)アウグスティヌス『マニ教徒ファウストゥス論駁』二二の三六参照。

第二十章

親愛の情を失うことなくおこなわれたロトとアブラハムの別れについて

このようにして、アブラハムはエジプトからもとの場所にかえってきたとき、かれの兄弟の息子ロトは、ソドムへ行くために、親愛の情が損われることなく、かれと別れたのであった。じっさい、かれらは富裕な者となり、多くの家畜と牧夫たちとを持ちはじめていたのであったが、牧夫たちのあいだに諍いが生じたので、かれら自身の家族のあいだの口論や不和を避けようとしたためである。たしかに、人間的なことがらとして、このようなばあい、かれら自身のあいだにも何らかの不和をもたらすこともありうるからである。

それゆえ、このような不和を未然に防ぐため、アブラハムはつぎのようなことばをロトに語ったのであった。「わたしとあなた、わたしの牧夫たちとあなたの牧夫たちとのあいだに争いがないように。わたしたちは兄弟なのだから。全地はあなたの前にあるのではないか。おたがいに別れよう。あなたが左へ行けば、わたしは右へ、あなたが右へ行けば、わたしは左へ行く(一)」。おそらくここから、地上の何かを分配しなければならないとき、年上の者が分け、年下の者が選ぶという平和を維持するための慣習が人びとのあいだに生じたのであろう。

(一)「創世記」一三の八以下。

第二十一章

アブラハムとその子孫に末永くカナンの地を保証した神の第三の約束について

このようなわけで、アブラハムとロトは家族を維持する必要から――仲違いという醜さからではなく――たがいに別れて、それぞれ別々に定住することになったのである。アブラハムはカナンの地に、他方、ロトはソドムの人びとのうちに住んだのであった。さて、いまや神はその第三番目のお告げによってアブラハムに語られたのであった。「あなたの目をあげて、あなたがいまいるところから、北と南、東と海のほうを見るがよい。あなたが見るところの地のすべてをあなたとあなたの子孫に末永く与えるであろう。そして、わたしはあなたの子孫を地の砂のごとくに多くしよう。もしもだれかが地の砂を数えることができるなら、あなたの子孫もまた数えられることになるであろう。さあ、立ち上がってこの地を縦と横に歩きまわるがよい。わたしがあなたに与えようとする地だからである(一)」。

この約束に、かれがすべての民の父祖となるという約束も含まれているのかどうか、明確にあらわれてはいない。というのは、「わたしはあなたの子孫を地の砂のごとくに多くしよう」ということばは、ギリシア人のもとで「誇張法」とよばれる語りかたでいわれているものの一つであるとおもわれるからである。それはたしかに比喩的なものであって字義どおりのものなのではない。聖書が他の比喩と同じような仕方でそのような語りかたをよく用いていると

いうことを、聖書を学ぶほどの者ならすこしも疑わないのである。ところで、このような比喩すなわちことばのいいまわしは、そこに述べられているところのものが、そのようないいかたによってじっさいに意味されているところのものをはるかに上まわっているときに見られるのである。

じっさい、砂の数のほうが、アダム自身から世の終わりに至るまでの人間の総数よりも比較にならないほど大きいものであるということを理解しない者がいるであろうか。まして、砂の数が、アブラハムの子孫よりも――それがたんにイスラエルの種属に属する子孫たちを意味するのみならず、信仰を模倣することによって地上の全世界のすべての民においてかれの子孫となるであろうところの人びとを意味するとしても――どれほど多いことであろうか。たしかにこの子孫は不信仰な人びとの多数に比較してみればごくわずかである。とはいっても、この少数の人びとは、数え切れない多数を形成しているのであって、これは誇張法にしたがって「地の砂」と表現されるのである。

もちろん、アブラハムに約束されたこの多数は、神にとっては数えられないものではないが、人間にとっては数えられないものである。それゆえ、約束が肉によるのでなく霊による多くの子孫たちにかんするものであるばあい、それはたんにイスラエルの民のみではなく、アブラハムの子孫の全体なのであるから、砂の多数性に比せられるのがいっそう適切である。したがって、この箇所では、約束はそれら両方のものについて与えられたと解されうるであろう。しかし、ここでは明確にあらわれてはいないとわたしが述べたのは、アブラハムからはじまってそ

の孫ヤコブを経て肉によって生れていったあの民が、世界のほとんどすべての部分を充たすほどに増大したという理由からなのである。そして、この民はそれだけで人間には数えられないものであるからには、誇張法にしたがって砂の多数性に比せられることも可能であったのであろう。

いずれにしても、カナンとよばれている地のみが意味されているということはだれも疑わないであろう。しかし、「わたしはあなたとあなたの子孫に末永く与えるであろう」といわれたことについて、もしも「末永く」(usque in saeculum)を「永遠に」(in aeternum)と解するなら、若干の人びとは頭を悩ますことがあるかもしれない。しかし、この箇所でいわれている「末」(in saeculum)のはじまりについて、来たるべき世は現在の世の終局とともに開始されるのだというわたしたちの信仰による確信のように解するなら、頭を悩ませることはないであろう。なぜなら、イスラエル人たちはエルサレムから追い出されたのではあるけれども、それにもかかわらず、かれらはカナンの地の他の諸都市に残っており、また、終わりまでそこに残るであろうし、そして、その全地はキリスト教徒によって住まわれているが、かれら自身もアブラハムの子孫だからである。

(一)「創世記」一三の八以下。

第二十二章

ソドムの敵にたいするアブラハムの勝利と祭司メルキセデクより受けた祝福について

この約束を受け、それに応えて、アブラハムは移動し、同じ地の別の場所ヘブロンにあるマムレの樫の樹のかたわらに留まった(一)。そののち、五人の王が四人の王に対していくさを仕掛け、ソドムを征服し、ロトも囚われの身となったとき、アブラハムは自分の家人のうちいくさの訓練のある者三百十八人を連れて、ソドムを襲った敵たちからソドムの王たちのために勝利を得させたとき、勝利を得た王がかれに戦利品を提供しようとしたが、かれは何ものも受け取ろうとはしなかった(二)。しかし、まさにそのときに、いと高き神の祭司であったメルキセデクより祝福を受けたのであった。メルキセデクについては、「ヘブライ人へ」と題された手紙のなかで、いくつか大切なことが記されているが(三)、多くの人はそれを使徒パウロに帰すべきものであるといい、ある人はそれを否定している(四)。

そこではたしかに、いまキリスト教徒によって地上の到るところで神にささげられている最初の犠牲があらわれたのであった。それからずっとのち、いまなお肉において来られるべきであったキリストにたいして、預言をとおして、「あなたはメルキセデクの位に即して永遠に祭司である(五)」といわれていたところのことが成就されるのである。すなわち、それはアロンの位に即して祭司であるのではないのであって、アロンの位は、それらの者の影によってさきに暗示されていたところのことが、光りかがやく者たちによって除去されるべきものなのであった。

(一)「創世記」一三の一八参照。
(二) 同上、一四の一以下。
(三)「ヘブル人への手紙」第七章参照。
(四) この手紙の著者がパウロであるということは、東方において三世紀までに徐々に受け入れられていった。西方ではバルナバを著者としていたが、今日では特定の人物の名をあげることには躊躇している。
(五)「詩篇」一一〇の四。

第二十三章

アブラハムの子孫についての神の約束、およびアブラハムの信仰における義認について

このときも主のことばが幻のうちにアブラハムに臨んだのであった。主は、保護とひじょうに多くの報酬とをかれに約束されたのであるが、そのとき自分の子孫について心配していたかれは、自分の家で生れたエリエゼルとよばれる者が後継ぎとなるだろうと語ったのであるが、ただちにかれに約束が与えられたのであった。すなわち、後継ぎは家人ではなくアブラハム自身の血筋から出るであろう者であること、そして、ふたたび数え切れないほどの子孫――それ

は地の砂のようではなく、天の星のような——が与えられるであろうということであった。(二) ここで約束されている子孫というのは、天上の至福によって高められた人びとのことであるようにわたしにはおもわれるのである。

じっさい、数の多さという点にかんするかぎり、天の星は地の砂と比較することができるのであろうか。もっとも、この比較は、星もまた数えることができないものであるかぎりにおいて——なぜなら、それらのすべてが見られうるとは考えられないからである——似たものであるという者がいれば別であるが。というのは、星を観る人はだれでも、目をより研ぎすませれば研ぎすませるほど、より多くの星を観るからである。だからして、この世界のなかでわたしたちからはなはだしくかけ離れた他の部分に昇ったり沈んだりすると伝えられている諸々の星は別としても、ある星は、きわめて研ぎすまされた目をもって観る人にさえ隠されていると考えるのも正当なことである。けっきょく、この書の権威は、それがたとえばアラトゥス(三)やエウドクス(三)、あるいは他のだれであっても、星の総数をすべて把握し記録したと誇らしげに語る人びとを軽視するのである。

ここの箇所で、使徒が神の恵みを強調しなければならないがゆえに想い起こしているところの「アブラハムは神を信じた。それによってかれは義と認められた(四)」というあの一節が入れられているのであるが、これは、割礼を受けた者が誇り高ぶって無割礼の民のキリストへの信仰を認めようとはしないというようなことのないためである。(五) というのは、信じたアブラハムにかれの信仰が義認されるということがおこったときには、かれはまだ割礼を受けた者ではなか

ったからである。

（一）「創世記」一五の一―六。

（二）紀元前三世紀の天文学者。

（三）紀元前四世紀の天文学者。

（四）「ローマ人への手紙」四の三、「ガラテヤ人への手紙」三の六、「創世記」一五の六。

（五）「ローマ人への手紙」四の九―一二参照。

第二十四章

アブラハムの捧げた犠牲の象徴的意味について

同じ幻のなかで神がアブラハムに語られたとき、神はつぎのようにもいわれたのであった。「わたしはこの地をあなたに与え、それを継がせようとしてカルデア人の地からあなたを導き出した神である」(一)。そこでアブラハムは、その地を自分が継ぐということを何によって知りうるのかと神に尋ねたのであるが、神は「三歳の雌牛と三歳の雌山羊および雄羊、それに山鳩と家鳩とを連れて来なさい」とお答えになった。「かれはこれらをみな連れて来て、それらを二つに引き裂き、裂いたものをたがいに向かい合わせに置いた。しかし鳥たちは裂かなかった。そして」と聖書はさらにつづけて記している。「鳥たちが引き裂いた死体の上に降りるとき、

アブラムはそのかたわらに腰を下ろした。
さて、日没のころ、アブラムは大きな戦慄におそわれ、暗く巨大な恐怖がかれにふりかかった。すると神はいわれた。『あなたの子孫たちは自分のでないひとつの国に寄留者のようになって四百年のあいだ奴隷のようにさせられ圧迫されるだろうということをよくよく心に留めるがよい。しかし、わたしはかれらが仕えるその民を審くであろう。そののち、かれらは多くの貯えを携えて出て行くであろう。あなたは平安に満たされて、高齢となって父祖たちのところへ行くであろう。けれども、四代目になって、かれらはこの地へ帰還するであろう。なぜなら、アモリ人たちの罪はまだその極みに達していないからである』。
さて、日が沈んだとき、炎があらわれ、煙るかまどと燃え立つたいまつが引き裂かれた死体のあいだを通り過ぎたのである。その日、主なる神はアブラムと契約を立てられていわれたのであった。『わたしはあなたの子孫にエジプトの川から大河ユウフラテスまでの、すなわち、ケニ人、ケニズィト人、カドモニ人、ヘテ人、ペリジ人、レパイ人、アモリ人、カナン人、ヒヴ人、ギルカシ人、イェブス人のこの地を与えるであろう(三)』。
これらすべてのことが神の幻のなかでなされ、また語られたのであった。そのひとつひとつにわたって詳しく分析することは長たらしくなってしまうであろうし、また、この仕事の意図から離れてしまうことになるであろう。それゆえ、わたしたちにとって十分であることだけを知る必要があるわけである。アブラハムが神を信じたこと、そしてそれによってかれが義と認められたこと、が述べられたのち、かれは、「主なる神よ、わたしがそれを継ぐということは

何によって知ることができるのですか(もちろん、これは、かの地について相続が約束されたことを意味しているのであるが〔三〕)」と尋ねたのであるが、これは、かれが信仰の不十分な者の発言であるかのように受けとられてはならない。——というのは、「どうしてわたしは知ればよいのですか」とはいっていないからである。もしもこのようにいったのなら、かれがまだ信じていないということを意味するであろう。そうではなく、かれは「何によって知ることができるのですか」といったのであって、これは、すでに信じていることがらにたいして、じっさいに実現される仕方を悟るために何らかのしるしが付け加えられるのを願ったのである。それはちょうど、処女マリアがつぎのようにいったとき、何の疑いもなかったのと同様である。「どうしてそのようなことがおこりうるのでしょうか。わたしはまだ男を知らないのですから〔四〕」。すなわち、かの女はおこるであろうところのことを確信していたのであるが、どのような仕方でおこるのかを尋ねたのであった。このことを問い求めたとき、かの女は聞いたのであった。——したがって、いまのばあいも象徴的なしるしが動物たちによって与えられたのである。雌牛と雌山羊と雄羊、それに山鳩と家鳩という二つの鳥であって、かれは、もはや疑ってはいなかったところの未来の出来事が、これらのしるしに即しておこるであろうことを知るためであった。

それゆえ、雌牛によっては律法の軛のもとにおかれた民が、そして雌山羊によっては同じ民についての未来の罪ある状態が、雄羊によっては同じ民の未来の統治が、象徴的に示されているのかもしれない(これらの動物たちが三歳と述べられているのは、アダムからノアに至るま

で、そこからアブラハムに至るまで、そしてそこからダビデ――かれは、サウルが拒まれての ち、主の意志によってイスラエルの民の王に立てられた最初の人物であった――まで、という特筆すべき時代区分に即しているのであって、アブラハムからダビデに至るこの第三番目の段階において、民はいわば三歳となって成長したのだからである）。――あるいは、これらはもっとちがった何ごとかをもっと適切に象徴しているのかもしれない。いずれにしても、山鳩と家鳩が加えられることにより、霊的なものが予示されているということを、わたしはけっして疑っていない。

「しかし鳥たちは裂かなかった」といわれているのは、肉的なものはたがいに分たれるが、霊的なものは、山鳩のように人間の日常的な用務から自分を遠ざけるにせよ、あるいは家鳩のようにそれらの用務のあいだにあって時をすごすにせよ、けっして分たれることはない、という理由からである。すくなくとも、これら二つの鳥たちは単純で無害なものであって、それらは、その地が与えられるべきイスラエルの民自身のうちに、分たれることのない約束の子らが未来にあらわれて、永遠の浄福のうちに王国の後継ぎが存続していくであろうことを意味しているのである。

それにたいし、引き裂かれた死体の上に降りてきた鳥たちは、何か善きものを表示しているのではなく、この肉的なものの分裂のうちに自分たちの何らかの食料を求めようとしている この大気の霊たちを表わしているのである。(五) アブラハムがそれらのもののかたわらに腰を下ろしたということは、肉的なものがたがいに分たれるなかにあってさえ、終わりに至るまで堅忍す

るところの真の信仰者を象徴している。また、日没のころに戦慄と暗く巨大な恐怖とがアブラハムをおそったということは、いまの世の終わりに大きな動揺と苦悩とが信仰者にやってくるということを象徴的に示しているのであって、それについては、主が福音書のなかで、「そのときには、世のはじめからこれまでなかったような艱難があることであろう[六]」といっておられるのである。

さて、アブラハムに向かって、「あなたの子孫たちは自分のものでないひとつの国に寄留者のようになって四百年のあいだ奴隷のようにさせられ圧迫されるだろうということをよくよく心に留めるがよい」と語られたことは、エジプトにおいて奴隷の状態にならねばならなかったイスラエルの民について預言されたものであるということはまったく明らかである。もっともこれは、四百年間を通じてその民が同じ奴隷状態のままエジプト人のもとで圧迫を受けながら過ごすということではなく、四百年の経過のうちに予示されたことがおこるであろうということである。

じっさい、アブラハムの父であるテラにかんしても、「ハランにおけるテラの日々は二百五年であった[七]」と記されているのであるが、これは、かれがこの全年数をその地で過ごしたからではなく、それだけの年数がこの地において完結したからである。それと同じように、「かれらは四百年のあいだ奴隷のようにさせられ圧迫されるだろう」と挿入されているのは、これだけの年数がそのような圧迫された状態にあったときに完結したからであって、全期間がその地で過ごされたからではないのである。たしかに四百年は概数として述べられているのである。

じっさいの期間は、これらの約束がアブラハムになされたその時点から数えるにせよ、あるいは、イサクがアブラハムの子孫であるがゆえに——この約束はほかならぬこの子孫たちについて予告されたものであった——イサクが生れたその時点から数えるにせよ、もうすこし長いのであるが。

というのは、すでにさきに述べたように、(八)アブラハムに最初の約束がなされたとき七十五歳であったが、そのときからイスラエル人のエジプトからの脱出まで四百三十年が数えられるからである。それについて使徒は想いおこしてつぎのようにいっている。「わたしのいうのはこのことである。神によってあらかじめ定められた契約は、四百三十年のちにできた律法によって破棄されず、したがってその約束も無効になることはない(九)」。

それゆえ、とにかく四百三十年を四百年とよぶことができたのは、それ以上多くはなかったからである。ましてそれが幻のうちにアブラハムに示され、かつ告げられたときには、その年数のうち幾らかがすでに過ぎ去っていたのであるからには、なおさらのこと、そのようによばれてもよいであろう。あるいはまた、イサクが百歳となっていた父親から生れたときは、最初の約束から二十五年経過したときであって、この四百三十年のうち四百五年が残っていたのであった。それを神は四百年とよぶことをのぞまれたのであった。神の予告のことばにつづく他のことがらが、イスラエルの民にかんするものであることは、だれも疑わないであろう。

さらになお、「さて日が沈んだとき、炎があらわれ、煙るかまどと燃え立ったたいまつが引き裂かれた死体のあいだを通り過ぎたのである」と付け加えられているのであるが、これは、世

の終わりに肉的な者たちは火によって審かれねばならない者であるということを象徴的に示している。神の国の苦難は、反キリストのもとにおこるであろうと予期されているものであって、かつてけっしてなかったような苦難であるが、これは、日没のころ、すなわち、すでに世の終わりが近づいたころのアブラハムの暗い恐怖によって象徴的に示されているのである。

次いでアブラハムにたいしてなされた契約は、まったく明らかにカナンの地をあらわしており、エジプトの川から大河ユウフラテスまでのその地の十一の種族の名をあげている。それゆえ、エジプトの大河、すなわちナイルからではなく、エジプトとパレスチナとを分かつ小さな川からであって、そこにはリノコルラという都市が存在しているのである。

(一)「創世記」一五の七。
(二) 同上、一五の九―一一。
(三) 同上、一五の八。
(四)「ルカによる福音書」一の三四。
(五) 本書第八巻第十四章参照。
(六)「マタイによる福音書」二四の二一。
(七)「創世記」一一の三一。
(八) 本書第十六巻第十六章。
(九)「ガラテヤ人への手紙」三の一七。

第二十五章

サラのはしためハガルについて

さて、ここでアブラハムの子らの時代がつづくことになるのであって、その一人は女奴隷ハガルからの子であり、他は自由女サラからの子である。かれらについてはすでにさきの巻で述べたのであった。(一) しかし、ことがらそれ自体にかんしては、この内妻の関係のゆえにアブラハムに責めを負わせることはけっしてできない。じっさい、かれがかの女を用いたのは子孫を儲けるためであって、情欲をみたすためではなかったからである。かれは妻を侮辱したのではなく、むしろ自分の不妊の慰めであると信じた妻に従ったのである。その自然本性によっては身ごもることの不可能であったゆえに、自分の意志によって女奴隷の妊娠能力のある胎を自分のものとしたのであれば、妻自身からしてできないところのことを他の者から得るために、使徒が「同様に夫も自分のからだを自由にすることはできない。それができるのは妻である」(二) といっているところの正当な権利を用いたのであった。

ここにはみだらな欲望はない。また下劣な醜悪さもない。女奴隷は子孫のために妻の手によって夫に渡され、女は子孫のために夫によって受け取られる。かれらのいずれも咎められるべき放蕩からでなく、自然の果実を目ざしているのである。けっきょく、身ごもった女奴隷が不妊の女主人を侮るようになり、サラが女性の疑惑によってかえってこれを夫のせいにしたとき、

そのばあいでもアブラハムは、自分が情愛の奴隷でなく、自由な父親であったこと、また、ハガルにおいて妻であるサラの貞淑を保護したこと、自分の官能をみたすのではなく、妻の意志をかなえようとしたこと、また求めたのではなく受け取ったのであること、かの女に執着したのでなく、かの女のところへ来たのであること、種を与えたのであって、愛したのではないこと、——これらのことを証示したのであった。

じっさいかれは、「さあ、あなたのはしためはあなたの手のうちにある。あなたの好きなようにしなさい(三)」といっている。男らしく女性をあつかう何という男であろう。妻によっては節度をまもり、女奴隷によっては妻の意に従い、いずれによってもけっしてみだらではなかったのである。

(一) 本書第十五巻第三章。
(二) 「コリント人への第一の手紙」七の四。
(三) 「創世記」一六の六。

第二十六章

イサクについての約束、および割礼の意味について

こののち、ハガルからイシマエルが生れたのであるが、アブラハムは自分の家で生れた者を

養子にしようとしていたとき、このイシマエルにおいてかれに与えられた約束が成就されたと見なしてよいであろう。すなわち、神によって「この者はあなたの後継ぎとはならないであろう。あなたから出る者、その者があなたの後継ぎとなるであろう」（二）といわれた約束である。それゆえ、つぎのようにいわれたのは、この約束が女奴隷の子どもにおいて成就されたと見なされることのないためであった。「かれが九十九歳であったとき、主はかれに現れていわれた。『わたしは神である。あなたはわたしの目に喜ばれる者となり、まったき者であるように。そうすればわたしは、わたしとあなたとのあいだに契約をたて、あなたをひじょうに増やそう』。アブラハムはひれふした。すると神はかれに語られた。『わたしはいま、あなたと契約を結ぶ。あなたは数多くの民の父となるであろう。あなたの名はもはやアブラムではなく、アブラハムとなるであろう。なぜならわたしがあなたを多くの民の父としたからである。わたしはあなたにきわめて多くの子孫を与えよう。そしてあなたを国々の民にするであろう。また王たちもあなたから出るであろう。わたしはわたしの契約をわたしとあなたとのあいだに立て、そして、あなたとあなたの後の子孫とのあいだに、代々に永遠の契約として定めて、わたしはあなたの神、あなたの後の子孫の神となるであろう。

わたしはあなたとあなたの後の子孫たちとに、あなたの住んでいるこの地、すなわちカナンの全地を永遠の所有として与えよう。そしてわたしはかれらの神となるであろう』。

神はまたアブラハムにいわれた。『あなたはわたしの契約をまもらなければならない。あなたとあなたの後の子孫もその系列においてまもらなければならない。わたしとあなた、および

わたしとあなたの後の子孫とのあいだで、代々にわたってまもられる契約とはつぎのことである。あなたがたのうちで男子はすべて割礼を受けなければならない。あなたがたは包皮の肉に割礼を受けなければならない。それがわたしとあなたがたとのあいだの契約のしるしとなるであろう。あなたたちのうちでその系列にある男子はすべて、生れてから八日目に割礼を受けなければならない。家で生れた奴隷も、あなたの子孫には属さない他の民の子から買い取られた奴隷も、割礼を受けなければならない。家で生れた奴隷も、買い取られた奴隷も、である。そしてわたしの契約は、永遠の契約によってあなたたちの肉において立てられることになるであろう。割礼を受けなかった男子、すなわち八日目に包皮の肉を切られていない者、その者はわたしの契約を無にしたのであるから、その魂は民から断たれるであろう』。

神はまたアブラハムにいわれた。「あなたの妻サライについては、その名をサライとはよばず、サラとよびなさい。わたしはかの女を祝福し、かの女によってもあなたに一人の息子を与えよう。わたしはその子を祝福しよう。かれから諸々の民がおこるであろう。そしてかれから民の王たちが出るであろう』。そこでアブラハムは地にひれふした。そして心の中で笑い、いった。『百歳のわたしに子どもが生れるというのであろうか。九十歳のサラが子どもを産むことができようか』。

アブラハムは神にいった。『ここにいるイシマエルがあなたの御前に生きながらえることができますように』。しかし、神はいわれた。『いや、あなたの妻サラはあなたに一人の男子を産むであろう。名をイサクとつけなさい。わたしはかれと契約を立て、永遠の契約としよう。そ

れは、わたしがかれの神となり、かれの後の子孫の神となるためである。イシマエルについてもわたしはあなたのことばを聞き入れた。見よ、わたしはかれを祝福した。わたしはかれに多くの子孫を得させ、それを大いに増すであろう。かれは十二の氏族を生むであろう。そしてかれを大いなる民としよう。けれども、わたしが契約を立てるのは、来年のいまごろサラがあなたに生むイサクとである[三]』。

ここでは、イサクすなわち約束の子における諸々の民の召命にかんする約束がいっそう明瞭に示されるのであって、かれにおいて自然本性よりはむしろ恩恵が象徴的に示されているのである。それというのは、老人および不妊の老婆の子どもとしてかれは約束されているのだからである。というのは、神は出産という自然的な成り行きにおいてもはたらかれるのではあるけれども、にもかかわらず、自然本性が退行し、かつ中断してしまったときに神の業が明らかであるばあい、恩恵はいっそう明白に知られるのだからである。そしてこのことは、出生をとおしてではなく、再生をとおしておこるはずのものであるがゆえに、サラからの一人の息子が約束されたまさにそのときに、割礼が命ぜられたわけである。子どもだけでなく、家で生れた奴隷も、買い取られた奴隷も、すべての者に割礼が命ぜられたという事実は、その恩恵がすべての者に関連しているということを証明しているのである。

じっさい、割礼というものが、老いを脱ぎ去ることによって自然本性を新たにすることを意味するのでなければ何を意味するのであろうか。また、八日目が、七日を経過して、すなわち復活されたキリストを意味するのでなければ何を意味するのであろうか。両親の名も変えられ

るのである。すべてが更新を反響させている。新しい契約は旧い契約のうちに覆われているのである。じっさい、旧約といわれているのは、新しい契約の隠されたもののことでなければ何であろうか。そして、新しい約束は旧い約束の開示でなくて何であろう。また、アブラハムの笑いは感謝する者の歓喜であって疑い深い者の嘲笑ではない。かれが心のうちに発したあの「百歳のわたしに子どもが生れるというのであろうか。九十歳のサラが子どもを産むことができようか」ということばも、疑う者のことばではなく、驚嘆する者のことばである。

しかしながら、もしもだれかが、「わたしはあなたとあなたののちの子孫たちとに、あなたの住んでいるこの地、すなわちカナンの全地を永遠の所有として与えよう」ということばについて悩まされて、地上的なものの所有はどのようなものであれ、いずれの民にとっても永遠ではありえぬのに、このことばが、成就されたものとして解されるべきなのか、それとも未来に成就されるべきものとして待望されるべきなのか、と迷うなら、この「永遠の」ということばは、わたしたちにおいては、ギリシア人が「アイオーニオン[三]」と表現しているものの訳語であると知るべきであろう。それは「サエクルム[四]」からきたものである。たしかに「サエクルム」はギリシア語では「アイオーン[五]」とよばれるのではあるが、しかし、ラテン人たちはこれをあえて「サエクラーレ[六]」といおうとはしなかった。それは、はなはだしく異なった意味に伝えられることのないためであった。じっさい、短い期間に過ぎ去ってしまうような仕方でこの世でおこる多くのものが「サエクラリア[七]」とよばれるのである。それにたいして、あるものが「アイオニオーン」とよばれるばあい、それは終わりをもたないもの、あるいは、この世の終わり

まで保持されるもの、を意味するのである。

（一）「創世記」一五の四。
（二）同上、一七の一―二一。
（三）*αἰώνιον*.
（四）saeculum.
（五）*αἰών*.
（六）saeculare.
（七）saecularia.

第二十七章

八日目に割礼をほどこされない者のことについて

同様に、「割礼を受けなかった男子、すなわち八日目に包皮の肉を切られていない者、その者はわたしの契約を無にしたのであるから、その魂は民から断たれるであろう(一)」とここでいわれているところについてどのように理解すべきであるか、悩まされることがあるかもしれない。というのは、これは、その魂が断たれるべきであるといわれているところの小児自身には何の負い目もなければ、また、神の契約を無にしたのは小児ではなくかれに割礼をほどこす配慮を

しなかった年長者だからである。もっとも、小児でさえも、その生活における自分自身の行為によってでなく人類に共通の根元によって神の契約を無にしたのだから、というのなら話は別である。(二) じっさい、すべての者は、罪を犯すことになったところのあの一人の人間において、神の契約を無にしているのである。

じっさい、旧と新というあの偉大な契約のほかに、多くのことが神の契約とよばれているのであって、このことはだれでも聖書を読んで知りうるであろう。けれども、最初の人間にたいしてなされた最初の契約は、たしかにあの「それを食べた日にきっと死ぬであろう(三)」ということである。だからして、「集会の書」とよばれる書のなかに、「すべてからだは衣服のように古びるものである。契約ははじめから『あなたはきっと死ぬであろう』となっている(四)」と記されているのである。そののちに律法はもっと明らかに与えられ、そして使徒が「律法のないところには違反なるものはない(五)」といっているのを見れば、『詩篇』に「わたしは地上のすべての罪人たちを違反者と見なした(六)」と読まれるのは、それが、何らかの罪によってとらえられている者はすべて何らかの律法の違反という負い目をもっていると考えるのでないなら、どうして真実であろうか。

したがって、真の信仰が教えるように、もしも小児でさえも、かれら自身によるのでなくその根元によって生れながらにして罪人であるのなら――そしてそれゆえにこそわたしたちはかれらにも罪のゆるしの恩恵が必要であると認めるのであるが――、たしかにかれらは、罪人であるのと同様、楽園において与えられていたあの律法の違反者として承認されるのであって、

「わたしは地上のすべての罪人たちを違反者と見なした」と記されていることも、「律法のないところには違反者なるものはない」と記されていることも、いずれも真であるわけである。
それゆえに、割礼が再生のしるしとなり、また、神の契約が無とされたあの原罪ゆえに、小児も、再生がかれらを解き放つのでないなら、その出生がかれらを滅ぼすことになるとしても不当ではない。そこで、この神のことばは、いわば「再生しなかった者、その者の魂は民から断たれるであろう」といわれているものとして解すべきである。なぜなら、その者自身もアダムにおいてすべての人間とともに罪を犯したときに、神の契約を無にしたのだからである。じっさい、もしも「かれは、わたしのこの契約を無にしたからである」と神がいわれたのであれば、それは割礼にかんするものとしてのみ解さざるをえない。しかし、いまのばあい、どの契約を小児が無にしたのか明瞭に述べていないのであるから、小児に関係づけることの可能なあの契約についていわれているのだと解することも自由である。
ところで、もしも、これはただ割礼についてのみいわれているのであると主張するなら――小児は割礼を受けなかったがゆえに、かれにおいて神の契約は無になったのだという理由でのであるからかれは契約を破ったのである、という意味に解しても不合理ではないような何らか――、かれによって破られたわけではないけれども、けっきょくはかれにおいて破られているかの表現の仕方を求めねばならないであろう。ただし、そのばあいであっても、その小児自身は割礼をほどこされていないことに負い目はないのであるから、その子どももまた根元的な罪の負い目のもとにあるということがないなら、その魂が滅びるというのはやはり不当であると

いうことに気付いていなければならぬであろう。

(一)「創世記」一七の一四。
(二)「ローマ人への手紙」五の一二参照。
(三)「創世記」二の一七。
(四)「集会の書」一四の一七。
(五)「ローマ人への手紙」四の一五。
(六)「詩篇」一一九の一一九。

第二十八章

アブラハムとサラの名前の変更およびサラの懐妊について

このように、かくも重大な、そしてかくも明らかな約束がアブラハムにたいしてなされての ち、つぎのことがこの上もなく明白に語られたのであった。「わたしはあなたを多くの民の父 とした。わたしはあなたにきわめて多くの子孫を与えよう。そしてあなたを国々の民にするで あろう。また王たちもあなたから出るであろう。わたしはサラによってもあなたに一人の息子 を与えよう。わたしはその子を祝福しよう。かれから諸々の民がおこるであろう。そしてかれ から民の王たちが出るであろう(一)」(この約束は、いまやキリストにおいて果たされたことをわた

したちは見ている）。このときから聖書では、この一組の夫婦は以前のようにアブラムとサライとはよばれず、わたしたちがはじめからよんでいるように――いまではすべての人によってそのようによばれているゆえに――アブラハムとサラとよばれるようになったのである。

アブラハムの名がなにゆえに変えられたかということについては、「なぜならわたしがあなたを多くの民としたからである」といわれているのが理由である。それゆえ、これが「アブラハム」の意味であると解されねばならない。かつての呼び名である「アブラム」は「高められた父」と訳されるのである。しかし、サラの名の変更については理由が与えられていないのであるが、聖なる書物のなかに出てくるヘブライ人の名を訳した人たちのいうところによれば、「サライ」は「わが王妃」と訳され、「サラ」は「力」と訳される。そこから「ヘブル人への手紙」において「信仰によってサラ自身も種をやどす力を得た」[三]と記されているのである。

じっさい、二人とも聖書の証言どおり老齢であった。その上サラは不妊であり、月々の血のものはすでに止まっていた。そのため、かりに不妊でなかったとしても、子どもを得ることは不可能であった。さらに、女が相当の年齢になっていても月のものがつづいているなら、なおも若い男によって子どもを産むことはできるであろうが、老いた男によっては不可能である。他方、年老いた男はなおも可能であるけれども、年若い女によって子どもを得ることができるのである。ちょうどアブラハムがサラの死後、ケトラによって可能であったごとくである。かれはかの女の生き生きとした若さに出会ったからであった。

それゆえ、これは使徒が驚嘆すべきこととして強調するところのことであり、また、これに

かんしてアブラハムの身体はすでに死んでいたものであるといっている。(三) それというのは、まだ子どもを産むための最後の期間がいくらか残されているようなどんな女からも、アブラハム自身がその年齢で子どもをつくらせることは不可能であったからである。ある点にかんして——すべての点にかんしてではなく——かれの身体は死んでいたと理解しなければならぬであろう。なぜなら、あらゆる点にかんして死んでいたのなら、それはもはや生きた老人ではなく死者の屍だからである。

この問題については、アブラハムがのちにケトラによって子どもを得たのは子どもを生むという主から受け取った賜物が妻の死ののちにも残っていたからだというような解決がなされるのがつねであるが、しかし、問題の解決としては、わたしたちの辿ってきたもののほうがより好ましいようにおもわれる。なぜなら、確かに百歳の老人は、わたしたちの時代においてはどんな女性からも子どもを得ることはできないが、当時、人びとが長く生きていたときには、百年はまだ人間を老齢の衰退状態にすることがなかったから、というものである。

(一) 「創世記」一七の五以下。
(二) 「ヘブル人への手紙」一一の一一。
(三) 「ローマ人への手紙」四の一九参照。

第二十九章

アブラハムに現れた三人の天使たちのうちに主がおられたと記されていることについて

ふたたび神はマムレの樫の樹のかたわらにいるアブラハムに三人の男の姿で出現されたのであった。それが天使たちであったことは疑いえない。もっともある人たちは、そのうちの一人が主キリストであったと考えるのであって、そのように考える人たちは、キリストは肉をまとわれる以前にも可視的であられたと主張するのである。たしかに、神の権能、不可視的で非形体的そして不可変的な神の本性には、それ自身は何ら変化もなくして可視的な視覚にも現れるということがある。もちろんこのことは、それ自身の存在をとおしてではなく、それ自身に服属しているところの何ものかをとおしてである。そして、それに服属していないようなものが何かあるであろうか。

しかしながら、これら三人の男たちのうちの一人がキリストであったと主張する理由として、アブラハムが三人を見たとき単数形で主に語りかけたからであるということをあげるのなら（なぜなら、「見ると、三人の人がかれのそばに立っていた。かれはこれを見て天幕の入口から走って行ってかれらを迎え、ひれ伏していった。『主よ、もしもわたしがあなたの御前に御好意を得ているのなら……』」[一]と記されているからである）、かれらはなぜ次のことにも注意を向けないのであるか。すなわち、アブラハムが男たちのうちの一人に、主とよびかけてまだ話をつづけて、ソドムにおいて義しい者が不敬虔な者と共に滅びることがないように執り成してい

るときに、そのうちの二人がソドムの人びとを絶滅するために出て行ってしまったということである。ロトも同じようにしてこの二人を迎えたのであるが、かれらと語り合ったとき、かれ自身も単数形で主とよんでいるのである。

じっさい、ロトがかれらに向かって複数形で、「さあ、主(あるじ)たちよ、あなたがたのしもべの家においでください(三)」等々、そこに述べられている他のことも語ったのであるが、しかし、そのあとで次のように読まれるのである。「主がかれに思いやりをかけることをのぞまれたので、天使たちは、かれの手と、かれの妻の手と、ふたりの娘の手を取った。かれらはかれを外へ連れ出した。連れ出してすぐにいった。『のがれなさい。あなたの命にかかわることだから。うしろを振り返ってはならない。この地域のどこにも止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければあなたは捲き込まれるだろうから』。するとロトは答えて、『いや、主よ、あなたのしもべはあなたの御前にあなたのあわれみを見出したのですから……』といったのであった(三)」。

次いで、これらのことばのあと、主は二人の天使たちにおいて存在しておられたのであるが、「見よ、わたしはあなたの顔におどろいた……(四)」といわれて、単数形でかれにたいして答えておられるのである。だからして、アブラハムは三人の人物のうちに、ロトは二人の人物のうちに主を認め、その人びとが人間であると見なしていたのではあるが単数形で主に語りかけたというのが、はるかに信頼されうることである。そして、かれらがそれらの人びとを受け入れたのは、それらの人びとがいわば可死的存在であり、かつ人間的な元気回復を必要としている存

在として、その世話をするという、ただそれだけの理由によるものであった。しかし、これらの人びとには、たしかに、いわば人間としてではあるけれども何か異常なものがあったのであって、そのため、その人びとに親切なもてなしを示したかれらは、その人びとのうちに主がおられるということを——預言者たちのうちによくおられるように——疑うことができなかったのである。それゆえ、これらの者は、その人びとのなかの主に、あるときには複数形で、あるときには単数形でよびかけたのであった。

ところで、かれらが天使たちであったことは、聖書の証言しているところであって、これらのできごとが語られているこの創世記の書においてだけでなく、「ヘブル人への手紙」にも記されている。すなわち、親切にもてなすことが賞賛されているところで、「このようにして、ある人びとは、気付かないで御使いたちをもてなした[五]」といっているのである。

この三人の人物をとおして、ふたたびアブラハムにたいして、息子イサクがサラから生れるという約束がなされたとき、「アブラハムは、大きな、そして数多い民となって、かれにおいて地上のすべての民が祝福されるであろう[六]」といわれているような神の答えが与えられたのであった。ここには、この上もなく簡潔で十分なかの二つの約束——すなわち肉によるイスラエルの民と信仰によるすべての民——がなされているのである。

(一)「創世記」一八の二以下。
(二) 同上、一九の二。
(三) 同上、一九の一六以下。

(四) 同上、一九の二一。
(五) 「ヘブル人への手紙」一三の二。
(六) 「創世記」一八の一八。

第三十章

ロトのソドムからの脱出およびアビメレク王とサラのことについて

この約束ののち、ロトはソドムから解き放たれて、(一) 火の雨が天から降ってきたとき、その不信仰な都市の全域が灰に帰したのであった。そこでは、男性のあいだでの淫乱が慣習となって、ひじょうな勢力を見せていたので、法律によって他の行為にも与えられるのを習わしとしている許可が示されていた。しかし、その人たちの罰は、来たるべき神の審判のひとつの標本であった。じっさい、天使たちによって解放された人びとがうしろを振り返るのを禁じられたという事実は、もしもわたしたちが最後の審判を免れたいと考えるなら、恩恵によって再生した人びとが脱ぎ捨てるところの古い生へ心を二度と戻してはならないという理由によるのでないなら、どのように関連づけられるのであろうか。さらに、ロトの妻が振り返った地点で動けなくなり塩に変じてしまったということは、信仰ある人びとにとって一種の薬味を提供するものであって、人びとは、そのような例を用心するゆえんとなるところの何ごとかを嗅ぐのである。

このあと、アブラハムはゲラルで、その都市の王アビメレクのもとで、エジプトにおいて妻にかんしておこなったことをふたたびおこなったのであるが、同じように汚されずにかれのところへもどされたのであった。ここでは、もちろん王はかれを非難したのであって、かの女が妻であることを黙し、妹であるといったのはなにゆえであるか、と問うたのであった。かれはなにを恐れていたのかを打ち明け、つぎのことも付け加えたのであった。「かの女はほんとうにわたしの妹なのです。父の娘ですが、母の娘ではありません」。それというのは、かの女はアブラハムの父からの妹であって、その父にかんしてかの女はかれの近親者であったからである(三)。しかし、かの女はきわめて美しい人であったので、その年齢においてすら、ひとにのぞまれるだけのものがあったのである。

(一)「創世記」一九の二九。
(二) 同上、二〇の一以下。

第三十一章
イサクの名の意味について

このあと、神の約束にしたがってアブラハムにサラから息子が生れたのであった。かれはその子どもにイサクという名を付けたが、これは「笑い」という意味に訳される。それというの

は、この子どもが父に約束されたとき父親はおどろきと喜びのために笑ったのであるが、(一) また、三人の人物によってその約束がくり返されたとき母親も信じがたい気持で喜んで笑ったのだからである。けれども、かの女の笑いは、それが喜びを示すものであったとはいえ、十分な信仰を示すものではなかったがゆえに天使はかの女を非難したのであるが、のちに同じ天使によって信仰においても堅くされたのであった。このようなわけで、この子どもはその名を受け取ったのである。

じっさい、イサクが生れてその名が与えられたときに、サラは、その笑いが不名誉を嘲笑するためでなく、かえって喜びを表現するためのものであったことをはっきり示したのであって、かの女はまったくつぎのようにいったのであった。「主はわたしを喜ばせてくださった。それを聞く者はだれもわたしのことを喜ぶでしょう」(二)。しかし、それから少し経ってから、女奴隷はその子どもと共に家から追い出されたのであるが、(三) 使徒によればこれは旧と新という二つの契約が象徴されているのであり、そこではサラは天上のエルサレム、すなわち神の国の姿を担っているのである。(四)

(一) 「創世記」一七の一七。
(二) 同上、二一の六。
(三) 同上、二一の一四。
(四) 「ガラテヤ人への手紙」四の二一以下参照。

第三十二章

息子の犠牲によって示されたアブラハムの従順と信仰について

すべてこれらのことに言及するのは冗長にすぎることになるが、そのなかで、アブラハムはほかならぬ最愛の息子イサクをいけにえとしてささげるという試みに会うのであって、それは、かれの敬虔な従順が証明されてひろく世の人びとに知られるため――神に知られるのではなく――であった。じっさい、試みはすべて咎められるべきものではない。なぜなら、それによって是認されるような試みは、むしろよろこばれるべきものだからである。ほとんどのばあい、人間の心は自己自身には知られないのであって、それはただ自分の力を言葉によらず何らかの仕方で問いただす試みに験されることにより、それに答えるときにのみ知られるのである。もしも神のなされるわざを認めるときには、ひとは敬虔となり、虚しい誇りによって膨れあがることがなく、恩恵の確かさによって固められるであろう。

神の命令の呼び声には議論をすることなく従わねばならぬけれども、アブラハムはたしかに神が人間の犠牲をよろこばれるとはけっして信じてはいなかった。しかし、すくなくともアブラハムは犠牲をささげたときに息子がただちに復活するであろうと信じたことにおいて賞賛されるべきである。じっさい、女奴隷とその息子とを家から追い出すようにという妻の意志にかれが応じようとはしなかったとき、神はかれに、「あなたの子孫といわれる者たちはイサクに

よって生れるからである」と語られたのであった。また、ここではつづいて「わたしはこのはしための子をも大いなる民としよう。なぜならかれはあなたの子孫だからである(二)」といわれているのである。――それでは、イシマエルもかれの子孫であると神がよばれているときに、「あなたの子孫といわれる者たちはイサクによって生れるからである」ということばはどのような意味なのであろうか。

ところで使徒は、「あなたの子孫といわれる者たちはイサクによって生れるからである」がどういう意味であるかを説明している。すなわち、「肉の子らがそのまま神の子であるというのではなく、むしろ約束の子らが子孫として認められるのである(二)」といっている。それゆえに、約束の子らがイサクによってアブラハムの子孫となるようよばれているのであって、これはすなわち、それらの者は恩恵によってよばれてキリストのうちに集められるのである。それゆえに、この信仰深い父親はその約束を忠実にまもっていたのであった。そしてそれは、神が殺すよう命じたこの息子をとおして成就されるべきであったゆえに、かれが(子孫の出生の)望みをすてたときに与えられた息子がいけにえとしてささげられても、自分のもとに戻されるであろうことを疑わなかったのであった。

このように「ヘブル人への手紙」では解されており、そしてつぎのように説明されている。「信仰によってアブラハムは試練を受けたときイサクをささげた。すなわち、約束を受けていたかれがそのひとり子をささげたのである。この子どもについては、『あなたの子孫といわれる者たちはイサクによって生れるからである』といわれていたのであった。かれは神が死人の

なかから人をよみがえらせる力があると考えていたからである」。さらに、「このことのために神はかれをも似姿に置かれたのであった[三]」と加えている。その似姿とは、使徒が「かれは自分の子を惜しまずわたしたちすべてのために手渡された[四]」と語っているところのそのかたの似姿にほかならない。

それゆえ、主が御自分の十字架を運ばれたように、イサク自身もかれが置かれるべきいけにえの場にまで薪を運んだのである。最後にイサクは殺されてはならなかったがゆえに父親が自分の息子を打ち殺すのを禁じられてのち、それをささげることによって象徴的な血によって犠牲を成就したところのあの雄羊はだれであったか。あきらかに、アブラハムがその雄羊を見たときにはそれは角を藪にかけていたのであった。それゆえ、その雄羊によって象徴されていたのは、犠牲としてささげられる前にユダヤ人の茨の冠をかぶせられたイエスでなくてだれであろうか。

しかし、わたしたちは天使によって語られた神の言葉に注意を向けよう。聖書はいっている。「そしてアブラハムが手を差し伸べ、刃物を取ってその子を殺そうとした。そのとき、主の使いが天からかれをよんでいった。『アブラハムよ』。かれは答えた。『はい、ここにおります』。天使はいった。『その子に手をかけてはならない。また、かれに何もしてはならない。わたしはあなたがあなたの神をおそれ、わたしのためにあなたのただ一人の息子をさえ惜しまなかったのを知った[五]』」。ここで「知った」というのは「わたしが知られるようにした」という意味である。というのは、神はこのことがおこるまえに無知であったというのではないからである。

そののち、雄羊が息子イサクの代りにささげられたとき、「アブラハムはその場所の名を『主がご覧になった』とよんだ。それにより、人びとは今日も『主は山に現れた』といっているのである」。ちょうどそれは、「わたしが知られるようにした」の代りに「知った」といわれているのと同じように、ここでは、「主がお現れになった」――すなわち主はご自身を見られるようになさった――という代りに「主はご覧になった」といっているのである。

「主の使いはいま一度天からアブラハムをよんでいった。『わたしは自分をさして誓う。あなたがこの命令を実行し、あなたのひとり子をもわたしのために惜しまなかったがゆえに、わたしは大いにあなたを祝福し、そして大いにあなたの子孫を増やして、天の星のように、浜辺にひろがる砂のようにする。あなたの子孫はあなたの敵の町を打ちとり、そして、地のもろもろの民はあなたの子孫によって祝福されるであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである』」。(六)

このようにして全燔祭――それによってキリストが表示されているのであるが――が終わってのち、アブラハムの子孫において、もろもろの民の召命についてのあの約束が神の誓約によっても確立されたのであった。神はしばしば約束を与えられたのであるが、けっして誓われたことはなかった。ところで、真の、そして真実の神の誓いとは、その約束の確証および信じない者への一種の譴責でなければ何であろうか。

このことののち、サラはその生涯の百二十七歳、夫の生涯の百三十七歳のときに死んだのであった。(七)かれがかの女をとおして一人の息子が与えられるという約束を受けたとき、「百歳の

わたしに子どもが生れるというのであろうか。九十歳のサラが子どもを産むことができようか」と自ら言明しているとおりである。そのときアブラハムは土地の一部を買い、そこに妻を埋めたのであった。ステファノの説明によればそのときにかれはその地に定住したのであった。かれはそこで土地所有者になりはじめていたからである。すなわち、かれの父の死ののちのことである。父は二年前に死去していたものと見なされる。

（一）「創世記」一二の一―一三。
（二）「ローマ人への手紙」九の八。
（三）「ヘブル人への手紙」一一の一七以下。
（四）「ローマ人への手紙」八の三二。
（五）「創世記」二二の一〇以下。
（六）同上、二二の一五以下。
（七）同上、二三の一。
（八）同上、一七の一七。
（九）同上、二三の三―二〇参照。
（一〇）「使徒行伝」七の四。

第三十三章

イサクが妻として迎えたナホルについて

その後イサクは四十歳のとき自分の叔父ナホルの孫娘リベカを妻として娶った。これはかれの父の百四十歳のとき、そして、かれの母が死んでから三年のちのときであった。かの女を迎えるために奴隷がイサクの父によってメソポタミアへ送られたとき、その奴隷に向かってアブラハムが「あなたの手をわたしの腿の下に入れなさい。わたしは天の神、地の神であられる主にかけて誓ってもらいたい。あなたはカナン人の娘からわたしの息子イサクに妻を取ることのないように」[(一)]といったのであるが、これは、天の神、地の神であられる主が腿から得られる肉において来られるべきかたであったということを証明するものにほかならないのではなかろうか。これは、わたしたちがいまキリストにおいて成就されているのを見ているところの現実を予示する小さな目じるしではないはずである。

(一)「創世記」二四の二、三。

第三十四章

アブラハムのケトラとの結婚の意義について

ところで、サラの死ののち、アブラハムがケトラを娶ったのは何を意図していたのであろうか。このばあい、とくにかれの年齢とかれの信仰の神聖さとによって、不節制であると疑ってはならない。イサクから出る子どもたちが天の星や地の砂のように増やされるというまったく確かな信仰によって神の約束を保持していたのに、かれはなおも子どもを生むことを求めていたのであろうか。しかし、使徒の教えるところによって、(一)もしもハガルとイシマエルとがたしかに旧約の肉的な人びとを表示しているとすれば、なにゆえにケトラとその子どももまた、自分が新約に属していると見なしている肉的な人びとを表示していないのであろうか。

じっさい、かの女らはアブラハムの妻とも内妻ともよばれているのに、サラはけっして内妻とはいわれていないからである。すなわち、ハガルがアブラハムに与えられたとき、聖書はつぎのようにいっているのである。「アブラムの妻サライは、アブラムが十年間カナンの地に住んだのちエジプト人の仕え女であるハガルをとって夫アブラムに妻としてかの女を与えた(二)」。一方、アブラハムがサラの死去ののちに娶ったケトラについては、「ふたたびアブラハムは妻を娶った。その名はケトラであった(三)」と読まれるのである。

ここでは二人とも妻とよばれているのを見るのである。しかし、かの女らはいずれも内妻であったということもわかるのであって、それというのは、聖書はそのあとで、「さて、アブラハムはその資産をすべてイサクに与えた。そしてそのそばめたちの子らにも贈り物を与えたが、

かれの生存中、かれらをその子イサクから離して、東方、東の地へ移らせた」といっているからである。

このように、内妻たちの子らにもいくらかの贈り物が与えられたのであるが、かれらは、それが異端者たちであっても肉によるユダヤ人たちであっても、約束された王国には達しないのである。なぜなら、イサクのほかに相続人は存在せず、そして、「肉の子らがそのまま神の子であるのでなく、約束の子らがその子孫と見なされる」[四]ゆえであって、その子孫について聖書は「あなたの子孫といわれる者たちはイサクによって生れるからである」といっているのである。じっさい、なにゆえにその妻の死ののちにアブラハムに娶られたケトラが内妻とよばれるべきであるか。この奥義のゆえでないとするなら、わたしにはわからない。けれども、これらのことをこのような意味に受けとるのを欲しない者もアブラハムに向かって非難を投げかけてはならない。

これは、二回目の結婚を咎めた異端者たちの反駁に対して[五]、妻の死後の二回目の結婚は罪ではないということが多くの民の父祖の例によって示されるために備えられたものであればどうであろうか。

さて、アブラハムは百七十五歳のときに死去したのであった。こうして百歳のときに生れた息子のイサクがそのあとに残されたのであった。かれはそのとき七十五歳であった。

(一) 「ガラテヤ人への手紙」四の二四。
(二) 「創世記」一六の三。

(三)　同上、二五の一以下。
(四)　「ローマ人への手紙」九の八。
(五)　二世紀後半に現れた熱狂的な預言者モンタヌスとその派の主張に見られた異端説。

第三十五章

リベカの胎内に懐かれている双児についての神の答えの意味について

さて、いまやわたしたちはアブラハムの子孫たちをとおして神の国の歴史がどのように発展していくのか見なければならない。イサクの生涯の最初の年からかれに息子たちが生れたその六十歳に至るまでにつぎのことがとくに注目されるべきである。――不妊であった妻(リベカ)が子どもを胎むことができるようかれが神に乞い求めたとき、主はかれの願いを受けいれられ、妻は懐胎したのであった。かの女の胎内に抱かれていた双児は、すでにはげしく動いていたのであった。この苦痛によってくるしめられていたとき、かの女はそれについて主に尋ねた。するとつぎのような答えを受けとったのであった。「二つの国民があなたの胎のうちにあり、二つの民があなたの腹から分れて出てくるであろう。そのうちの一つは他の民よりもつよく、兄は弟に仕えるであろう(一)」。

使徒パウロはこれを恩恵の大いなる証明と解されることをのぞんでいる。なぜなら、かれら

はまだ生れてはおらず、何の善も悪もおこなっていなかったときに、何らかの功績もなくして弟のほうが選ばれ、兄のほうがしりぞけられたからである。(二) その時点には、疑いもなく二人は原罪にかんして等しい状況にあった。また、個人の罪にかんしてはどちらにも何の罪もなかったのであった。けれども、現時点で、わたしが従事しているこの書の計画は、このことがらについてこれ以上述べることはゆるされない。わたしは他の書においてすでに多くのことを述べたのであった。(三)

ところで、「兄は弟に仕えるであろう」といわれているところのことであるが、それを、ユダヤ人という年上の民が年下の民すなわちキリスト教徒に仕えるべく定められているという意味以外に受けとった者はほとんどいないであろう。この預言がイドマヤ族の民において成就されたと見られうるのである。それは兄のほう(かれはエサウおよびエドムという二つの名をもっていた。このエドムという名からしてイドマヤといわれることになった)から出ていたのであったが、それはのちに弟から出た民すなわちイスラエルの民によって打ち負かされ、これに服属することになるからである。しかしながら、「そのうちの一つは他の民よりもつよく、兄は弟に仕えるであろう」というこの預言的言明は、何かもっと重要な意味を伝える意図があったと考えるのがより適切であろう。そしてこれは、ユダヤ人とキリスト教徒において明らかに成就されているところのことでないなら何であろうか。

(一) 「創世記」二五の二三。

(二) 「ローマ人への手紙」九の一一以下。

(三)　アウグスティヌス『原罪について』三六の三一参照。

第三十六章

イサクにも与えられた神のお告げと祝福

イサクもまた、かれの父が幾度か受けたようなお告げを取り受ったのであった。それについてつぎのように記されている。「アブラハムのときにおこった初めの飢饉とは別に、その地方に飢饉がおこった。そこでイサクはゲラルにいるペリシテ人の王アビメレクのところへ行った。そのとき主がかれに現れていった。『エジプトに下ってはならない。わたしがあなたに示す地に住みなさい。そしてその地に定着しなさい。そうすればわたしはあなたとともにいて祝福しよう。

というのは、わたしはあなたとあなたの子孫とにこの国をことごとく与えて、あなたの父アブラハムに誓ったわたしの誓いを果たそうとしているからである。わたしはあなたの子孫を天の星のように増やし、子孫にこの地のすべてを与えよう。地上のすべての民はあなたの子孫によって祝福されるであろう。なぜなら、あなたの父アブラハムがわたしの声に従い、わたしのさとし、わたしの命令、わたしの定め、わたしの律法をまもったからである(一)』」。

この族長は他の妻も内妻ももたなかったが、一度の交わりから生れた双児の子孫で甘んじて

いた。たしかにかれ自身も、異国人のあいだに住んでいたとき、自分の妻の美しさからおこる危険を恐れていたのであった。かれはかの女のことを自分の妹とよび、かの女が自分の妻であることを隠して自分の父と同じことをおこなったのであった(三)。じっさい、かの女は父方と母方とのいずれの血縁においてもかれにひじょうに近い関係にあったのである。けれども、かの女もかれの妻であることが知られて、異国人の手によって汚されずにすんだのであった。にもかかわらず、わたしたちは、かれがその一人の妻以外にはどんな女性とも関係をもたなかったという理由で、かれを父親よりも優位におくべきではないのである。じっさい、かれの父親の信仰と従順の功績は、かれ自身のそれよりもすぐれていたことに疑いの余地はない。それは、神がイサクに与えられる善きものは、かれの父親のゆえになされるのであると神がいわれるほどであった。

「地上のすべての民はあなたの子孫によって祝福されるであろう。なぜなら、あなたの父アブラハムがわたしの声に従い、わたしのさとし、わたしの命令、わたしの定め、わたしの律法をまもったからである」といわれている。そしてさらに神は別のお告げによって、「わたしはあなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしはあなたとともにいてあなたを祝福し、あなたの父アブラハムのゆえにあなたの子孫を増すであろう(三)」といわれるのである。そこからしてわたしたちは、自分自身の粗悪さを弁護してくれる根拠を恥知らずにも聖なる書のなかに見出そうとする人びとにとっては情欲によっておこなったと見られるようなことがらにおいてもアブラハムはいかに純潔に振舞ったか、ということを理解するのである。さらに、

わたしたちは、人間はたがいのあいだで特定の善にもとづいて比較すべきではなく、各人の全体を考量しなければならないということを学びうるであろう。

というのは、ある人がその生活と習慣とにおいて他の人に優るところの何らかの性質をもっており、そしてその美点が、他の人よりも劣るゆえんとなっているところの他の何らかの性質よりもはるかにまさっているということがおこりうるからである。このような健全で真実なる判断によって、節制ということが結婚ということよりもまさっているとされるときでも、すくなくとも結婚しつつも神への信仰をもつ人は、信仰をもたずして節欲している人よりもまさっているのである。じっさい、不信仰な人はより少なく賞賛されるべきである。それだけではない。その人はきわめて忌むべき人である。どちらも善き人であるとしよう。そのようなときでも、結婚していながらまったく信仰厚くまったく神に従順な人のほうが、節欲していながらも信仰なく従順でない人よりもよりすぐれているのである。しかし、もしも他のことが等しくあるなら、結婚している人よりも節欲している人のほうを上位におくことをだれが躊躇するであろうか。

(一)「創世記」二六の一―五。
(二) 同上、一二の一一―一三参照。
(三) 同上、二六の二四。

第三十七章

エサウとヤコブにおける秘義について

イサクの二人の息子エサウとヤコブはこうして一緒に成長した。年上のほうの首位性は、かれらのあいだでの協定と合意の結果、年下のほうに移されることになったのであった。兄のほうが、弟が自分の食べ物のために用意していたレンズ豆を異常な仕方で欲し、誓いを立てて代価として弟に長子の特権を売ったからである。(一) ここにおいてわたしたちは、食べることにかんして人が非難されるのは、食べ物の種類ではなく、節度のない貪欲であるということを学ぶのである。イサクは年老いて、老化によって自分の視力を失っていった。かれは年長の息子を祝福しようとして、毛深い人であったその息子の代りに、知らずに年下の息子のほうを祝福するのである。弟は他人の罪を担うかのごとくに子やぎの皮を身につけて父の手の下に自分を置いたのである。

ヤコブのこのような術策が偽瞞めいた欺きであると見なされることのなきよう、また、その偉大な秘義の意味を求めるのに失敗することのなきよう、聖書はあらかじめ「エサウは巧みな狩人となり野の人であったが、他方ヤコブは穏やかな人で天幕に住んでいた」(二) と述べているのである。ところで、わたしたちのうちのある人はこれ(「穏やかな」という訳)の代りに「術策のない」と訳したのであった。しかし、「術策のない」とするか「穏やかな」とするか、ある

いはむしろ「見せかけのない」とするか、いずれであっても、そしてこれはギリシア語では「アプラストス」(三)なのであるが、祝福を得るに際して術策のない人の術策とは何であろうか。穏やかな人によって示された術策とはどういう術策なのであろうか。偽りをいわない人による見せかけとは、それが深遠な真理の秘義でなければどういう見せかけであろうか。その祝福とはどのような性質のものなのであるか。

「見よ」とイサクはいってつぎのようにつづけられている。「わが子のかおりは主が祝福なさった野のかおりのようだ。どうか神が、天の露と地の肥えたところと多くの穀物と新しいぶどう酒とをあなたに与えてくださるように。すべての民があなたに仕え、諸々の民があなたの前に身を屈めるように。あなたの母の子らがあなたの前に身を屈めるように。あなたを呪う者は呪われ、あなたを祝福する者は祝福されるように(四)」。したがって、ヤコブの祝福はすべての民におけるキリストの予告である。このことがおこり、このことが実際にすすめられる。イサクは律法であり、預言である。ユダヤ人たちの口をとおしてさえ、キリストは祝福を受けられるのであって、それはあたかも律法と預言そのものが知られていないがゆえにキリストのなされることを知らない人によって祝福されるごときものである。キリストの御名の香気によって野のように世界は充たされるのである。天の露すなわち神の御言葉という雨からの祝福はかれのものである。土の豊かさすなわち諸々の民の集まりからの祝福もかれのものである。穀物とぶどう酒すなわちかれのからだと血の秘跡において集めるところの大勢の人びともかれのものである。諸々の民が仕え、王たちが敬慕するのはキリストである。かれの民がユダヤ人たちを

の子らすなわち信仰によるアブラハムの子であるからである。かれを呪う者は呪われ、かれを祝福する者は祝福される。

わたしはいうが、わたしたちのキリストはユダヤ人たちの口――それは誤っている者らのものであるけれども、すくなくとも律法と預言とをうたう者らの口である――によって祝福されているのである。すなわち真実な仕方で語られるのである。そして、誤りのうちにいる者たちによって待望されているところの別の人が祝福されていると見なされているのである。見るがよい、イサクは兄が約束された祝福を求めたとき、びっくりして、かれが自分の代りに別の者を祝福してしまったことを知るのである。かれはおどろき、この別の者はだれであるかと尋ねるのである。けれども自分が欺かれたことを嘆かない。かえって、大いなる秘義がその心の深みのうちにただちに明らかに示されたので、かれは憤りを抑え、その祝福を確認するのである。

「それでは、わたしのために獲物をとって持ってきた者はだれか。わたしはあなたがくる前にそれをみんな食べて祝福した。だからかれが祝福されるであろう(五)」。もしもすべてこれらのことが、上からの霊感によっておこるのでなく、地上の慣例のとおりにおこるのなら、きっと、このようなことに憤った人間の呪いを予想しない人はいないであろう。じつにこれらはじっさいにおこった出来事であるが、預言的な出来事なのである。地上での出来事であるが、天からのものである。人間の行為であるが、神の業なのである。

このような重要な秘義に充満しているひとつひとつのことがらが厳密にしらべられるとすれ

ば、多くの巻を埋めつくすことになるであろう。しかし、この書には、それを適度な量に保つよう限界が付せられている。したがって、急いで他のことがらへ赴かねばならない。

(一)「創世記」二五の二九―三四参照。
(二) 同上、二五の二七。
(三) ἄπλαστος.
(四)「創世記」二七の二七以下。
(五) 同上、二七の三三。

第三十八章

ヤコブの見た夢について

さて、ヤコブは両親によってメソポタミアへ送り出されたのであった。それはその地で妻を娶るためであった。かれの父はかれを見送るときにいった。「あなたはカナン人の娘をあなたの妻に娶ってはならない。さあ、メソポタミアへ発ち、あなたの母の父ベトエルの家に行ってあなたの母の兄ラバンの娘の一人を妻に娶りなさい。わたしの神があなたを祝福し、多くの子孫を得させ増やして多くの民となし、また、あなたの父祖アブラハムの祝福をあなたと子孫とに与えてくださるであろう。神がアブラハムにお与えになったところの、あなたが寄留してい

る地をあなたが継ぐことができるように(二)」。

わたしたちはここですでに、ヤコブの子孫がイサクのもう一つの子孫すなわちエサウから出る子孫からは分けられているのを理解するのである。すなわち、「あなたの子孫といわれる者たちはイサクによって生れるからである(三)」といわれたのは、たしかに神の国に属する子孫たちのことであるが、かれらから、アブラハムの他の子孫すなわち女奴隷の子による子孫およびのちにケトラの息子によって出るべき子孫たちとは区別されているのである。しかし、イサクの双児の息子についてはまだ不明な点が残っていたのであった。すなわち、祝福がかれら二人のものであったのか、それともそのうちの一人のものであったのか、そしてその一人のものであったのなら、かれらのうちのいったいどちらのものであったのか、という点である。このことはいまや、ヤコブが父によって預言的に「あなたを多くの民となし、そして神があなたの父祖アブラハムの祝福をあなたに与えてくださるであろう」ということばをもって祝福されたときに明らかになったのであった。

ヤコブはメソポタミアへ向かう途中で、眠っているときにお告げを受け取ったのであった。それについてはつぎのように記されている。「さて、ヤコブは契約の井戸をあとにしハランに向かった。あるところに着いたが、日がくれたのでそこに夜をすごすことにした。かれはそこにあった石を一つ取ってまくらとし、そこに寝たのであったが、そのときかれは夢を見た。一つの梯子が地に立っていて、その頂きは天にまで達し、神の御使いたちがそれを上り下りしているのを見た。すると主がそこに立っていわれた。『わたしはあなたの父アブラハムの神、イ

サクの神である。恐れてはならない。あなたが伏している地をあなたとあなたの子孫たちに与えよう。あなたの子孫は地のちりのように増えて、海をこえて南へ、また北と東へ拡がるであろう。地のすべての種属はあなたとあなたの子孫とによって祝福されるであろう。わたしはあなたと共にいて、あなたがどこへ行こうともその道のどこにあってもあなたをまもり、この地に連れもどすであろう。なぜなら、わたしはあなたをすてず、わたしが語ったことをすべて果たすまではあなたを見すてるようなことはしないからである』。

ヤコブは眠りからさめていった。『まことに主がここにおられるのに、わたしは知らなかった』。そしてかれは恐れていった。『これは何という恐るべきところだろう。ここは神の家にほかならず、これは天の門だ』。ヤコブはおきあがり、まくらとしていた石をとり、それを立てて記念柱とし、その頂きに油を注いだのであった。ヤコブはその場所を神の家という名でよんだ[三]」。——以上のことは預言に関連しているものである。ヤコブが石に油を注いだのは、その石をあたかも神となすのであるかのように偶像礼拝的な流儀によったのではなかった。かれはその石を礼拝したわけでもなければ、それに犠牲をささげたわけでもなかった。キリストという名は「クリスマ[四]」すなわち「油を注ぐこと」からきているからであって、たしかにここでは偉大な秘義に関連したところのあることがらが象徴的におこなわれているのである。

けれども、その梯子については救い主ご自身が福音書のなかでわたしたちに想いおこさせておられるのをわたしたちは知っている。そこの箇所では、ナタナエルについて「見よ、あの人こそほんとうのイスラエル人である。かれには偽りがない」(なぜなら、その幻を見たのはイス

ラエル、すなわちヤコブであったからである）といわれ、そしてその同じ箇所で「よくよくいっておく。天が開かれて神の御使いたちが人の子の上にのぼりくだりするのをあなたがたは見るであろう」(五)といわれているからである。

そこでヤコブはメソポタミアへ進んで行ったのであった。その地で妻を娶るためであった。かれはそこで四人の女性を得たのであったが、聖書が示すところによれば、かれはそれらの女性のだれにも不正な仕方で情欲を抱いたのでもなく、かの女たちから十二人の息子と一人の娘を得たのであった。かれははじめに一人の女性を娶るために来たのであるが、その女性の代りに他の女性がすりかえられてかれに与えられたとき、かれはそれと知らずに夜の交わりをおこなったのであるが、かの女をもてあそんだかのように見られることがないように、その女をしりぞけはしなかった。そして、その時代にあっては、子孫の増大を確保するために複数の妻をもつことを法律は禁じていなかったので、すでに未来の結婚の誓いをおこなっていたかの一人の女性をも娶ったのであった。

その女性が不妊であることがわかったとき、かの女は自分の子どもを得るために下女を夫に差し出した。その姉も、子どもを生んでいたけれどもそれと同じことをおこなったのである。というのは、かの女は子孫を増やすことを願望したからであった。わたしたちの読むところでは、ヤコブはただ一人の女性のほか、他のだれをも求めたわけでなく、また複数の女性と交わったのは子孫を増やすことのみを意図したものであった。かれは婚姻の法をまもったのであって、自分の夫のからだを正当に自由にしうる権利をもつところのその妻たちがそれをなすこと

を求めなかったならばそれをしなかったことであろう。(六) このようにして、かれは四人の女性たちから十二人の息子と一人の娘を得たのであった。そののち、その息子ヨセフのおかげでエジプトへ移ったのであるが、(七) このヨセフは、かれを羨んだ兄たちによって売られて、その地へ連れて行かれ、そこにおいて高められたのであった。

(一)「創世記」二八の一以下。
(二) 同上、二一の一二。
(三) 同上、二八の一〇以下。
(四) chrisma.
(五)「ヨハネによる福音書」一の四七、五一。
(六)「コリント人への第一の手紙」七の四参照。
(七)「創世記」四六の一以下参照。

第三十九章

イスラエルと訳されるヤコブの名前について

さて、わたしがすこし前に述べたように、ヤコブはイスラエルともよばれたのであった。これは一般にかれから出た民によって保持された名であった。この名は、かれがメソポタミアか

ら帰る途中でかれと組み打ちをした天使によってかれに与えられたのであった。この天使は明らかにキリストのある姿をあらわしているのである。というのは、ヤコブがその天使を打ち負かしたという事実は(もちろん天使はその秘義を象徴せんとして敗北者であることをいとわなかったのである)、キリストの受難をあらわしているのだからである。そこではユダヤ人はキリストにまさったように見えたのである。にもかかわらず、ヤコブはかれが打ち負かしたその同じ天使から祝福を得たのであった。かくして命名が祝福となったわけである。

ところで、「イスラエル」は「神を直視する」(一)という意味に訳されるのであるが、それはこの世の終わりにおけるすべての聖徒たちの報いとなるであろう。さらに天使はまた、勝利者のごとくに見えたその者の大腿のつがいの広い部分に触れたので、かれはびっこを引くことになったのであった。したがって、同じ一人の人間ヤコブが、同時に祝福された者でありかつびっこを引かされたのである。――この同じ民から出て、キリストを信ずる者においては祝福され、不信仰な者たちにおいてはびっこを引く者とされたのであった。また、大腿のつがいの広い部分は種族の多数の者たちなのである。じっさい、その血統の多数の者たちにかんしては、「かれらはその道からはずれてびっこを引いた」(二)と預言的にいわれているのである。

(一) videns Deum.

(二) 「詩篇」一八の四五(七十人訳)。

第四十章

ヤコブが七十五人の人びとと共にエジプトに入ったと述べられていることについて

このようにして、七十五人の人びとが――ヤコブとその子どもたちも数のうちに入れて――ヤコブ自身と共にエジプトに入ったと語られている。(一) この数のなかには女性は二人だけがあげられており、一人は娘、他の一人は孫娘である。しかし、ことがらを仔細に考察するなら、ヤコブがエジプトに入った日または年に、ヤコブの子孫がそれだけの数に達していたということを示しているわけではない。じっさい、ヨセフの曾孫たちまでも数のうちにあげられているのであり、そして、ヤコブがそのとき百三十歳、その息子ヨセフが三十九歳であったということを見るなら、(二) あの曾孫たちがそのときに存在していたという可能性はないのである。ヨセフが妻を娶ったのが三十歳あるいはそれよりあとのことであったのは確定しているのであるから、かれがその妻をとおして得たところのその息子から、九年間のうちに、どうして曾孫をもつことなどできたであろうか。

ヨセフの息子エフライムおよびマナセは息子をもってはいなかったのであって、ヤコブがエジプトに入ったときにはこの息子たちは九歳にも満たない子どもであったのであるから、あのときヤコブと共にエジプトに入った七十五人のうちに、どうしてかれらの息子たちのみならずその孫たちまで数え入れられるのであろうか。じっさい、そこでは、マナセの息子でヨセフの

孫であるマキル、およびマキルの息子ギレアデすなわちマナセの孫でヨセフの曾孫たる者があげられているのである。ヨセフのもうひとりの息子エフライムの息子すなわちヨセフの孫であるシュタラとこのシュタラの息子エデム——かれはエフライムの孫でヨセフの曾孫である——も含まれている。ヤコブがエジプトに来てヨセフの息子たちすなわち自分の孫であってヤコブを祖父とする者たちが、まだ九歳にも満たない少年であるのを見たときに、あの曾孫たちが存在していたとはどうしても考えられない。

ヤコブのエジプトへの移入は聖書において七十五人の道連れのうちにかれをも含めて記されているのであるが、これはもちろん一日や一年のことではない。その移入を導いたヨセフの生涯の全期間を含むものである。すなわち、同じ聖書はヨセフ自身についてつぎのように語っている。「こうしてヨセフはその兄弟たちおよびかれの父親のすべての同居者と共にエジプトに住んだ。ヨセフは百十年生きながらえた。ヨセフはエフライムの子孫を三代にわたって見た[三]」。

エフライムから第三番目の世代はヨセフの曾孫にあたる。この第三番目の世代とは、疑いもなく、息子、孫、そして曾孫を意味している。次いで「マナセの子マキルの子らも生れてヨセフのひざの上に置かれた」とつづけられている。ここでいわれているのはマナセの孫、ヨセフの曾孫のことである。ただし、複数形でいわれているのは、ちょうどヤコブのただ一人の娘が「娘たち」といわれたように、聖書の慣用的な語法である。ラテン語の慣用では、一人の子どもしかいないばあいであっても「子どもたち」といわれるのと同様である。

それゆえ、ヨセフが自分の曾孫を見ることができたという理由で、かれの幸福がたたえられ

ているのではあるが、しかし、かれの父ヤコブがエジプトのかれのもとに来たときに、この曾孫たちが曾祖父にあたるヨセフの三十九歳のときにすでに存在していたとけっして考えてはならない。これはこの事実について注意深く見ない人びとによって見逃される点である。というのも、聖書が「これらがその父ヤコブと一緒にエジプトに入ったイスラエルの子らの名である」[四]といっているからである。じっさい、このように述べられているのは、ヤコブも含めて七十五人が数えられるというのは、ヤコブがエジプトに入ったときにそれらの者のすべてが一緒にいたからでなく、わたしが述べたように、この移入が、それを導いたと見られているヨセフ自身の生涯の全期間にわたっているものと考えられるからである。

(一)「創世記」四六の二六参照。
(二)同上、四七の九参照。
(三)同上、五〇の二二、二三。
(四)同上、四六の八。

第四十一章

ヤコブによってその息子ユダに与えられた祝福について

したがって、キリスト者の民──その民のうちに神の国はこの世にあっては巡礼の旅を歩ん

でいるのである――のために、もしもわたしたちがキリストの肉をアブラハムの後裔のうちに求めるなら、内妻たちの子どもらは除かれ、イサクが現れることになる。もしもイサクの後裔のうちに求めるなら、エドムともよばれるエサウは除かれ、イスラエルともよばれるヤコブが現れることになる。もしもイスラエル自身の後裔に求めるなら、他の者は除かれ、ユダが現れることになる。なぜなら、キリストはユダの種属から生れられたからである。このことからして、わたしたちは、イスラエルがその死のすこしまえにエジプトにおいて息子たちを祝福したとき、ユダに与えたところの預言的な祝福に耳を傾けねばならない。「ユダよ」とかれはいう。「あなたの兄弟たちはあなたをほめたたえるであろう。あなたの手は敵の背に置かれるであろう。あなたの父の子らはあなたの前に身を屈めるであろう。ユダは若ししである。あなたは若枝から立ちあがった。あなたはししのように、また若ししのように横たわり、眠った。だれがかれを起こすであろうか。かれのためにとっておかれたことがやってくるまでは、ヤコブから王の出ないことはなく、また、かれの大腿から指導者の出ないことはない。かれ自身が民の待望なのである。かれは自分のろばの子をぶどうの木につなぎ、自分の雌ろばの子を良きぶどうの木につなぐ。かれはその衣服をぶどう酒で洗い、その着物をぶどうの血で洗うであろう。かれの目はぶどう酒で赤く、その歯は乳よりも白い(二)」。

わたしはこれらのことをマニ教徒ファウストゥスに反論して説明したのであった。それによって十分にこの預言の意味が明らかになると考えている。ここではキリストの死が眠りということばで予告されているのである。また、ししという名でもって、かれの死において、必然で

はなく、力が予告されているのである。かれ自身、この力について福音書のなかで強調して語っておられるのである。「わたしはわたしの生命を捨てる力をもっている。そしてふたたびそれを得る力をもっている。だれもそれをわたしから取り去ることはない。しかし、わたしは自分からそれを捨てる。そしてふたたびそれを得る[二]」。このようにししは吠え、そのようにかれは語ったことを成就したのであった。

かれの復活についてさらに「だれがかれを起こすであろうか」といわれているところのことは、この力に関連するものである。これは、かれ自身のほかにだれもそれをなす者はいないということである。なぜなら、かれは自分のからだについて、「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちにそれを起こすであろう[三]」といわれたからである。ところで、かれの死の様態、すなわち十字架にあげられるということは、「あなたは立ちあがった」といわれているその一語によって解されるであろう。それにつづく「かれは横たわり、眠った」といわれているところのことは、福音史家が「かれは首をたれて息を引きとられた[四]」と説明しているのである。あるいは、そうでなければ、すくなくともこれはかれの埋葬に関連している。かれは墓に横たえられ、そして眠ったのだからである。預言者がある人びとを起こしたり、あるいはかれ自身が他の人びとを起こしたりしたようには、だれもかれをそこから起こさなかった。かれは眠りからさめるように墓から自分で起きたのであった。

さらに、かれがぶどう酒で洗う外衣は、かれが自らの血で罪から清めることを意味している。洗礼を授けられた者はその血の秘跡を知っているのである。だからして、「その着物をぶどう

の血で」と付け加えているのである。この着物とは教会でなければ何であろうか。「かれの目はぶどう酒で赤い」というのは、かれの杯で酔った霊的な人びとのことである。その杯については『詩篇』で「わたしを酔わせるあなたの杯はいかにすぐれたものであることか(五)」とうたわれているのである。「かれの歯は乳よりも白い」というのは、使徒のいうごとく、小さい者たちが飲むところのものであって、まだ固い食物が口に合わないときに養う御言葉のことである(六)。

このようにして、ユダにたいしてなされた約束がとっておかれたのはその人(キリスト)にほかならない。これらのことが到来するまでは、その系統から王たち――イスラエルの王たち――が出ないことはけっしてなかったのであった。「かれ自身が民の待望である」というのは、何らかの説明を加えるよりも見ることによっていっそう明らかであろう。

(一) 「創世記」四九の八以下。
(二) 「ヨハネによる福音書」一〇の一八。
(三) 同上、二の一九。
(四) 同上、一九の三〇。
(五) 「詩篇」二三の五(七十人訳)。
(六) 「コリント人への第一の手紙」三の二参照。

第四十二章

ヤコブがその手を取り換えて祝福したヨセフの息子たち――エフライムとマナセ――について

わたしたちは、イサクの二人の息子たち、すなわちエサウとヤコブがユダヤ人とキリスト教徒という二つの民を象徴的に表現しているというのを見てきたのであった（ただし、肉の血統にかんしては、エサウの子孫から出ているのはユダヤ人ではなくイドマヤ人であり、ヤコブから出ているのはキリスト教徒の民ではなく、むしろユダヤ人である。じっさい、その象徴は、「年長の者が年下の者に仕えるであろう」[(一)]といわれていることにかんするかぎりで意味があるからである）。――それと同じようなことがヨセフの二人の息子のばあいにもおこっているのである。というのは、年長の者がユダヤ人をあらわし、年下の者がキリスト教徒をあらわしているからである。

ヤコブがヨセフの息子たちを祝福したとき、その右の手を左側にいた弟の上におき、左の手を右側にいた兄の上においたのであった。それはかれらの父親（ヨセフ）には重大なことのようにおもわれ、かれの誤りを正そうとし、かれらのうちのいずれが本当の年長者であったかを知らせようとした。しかし、かれの父親（ヤコブ）はその手を置き換えることをのぞまず、「わかっている。わが子よ、わたしにはわかっている。この者もまた一つの民となり、また高められ

るであろう。しかし、弟のほうがかれよりも大いなる者となり、その子孫は多くの民となるであろう[二]」といったのであった。

ここでも二つの約束が指し示されている。一方は「一つの民となり」であり、他方は「多くの民となる」のである。ここで何よりも明らかになっていることは、これら二つの約束には、イスラエルの民と全世界の民とがアブラハムの子孫のうちに含まれていて、前者は肉による子孫であり、後者は信仰による子孫である、ということであろう。

(一)「創世記」二五の二三。
(二) 同上、四八の一九。

第四十三章

モーセ、ヨシュア、判事(士師)、そして王たちの時代について

ヤコブとヨセフの死ののち、エジプトの地からの脱出までに一四四年残っていたが、その間に、この民族は多くの迫害によって疲弊させられたのであった。この迫害は、人びとのはなはだしい増加がエジプト人たちに驚きと恐れを惹きおこしたので、あるときには生れたばかりの男の子を虐殺するというほどのものであった[一]。——この時に、モーセは、神がかれをとおして偉業を計画されたので、幼児たちを殺害者らの手から救い出され、王宮へ連れて行かれたので

あった。かれはパロ（パロという名は、すべてのエジプトの王たちによって保持されていた名であった）の娘により育てられ、養子として引きとられることになったのであるが、かれは、ひじょうに偉大な人物に成長して、おどろくほどに増大した民を、その地で課せられていた苛酷で困難な奴隷の軛から解放したのであった。これはむしろ、神がかれをとおしてアブラハムに約束しておられたことをこのようにして成就なさろうとして、かれらを解放されたのであろう。

たしかにモーセははじめ、あるイスラエル人をまもろうとして一人のエジプト人を殺したとき、恐ろしくなって、その地から逃げたのであった[二]。けれども、そののち、神に遣わされて、神の霊の力のうちにあって、かれに対抗するパロの魔術者たちを打ち負かしたのであった。エジプト人たちが神の民を自由にするのをのぞまなかったので、かれのはたらきをとおして記憶すべき十の災難がエジプト人たちをおそったのである。水が血に変えられ、蛙、ぶよ、あぶ、家畜の死、雹、いなご、暗闇、初子の死、である。エジプト人たちはこれらの大きな災害によって砕かれ、ついにイスラエル人たちを自由にしたが、かれらは、逃亡する人びとを追跡していたとき、紅海で滅ぼされたのである。海は、去っていくイスラエル人たちのために分かれて道を開いたが、エジプト人たちがかれらを追ったとき、水は再びもどって、かれらを呑み込んだからである[三]。

そののち、神の民はモーセの導きのもとに四十年間、沙漠のなかを進んで行った。この間、来たるべき出来事を予告するいけにえをもって神が礼拝される場所に「証しの幕屋[四]」という名が与えられた。すなわち、すでに律法がおそるべき仕方で山上で与えられていたのであって、

神性が不思議なしるしと声とによってこの上もなく明白に示されていたのである。このことは、エジプトを出てのちまもなくおこったのであって、この民が沙漠に生きはじめたときのことである。それは羊のいけにえによって祝われた過越しの祭ののち五十日目である。この民は、まさしくキリストの象徴であって、受難によってささげられた犠牲をとおしてかれがこの世から御父のもとへ移って行かれること(事実、「過越し」はヘブライ語では「通過する」を意味する)を予示するものであって、新しい契約が啓示されたとき、わたしたちの過越しの羊であるキリストが犠牲にささげられてのち五十日目に天から聖霊がくだってくるのである。(五)この聖霊は福音書では「神の指」とよばれているが、(六)それはあの原初的な象徴の記憶をわたしたちの心によびおこすためである。律法の板も神の指によって記されたといわれているからである。(七)

モーセの死ののち、ヌンの子ヨシュアが民を導き、約束の地へ引き入れ、その地を民に分けたのであった。この二人の感嘆すべき指導者たちによって戦いもおどろくべき成功をもって遂行された。しかし、神の証言によれば、それらの勝利がかれらにもたらされたのは、ヘブライ人の民の功績のゆえでなく、かれらが破った諸々の民の罪のゆえであった。この二人の者たちのあとに多くの士師たちが出た。民はすでに約束の地に住んでいたので、アブラハムにたいする最初の約束は、この間に成就されはじめていたのであるが、それはヘブライ民族という一つの民とカナンの地にかんするかぎりであって、すべての国民と全世界にかんする約束はまだであった。これは、キリストの肉における到来によって成就さるべきものであった。そして、旧い律法の遵守によるものではなく、福音の信仰によるものであった。

このことが予徴的にあらわされているのは、民を約束の地へ導き入れたのは、シナイ山上でその民のために律法を受け取ったモーセではなく、神の命令で名を変えてヨシュアとよばれねばならなかったそのヨシュアであったという事実である。[八] 判事（師士）の時期には、民の罪と神の憐れみにしたがって、戦さの幸と不幸とが交互に入れかわった。

このあとに王たちの時期が到来した。サウルがその最初の者として統治したのであった。かれは（神によって）排除され、戦いに敗れてその系列はしりぞけられて、そこからは王が出ないようになったとき、ダビデが王位を継承したのであった。キリストはとくに「ダビデの子」といわれるのである。ダビデにおいて、ある新しい時代のはじまりが刻まれ、ある意味で神の民の成年の出発がなされたのであった。この民のいわば思春期とでもいうべきものは、アブラハムからダビデに至るまでに導かれたのであった。福音書記者マタイがその諸世代をこのような仕方でとくに記しているのも理由のないことではないのであって、かれは、アブラハムからダビデまでの十四世代をこの第一の段階として特筆しているのである。[九]

たしかに人間が子どもを生むことができるのは思春期になってからである。それゆえに、諸世代の系譜がアブラハムをもってはじめられるわけである。かれはまた、新しい名前を受けとったとき、「諸々の民の父祖」として立てられたのであった。[一〇] これ以前には、ノアからこのアブラハムに至るまでの神の民のこの種族は、いわば少年期であった。それゆえ、この少年期は一つの言語、すなわちヘブライ語が得られたのであった。じっさい、人間が話しはじめるのは幼年期を去ってからである。幼年期には、話す力をもたないゆえにそのようにいわれるのであ

る。幼年期のこの最初の年代は、人類の最初の年代が洪水によって消し去られたように、忘却のうちに沈められてしまうのである。たしかに、幼年期について何らかの記憶をもつ人がどれほどあるであろうか。

さて、このようにして、さきの巻が神の国の進展における一つの、そして最初の時代を包含するものであり、この巻は第二と第三の時代を包含するものである。この第三の時代には、三歳の雌牛、三歳の山羊、三歳の羊によって象徴されているように、律法の軛が課せられ、罪ある者たちが多く出て、この世の王国のはじめが現れたのであった。けれども、同時にそこでは、山鳩や家鳩によってその秘義が象徴的に示されているところの霊的な人びとも欠けていたわけではなかったのである。

(一)「出エジプト記」一の一以下。
(二) 同上、二の一—一五参照。
(三) 同上、第七—第一二章、および第一四章。
(四) tabernaculum testimonii,(「出エジプト記」三八の二一)。
(五)「コリント人への第一の手紙」五の七参照。
(六)「ルカによる福音書」一一の二〇。
(七)「出エジプト記」三一の一八参照。
(八)「民数記」一三の一六。イエスという名はヘブライ語のヨシュアと同義のギリシア語である。
(九)「マタイによる福音書」一の一七参照。
(一〇)「創世記」一七の五。

第十七巻

第一章

預言者たちの時代について

わたしたちは、イスラエルの民が肉にしたがってはアブラハムの子孫から由来し、そして信仰においてはすべての民がかれから出たのであって、このことはアブラハムにたいしてなされた神の約束によるのであること、を学んだのであった。神の国の歴史は、それが進行していく諸時代を経ることにより、その約束がどのように成就されるか、示すことであろう。わたしのさきの巻は、ダビデの統治までなされたのであるから、いまやわたしたちは、わたしたちの引き受けたこの仕事にとって十分とおもわれるかぎりで、かれの統治に続くところの他のことがらを扱っていくことになるのである。したがって、つぎの時代は、聖サムエルが預言をはじめたそのときから、イスラエルの民が捕囚となってバビロンに移され、ついで、七十年のちにイスラエル人たちが帰還して神の家が回復されて聖エレミヤの預言が成就されるまでである。(一) こ

の全期間は預言者たちの時代である。

もちろん、全地が洪水によって滅ぼされた時代に生きた族長ノア自身にたいしても、また、かれ以前、かれ以後の、神の民のうちに王たちが存在しはじめた時代に至るまでの他の人びとにたいしても、預言者という名称を与えることは不当でない。かれらをとおして神の国と天の王国とに関連する未来の出来事が、何らかの仕方で象徴的に示されたり、予告されたりしたのだからである。これは、たとえばアブラハムやモーセなど、そのような人びとについては正当であって、[二]わたしたちはこの名称が与えられたのをはっきりと読んでいる。――それにもかかわらず、「預言者の時代」というのは、主として、そしてとくに、サムエルが預言的な活動をはじめた時代に与えられる。かれは神の命ずるところによってはじめにサウルに、そしてサウルが排斥されてからダビデ自身に王位につけるために油を注いだのであって、[三]このダビデの家系から他の王たちが、そのように王位の継承がゆるされるまでのあいだ、受け継がれて行ったのであった。

したがって、神の国が、それを構成する者たちが死んで立ち去ったり誕生して引き継いだりしながら、この時代を通じて進んでいくあいだに、預言者たちによっておこなわれたキリストについての予告のすべてを記そうとすれば、際限のないものに広がってしまうことであろう。それというのは、聖書の記事そのものは、まずはじめに王たちとその事績およびその治世の出来事について順序立てて記していながら、歴史的な勤勉さをもって過去におこったことを物語ろうとして専念しているように見えるのであるが、神の霊の助けのもとにその記事の注意深い

考察をおこなうなら、それはむしろ——あるいはすくなくとも同じ程度で——未来のことを予示しようとしていることが知られるからである(このことを厳密に探求したり議論によって証明しようとすることがいかに骨のおれる仕事であるか、また、いかに面倒な仕事であるか、そしてどれほど多くの巻を必要とするか、これらのことをいくらかでも考える者ならわからないはずはないであろう)。

さらに、預言的なことがらに属しているということが疑えないところのものがあって、それらは多く、キリストと天の王国——すなわち神の国——にかんするものであるので、これを明らかにするためには、この書の限度が要求するより以上の議論を必要とするであろう。それゆえ、わたしはできるだけ自分の筆に節度を課して、神の御意志により、この書を完成させていくため、余計なことを語らぬようにし、また、必要なことは何も見落すことのないようにしなければならないと考える。

(一)「エレミヤ書」二五の一一参照。
(二)「創世記」二〇の七、「申命記」三四の一〇参照。
(三)「サムエル記上」一六の一三参照。

第二章

カナンの地についての神の約束の成就について

前巻においてわたしは、二つのことがはじめからアブラハムにたいして神によって約束されていたと述べたのであった。ひとつは、かれの子孫がカナンの地を所有するであろうということであった(これは「わたしがあなたに示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる民としよう」[一]ということばで示されている)。いまひとつは、それ以上に重要であるが、その肉の子孫についてではなく、霊の子孫についてであって、その子孫をとおしてかれはイスラエルという一つの民の父であるだけでなく、その信仰の足跡にしたがうところのすべての民の父となるというものである。この約束は、「あなたにおいて地のすべての種族は祝福されるであろう」[二]ということばではじまっている。わたしは、これらの約束がそれ以後もつづいてくり返されてきたことをひじょうに多くの証言によって示したのであった。

こういうわけで、肉に即してのアブラハムの子孫たちすなわちイスラエルの民はすでに約束の地にあり、そして、かれらに敵対する者たちの諸都市を確保、所有することによってのみでなく、王を持つことによってもまた、その地に支配を確立しはじめていたのであった。このように、この民についての神の約束はすでにかなりの程度に成就されていたのであって、それは

三人の種族の父祖、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブにたいしてなされたものや、かれらの時代になされた他のもののみならず、モーセをとおしてその時代に与えられたものを含んでいる。かれによって同じ民はエジプトにおける奴隷の状態から解放され、かれが民を沙漠を通って導いていたときに、かれをとおしてすべての過去の出来事は明らかに示されたのであった。

しかしながら、カナンの地にかんする神の約束は、〔三〕民を約束の地に導いたすぐれた指導者ヨシュアによって成就されたわけではなかったのである。かれはその地の種族を攻略して取り払い、神が命じられたようにその地方を十二の部族に分け、そして死んだのであった。約束は、かれの死ののちにつづいた師士たちの全時代にあっても成就されなかった。というのは、カナンの地について告げられた約束は、エジプトのひとつの川から大河エウフラテスにまで広がるものであったからである。しかし、これはもう遠い未来の預言であったのではなく、すぐに成就されることが期待されていたのである。その成就は、ダビデとその息子ソロモンによって到来したのであった。かれらの統治は約束のなかで触れられていた全地域にわたるものであった。じっさい、かれらはすべての民を征服し、貢を義務づけたのであった。〔四〕

したがって、このようにこれらの王のもとにアブラハムの子孫は肉的な意味における約束の地すなわちカナンの地に定着したのであって、地上の領土にかんする神のあの約束は成就されてもはや何も残っていないことになったのである。ただし、ヘブライの民族は、そのこの世的な繁栄にかんするかぎり、かれらの主である神の掟に従順であるならば、その子孫の継承を通じてその同じ地に揺らぐことなく安定して留まるであろうという条件を除いてである。けれど

も、神は、この民が掟に従順ではないであろうことを知っておられたゆえに、民のうちの少数の敬虔な者たちにはその練達のために、また、のちにすべての民のうちに出てくるであろうところの敬虔な者たちにはその警告のために、この世の罰をも用いられたのである。キリストの受肉によるところの新しい契約を啓示されることによって、その敬虔な者たちにおいて別の約束を成就しようとされたのであって、その人びとに警告が与えられるのは必要なことなのであった。

(一)「創世記」一二の一。
(二)同上、一二の三。
(三)同上、一五の一八。
(四)「列王紀上」四の二一参照。

第三章

預言の三様の意味について

それゆえに、アブラハム、イサク、ヤコブに与えられた神のお告げ、および、さきに聖なる諸書のうちに見出された他の預言的なしるしやことばと同様、王たちのこの時代からの他の諸々の預言も、部分的には肉的にアブラハムから出た民に関係しているが、また部分的には永遠

の生と天の王国とを所有するために新しい契約をとおしてキリストの共同相続人としてすべての民が祝福されることになったところのアブラハムのあの子孫（信仰による民）に関係しているのである。つまり、この諸々の預言は、部分的には奴隷となるべき者を生んだ仕え女すなわち地上のエルサレム――それは自分の子らと共に仕えるのである――に関係しているが、また部分的には神の自由な国すなわちこの世にあって巡礼の旅を歩みながら神にしたがって生きる人びとをその息子とするところの天にある真実にして永遠なるエルサレムに関係しているのである。しかし、諸々の預言のなかには、両方に関係すると解されるもの、すなわち文字通りには女奴隷に、そして象徴的には自由女に関係するものがある。（一）

したがって、もしもあるものが地上のエルサレムに、他のものは天上のエルサレムに、そしてまたあるものは両方に関係しているとすれば、預言者たちの言辞は三様であることが知られるであろう。いまわたしのいっているところのことを例によって証明すべきであろう。預言者ナタンはダビデ王の重い罪を告発し、その罪に伴っていずれわざわいがやってくることを予告するために遣わされたのであった。（二）この預言や同じような仕方で予告される他のものは、民の福利と有益のために公けになされたものであれ、あるいは、自分自身のためにこの世の生にとって益となるような未来のことについての何ごとかを知らせてくれる神的なことばを獲得するため個人的になされたものであれ、いずれもこの世の国に関係したものであることをだれが疑うであろうか。

しかし、つぎのように読まれるのである。「主はいわれる、見よ、わたしがイスラエルの家

とユダの家とに新しい契約を立てる日がくるであろう。この契約はわたしがかれらの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。というのは、かれらはわたしの契約をまもらず、わたしはかれらをすてたからであると主はいわれる。しかし、それらの日ののちに、わたしがイスラエルの家のために立てる契約はこれである。すなわち、わたしはわたしの律法をかれらの心のうちにおき、その心に記し、そしてわたしはかれらを見るであろう。わたしはかれらの神となり、かれらはわたしの民となるであろう[三]」。

これは疑いもなく上なるエルサレムについての預言であり、その報いは神御自身である。そこにおいては、神を所有し、神のものであるということが、最高の善であり、完き善である。しかし、エルサレムが神の国とよばれるというこの事実は両方に関係している。その国においては、来たるべき神の家が預言されているが、その預言はまた、ソロモン王がかの有名な神殿を建てたときに成就したようにおもわれるのである[四]。すなわち、これらのことは、歴史にしたがえばこの世のエルサレムにおこったことであっただけではなく、天上のエルサレムの象徴でもあったからである。両方のいわば合成と混合とが存するこの種の預言は、歴史的におこったことがらの物語りを含む古い正典の諸書においてはもっとも重要であって、聖なる書を研究する者たちの知力をたえず働かせてきたし、またいまもそうであって、したがって、わたしたちが、アブラハムの肉による子孫において歴史史実的に預言と成就とを読むときには、信仰によるアブラハムのこの子孫において成就されるべきことの比喩的な意味をも問い求めるのである。そこで、ある人は、これらの書物には、預言されかつ実行されたこと、あるいは預言なしに実

行されたことはすべて、象徴的な仕方によって上なる神の国とこの世にあって旅をつづけるその国の子らたちに関係をもっていると考えたほどであった。

しかし、このような考え方によるなら、預言者たちの言明はただ二つの種類だけであって、三つの種類ではないということになる。――あるいはむしろ、このことは旧い契約という呼び名のもとに分類されているところのすべての書についていえることになる。というのは、もしもそこでいわれていること、成就されていることが、この世の国についてであっても、この世の国のためのものであっても、それらが預言的な比喩によって天上のエルサレムについても関係しているとするなら、この世のエルサレムについてのみ関係するようなものは何もないということになる。そして、ただ二つの種類、すなわち自由なるエルサレムにかんするものと両方にかんするものだけが存在することになってしまうであろう。

わたしには、この種の書に記されている出来事は、ただいかにしてそれが歴史的に生起したかということのほかには何も意味していないと考えるのは、まったくの誤りであるとおもわれる。しかし、同様に、これらの書の言明がすべて比喩的な意味を含んでいると主張するのも早まっている。わたしが二種類ではなく三種類あるといったのも、それゆえである。これは熟考の上での判断である。にもかかわらず、わたしは、すくなくとも原初の歴史史実的な真実性を保持しているかぎりにおいて、そこに記されているところのすべての出来事から霊的な意味を掘り起こすことができた人びとを非難しようとおもわない。

それが人間のはたらきによるものであれ、神のはたらきによるものであれ、過去におこった

出来事、あるいは未来におこるべき出来事に適合されない言明があることは確かである。しかし、信仰のある者なら、それらの言明が空しく語られたものではないことを疑いはしないであろう。そのような人は、もしも自分ができるならば、それらの言明に霊的な理解を与えたいものだとおもうであろう。あるいは、すくなくとも、それができる人によってそのように理解されうることを認めるであろう。

(一)「ガラテヤ人への手紙」四の二一以下参照。
(二)「サムエル記下」一二の一参照。
(三)「エレミヤ書」三一の三一以下。
(四)「列王紀上」五の五参照。

第四章

イスラエル王位の変化とサムエルの母ハンナの預言について

このように、神の国の進行は、王たちの時代、すなわちサウルがしりぞけられて(一)ダビデがはじめて王位を獲得してその子孫たちがその後長い期間継続してこの世のエルサレムを統治する時代にまで至るのであるが、この出来事はある象徴を提供するものである。それは、未来におこるべきことを預言的に示す出来事であり、その重要性は黙って見すごしてはならない。これ

は二つの契約すなわち旧い契約と新しい契約とに関連する未来におこるべきであった変化の前ぶれであった。祭司職と王制とは、新しい永遠なる祭司であり同時に王であるところのキリスト・イエスに変転されるのである。

なぜなら、祭司エリがしりぞけられてサムエルがそれに代って神の奉仕にあたり、(二)祭司と判事(師士)の二重のつとめを果たし、そして、サウルが見捨てられてダビデ王が王位に据えられることによって、わたしがすでに述べた変化を預言的に象徴しているのだからである。サムエルの母ハンナ自身もまた、かつて不妊であったがのちに子どもに恵まれて喜んだのであるが、歓喜のうちにその感謝を主の前に注ぎ出したときに、いま述べたことを預言していると考えられる。それはかの女が、子どもを生んで乳離れさせてのち、誓願を立てたときと同じ敬虔な心をもってその子どもを神に返したときのことである。すなわちつぎのようにいうのである。

「わたしの心は主によって強められ、わたしの角はわたしの神によって高められます。わたしの口は敵対する者らに向かって開かれ、わたしはあなたの救いによってよろこびます。主のように聖なるかたはなく、わたしの神のように正しいかたはありません。あなたのほかにだれひとり聖なる者はありません。誇ってはなりません。高慢なことばを吐くことのありませんように。あなたの唇から横柄なことばが出ませんように。主はすべてを知りたもう神。ご自身のはかりごとをそなえたもう神。勢力ある者の弓を曲げ、力弱き者は力をまとい、パンに飽き足りた者は欠乏するようになり、飢えた者が地を渡るのです。

石女（うまずめ）は七人の子どもたちを生み、子だくさんの女が衰えるからです。死なせるのも生かせる

のも主です。人間を黄泉に下し、そこから引き上げるのも主です。貧しくするのも、富ませるのも主です。小さくするのも、高くするのも主です。貧しい者を土から取り上げ、乏しい者を芥から拾い上げ、そして民のなかの頭たちと共にすわらせ、かれらに栄光に輝く玉座を継がせられ、誓願する者を成就させ、義しい者の齢を祝されます。ひとはみずからの力によってはつよくないからです。主ははむかう者を弱くされます。主は聖なるかた。

思慮ある者はその思慮を誇ってはならず、力に輝く者はその力を誇ってはなりません。富める者はその富を誇ってはならず、誇るなら、主を理解し主を知ること、そして地の只中で正義と公正を果すことを誇るべきです。主は天にのぼり、いかずちを鳴らして、地の果てまでその裁き手となられるでしょう。主は正しいかただからです。主はご自分の王たちに力を与え、その油注がれたる者の角を高くなさるでしょう（三）」。

これらのことばが、子どもの誕生に感謝しているいと小さき女のことばと見なしてよいであろうか。人間の心は、この女によって注ぎ出されたこれらのことばが、女の想いの限界を超え出ているのを感じとることができぬほどに真理の光から離反してしまったのであろうか。さらに、成就されはじめた諸々の出来事に適切にも心動かされた者なら、この世にあって巡礼の旅をつづけているときでさえ、このことばに注目し、この女をとおして（まさしくかの女のハンナという名は「神の恩恵」と訳されるのであるが）預言の霊によってそこに語られているのはほかならぬキリスト教という宗教であり、かつ、キリストが王にして建設者であられる神の国そのものであることを、知り、認めないであろうか。たしかに、そこに語られているのは、け

っきょく神の恵みのことなのであって、高慢なる者はその恵みから遠ざけられて倒れ、謙遜なる者は満たされて起きあがるのである。これこそが、かの女の賛美の調べのうちに鳴りひびいたところのことである。もしかして、ある者は、この女は預言をいったのではなく、ただたんにその祈りがかなえられて与えられた子どもゆえの歓喜の表現による神の賛美にすぎない、といおうとするかも知れない。

それでは、つぎのことばは何をいおうとしているのであろうか。「勢力ある者の弓を曲げ、力弱き者は力をまとい、パンに飽き足りた者は欠乏するようになり、飢えた者が地を渡るのです。石女(うまずめ)は七人の子どもたちを生み、子だくさんの女が衰えるからです」。――ハンナ自身が石女であったにもかかわらず、すでに七人の子どもを生んでいたのであろうか。このことばをいったとき、かの女はただ一人の子どもをもっていただけであった。そしてそののちでさえ七人の子どもを生んだわけではなかった。もしもそうなら、サムエルは七人目となったことであろう。じっさいにはかの女は三人の男子と二人の女子を得たのであった[四]。さらに、かの女がおしまいのところでいっていることば、すなわち「ご自分の王たちに力を与え、その油注がれたる者の角を高くなさるでしょう」というのは、あの民はまだだれをも王として立てていなかったときに語られているのであるが、もしも預言をいったのでないのなら、どうしてかの女はこれをいったのであろうか。

それゆえ、キリストの教会が語るがよい。偉大なる王の都、豊かな子どもを抱く恵みに満たされた教会が語るがよい。この敬虔な母親の口によってかくもはるか以前に自分自身について

預言的に語られたと認めていることばを語るがよい。「わたしの心は主によって強められ、わたしの角はわたしの神によって高められる」と。心は真に強められ、角は真に高められるのである。なぜならそれは、自分自身によるのではなく、主なる神によるのだからである。「わたしの口は敵対する者らに向かって開かれる」のは、圧迫の苦悩のなかにあっても、その伝令使たちが鎖につながれているときでも、神のことばは鎖につながれていないからである。(五)「わたしはあなたの救いによってよろこびます」とかの女はいう。この救いはキリスト・イエスである。老シメオンがその幼な子を腕に抱き、その偉大さを認めて「主よ、いまこそあなたはわたしを安らかに去らせてくださる。わたしの目がいまあなたの救いを見たのですから(六)」といったのであった。

そこで教会はいうがよい。「わたしはあなたの救いによってよろこびます。主のように聖なるかたはなく、わたしの神のように正しいかたはありません」と。主は聖なるかた、そして人を聖なるものとされる。主は正しいかた、そして人を正しいものとされる。「あなたのほかにだれひとり聖なる者はありません」。だれもあなたによらずしては聖なる者とされないからである。さらにつぎのようにつづけられる。「誇ってはなりません。高慢なことばを吐くことのありませんように。あなたの唇から横柄なことばが出ませんように。主はすべてを知りたもう神」。神御自身は、たとえだれも知らないところであっても、あなたのことを知っておられる。なぜなら、「もしあるひとが、じっさいにはそうでないのに、自分が何か偉い者であるようにおもっているとすれば、そのひとは自分を欺いている」からである。

これらのことばは、神の国に敵対する者たち——バビロニアに属し、自己の力を頼みとなし、神を誇るかわりに自己を誇る者たち(七)——に向かって語られているのである。それらの者のうちには肉の血を引くイスラエル人、すなわち、この世のエルサレムの、この地上に生れた市民たちもいる。かれらは、使徒のことばによってつぎのようにいわれている者たちである。「神の義(八)(すなわち、ひとりそのかたのみが正しくあられ、また、人間を正しくなさる神がお与えになるところの正しさ(九))を知らず、自分の義を立てようと努め(すなわち、それを神によって与えられたものとしてではなく、自分自身で得たもののごとくに考えているのである)、神の義に従わなかったのである」。じつにかれらは尊大で、神の義によらず自己自身の義によって神をよろこばせることができるとおもっているからであって、この神こそ「すべてを知りたもう神」であり、したがってまた、人間のうちなる想いを裁かれるかたである。神は人間のうちに人間の想いをご覧になり(一〇)、それが人間にのみよるものであって神からくるものでないなら空しいものであることを知っておられるのである。

「主はご自身のはかりごとをそなえたもう神」といっている。これは、誇り高い者が倒れ、へりくだる者が立ちあがるということでなければどんなはかりごとを考えるべきであろうか。「勢力ある者の弓を曲げ、力弱き者は力をまとい」というとき、たしかにこのはかりごとのことを述べている。弓が曲げられる、これはすなわち、神の賜物と助力なしに人間を頼みとすることによって神の命令を果たしうるほど自分たちが力ある者であるとおもっている者らの意図が曲げられることである。そして、内なる声が「主よ、わたしをあわれんでください。わたし

は弱り衰えているからです」[二一]というとき、その者は力をまとわされるのである。

「パンに飽き足りた者は欠乏するようになり、飢えた者が地を渡るのです」といっている。パンに飽き足りた者ということばによって理解されるのは、あたかも力あるごとくに見られる者、すなわち、神のことばがゆだねられたところのイスラエル人たち自身のことでなければだれのことであろうか。[二二]しかし、この民のなかで、仕え女の子らは欠乏するようになったのであった(この「欠乏するようになった」[二三]——縮小された——ということばは、じっさいよいラテン語ではないが、大きなものからより小さいものに縮小されたということをよく表わしている)。なぜなら、このパン、すなわちその当時のすべての民族のなかでただイスラエル人だけが受けとった神の言葉を所有しながらも、かれらはそのなかに地上的なものを味わったからである。

ところが、その律法が与えられなかった民族は、新しい契約をとおして神のこれらの言葉を知るようになって以後、はなはだしく飢えて、地上を渡ったのであった。それというのは、かれらがこれらのことばのうちに賞味したのはこの世的なものではなく、天上的なものであったからである。そして、「石女(うまずめ)は七人の子どもたちを生み、子だくさんの女が衰えるからです」というとき、なにゆえにこのようなことになったのか、その理由を求めているかのようである。ここで、預言されたことの全体が、七という数の重要性を認める人びとに輝き出るようになるのである。というのは、この数によって全教会の完全性が表示されているからである。

使徒ヨハネが七つの教会に手紙を送ったのもそのような理由によるのであって、これは唯一

の教会全体に記していることを明らかにしているのである。それより前、「ソロモンの箴言」においても、知恵が「自分の家を建て、それを七つの柱で支えた」[一四]とき、この教会のことを予示しているのである。じっさい、神の国は、わたしたちがいま識別しているような子孫[一五]の誕生の前には、すべての民族において石女であったからである。わたしたちはまた、多くの子どもをもっていたけれどもいまでは衰弱しているこの世のエルサレムを見るのである。その力は、その都の自由女の子どもらのすべてに存していたのであった。けれどもいまでは、ただ文字のみが存在して霊はなく、力は失われて衰弱してしまったのであった。

「死なせるのも生かせるのも主です」。――主は多くの子どもをもつ女を死なせ、七人の子どもを生んだ石女を生かされるのである。しかしながら、ここではより適切には、主は死なせたその者を生かされると理解することができるであろう。「主は黄泉に下し、そこから引き上げられる」と加えていうとき、あたかもこのことをくり返しているかに見えるからである。使徒はそのような者に向かって「もしもあなたがたがキリストと共に死んだのなら、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである」[一六]といっているのである。かれらは主によってたしかにかれら自身の健康のために死へ渡されたのである。使徒はかれらにつぎのように加えている。「あなたがたは上にあるものを味わうべきであって、地上のものに心をひかれてはならない」[一七]。これらの者こそ「飢えて地上を渡った」者たちにほかならない。

というのは、聖パウロは「あなたがたはすでに死んだものである」といっているからである。

しかし、どのようにして神が健康のためにそれらの者を死へ引き渡されるかを見るべきである。次いでかれは「あなたがたのいのちは、キリストと共に神のうちに隠されているのである」とつづけるのである。どのようにして神がその同じ者を生かされるか、見るべきである。けれども、黄泉へ引き渡された者と再び引き上げられた者たちが、いったいどうして同じ者であるのであろうか。じっさい、信ずる者にとっては異論の余地なく、かれ（かれは「わたしたちの頭」である）において――使徒がいうように「わたしたちのいのちはかれと共に神のうちに隠されているのである」といったそのかたにおいて――成就されたのを、わたしたちは見るのである。すなわち神は「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかた」であって、そのようにして神はかれを死へ引き渡し、死者のなかから起こすことによってふたたび生かされたのであった。

かれの声は「あなたはわたしを陰府に捨てておかれない」という預言のうちに認められるのであるからして、神は同一者を死者の世界に下し、ふたたび引き上げられたのである。かれのこの貧しさによって、わたしたちは富まされたのであった。というのも、「貧しくするのも、富ませるのも主」であるからである。これがなにを意味しているかを理解するために、つづくことばに耳を傾けねばならない。「小さくするのも、高くするのも主です」。これはたしかに、主は高慢なる者を低くし、謙遜なる者を高くなさるということを意味している。他のところでもこのことばは見出されるのであって、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(一八)とあるのである。これが、「恵み」という意味に訳される名をもったハンナの語ったことばの

全体の意味である。

さて、それにつづく「貧しい者を土から取り上げ」といわれているところのことは、すこしまえに「かれは富んでおられたのに、わたしたちのために貧しくなられた。それはその貧しさによってわたしたちが富む者になるためである[一九]」と述べたあのかたにかんして理解する以上によりよい理解はないであろう。神はそのかたをじつにすばやく地から立たせられたので、かれの肉は腐朽を見なかったのであった。「乏しい者を芥から拾い上げた」と加えられているところのこともかれにあてられているのであって、わたしはこれをそのかたから取り去ろうとはおもわない。たしかに乏しい者というのは貧しい者と同じである。かれがそこから拾い上げられたところの芥とは、ユダヤ人を迫害する者たちと解するのがもっとも正しいであろう。使徒は、自分自身教会を迫害したといったとき、自己をそれら迫害する者らのうちに数えているのであって、つぎのようにいっているのである。「しかし、わたしにとって益であったところのこれらのものをキリストのゆえに損であるとおもうようになった。じっさい、わたしはキリストを得るために、それらのものを不利益とおもうようになったのみでなく、芥のようにおもっている[二〇]」。

そのようなわけで、貧しい者はすべての富める者の上に地から立ち上がらされ、乏しい者はすべての豊かな者の上に芥のなかから引き抜かれ、民のうちの「あなたがたもまた十二の位に座するであろう[二一]」と主がいわれたところの人びとと共に座するようになるのである。というのは、あの力ある者たちが「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨ててあなたに従いまし

た」といったからである。かれらは全力を尽くしてこの誓いを誓ったのであった。けれども、かれらのこれをなすことのできたその能力は、「誓願する者を成就させ」とつづけられているところのそのかたからでなければどこからきたのであろうか。そうでなければ、その弓を弱くされたところのあの力ある者たちからきたということになろう。「誓願する者を成就させ」といっているのである。だれも、自分が誓ったところのことをそのかたから受けとるのでなければ、そのかたすなわち主にたいして正しい誓いをなすことはできないからである。さらに、「義しい者の齢を祝されます」とつづけられているのであるが、これはつまり、義しい者は「あなたの齢はけっして終わることがない(二三)」といわれているところのそのかたと共に終わりなく生きるようになるためである。

すなわち、かしこにおいては齢(よわい)は存続するが、この世では移り行き、つねに滅び去っていくのである。かれらはやってくるまえには存在しなかったのである。しかし、やってきたときにはそれ以上存在しないであろう。それというのは、かれらは自分自身の終わりと共にやってくるからである。ところで、これら二つのこと、すなわち「誓願する者を成就させ」というのと「義しい者の齢を祝されます」というのとは、そのひとつはわたしたちがなすところのことに関連しており、他はわたしたちが受けとることに関連しているのである。けれども、この第二のことは、第一のことが神の御助力によって完成されるときにはじめて神の御寛容をとおして受けとられるものである。「ひとはみずからの力によってはつよくされない。主ははむかう者を弱くされる」からである。これはいうまでもなく、誓いを立てる人間に悪意をもってはむか

う者は、けっきょく自分の誓いを成就することはできない、という意味である。

もっとも、ギリシア語には曖昧さがあって、これは「自分の敵対者」[二三]と解されもしよう。すなわち、神がわたしたちを所有されはじめるやいなや、わたしたちの敵対者は神の敵対者となり、わたしたちによって打破されるのだからである。しかし、それはわたしたち自身の力によるものではない。「ひとはみずからの力によってはつよくないから」である。それゆえに「主にはむかう者を弱くされます。主は聖なるかた」。それで、敵対者は聖徒たちによって打ち破られるのである。聖なる者たちの聖なる主がかれらを聖化されたのである。

このゆえに、「思慮ある者はその思慮を誇ってはならず、力に輝く者はその力を誇ってはなりません。富める者はその富を誇ってはならず、誇るなら、主を理解し主を知ること、そして地の只中で正義と公正を果たすことを誇るべきです」。主を理解し知ることはけっして取るに足らぬことではない。かれは、主を理解し知ることは、それ自身、主から与えられたものであることを理解し知るからである。「あなたの持っているもので、もらわなかったものがあるか。もらったのなら、なぜ、もらわなかったもののように誇るか」[二四]と使徒はいう。これは、あなたが誇るその根拠があたかも自分自身からきたもののごとくに振舞う、という意味である。

さて、正しく生きる者は「正義と公正を果たす」のである。かれは神の命じられるところに従順なひとである。「命令の目的」すなわち、命令がそれへと指し示すところのものは、「清い心と正しい良心と偽りのない信仰から出てくる愛（カリタス）である」[二五]。さらに、使徒ヨハネが証言しているように「この愛（カリタス）は神から出たものである」[二六]。したがって「正義と公正をなすこと」は神から

くるのである。

しかし、「地の只中で」というのはどういうことであろうか。この地上の縁に住む者たちは正義と公正の義務を免れているということではない。だれがこのようなことをいうであろうか。では、なにゆえに「地の只中で」ということばが付け加えられているのであろうか。もしもこれが付け加えられずに、ただ「正義と公正を果たす」ということばだけであるなら、むしろその命令は二つの種類の者たちに関係づけられるであろう。内陸に住む者たちと海岸に住む者たちである。

けれども、わたしがおもうのに、このことばは、このからだにおいて生きた生の終わりののちも、肉のうちにいるあいだに達成できなかったところの正義と公正とを果たすためのある期間がまだ残されていて、したがって、神の審判を免れうるのだ、などと考えることのないように付け加えられたのであろう。それゆえ、このことばは、わたしには「地の只中で」は「だれでもこのからだのうちにあって生きているあいだに」ということであるとおもわれるのである。この世の生においては、ひとはだれも自分の「地」を担っており、かれが死んだなら、ふたたびよみがえるときにそれを返還するように、共通の地がそれを受けとるのである。したがって、「地の只中で」すなわちわたしたちの魂がこの地上のからだのうちに囲まれているあいだに、わたしたちは正義と公正を果たさねばならないのである。それはいずれ「善であれ悪であれ、自分のからだをとおしておこなったことに応じて、それぞれ報いを受ける」[二七]ときにわたしたちの益となるためである。じっさい、ここで、「自分のからだをとおして」ということによって

使徒は、「からだのうちに生きているあいだ」ということをいっているのである。

心に悪意を抱き、不敬虔な想いをもって、神に対して冒瀆的となり、そしてそれを何ら自分の身体的な器官をもっておこなうことがなかったばあいでも、そこには、この行為に身体的な動きが何もなかったからといって、負い目がないわけではないのである。というのは、その者はからだを担っていた期間を通じてこれをおこなったのだからである。わたしたちはこれと同じ意味で『詩篇』に読まれる「神はいにしえからわたしたちの王であられて、救いを地の只中でおこなわれた」[二八]ということばも解することができるのである。わたしたちの神とは、いにしえからいます主イエスのことと解されるであろう。なぜなら、世々はかれによってつくられたからである。御言が肉となってこの世のからだのうちに宿られるようになったときに、かれは「地の只中で」救いをおこなわれたのであった。

それに次いでハンナの預言的なことばは、審きの日におこるであろう応報のために、誇る者はどのように誇るべきであるか、述べているのである。「主は天にのぼり、いかずちを鳴らして、地の果てまでその裁き手となられるでしょう。主は正しいかただからです」。かの女は正確に信仰者の告白の順序にしたがっている。主キリストは天にのぼり、そしてそこから、生ける者と死せる者とを審くために来られるのである。使徒もいっているように、「地の低い底にも降りられたかたのほかにだれがのぼったのであるか。降りたかたは、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまでのぼられたかたなのである」[二九]。それゆえに、のぼられたときに聖霊でかれを満たしたご自身の雲によって、かれはいかずちを鳴らされたのであっ

た。この雲にかんしては、イザヤの預言において、下女であるエルサレム――忘恩のぶどう畑――を、雲に命じてその上には雨を降らさない、と脅している。[30]「地の果てまでその裁き手となられるでしょう」といっているのは、「地の果てまでも」といわれるのと同じである。というのは、すべての人間を疑いもなく審かれるかたは、この地上のすべての部分を審かないというようなことはないからである。しかし、「地の果て」は「人間の終極」と解するほうがよいであろう。中間の時期にあってより善くもより悪しくも変わる状態にある者に審きはおこなわれないからである。審きは審かれる者が終極にあると見られるときにおこなわれるのである。そのために「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」[31]といわれるのである。それゆえに、「地の只中にあって」正義と公正とを忍耐して果たす者は、「地の果て」が審かれるとき有罪とされることはないであろう。「主はご自分の王たちに力を与え」といっている。これは、その審きによってかれらを有罪とするためではないのである。

かれらに力をお与えになるのは、それによってかれらが王のように肉を支配し、かれらのために血を流されたかたの力によって世に勝つためである。「その油注がれたる者の角を高くなさるでしょう」。どのようにしてキリストはその油注がれたる者の角を高くされるのであろうか。というのは、かれについてさきに「主は天にのぼり」といわれており、これは主キリストを意味すると解されるからである。ここでいわれているように、「その油注がれたる者の角を高くなさる」かたはキリスト御自身なのである。それでは、キリストの油注がれたる者(クリストゥス)とはだれのことであろうか。ハンナ自身がこの賛歌のはじまりのところで「わたし

の角はわたしの神によって高められます」といっているように、かれは、かれに従うどの信仰者の角も高められるということであろうか。

たしかにわたしたちは、かれの聖油が注がれた者すべてに「油注がれたる者（クリストゥス）」という名を正当に与えることができよう。しかしながら、かれを頭（かしら）とするからだ全体が一人のキリストなのである（三）。

——これらがハンナの預言したところのことである。かの女は、聖なる人物であり高く賛えられるべきサムエルの母であった。じつにかれにおいて古い祭司職の変更がそのときに象徴的に表わされたのであった。それはいまや、七人の子どもをもつ石女がキリストにおいて新しい祭司職を得るために、多くの子どもをもつ女が衰えたとき、成就された変更である。

（一）「サムエル記上」一三の一一以下参照。
（二）同上、二の二七以下参照。
（三）同上、二の一－一〇。
（四）同上、二の二一。
（五）「テモテ人への第二の手紙」二の九。
（六）「ルカによる福音書」二の二九。
（七）本書第十六巻第十七章参照。
（八）「ローマ人への手紙」一〇の三。
（九）同上、三の二六。

(一〇)「詩篇」九四の一一。

(一一)同上、六の二。

(一二)「ローマ人への手紙」三の二。

(一三)minorati sunt.

(一四)「箴言」九の一。

(一五)これはキリストのことであろう。

(一六)「コロサイ人への手紙」三の一。

(一七)「詩篇」一六の一〇。

(一八)「ヤコブの手紙」四の六。

(一九)「コリント人への第二の手紙」八の九。

(二〇)「ピリピ人への手紙」三の七以下。

(二一)「マタイによる福音書」一九の二八。

(二二)「詩篇」一〇二の二七。

(二三)*ἀντιδίκου αὐτοῦ.*

(二四)「コリント人への第一の手紙」四の七。

(二五)「テモテへの第一の手紙」一の五。

(二六)「ヨハネ第一の手紙」四の七。

(二七)「コリント人への第二の手紙」五の一〇。

(二八)「詩篇」七四の一二。

(二九)「エペソの人へ手紙」四の九。

(三〇)「イザヤ書」一〇の二二。
(三一)「マタイによる福音書」一〇の二三。
(三二)「コリント人への第一の手紙」一二の二参照。

第五章

神の人によってエリに語られた預言の意味について

祭司職におけるこの変化は、祭司であるエリ自身につかわされた神の人によっていっそう明らかに語られたのであった。たしかにその人の名は黙されてはいるが、そのつとめと職務からして、疑いもなく預言者であったと解される。すなわち、つぎのように記されているのである。「このとき、ひとりの神の人がエリのところに来ていった。『主はつぎのようにいわれる。――あなたの父祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であったとき、わたしはその父祖の家にみずからを現した。そしてイスラエルのすべての笏のうちからあなたの父祖の家を選び出して、わたしの祭司とし、そしてわたしの祭壇にのぼって香をたかせ、エポデ(祭衣)を着けさせ、また、イスラエルの子らが火祭としてささげるところのすべてのものをかれらの食べものとしてあなたの父祖の家に与えた。

それなのにどうしてあなたがたは、わたしの薫香と犠牲とを無礼な目で見、わたしよりも自

分たちの子らを誇るのであるか。かれらはわたしの目の前でイスラエルのささげるもろもろの供え物の初ものを祝福している』。それゆえ、イスラエルの神、主はいわれる。『わたしはかつて、あなたの家とあなたの父祖の家とは、永久にわたしのいる前で歩むであろう、といったのであった』。しかし、いまや主はいわれる。『けっしてそのようにならないであろう。わたしを尊ぶ者をわたしは尊び、わたしを卑しめる者は軽んぜられるであろう。見よ、その日が来るであろう。わたしはあなたの子孫とあなたの父の家の子孫とを追い出し、わたしの家にはいつまでも年老いた者はいなくなるであろう。わたしの祭壇からあなたの家の者たちを追い出し、かれらの目は衰え、その魂は消えていくであろう。あなたの家の残った者はすべて人びとのつるぎによって死ぬであろう。あなたのふたりの息子ホフニとピネハスの身におこることが、あなたのためにしるしとなるであろう。すなわちそのふたりは共に同じ日に死ぬであろう。わたしは自分のためにひとりの忠実な祭司を立てる。その者はわたしの心と思いとに従ってそのすべてをなすであろう。わたしはかれに忠実な家を建てよう。かれはわたしが油注いだ者の前につねに歩むであろう。そして、あなたの家で生き残っている者たちはみな来て、一枚の銀でかれに敬意を表し、そしていうであろう。わたしがパンを食べることができるようあなたの祭司の職の一つにわたしを任じてください、と』」。(二)

これは古い祭司職の変化にかんする預言である。それはまったく明白な表現によって告げ知らせられたものであった。(サムエルが祭壇に仕えるよう主によって立てられた種族とは別の種族に属する者ではなかったゆえに、この預言はある程度は成就されたのであるが、にもかか

わらず、かれは、アロン、すなわちその子孫たちから祭司を出すと見られていた人物の子らに属する者ではなかった。(三) そしてそのことによって、キリスト・イエスをとおしておこることになっていた変化の輪郭が描かれているのである。ことばによって表わされたのでなく出来事によって示されたこの預言は、直接的には旧い契約にかかわるものであったが、しかし、この出来事において預言者をとおして祭司エリにたいしていわれたところのことは予徴的に新しい契約に関係しているのである)。

じっさい、そののち、たとえばダビデの治世におけるザドクやアビヤタル、そしてそれ以後の他の者たちのように、(三) かつて祭司職の変移についていわれた預言がキリストにおいて実現されるときがくるまで、アロンの系統の祭司が存在したのであった。しかし、いまや、これらの預言を信仰の目をもって見るなら、それが成就されたのをだれが見ないであろうか。というのは、神の法によってアロンの系列に定められるようユダヤ人たちに命じられていたのに、いまではたしかに、いかなる幕屋も、いかなる神殿も、いかなる祭壇も、いかなる犠牲も、かれらに残されなかったからである。

このことは、現に預言者が「主はいわれる。『わたしはかつて、あなたの家とあなたの父祖の家とは、永久にわたしのいる前で歩むであろう、といったのであった』。しかし、いまや主はいわれる。『けっしてそのようにならないであろう。わたしを尊ぶ者をわたしは尊び、わたしを卑しめる者は軽んぜられるであろう』」といっているところで言及されているのである。預言者は「あなたの父祖の家」とよんでいる。これはその直接の父のことではなく、最初の祭

司として定められたかのアロンのことであって、かれの子孫から他のすべての祭司たちは継承されて行ったのであった。これはさきに、「あなたの父祖の家がエジプトでパロの家の奴隷であったとき、わたしはその父祖の家にみずからを現した。そしてイスラエルのすべての氻のうちからあなたの父祖の家を選び出してわたしの祭司とし」といったところに示されている。あのエジプトで奴隷であって、そこから解放されたのち祭司に選ばれたのは、父祖たちのうちのだれであったであろうか。ひとりアロンのみではなかったか。それゆえに、かれらはもはや祭司ではなくなるであろうときが来るといったとき、預言者がここで語ったのはアロンの血統のこととなる。わたしたちはこの預言がいまや成就したのを見る。信仰者はよく目を覚まして見るがよい。事実はわたしたちの前に現存する。それは認められ、心に留められる。見る意志のない者たちにさえその目に刺し通される。かれはいっている。「見よ、その日が来るであろう。わたしはあなたの子孫とあなたの父の家の子孫とを追い出し、わたしの家にはいつまでも年老いた者はいなくなるであろう。わたしの祭壇からあなたの家の者たちを追い出し、かれらの目は衰え、その魂は消えていくであろう」。

見るがよい。さきに告げられた日はいまや来たのである。アロンの系列による祭司はだれもいない。かれの家門から出た者はだれも、キリスト教徒たちの犠牲が全土にひろく行き渡ったのにあの大いなる栄誉はかれらから取り去られてしまったのを見て、その目は衰え、その魂は悲嘆に消耗して消え去ったのである。

さて、それにつづいていわれたことは、直接的にエリの家に関係している。「あなたの家の

残った者はすべて人びとのつるぎによって死ぬであろう。あなたのふたりの息子ホフニとピネハスとの身におこることが、あなたのためにしるしとなるであろう。すなわちその二人は共に同じ日に死ぬであろう」。

それゆえ、これはこの人物の家から祭司職が移行していくことのしるしとしておこったのであり、このしるしによって、アロンの家の祭司職が変えられることが表示されているのである。じっさい、この人物(エリ)の子どもらの死は、個人的な人間の死を表示するものではなく、アロンの子らによるところの祭司職そのものの死を表示するものである。ところで、それにつづくところのことは、エリのあとを継承したサムエルが象徴したあの祭司に関係している。それゆえ、つづくことばは、新しい契約の真の祭司であられるキリスト・イエスについて語られたのである。すなわち「わたしは自分のためにひとりの忠実な祭司を立てる。その者はわたしの心と思いとに従ってそのすべてをなすであろう。わたしはかれに忠実な家を建てよう」ということばである。

この家こそ、永遠の、そして天上のエルサレムである。そして「かれはわたしが油注いだ者の前につねに歩むであろう」といっている。「歩むであろう」というのは「共に居るであろう」ということをいったのである。それは、さきにアロンの家について「わたしはかつて、あなたの家とあなたの父祖の家とは、永久にわたしのいる前で歩むであろう、といったのであった」といったのと同じである。しかし、「かれはわたしが油注いだ者の前に歩むであろう」といったのは、たしかに、その家にかんしてであると解されるべきである。仲保者であり救い主であ

る油注がれたキリストご自身であるところのあの祭司にかんしてではない。それゆえ、かれの家がキリストの前を歩むわけである。「歩むであろう」といわれていることも、死から生への歩みと解されるであろう。そのことが、この世の終わりに至るまで地上の可死性のうちに「つねに」おこるのである。

神が「その者はわたしの心と思いとに従ってそのすべてをなすであろう」といわれたのであるが、これについて神が魂をもっておられると考えてはならない。神は魂の創造者であられるからである。神については、神の手とか足、あるいは身体の他の部分にかんして語るばあいと同様、字義どおりの意味においてでなく、比喩的な意味でいわれるのである。人間が神の像にしたがってつくられたということが何か肉の形態にかんするものであるかのように考えることのないよう、人間がもっていない「つばさ」が付け加えられたりもするのである。すなわち、「あなたはみつばさの陰にわたしを隠し」[四]といわれているのである。これは、神の、ことばには表わしえない本性については字義どおりのことばによるのでなく、転喩的なことばによって表現されることを人びとに悟らせるためである。

つぎに「そして、あなたの家で生き残っている者たちはみな来て、かれに敬意を表し」ということばがきている。これは直接エリの家についていわれたものではなく、アロンの家についていわれたものである。アロンの家に属する者はイエス・キリストの到来のときまで生き残っており、いまに至るまでその系列は絶えていない。なぜなら、エリの家については、さきに「あなたの家の残った者はすべて人びとのつるぎによって死ぬであろう」といわれたからであ

る。復讐する者のつるぎが、かれらのうちのだれをも残さないということが真であったなら、ここで「あなたの家で生き残っている者たちはみな来て、かれに敬意を表し」といわれていることがいかにして真でありえようか。これは、たしかにその同じ系列に属する者ではあるが、しかし、とくにアロンの系列によるところの全祭司職の意味で理解するときにのみ、真である。それゆえ、これは他の預言者が「そのうちの残りの者だけが救われる(五)」といっているところの(だからして使徒も「それと同じようにいまのときにも、恵みの選びによって残された者がいる(六)」といっている)、残るように定められた者のことであるとするなら、「あなたの家で生き残っている者」と記されているその者についてよく理解されうるであろう。たしかにその者は「油注がれた者(クリストゥス)」を信じているのであり、それは、使徒の時代にその氏族の多くの者が信じたごとくである。そして、いまもなお、ひじょうにわずかではあるが、にもかかわらず、かれらのうちから信じる者が出ており、絶えていないのである。このことにおいて「かれらはみな来て、一枚の銀でかれに敬意を表するであろう」というこの神の人のつづく預言が成就されたのである。

神でもあられるところの、あのいと高き祭司に敬意を表するのでなければ、だれに敬意を表するのであるか。というのは、アロンの系列によるその祭司職においてさえも、この祭司に敬意を表するために人びとが神殿や神の祭壇へやってくることなどなかったからである。ところで、「一枚の銀で」というのは、簡潔な信仰のことばによるのでなければ何であろうか。それについて使徒は「主は、ご自分のことばを完全に、そして簡潔に地になしとげられる(七)」という

ことばを引用している。「言辞」の代りに「銀」が用いられることについては、『詩篇』がこれを証明しており、そこでは「主のことばは清く、炉で練られた銀のようである」(八)とうたわれているのである。

それでは、神の祭司、神であられる祭司に敬意を表するためにやって来た者が「わたしがパンを食べることができるよう、あなたの祭司の職の一つにわたしを任じてください」といっているのはどういうことであろうか。わたしは、わたしの父祖たちの栄誉に据えられることを欲してはいない。それはなくなっている。どうかわたしをあなたの祭司職の一つに任じてください。それというのも、「わたしは神の家の卑しいしもべになることを選んだ」(九)からである。それがどのような種類の、どのように低いものであっても、わたしはあなたの祭司職の一員であることを熱望します。たしかに、ここで祭司職といわれているのは人民そのもののことをいっているのであって、その人民の祭司こそ、神と人間との仲保者、人なるキリスト・イエスである(一〇)。

使徒ペテロはこの人民に向かって「聖なる民、王の祭司職」とよんでいる(一一)。ある人びとは「あなたの祭司職」とは訳さず、「あなたの犠牲」と訳したのであるが、それでもこれは同じキリスト教徒の人びとを意味している。だからして使徒パウロは、「わたしたちは多くいても、一つのパン、一つのからだである」(一二)といっているのである。それゆえ、「パンを食べることができるよう」と付け加えていることは、ほかならぬ犠牲というものを巧みに表現しているのであって、それについて祭司自身が「わたしが与えるパンは、世の命のために与えるわたしの肉

である[13]」といっている。これが犠牲である。それはアロンの系列によるのでなく、メルキゼデクの系列によるのである[14]。読む者は悟るがよい。

このようなわけで、「わたしがパンを食べることができるよう、あなたの祭司の職の一つにわたしを任じてください」といわれていることばに、簡潔な、そして救いに有益な謙遜なる信仰告白があるのである。この告白自身、一枚の銀である。それは短く[15]、そして信じる者の心のうちに住む神のことばである。「イスラエルの子らが火祭としてささげるところのすべてをかれらの食べものとしてあなたの父祖の家に与えた」といわれたところで、神はさきに旧い契約の犠牲のささげものから食べものの一部分をアロンの家に与えたと語っていたゆえに(もちろん、これらのものはユダヤ人の犠牲であった)、ここでは神の人は「パンを食べることができるよう」といったのであって、これは新しい契約においてはキリスト教徒たちの犠牲なのである。

(一) 「サムエル記上」二の二七—三六。
(二) アウグスティヌスはのちに『訂正録』において、ここのところは「サムエルは祭司の子ではなかった」と書くべきであったと訂正している(同書一一の六九)。
(三) 「サムエル記下」一五の二四以下。
(四) 「詩篇」一七の八。
(五) 「イザヤ書」一〇の二二。
(六) 「ローマ人への手紙」一一の五。

(七) 同上、九の二八。
(八) 「詩篇」一二の六。
(九) 同上、八四の一〇。
(一〇) 「テモテへの第一の手紙」二の五。
(一一) 「ペテロの第一の手紙」二の九。
(一二) 「コリント人への第一の手紙」一〇の二七。
(一三) 「ヨハネによる福音書」六の五一。
(一四) 「ヘブル人への第一の手紙」八の一一参照。
(一五) この告白はきわめて簡潔で一枚の銀貨のようであるが、それは同時に、その謙虚さにおいてキリスト者の精神となっているという意味も含まれる。

第六章

ユダヤの祭司職および永遠なものとして立てられた王国について

このようなわけで、これらの預言はその当時、このように高い調子で表明され、いまやこれほどの明白さをもって示されたのであるが、しかしなおもだれかが問題を感じて、つぎのように問うこともあるかも知れない。「もしも、そのひとつの言明、すなわち『あなたの家とあなたの父祖の家とは、永久にわたしのいる前で歩むであろう』といわれていることが神の力によ

って成就されなかったのであるなら、これらの書において未来におこるべきこととして預言されたすべてのことがおこるということを、わたしたちはどうして確信できようか。いまやわたしたちは、祭司職が取って替わられて、その家にたいしてなされた約束がいつか実現されるという希望をもたないからである。なぜなら、旧い祭司職がしりぞけられ取って替わられてのちにつづいた祭司職が永遠なるものと告げられているのを見ているのだから」。

　このように問う者は、アロンの系列の祭司職が、来たるべき永遠の祭司職のいわば影として立てられたのだということを、まだ理解しておらないのか、(二)それとも、想起しておらないのである。それゆえに、永遠性がその家に約束されたとき、それは影や象徴にたいしてなされたのではなく、それによって暗示され象徴として示されるところのものにたいして約束されたのである。影そのものが存続すると考えることのないよう、そのためにもその変更が預言されねばならなかったのである。

　これと同じ意味で、明らかにしりぞけられて捨てられたサウル自身の王国も、永遠に存続するであろう未来の王国の影であった。かれが注がれた油は――その聖油ゆえにかれは「油注がれた者(クリストゥス)」とよばれたのであるが――神秘的な意味に受けとられ、また、大いなる秘義として理解されねばならない。これはダビデに、ひじょうな尊敬の念をおこさせたところのものであった。サウルがある自然的な必要を果たすためにほら穴にはいってきたのであるが、そこにはダビデが隠れていたのであった。ダビデは尊敬の念から、(殺すことを避けて)ひそかに背後からサウルの上衣の裾の一部を切りとったのであるが、それは、サウルを殺すこともできたのに、

サウルを大切におもったことを示す証拠を得るためであった。聖なるダビデを敵と見なし、それゆえに激しく追撃するサウルの不信を取り払いたいとおもったのであった。

けれども、そのようにサウルの上衣に触れたということのゆえに、かれは、サウルのうちにある大いなる秘義を侵害したのではないかとおもい、心の責めを感じてひじょうに不安となった。すなわち、「ダビデはサウルの上着の裾を切ったことに心の責めを感じた」と記されている。さらに、かれと共にいた者たちが、その手中に渡されたサウルをほろぼすようダビデに勧めたとき、ダビデはその者たちにいったのであった。「主が油を注がれたわたしの主人にこのことをするのを主はとどめられる。かれは主が油を注がれた人なのだから[二]」。

このように、来たるべきもののこの影にたいして示された尊敬の念は、そのもの自身のためでなく、それが予示したところのもののため、かくも大きいものであった。サムエルがサウルにむかっていったことも同じである。「あなたは、主によってあなたに与えられたわたしの命令をまもらなかった。それゆえ、主がかつてあなたの王国を末永くイスラエルの上に定めたように、いまやあなたの王国はあなたのために持続することはないであろう。主はご自身の心にかなう人を求めて、その人に民の君となることを命じられた。あなたが主の命令を守らなかったからである[三]」。

わたしたちはこれを、サウル自身が永久に支配するように神が定められたが、のちにサウルが罪を犯したので、その定めを守ることを神は思いとどまられたのだという意味に受けとってはならない（というのは、サウルが罪を犯すであろうことを神が知られなかったわけがないか

らである)。そうではなく、神は、かれの王国が永遠なる王国の予徴となるようあらかじめ定められたのである。それゆえにサムエルが「いまやあなたの王国はあなたのために持続することはないであろう」と付け加えたのであった。したがって、その王国によって象徴されたところのものは持続したのである。そしてまた持続していくであろう。しかし、その王国はサウルのためには持続しないことであろう。かれも、そしてかれの子孫たちも永久に支配するはずのものではなかったからである。それは、子孫が次から次へと継承し、その意味において「永久に」王国が存続するという約束が成就されたかのごとくにおもわれることのないためである。

また、サムエルはつづけて「主は自分の心にかなう人を求められるであろう」といっている。これはダビデのことであるか、それとも、ダビデおよびその子孫たちが注がれたところの聖油において予徴された新しい契約の仲保者ご自身のことである[四]。ただし、神がご自身の心にかなう人を求められるというとき、神がその人がどこにいるか知らないかのごとくに求められるわけではない。神は、人間をとおして語られるとき、人間の流儀によって語られるのである。そのような意味で語られることによって主はわたしたちを「求められる」のである。わたしたちが父である神によく知られたものであるのみならず、御独り子にもすでによく知られたものであるが、にもかかわらず御独り子は「失われたものを求めて」来られたのである[五]。わたしたちは「世のつくられる以前からそのかたにおいて選ばれて」いたのであった[六]。

それゆえに、「求めるであろう」ということによって、サムエルは、「自分自身のものとして所有するであろう」ということをいっているのである。だからして、ラテン語の「求める」[七]と

いうこの動詞は、前置詞を受けとって「獲得する（アドクイエレ）(八)」といわれる。その意味はまったく明らかである。たとえその接頭辞がなくとも、「求める」は「獲得する」と解されるであろう。じっさい、このことから、「利益（ルクルム）(九)」は「クアエストゥス(一〇)」ともよばれるのである。

(一)「ヘブル人への手紙」七の一一参照。アロンをもって祭司の代表者と見なしているが、しかしキリストはその祭司職の限界をこえる永遠の祭司であるとされる。
(二)「サムエル記上」二四の一―七。
(三)同上、一三の一三以下。
(四)「ヘブル人への手紙」一二の二四。
(五)「ルカによる福音書」一九の一〇。
(六)「エペソ人への手紙」一の四。
(七) quaerere.
(八) adquiere.
(九) lucrum.
(一〇) quaestus.

第七章

霊的なイスラエルが肉的なイスラエルから分たれることの暗示となったイスラエル王国の分裂

サウルは不従順によってふたたび罪を犯し、サムエルは再度主のことばをかれに語った。「あなたが主のことばを捨てたから、主もあなたを捨てて、あなたをイスラエルの王の位からしりぞけられた(二)」。そしてさらに、同じ罪のために、サウルが告白し、赦しを求め、神と和解するため自分と一緒に帰ってくれるようサムエルに乞い求めたとき、サムエルはいった。「一緒に帰ることはできない。なぜなら、あなたが主のことばを捨てたから、主もあなたを捨てて、あなたをイスラエルの王位からしりぞけられた」。こうしてサムエルが振り向いて去ろうとしたが、サウルはサムエルの上着の裾をとらえたので、それは裂けた。

そこでサムエルはいった。「主はきょう、あなたの手から、イスラエルから王国を裂き、もっと良いあなたの隣人に与えられる。イスラエルは二つに分れるだろう。主は心を変えられない。悔いることもない。主は人間のように悔いることはないからである。人間は脅かすが、持ちこたえられない」。このように、サウルにたいして「主もあなたを捨てて、あなたをイスラエルの王位からしりぞけられた」、「主はきょう、あなたの手からイスラエルの王国を裂いた」と語られたのであるが、しかしこのサウルは四十年間イスラエルを統治したのであった。それはダビデ自身が統治したのと同じだけの期間であった。そして、この預言を聞いたのは、その治世の最初の時期においてであった。したがってこの預言は、サウルの系列のだれも王位につ

くであろうようには定められていなかったことをわたしたちが悟るために語られたのである。また、肉によってはそこからして「神と人との仲保者、人なるキリスト・イエス」[三]が出ることになったダビデの血統にわたしたちの注意を向けさせようとするのである。

さて、聖書は、ほとんどのラテン語の写本のうちに「主はあなたの手からイスラエルの王国を裂き」と読まれるところのものを示してはいない。わたしたちが読んだように、ギリシア語訳に見出される「主はあなたの手から、イスラエルから王国を裂き」という文を置いているのである。これは、「あなたの手から」が「イスラエルから」と同じ意味であることを明らかにするためである。したがって、このサウルという人はイスラエルを個人的な仕方で象徴しているのである。つまり、わたしたちの主イエス・キリストが新しい契約によって肉による王位の代りに霊的な王位のもとに支配されるとき、王国を失うことになったところの民である。キリストについて「それをあなたの隣人に与えられる」といわれているのであるが、これは肉による血縁関係に関連していわれている。すなわち、キリストは肉によってはサウルがそうであったようにイスラエルから出られたのである。

「もっと良い」と付け加えられているのは、「あなたにまさってより良い」というように受けとられることもありえよう。事実、ある人びとはそのように訳したのであった。しかし、「あなたにまさってより良い」のは、まさにそのかた自身が善きかたであるからこそそのようにいわれるのだと解するほうがいっそうよいであろう。これは、あの別の預言が、「わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで[三]」といっているのと合致する。イスラエルは

この敵のなかのひとつであって、キリストはこの迫害者から王国を取り去られたのであった。しかし、そこには、あのもみ殻のなかのいくつかの穀粒のように「その心には偽りがない」(四)イスラエルも存在してはいた。じっさい、わたしたちも知っているように、使徒はイスラエルから出たのであったし、ステファノをその最初の人としたところの、かくも多くの殉教者たちも出たのであった。したがって、かくも多くの教会もそうであったのであって、使徒パウロは、自分の回心ゆえにそれらの教会が神をほめたたえたと述べている。(五)

「イスラエルは二つに分かれるだろう」とつづけられているのは、このことにかんしていわれているということは疑えない。すなわち、キリストの敵たるイスラエルとキリストにつくイスラエル、女奴隷に関係しているイスラエルと自由女に関係しているイスラエルに分けられるということである。じっさい、二つの種類のイスラエルは最初は一緒に存在していた。それはちょうどアブラハムが、その石女の妻がキリストの恵みによって子どもに恵まれ「このはしためとその子を追い出してください」(六)と叫んだそのときまで、女奴隷に付いていたごとくである。もちろん、わたしたちは、ソロモンの罪ゆえにイスラエルがその子レハベヤムの治世のときに二分されることになったこと、(七)また、その民全体がカルデア人たちによって徹底的に荒廃せしめられて崩壊され、追い出されるまで、それぞれの部分が自分たちの王をもちながら分たれたままつづいたということを知っている。しかし、このことがサウルにどのような関係をもつというのであろうか。もしも何かそのようなことが脅かしとしてなされるべきであるとするなら、その脅かしはサウルに向けられるよりも、むしろダビデに向かってなされるべきであったろう。

というのは(罪をおかした)ソロモンはダビデの息子であったからである。けっきょく、現在ではヘブライの民族は分たれずに、同じ誤りのもとに結合して世界中いたるところに散在させられているのである。しかしながら、王国と民とを個人的な仕方で象徴したサウルという人物において神がこの同じ王国と民とを脅かしたところのあの分割は、永遠にして不可変のものとして表示されたのであって、それはつづいて加えられたことばによって示されている。「主は心を変えられない。人間は脅かすが、持ちこたえられない」。これはすなわち、主は人間のように悔いることはないからである。人間は脅かすが、持ちこたえられない。悔いることもない。主は人間のように悔いることはないからである。人間は脅かすのであるが持ちこたえられないけれども、神はそうではない、ということである。というのは、神が心を変えるとか悔いるとか読むばあい、それは、神の予知は不変でありつづけながら、事柄に変化があるということを意味しているからである。したがって、神は心を変えられないといわれるばあい、神のうちにはいかなる変化も存在しないという意味に解されるのである。

わたしたちは、じつに、これらのことばをとおして神のけっして取り消すことのできない、まったく永続する判決が、このイスラエルの民の分割にかんして宣告されたのを知るのである。というのも、その民からキリストへ移った者たち、いま移りつつある者たち、移るであろう者たち、——かれらはすべて神の予知にしたがってその民に属した者であったわけでもなく、また、人類の同じ一つの本性にもとづいてその民に属したわけでもないからである。じつに、イスラエル人のうち、キリストにつき、キリストのうちに留まりつづける者たちはすべて、この世の終わりまでその敵となりつづけるイスラエル人と共に存在することはけっしてないであろ

う。かれらはここに予告されているあの分離の状態にいつまでも留まりつづけることであろう。というのは、シナイ山から出たところの、奴隷となる者を生む旧い契約[八]は、新しい契約にたいする証言を提示するという理由においてのみ有益なものであるからである、そうでなければ、モーセの諸書が読まれるかぎり、覆いがかれらの心にかかっていることになる。しかし、だれでもその民からキリストへ移るときには、その覆いは取り除かれるであろう[九]。移っていく者たちの意図は、たしかに、古い人から新しい人に変えられることであって、それによって各人はもはや肉的な幸福を受けとることを志すのではなく、霊的な幸福を志すのである。そのことは、この偉大な預言者サムエルが、サウル王に油を注ぐまえになしたところの行為を説明するものである。

すなわち、サムエルはイスラエルのために主に向かって叫んだので、神はこれを聞かれた。そしてかれが燔祭をささげていたとき、異邦人たちが神の民とたたかおうとして近づいた。主は大いなる雷をかれらの上にとどろかせて、かれらは混乱し、イスラエルの前で狼狽し、敗れたのであった。そのとき、サムエルは一つの石を取って新しいミヅパと古いミヅパとの間に据え、それにラテン語で「助け人の石」を意味するエベネゼルという名を付けた。そして「主はいまに至るまでわたしたちを助けられた」といった[一〇]。ミヅパの町は「意図」[一一]と訳される。その「助け人の石」は救い主の仲介のことである。このかたをとおしてわたしたちは古いミヅパから新しいミヅパへと移らねばならないのである。すなわち、肉的な王国において肉的な至福――虚偽の至福――を期待するような意図から、天の王国において霊的な至福――真の至福

――を期待するような意図へと移るのである。このこと以上によりよきものはないゆえに、神は「いまに至るまで」わたしたちを助けられるのである。

(一)「サムエル記上」一五の二三以下。
(二)「テモテ人への第一の手紙」二の五。
(三)「詩篇」一一〇の一。
(四)「ヨハネによる福音書」一の四七。
(五)「ガラテヤ人への手紙」一の二四参照。
(六)「創世記」二二の一〇。
(七)「列王紀上」一二の一以下参照。
(八)「ガラテヤ人への手紙」四の二四参照。
(九)「コリント人への第二の手紙」三の一五以下参照。
(一〇)「サムエル記上」七の一二。
(一一) intentio.

第八章

ダビデにたいして与えられたその息子についての神の約束

さて、いまやわたしは、サウルのあと王位を継承したダビデ自身にたいして神がお与えになった約束について説明しなければならない。この王権の移行はかの最後の変転の徴表なのであった。その変転のために、これらすべてのことが神の力によって語られ、かつ記されているのであって、神が約束されたことが当面しているわたしたちの主題に関連しているのである。ひじょうな繁栄がダビデ王におとずれるようになったとき、かれは神のために家を建てようと考えたのであった。かれが心に抱いたのは、のちにその息子ソロモン王によってつくり上げられたところの、あの世にも名高い神殿であった。ダビデがこれを考えていたとき、主のことばが、王に伝えるため、預言者ナタンに下った。そのはじめの部分は、その家はダビデ自身によっては建てられないであろうこと、そして、きわめて長期間にわたって、自分のために香柏の家が建てられるようその民のだれにも命じたことはなかったこと、である。

次いで、つぎのようにいったのであった。「いま、あなたは、わたしのしもべダビデにこういいなさい。『全能の主はいわれる。あなたをわたしの民イスラエルの指導者とするために、羊に従っているところから取って、あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしは、地上の偉大なる者らのような大いなる名をあなたに得させよう。また、わたしの民イスラエルのために一つ所を定めて、かれらを植えつけ、かれらを自分のところに住まわせ、それ以上動くことのないようにするであろう。また、わたしがわたしの民イスラエルの上に判事たちを立てた日からこのかたのように、悪しき者らがかれらを悩ますことはない。わたしはあなたのすべての敵からまもりあなたに安息を与えよ

う。主はあなたに、あなたが主のために家を建てる、と告げられる。あなたの日が満ちて、あなたが父祖たちと共に眠るとき、わたしはあなたの身から出る子孫をあなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。かれはわたしの名のためにわたしに家を建てるであろう。わたしはその王位をいつまでも導く。わたしはかれの父となり、かれはわたしの子となるであろう。もしもかれの不正が生じたなら、わたしは人の笞と人の子のくだす同じわざわいでかれを打つであろう。しかしわたしはわたしの慈しみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから取り去ったようにかれから取り去ることはしない。かれの家とかれの王国とはわたしの面前にいつまでも固められており、かれの王位はいつまでも堅くせられる[一]』。

このかくも大いなる約束がソロモンにおいて成就したと考えるのは、はなはだしい誤りである。というのは、そのように考える者は、ソロモンがかの有名な神殿を建てたゆえに「かれはわたしに家を建てるであろう」ということばにのみ注目し、そして、「かれの家とかれの王国とはわたしの面前にいつまでも固められるであろう」ということばに注目していないのだからである。ソロモンの家に注意を向けねばならない。そこでおこったことを考えねばならない。すなわち、かれの家は虚偽の神々を拝する異国の女たちで満ちていたのであり、知恵ある人であった王自身、同じ偶像に誘われ、堕落していたのであった[二]。また、神はこの約束を欺瞞的な仕方で与えられたのだと想像したり、あるいは、神はソロモンとその家とがこのような状態になるであろうことを予知されなかったのだと考えたりしようとしてはならない。

しかし、これらの預言がいまや、肉によればダビデの子孫から生れられたわたしたちの主キ

リストにおいて成就されたことをわたしたちが見ていないとしても、このことについて疑ってはならない。それは、肉的なユダヤ人がいまなお探しているようにだれか他のかたを虚しくかつ徒らに探すことのないためである。じっさい、かれらは、この箇所を読んでダビデ王に約束された子がソロモンではなかったことまでは理解しているのであるが、しかし、かれらの盲目さはおどろくほどのものであって、約束された子がすでにこれほど明らかに告げられているときでさえ、なおも他のかたを待ち望むといっているのである。

たしかに、未来におこるべきもののいくらかの像は、ソロモンにおいても示されていた。かれは神殿を建設したのであった。その名にふさわしく平和を得ていたのであった(じっさい、ソロモンというのはラテン語で平和をつくり出す人という意味である)。また、その治世のはじまりにおいては、おどろくほどの称賛を受けていたのであった。けれども、ほかならぬソロモンその人は、来たるべきものの影によって主キリストを予告したのであって、かれがそれを現わしたわけではない。だからして、じっさいにおこった出来事によっても預言する聖書が、ある意味で、かれにおいて未来の像の下絵を描いているのに、あることについては、それがあたかもソロモン自身によって予告されたかのごとくに記されている。それというのは、かれの治世の諸々の出来事を記している聖なる歴史の諸書のほかに、『詩篇』第七十一篇も表題にかれの名を記しているからである。しかし、この『詩篇』には、ソロモンにあてることは到底できないと考えられるが、主キリストにはまったく明白に適合すると考えられる多くのことばが出ているのである。それゆえに、ソロモンにおいては一種の影のような下絵が描かれ、キリス

トにおいて現実そのものが差し出されるところの事実が存在するのである。ソロモンの王国を区切る境界はよく知られている。しかし、この詩において他のことは触れずにただ一つの点だけをあげるとすれば、「かれの支配は海から海まで、川から地の果てにまで及ぶであろう(三)」と読むのである。わたしたちは、これらのことばが成就したのはキリストにおいてであったことを知っている。事実、キリストの支配は川からはじめられたのであった。川でヨハネより洗礼を受けられ、その弟子たちによって認知されたのであった。かれらはキリストを師とよんだだけでなく、主ともよんだのであった。

さらに、ソロモンが自分の父ダビデの存命中に統治をはじめたことも(これはかれらの王のだれにも見られなかったことである)、このような仕方で、かれ自身はその父にたいして語られたあの預言によって指示された当の人ではなかったことをまったく明らかにするものでなければ何であろうか。すなわち、預言はつぎのようにいったからである。「あなたの日が満ちて、あなたが父祖たちと共に眠るとき、わたしはあなたの身から出る子孫をあなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう」。それゆえ、つづくことばが「かれはわたしに家を建てるであろう」といわれているからといって、これがいかにしてソロモンにかんして預言されたものと考えられるであろうか。むしろ、わたしたちは、それに先立って「あなたの日が満ちて、あなたが父祖たちと共に眠るとき、わたしはあなたの子孫をあなたのあとに立てるであろう」といわれているところにしたがって、他の「平和をつくり出す人」が約束されていると推断すべきではなかろうか。その人とは、ダビデの死ののち――ソロモンのようにその死の前にではなく

——立てられるべき人のことである。

というのは、イエス・キリストが来られるまでには、長い期間が介在したのではあっても、それは疑いもなくダビデの死ののちであった。このダビデにたいして、木と石によるのでなく、人間による、神のための家を建てるであろうところの、そしてそれを建てることがわたしたちをよろこばせるような家を建てるであろうところのかたの到来すべきことが約束されたのであった。使徒が「なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そしてあなたがたはその宮なのだからである」(四)と語っているのも、この家にたいして、すなわち、すべての忠実なるキリストの信仰者にたいしてである。

(一) 「サムエル記下」七の八—一六。
(二) 「列王紀下」一一の一以下参照。
(三) 「詩篇」七二の八。
(四) 「コリント人への第一の手紙」三の一七。

第九章

ナタンの預言に比せられる詩篇第八十八篇に見られるキリストについての預言

そのために、『詩篇』第八十八篇(一)にもダビデ王にたいしてなされた神の約束が述べられてい

るのであって、それは「エズラ人エタンの理解のために」と題されているものである。ここでは、『諸王国の書』(サムエル記)のなかに記されていることに相似したいくつかのことが語られている。たとえば、「わたしはわたしのしもべダビデに誓った。『わたしはあなたの子孫をとこしえに堅くしよう(二)』とある。さらに、「そのときあなたは幻をもってあなたの子らに告げていわれた。『わたしは力ある者に助けを与え、わたしの民のなかから選ばれた者を高くあげた。わたしはわがしもべダビデを得て、これにわが聖なる油を注いだ。わが手はかれを助け、わが腕はかれをつよくする。敵はかれによって益を得ることなく、悪しき者の子がかれを損なうこともない。わたしはかれの前にもろもろのあだを打ち滅ぼし、かれを憎む者らを去らせる。わがまこととわが慈しみはかれと共にあり、わが名によってかれの角は高くあげられる。わたしはかれの手を海の上におき、かれの右の手を川の上におく。かれはわたしに『あなたはわが父、わが神、わが救いの守り手』とよぶであろう。わたしはまた、かれをわが初子とし、地の王たちのなかのもっとも高い者とする。わたしはとこしえにわが慈しみをかれのために保ち、わが契約はかれのために堅く立つ。わたしはかれの家系をとこしえに堅く定め、その王位を天の日のようにながらえさせる(三)」。

すべてこれらの預言は、正しく理解されたときには、「しもべのかたち(四)」のゆえにダビデの名のもとに主イエスについて理解される。それは、ダビデの子孫に属し、同じ仲保者が処女から受けとられたかたちなのである。これにつづけて、かれの子どもの罪について言及される。まさしく『諸王国の書』(サムエル記)に見出されるのと同じであって、それはあたかもソロモ

ンにかんしてきわめて容易にあてはまるかのようである。その書では、つぎのようにいわれていたのであった。「もしもかれの不正が生じたなら、わたしは人の咎と人の子のくだす同じわざわいでかれを打つであろう。しかしわたしはわたしの慈しみをかれから取り去らない(五)」。この「人の子のくだすわざわい」とは懲らしめの打撃のことである。

だからして、「わが油注がれた者たちにさわってはならない(六)」ということばは、「かれらを傷つけてはならない」という意味でないなら何であろうか。ところで、『詩篇』においては、いわばダビデのことを扱っているかのようにして、同じ種類のことをそこでもいおうとしているのである。つぎのようにいわれている。「もしかれの子らがわが掟を捨て、わがさばきに従って歩まないならば、もしかれらがわが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしは咎をもってかれらのとがを罰し、むちをもってかれらの不義を罰する。しかし、わたしはわが慈しみをかれから取り去ることはない(七)」。

ダビデ自身について語られているのでなくかれの子らについて語られているのに、「かれから」とはいわれず、「かれから」といわれたのであって、これは正しく理解されるなら、同じだけの効力をもっているものである。というのは、教会のかしらであられるキリストご自身にはいかなる罪も見出されないからである。その罪は、神の慈しみは変らずに保たれているのに人間の非難によって正されねばならぬような罪のことである。かえってそのような罪は、かれの身体、かれの肢体、すなわちキリストの民のうちに存在する。したがって、『諸王国の書』(サムエル記)では「かれの不正」といわれているが、『詩篇』では「かれらの不義」といわれ

ているのである。これは、かれの身体についていわれることは、ある意味では、かれ自身についてもいわれるということをわたしたちが悟るためである。このことゆえに、サウロがその身体すなわちかれを信ずる人たちを迫害したとき、かれ自身が天から「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか(八)」といわれたのであった。

次いで『詩篇』のつづく句においていっている。「わたしはわがまことにそむくことはない。わたしはわが契約を破ることなく、わが唇から出たことばを取り消すことはない。わたしはひとたびわが聖によって誓った。わたしはダビデに偽りをいうであろうか(九)」。——これはすなわち、「わたしはけっして偽りをいわない」ということである。これは聖書の慣用とする語り方である。何の偽りをいわないのかということについて、かれは加えていっている。「かれの家系はとこしえにつづき、かれの位は太陽のようにわたしの前にある。月のようにとこしえに堅く立てられ、大空における忠実な証しとなる」。

(一) この第八十八篇というのは七十人訳によるもので、現行の訳では第八十九篇に当たる。
(二) 「詩篇」八九の三以下。
(三) 同上、八九の一九—二九。
(四) 「ピリピ人への手紙」一二の七参照。
(五) 「サムエル記下」七の一四以下。
(六) 「詩篇」一〇五の一五。
(七) 同上、八九の三〇以下。

（八）「使徒行伝」九の四。
（九）「詩篇」八九の三三―三七。

第十章

神の約束と地上のエルサレムの歴史とのあいだに見られる相違の意味について

このような重要な約束が堅く確証されたのち、詩人は、その預言がソロモンにおいて完了されたと考えることのないよう、これらのことは待望されたのであって現に見出されたのではないことを示唆して、つぎのように付け加えている。「しかし主よ、あなたはかれをしりぞけ、無に帰せられた(一)」。じっさい、このことはその子孫らのもとでソロモンの王国におこったところのことであった。かれらの歴史はその王国の座であった地上のエルサレム自身の転倒、とりわけ、ソロモンによって建てられたあの神殿の破壊で頂点に達した。けれども、神がご自身の約束に違反するようなことをなさったとわたしたちが考えることのなきよう、すぐに(詩人は)つづけて「あなたはあなたの油注がれた者を延ばされた(二)」といっている。

それゆえに、もしも主の油注がれた者が延ばされたのなら、その者は、ソロモンでもなければダビデ自身でもない。かの神秘的な聖油をもって聖別されたすべての王が「主の油注がれた者」とよばれたのであるからには、それはたんにダビデおよびそれにつづく王のみならず、あ

の民において最初に油注がれた王であったサウルもそうであった。たしかに、ダビデ自身、サウルを「主の油注がれた者」とよんだのであった。それにもかかわらず、これらの王が預言的な塗油によって象徴的にあらわした唯一にして真なる「油注がれた者」が存在したのであった。その者がダビデやソロモンと同一であると考えた人びとにしたがえば、その真の「油注がれた者」の到来はずっと延ばされていたのであるが、神の計画においては、神ご自身のときに、そのかたの来たるべきことはすでにととのえられていたのである。

それで『詩篇』は、そのかたの到来が延ばされていたあいだに、いずれにしてもその支配を待望していた地上のエルサレムの王国に何がおこったのであるか、加えて語っている。「あなたはそのしもべとの契約を廃棄し、かれの聖性を汚され、それを地に投げ打たれた。あなたはその城壁をことごとく壊し、その砦に恐れをもたらされた。そこを通り過ぎる者はみなかれを掠め、かれはその隣り人のあざけりとなった。あなたはかれのあだの右の手を高くあげ、そのもろもろの敵を喜ばされた。あなたはかれを助けるはずの剣の刃をかえし、戦いに立たせられなかった。あなたはかれの汚れのない装いを奪い、かれの王座を地に投げ捨てられた。あなたはかれの主権の日を縮め、恥をもってかれを覆われた[三]」。

すべてこれらのことは女奴隷であるエルサレムにおこったことであったが、そこではいくらかの自由女の子らも治めていたのであった。かれらは無常的な職務にあってその王国をまもりながら、真の信仰によって天上のエルサレムの王国――かれらはその子どもなのである――を持ち、望みをまことのキリストにおいていたのであった。しかし、これらのことがいかにして

おこったかは、その史実的な記録において、よく読むなら、明らかに示されるであろう。

(一)「詩篇」八九の三八。
(二) 同上、八九の三八。
(三) 同上、八九の三九―四五。

第十一章

神の民の、受肉によってキリストのうちに存する実体について

これらの預言ののち、預言者は神への祈願へと転じるのである。けれども、祈願そのものは預言の行為ともなっている。「主よ、いつまでなのですか。とこしえにそむけられるのですか(一)」。わたしたちは、他の篇にあるような「いつまで御顔をわたしからそむけられるのですか(二)」という例にならって「あなたの御顔を」と補おうとおもう。ここで、「そむける」の代りに、ある写本では「そっぽを向く」と読まれるのもそのためである。しかし、考えられうる解釈としては、「あなたがダビデに約束された慈しみをそむけられる」であろう。また、「とこしえに」というのはどういう意味であろうか。それは「終わりに至るまで」ということであろう。

「終わり」というのは、かの民がキリスト・イエスを信じるようになる最後のときと解されるであろう(三)。その終わりの前には、(詩人が)さきに嘆いたような悲惨なことがおこらなければ

ならない。そのつぎのことばもそのゆえである。「あなたの怒りは火のように燃える。わたしの実体がいかなるものであるかをみこころにとめてください(四)」。これは、キリストがご自身の肉の本性をそこから得られたところの、かの民の実体としてのイエスにかんするものと解するより以上に良い解釈はないであろう。『詩篇』は「あなたは人の子を虚しくつくられなかったからである」という。イスラエルの「実体」であられる「唯一の人の子」が存在されなかったなら、人の子らは虚しくつくられたであろうことは確かである。この「人の子」とは、そのかたをとおして多くの人の子らが自由を得させられるところのかたである。

しかしながら、いまや、すべての人間の本性は最初の人間の罪によって真理から虚無へと転落してしまっているのである。このゆえに、別の『詩篇』は「人は虚しいもののごとくになり、その日は過ぎゆく影にひとしい(五)」といっている。しかし、神はすべての人の子らを虚しくつくられたのではないのであって、なぜかといえば、神が仲保者なるイエスをとおして多くの人間をこの虚無から解放されることを知っているからである。予知によって解放されるべきではないと知っていた者たちについても、神は、それらの者を、解放されるべきであった者たちの益のために、また、相互に相反する二つの国のあいだの対照を際立たせるために、おつくりになったのであった。このようにそれらがつくられたことは虚しいことでなかったのは確かである。それは、理性的被造物全体のうちに、至高の美と正しさとを按配される秩序によって立てられているのである。そして、「だれか生き、死を見ず、その魂を陰府(よみ)の手中から救う者があるであろうか」とつづけられている。

じっさい、ダビデの子孫から出たイスラエルの「実体」であられるキリスト・イエスでないなら、それはだれであろうか。このかたについて使徒はいっている。「死者のなかからよみがえらされて、もはや死ぬことはなく、死はもはやかれを支配しないであろう」[六]と。このように、かれは生き、そして死を見ることはない。すくなくともはじめに死んだのであるが、陰府の手中からご自身の魂を救い出したのであって、かれは死者のなかのある者から陰府の足枷を解くためにそこへ下られたのである。さらに、かれは福音書のなかで語っておられるあの権能によってご自身の魂を救い出されたのであった。「わたしはわたしの命を捨てる力をもっており、またそれをふたたび取りもどす力をもっている」[七]。

(一)「詩篇」八九の四六。
(二)同上、一三の一。
(三)本書第二十巻第二十九章参照。
(四)「詩篇」八九の四六以下。
(五)同上、一四四の四。
(六)「ローマ人への手紙」六の九。
(七)「ヨハネによる福音書」一〇の一八。

第十二章

神の昔の慈しみを求める者はだれであるか

この『詩篇』の他のところはつぎのようになっている。「主よ、あなたがあなたのまことの誓いをもってダビデに約束された昔の慈しみはどこにあるのですか。主よ、あなたのしもべが受けるはずかしめをみこころにとめてください。わたしはもろもろの民のはずかしめを心に抱いているのです。主よ、あなたの敵はののしりました。かれらはあなたの油注がれた者の変容をそしりました」(一)。——さて、当然のことであるが、つぎのように問われるであろう。これは、ダビデになされたこの約束を受けることを切望していたイスラエル人たちのなかの人物によって語られたものであるか、それとも、むしろ、肉によるのではなく、霊によるイスラエル人であるところのキリスト教徒たちのなかの人物によって語られたものであるか。

これらのことばは、たしかに、その『詩篇』の表題がその名からとられることになったあのエタンの時代に語られ、記されたものである。そしてそれはダビデの統治と同時期である。このゆえに、「主よ、あなたがあなたのまことの誓いをもってダビデに約束された昔の慈しみはどこにあるのですか」というのは、これらの約束がダビデにたいしてなされたこの時期が「昔」であるような、ずっとのちの時期に出ることになった人びとのなかの人物においてこの預言が

変容されるのでないなら、このように語られはしなかったであろう。これは、もろもろの民がキリスト教徒たちを迫害していたときに、かれらはキリストの受難をもってかれらをそしったことを意味していると解される。つまり聖書はこの受難のことを、死ぬことによって不死となられたゆえに、キリストの「変容」とよんでいるのである。

このような理解にしたがえば、キリストの「変容」はまた、イスラエル人たちにたいするそしりとも受けとられうるであろう。なぜなら、キリストはかれらの救い主として来られることを待望されていたのに、じっさいには異教徒たちの救い主となり、そして、新しい契約をとおしてかれを信じた多くの民が、いまやこのことをイスラエル人たち——かれらはなお旧い契約のうちにとどまっている——にたいするそしりとするからである。そのため、「主よ、あなたのしもべが受けるはずかしめをみこころにとめてください」といわれるのは、主がこれらのしもべを忘れずに、むしろあわれまれるなら、かれら自身がこの恥辱ののちに信じるようになるであろうからである。

けれども、さきにわたしが示唆した解釈のほうがいっそう適切であるようにおもわれる。というのも、「主よ、あなたのしもべが受けるはずかしめをみこころにとめてください」という叫びは、もしもそれがキリストに敵対する者たちに結び合わされるなら——キリストがその者たちを捨てて異教徒のほうへ移られたという理由で、その者たちがそしりを受けることになって——つじつまがあわないからである。そのようなユダヤ人たちが「神のしもべ」とはよばれないはずである。かえって、これらのことばはつぎのような者たちにこそ適わしいのである。

すなわち、キリストの御名のゆえに苛酷な迫害の卑劣さを耐え忍ぶときに、上なる王国がダビデの子孫に約束されたことを想い起こし、それを熱望しながらうったえて、絶望することなく求め、たずね、叩きつつ、「主よ、あなたがあなたのまことの誓いをもってダビデに約束された昔の慈しみはどこにあるのですか。主よ、あなたのしもべが受けるはずかしめをみこころにとめてください。わたしはもろもろの民のはずかしめを心に抱いているのです（すなわち、わたしはわたしの内面において忍耐して持ちこたえているのです）。主よ、あなたの敵はののしりました。かれらはあなたの油注がれた者の変容をそしりました」とうったえる者たちである。あの者たちはそれを変容というよりも破壊であると見なしているのである。「主よ、みこころにとめてください」というのは、「あわれみをたれてください。そして忍耐して持ちこたえている謙遜にたいし、あなたがあなたのまことの誓いをもってダビデに約束された高揚をもって応えてください」というのでないなら何であろうか。

ところで、これらのことばをユダヤ人たちに当てがうとすれば、それは、イエス・キリストが人間の姿をとって生れられる前に、地上のエルサレムの略奪ののち捕われていったあの「神のしもべたち」がそのようにうったえることができたのであろう。そのばあい、かれらは、この「油注がれた者の変容」を、たとえばソロモンのごく短い年月の治世のあいだに見られたようなこの世的で肉的な幸福でなく、信仰をもって待望されるべき天上的で霊的な幸福と解しているのである。当時、不信仰な民はそのような幸福について無知であって、神の民にたいして勝ち誇り、その捕囚によってののしっていたのであった。無知なる者が知る者をののしるので

あって、かれらがはずかしめていたのは「油注がれた者の変容」でなくて何であったであろうか。

そのようなわけで、この『詩篇』をしめくくるにあたってつぎのようなことばがつづけられるのである。「主の祝福がとこしえに。アァメン、アァメン[三]」。このことばは、天上のエルサレムに属する民の全体に——すなわち、新しい契約が啓示される前、旧い契約の時代に隠されていた者たちにおいてであれ、あるいは、新しい契約が啓示されてのち、明らかにキリストに属するとわかる者たちにおいてであれ——大いに適わしいことである。じっさい、ダビデの子孫にたいする主の祝福は、ソロモンの時代に見られたような、ある限られた期間に望まれるべきものであるのでなく、とこしえにつづくことこそ望まれるべきものである。この上もなく確かなその希望によって、「アァメン、アァメン」といわれるのである。

このことばのくり返しは、その希望の確認である。わたしたちがそこから逸れてこの『詩篇』を扱うことになった『諸王国の書』(サムエル記)の第二の書において、ダビデは、「あなたはあなたのしもべの家のためにはるかのちのことを語られた[三]」というとき、このことを理解しているのである。さらに、そのすこしあとのところで、「どうかいま、あなたのしもべの家を、とこしえに始められ、祝福されますように」というのであるが、それは、そのときかれに子どもが生れようとし、その子から出てその後裔がキリストにまで至り、キリストによってかれの家は永遠なものと定められ、神の家となるはずであったからである。すなわち、その子孫がダビデの種属から出るのであるがゆえにダビデの家であるが、しかし、それが石から建てられた

のではなく、人間から建てられた神の神殿であるゆえに、神の家でもあるのであって、そこにおいて民は永遠にかれらの神と共に、そしてかれらの神のうちに住み、神もその民と共に、そしてその民のうちに住まわれるからである。このように、神がすべてにおいてすべてとなられるとき[四]、神はその民を満たし、民はその神によって満たされる。ご自身は、戦さにおいてわたしたちの力であられるように、平和においてはわたしたちの報酬であられるからである。

このようなわけで、「主はあなたが主のために家を建てると知らせられるであろう[五]」というナタンの言葉は、のちに、ダビデのことばにおいて、「全能の主、イスラエルの神よ、あなたはしもべに示して『あなたのために家を建てよう』といわれました」とくり返されたのであった。すなわち、わたしたちはこの家を善き生を生きることによって建て、神もわたしたちがそのように生きるよう助けられることによってお建てになるのである。「主が家を建てるのでなければ、建てる者のはたらきは虚しい[六]」からである。この家の最後の奉献のときがくれば、そのときには、神がナタンに語られたところのことが成就されるであろう。「そしてわたしは、わたしの民イスラエルのために場所を定め、かれらをそこに据えよう。かれらはみずからそこを動かず、それ以上悩まされることはないであろう。そして、わたしの民イスラエルの上に裁き人らを立てた日からこのかたのように、悪しき者の子らがかれらをはずかしめることはないであろう[七]」。

(一)「詩篇」八九の四九以下。
(二) 同上、八九の五二。

(三)「サムエル記下」七の一九、二九。
(四)「コリント人への第一の手紙」一五の二八。
(五)「サムエル記下」七の一一、二七。
(六)「詩篇」一二七の二。
(七)「サムエル記下」七の一〇以下。

第十三章

約束された平和の成就の時期について

これほどの大いなる善を、この世においてそしてこの地上で望む者はだれも、愚かな仕方で知恵をもつ者である。この善がソロモンの治世のときの平和において十分にかなえられたとだれがおもうであろうか。たしかに聖書はその平和を卓越した預言によっておこるべきものの影として描いてはいる。しかし、そのような推測にたいしては注意深く異議を立てるのである。すなわち、「悪しき者の子らがかれらをはずかしめることはないであろう」といったあとで、「わたしの民イスラエルの上に裁き人らを立てた日からこのかたのように」とつづけているのである。

そこでは、王たちの統治のはじまる前は、民が約束の地を受けたときから、裁き人たちがそ

の民の上に立てられていたのであった。とにかく、悪しき者の子らすなわち外国の敵は、平和と戦いとが入り替わりおとずれたと読まれているこの期間を通じてかれらをはずかしめたのであった。その時代を通じて、ソロモンが支配した四十年間に享受した平和よりもより長くつづいた平和の期間が見出されるのである。たとえば、エホデといわれる裁き人のもとでは、八十年間の平和の期間が存したからである。[一] それゆえ、この約束において予告されたのはソロモンの時代であったと考えてはならない。ましてだれか他の王の治世についてはなおさらである。というのは、他の王たちのだれも、ソロモンのようには平和のうちに支配した者はいなかったからである。しかし、その民は、敵によって征服される恐れをもたないほど堅固にその王国を保持したわけではなかった。事実、人間的なことがらの変易性はまさにそのようなものであるから、いかなる民もこの世の生において敵の襲撃の恐怖を免れるほどの平穏をかつてゆるされたことはなかった。それゆえ、そのような平和と安全の居所として約束されたかの場所は永遠であり、また「自由である母なるエルサレム[二]」の永遠なる存在にたいして留保されているのである。かの場所においてはかれらは真にイスラエルの民となるであろう。というのは、「イスラエル」とは「神を見る」を意味するのだからである。[三] わたしたちは、この報酬を切に望みつつ、この苦悩に満ちた巡礼の旅路のあいだ、信仰によって導かれて敬虔な生をいとなむのでなければならぬ。

（一）「士師記」三の三〇。エホデはベニヤミン族出身のイスラエルの判事（師士）のひとりである。
（二）「ガラテヤ人への手紙」四の二六。

（三）本書第十六巻第三十九章参照。

第十四章

詩篇とダビデの関係について

このようにして、神の国の時間的な進行によって、最初にダビデが来たるべきものの影であったこの世のエルサレムにおいて統治したのであった。さて、ダビデはひじょうに歌に秀でた人であった。かれは音楽の調和を愛した。とはいえ、かれは、音楽というものがたんなる楽しみとなっているようなありふれた人ではなかったのであって、かれは音楽を信仰的な意図をもって尊重したのであった。かれは、きわめて重要なことがらの神秘的な形象を与えることによってそれを、真の神であられるかれの神の奉仕に用いたのである。というのは、正しい比によって調整された多様な音色の和合というものは、調和のとれた多様性のうちに共に融合されて、よく秩序づけられた国の一性を暗示しているからである。つまり、かれの預言のほとんどすべてのものは詩によって書かれて、わたしたちが『詩篇』とよぶところの書はその百五十篇を包含しているのである。

ある人びとは、かれの名をもって記されている『詩篇』のみがかれによってつくられたものとしている。また、他の人びとは、頭に「ダビデ自身の」と付せられているもの以外のものは、

かれの作になるものではないと考える。表題に「ダビデ自身のために」と付せられたものは、別人によってダビデ個人に結び合わせるような仕方でつくられたものとするのである。このような意見は福音書のなかで救い主ご自身の発言によってしりぞけられている。そこでは、ダビデが霊感に導かれてキリストは自分自身の王であるといわれているのであって、『詩篇』第百九篇は「主はわが主にいわれる。『わたしがあなたの諸々の敵をあなたの足の下におくまで、わたしの右に座せよ』(一)」ということばではじまっているからである。たしかにこの詩は、その表題において「ダビデ自身の」と付せられているわけでなく、多くの『詩篇』と同様、「ダビデ自身のために」となっているのである。

しかしながら、わたしにとっては、百五十篇の『詩篇』のすべてがダビデの作によるものとして、かれが、そのあるものにことがらと関連をもつ何ごとかを象徴的にあらわしている他の人の名をもって前書きとしたのであるが、他のものはその表題にいかなる人の名ももたぬよう決定したのだと判断する人のほうがより信憑性があるとおもわれるのである。同様に、かれがこの多様な配置をおこなったのも、主が霊感を与えられたからであって、その意図は隠されたものであるが、だからといって空しくなされた配置ではないのである。この書のなかのいくつかの『詩篇』にはダビデの治世のずっとのちの時代に存在したいくらかの預言者たちの名が付せられていて(二)、そこでは、これらの『詩篇』の内容があたかもかれらによって語られたかのように記されていると読まれるとしても、そのことによって、いま述べたことを信じないように動かされてはならない。

というのは、預言的な霊は、ダビデが預言していたときに、来たるべきこれら預言者たちの名をかれに啓示して、その結果、かれらの個性に適合した何ごとかが預言的な仕方でうたわれるようにしたということは、ありえないわけではないからである。それは、それから三百年以上ものちのことであったヨシヤ王の誕生と統治とが、その名と共に、その未来の行為を予告したところのひとりの預言者に啓示されたのと同様である。(三)

(一)「詩篇」一一〇。
(二)ハガイおよびゼカリア(七十人訳)。
(三)「列王記上」一三の二。

第十五章

詩篇におけるキリストと教会とにかんする預言について

さて、この書のこの箇所で、いまわたしに期待されているところのことは、『詩篇』において主なるイエス・キリストおよびその教会についてダビデがどのように預言しているかを明らかにすることであるとおもわれる。わたしは(これを一つの『詩篇』においてすでにおこなったのではあるけれども)素材の不足によるよりもその豊かさによってこの期待が要求するようなことを妨げられていたのである。というのは、冗長になるのを避けるため、すべてのことを述

べることはできないからである。

他方、もしもわたしがいくつかのものを限定して選ぶなら、それについて精通している多くの者たちにとっては、わたしが必要なものを省略してしまっていると見られることをおそれる。さらに、例証としてあげられた証言は『詩篇』全体の脈絡によって支持される必要があるであろう。たとえすべてのものが支持されるとまではいわずとも、すくなくとも反駁されるような何ごともないことを示す範囲でそうでなければならない。そうでなければ、つぎはぎ細工の方法を用いて選んだことがらに適した短い抜粋をいわばわたしが収集しているようにおもわれるのではないであろうか。つまり、当面していることがらについて書かれたのではなく、何か他のものはなはだしくかけはなれたことについて書かれていると見られる大きな詩から取られているわけである。

ところで、これをいずれもの『詩篇』において明らかにすることができるためには、その全部のものが説明されねばならない。これはあまりに大きな仕事であって、他の人びとの書物から、また、わたしがおこなったようなわたしたちの書物から[一]、十分に見られるとおりである。これを欲し、なしうる人はこれらの書物を読まれるがよいであろう。その人は、キリストおよびその教会について――すなわち王と王が建設された国について――王であり預言者でもあったダビデによって、いかに多くの、そしてどれほど重要な預言がなされたかを見出すであろう。

(一) アウグスティヌス『詩篇講解』

第十六章

詩篇第四十五篇におけるキリストおよびその教会にかんする証しについて

どのようなことがらについても、本来的で明白な預言の陳述があるけれども、比喩的な陳述も必らずといってよいほどそれらと混じっているものである。それらはとくに呑み込みの遅い人の益となるよう論じたり陳開したりする厄介な仕事を学者に課するものである。たとえ、いくらかのものについては理解するのに容易でなく、その説明には暇を要するものが残るとしても、それらのうちのあるものは、それが語られるやいなや、ただちにキリストとその教会のことを示していることがわかる。そのようなものとして、同じ『詩篇』の書のなかに、つぎのようなものがある。「わたしの心は善きことばを吐き出した。わたしは王にわたしの詩を語る。わたしの舌はすみやかに物書く人の筆のようである。あなたの姿は人の子らにまさって美しく、あなたの唇には気品がただよう。そのために神はとこしえにあなたを祝福された。いと雄々しき者よ、威厳と美とをもって、腰に剣を帯びよ。真理と慈悲と正義とのために、勝利を得て乗り進み、支配せよ。あなたの右の手はおどろくべきわざを見せるであろう。いと雄々しき者よ、あなたの矢は鋭く、もろもろの民はあなたの力の下に倒れ、王の敵の胸をつらぬく。おお、神よ、あなたの王座は世々とこしえに限りなくつづき、あなたの王の杖は公平の杖である。あな

たは正義を愛し、悪を憎む。そのため、神、あなたの神は、あなたのともがらのだれにもまさって喜びの油をあなたに注がれた。没薬(もつやく)、蘆(ろ)かい、肉桂はあなたの衣から、象牙の家から香りを放っている。そこからは王の娘たちが出て、あなたの栄光をたたえるため、あなたを喜ばせる」(こ)。

どれほど呑み込みが遅くとも、このところで、その王座が世々とこしえに限りない神についてきくとき、わたしたちが告げ、わたしたちが信じているキリストを認めない者がいるであろうか。神によって油注がれたる者、すなわち可視的な油によってではなく、霊的で知性的な聖油によって神が油を注がれたと解するところの「油注がれたる者」のことである。キリストの名が聖油すなわち頭に油注がれることからそのようによばれたのであることを知らないほど、わたしたちの宗教について無知なる者、あるいは、ひろく行き渡って知られたその名声に耳の遠い者がだれかいるであろうか。

しかし、キリストを王と認めたときには、ここで比喩的に述べられている他のこと、すなわち、形姿が人の子らにまさってどのように優美であるのか、それがたんなる物体的な優美さでないためになおいっそうのこと愛され、感嘆されるべきものであること、かれの剣、かれの矢、そしてそのような仕方で本来的な字義どおりでなく比喩的に表現されているそのほかのものについて、真理と慈悲と正義のゆえに支配するその王に服従しつつ暇をかけて探求するのがよいであろう。

つぎに、霊的な結婚と神的な愛とによってこれほどの偉大な夫と結婚したキリストの教会に

注意を向けるがよいであろう。この教会についてはこのようにいわれているのである。「王妃は多くの色をもった金色の衣服をまとって、あなたの右の手に立つ。娘よ、きけ、そして耳を傾けよ。あなたの民とあなたの父の家とを忘れよ。王はあなたの美しさを慕うであろう。なぜならかれ自身はあなたの神であるからである。ツロの娘たちは贈り物をもってあなたをあがめ、民のうちの富める者もあなたの好意を乞い求めるであろう。王の娘の栄光はすべて殿の内にあり、黄金のふさ飾りを織り込んだ衣を着ている。そのおとめたちはかの女にしたがって王のもとに導かれ、その供(とも)びとらはあなたのもとに導かれる。かの女らは喜びとたのしみとをもって導かれ、王の神殿に導き入れられる。あなたの父祖たちに代って子どもらが生れ、あなたはかれらを全地の上に君となすであろう。かれらはあなたの名をよろずの代にわたって記憶するであろう。このゆえにもろもろの民はとこしえに限りなくあなたをほめたたえるであろう」(二)。

ここには、たんなる女性のことが語られ、描かれていると考えるほどに愚かな者がいるとはわたしは考えない。これはたしかに、「おお、神よ、あなたの王座は世々とこしえに限りなくつづき、あなたの王の杖は公平の杖である。あなたは正義を愛し、悪を憎む。そのため、神、あなたの神は、あなたのともがらのだれにもまさって喜びの油をあなたに注がれた」と語られているかたの妻のことである。というのは、かれらはキリストに従う供びとであって、あらゆる民におけるかれらの統一と和合とからその王妃は存在するようになるのだからである。他の『詩篇』において「大いなる王の都(三)」と描かれているごとくである。

この王妃は霊的な意味におけるシオンである。シオンという名はラテン語で「熟視(四)」と訳さ

れる。すなわち、かの女のすべての志しはそこへ向けられているのであるが、それは来たるべき時代の大いなる善を熟視しているからである。かの女は、同じように霊的な意味におけるエルサレムでもある。それについてはすでにわたしは多くを語ってきたのであった。かの女の敵はバビロンであり、「混乱」を意味する悪魔の都である。[五] しかしながら、この王妃は、もろもろの民のあいだで、再生によってそのバビロンから解放され、もっとも悪しき王からもっとも善き王へと、すなわち悪魔からキリストへと移るのである。それゆえにこそ、「あなたの民とあなたの父の家とを忘れよ」とかの女に語られているのである。

信仰によるのでなくただ肉によるのみであるイスラエル人も、かの不信仰の都の一部分である。かれらはこの大いなる王自身とその王妃とに敵対する者である。キリストはかれらのもとに来られたのであるが、かれらによって殺害され、むしろ他の人びとのキリストとなられたからである。それは、ご自身がその受肉された生によってご覧にならなかった人びとのことである。だからして、わたしたちの王であるキリストご自身が『詩篇』の一つでいっておられるのである。「あなたは民の争いからわたしを救い、わたしをもろもろの民のかしらとされました。わたしの知らなかった民がわたしに仕えました。かれらはわたしのことを耳にすると、わたしに従いました[六]」。

それゆえに、キリストがその身体において現存しておられたときにはご存知のなかった異邦人たちの民は、それにもかかわらず、キリストがかれらに伝えられたとき、キリストを信じたのであった。それで、かれらについて、「かれらはわたしのことを耳にすると、わたしに従い

ました」といわれているのも正当なことであって、それというのは、「信仰は聞くことからくる」(七)ゆえである。わたしはいうが、肉によっても信仰によっても真のイスラエル人に加えられたこの民は、神の国すなわちキリストご自身をも生んだところの国である。当時、この民はただこのようなイスラエル人のうちにのみ存立したのであった。処女マリアはたしかにそこから出た人であり、かの女においてキリストは人となるために肉を取られたのである。この国について他の『詩篇』はつぎのようにいっている。「ひとは『母なるシオン』というであろう。『ひとはかの女のうちに生れ、いと高き者みずからシオンを堅く立てられた』(八)。

この「いと高き者」とは神でなくてだれであろうか。それゆえ、かの国においてマリアによって人間となられる前に父祖と預言者とによってそれを建てられた神なるキリストである。したがって、いまわたしたちがその成就を見ているところのものは、この王妃にたいしてはるか以前に「あなたの父祖たちに代って子どもらが生れ、あなたはかれらを全地の上に君となすであろう」と語られていたのであった(というのは、民が来たるべき世々にわたって永遠の賛美を告げるためにかれらが共に集まるとき、かの女の子らが全地にわたってその父祖たちとして指導に立ったのである)。疑いもなくここで語られているところのことは、ややあいまいであるけれども、それがどのように理解されるにしても、これらのまったく明白な事実と一致しているべきである。

(一)「詩篇」四五の一―九。
(二)同上、四五の一〇―一七。

(三) 同上、四八の二。
(四) speculatio.
(五) 本書第十六巻第四章参照。
(六) 「詩篇」一七の四四以下。
(七) 「ローマ人への手紙」一〇の一七。
(八) 「詩篇」八七の五。

第十七章

キリストの祭司職および受難にかんする詩篇

キリストが王として語られているのを見たが、それと同じように、あの『詩篇』では、かれは祭司として示されている。それはまったく明らかなことばでいわれている。「主はわが主にいわれる。『わたしがあなたの諸々の敵をあなたの足の下におくまで、わたしの右に座せよ』(一)。キリストが御父の右手にすわられるということは信じられるのであって、眼に見られるのではない。その敵がそのかたの足の下におかれるということもまだ明らかではない。しかし、これはおこるであろうし、終わりのときに明らかとなるのであろう。これもまた、いまは信じられ、のちに眼に見られるのであろう。しかし、それにつづく「主はあなたの力ある杖をシオンから

送り出される。あなたはあなたの諸々の敵のなかで治めよ」ということばはきわめて明白であるので、それを否定するのは、不信仰と不幸であるのみならず、恥知らずともなるであろう。
じつに、わたしたちの敵でさえ、わたしたちが福音とよんでいるキリストの律法がシオンから送り出されたことを認めており、わたしたちはそれを「力ある杖」として認めている。かれが「諸々の敵のなかで治めている」ということは、かれが治められるその敵――かれらは歯ぎしりをし、みずから消耗して、(三)かれに対抗しては何ごともなしえないのである――によっても証明されているのである。
そのすこしあとに、「主は誓いを立てて、み心を変えられることはない」ということばがあるが、これによって、つづく「あなたはメルキゼデクの家系にしたがってとこしえに祭司である」ということばの不可変の性質を表示しているのである。すでにこのときにはアロンの系統における祭司職と犠牲とはどこにも存在しないこと、そして、キリストの祭司職のもとには、メルキゼデクがアブラハムを祝福したときにささげられたところのものがいたるところに存在していたこと、(三)――これらの事実が与えられていることから、これらのことばがだれについて語られているのか、だれか疑ってよいであろうか。
したがって、同じこの『詩篇』でいくらかあいまいに表現されていることがらも、正しく受け取られるなら、この明白な事実に関連しているのである。わたしはすでに人びとにたいする説教でこれらのことを述べたのであった。キリストが預言によってご自身の受難について語っておられる『詩篇』においても同じものを見るのである。「かれらはわたしの手と足とを刺し貫

いた。かれらはわたしの骨をことごとく数えた。かれらは目をとめて、わたしを凝視した」(四)(これらのことばによって、たしかに、かれは刺し貫かれた手と足とをもって釘によって打ちつけられ、十字架上にひろげられたからだのこと、そしてかれを見つめ凝視する者らのためにこのようになったこの見世物のことを指示しておられるのである)。つぎのように加えられている。

「かれらはたがいにわたしの衣服を分け、わたしの着物をくじ引きにする」。そして福音書はこの預言がいかにして成就されたかという史実的説明をおこなっている。『詩篇』ではあまり明白に示されていない他のことばが存在しているが、これほどの明白さによって明らかな箇所と適合しているとき、確かに、そして正しく解されるのである。ことに、過ぎ去ったこととして信じているのではなく、現在のこととしてわたしたちの見るところのものが、この同じ『詩篇』においてかくも以前に告げ知らされたように、いま全地にわたってはっきりと知られるからである。

たとえば、その『詩篇』のすこしのちに語られていることばもそうである。「地の果ての者はみな思い出して主に帰り、諸々の国の種属はみな御前に礼拝するでしょう。王国は主のものであって、主は諸々の国民(くにたみ)を統べ治められるからである」(五)。

(一)「詩篇」一一〇の一。
(二) 同上、一一二の一〇参照。
(三)「創世記」一四の一八。
(四)「詩篇」二二の一六。

（五）同上、二二の二七以下。

第十八章

詩篇において預言されている主の死と復活について

さらに、『詩篇』の告知はそのかたの復活についても黙しているわけではない。『詩篇』第三篇において、「わたしは伏して眠り、また目を覚ます。主がわたしを支えられるから」とうたわれているのは、それ以外の何であろうか。眠ってまた目を覚ますということが重要なことであるとわたしたちが知るよう、預言者が欲したのだ、などと信じるほどだれか愚かな者がいるであろうか。その眠りとは死のことであり、その目覚めとは復活のことである。詩人はキリストの死と復活にかんする預言をこのような仕方で預言しなければならなかったのである。じっさい、このことは『詩篇』第四十篇にいっそう明瞭にあらわれている。そこではいつもの仕方で、未来の預言が仲保者ご自身の口をとおして、あたかも過去の出来事を語るかのように語られているのである。それというのも、来たるべき出来事は、神の予定と予知のうちにすでに存在したからである。

「わたしの敵たちは邪意をもってわたしにいう。『いつかれは死に、その名が滅びるであろうか』と。もしもだれかがわたしを見ようとしてやってくるとき、かれの心は虚しいことを語

り、その心によこしまを積み重ねる。かれらは外に出て、ひとつになって共に語る。わたしの敵はみな、わたしに向かってささやく。かれらはわたしに対してわざわいをおもいめぐらす。かれらはわたしに対してよこしまなことばをいいふらすのだ。『眠っている者が、ふたたび起き上がるようにならないであろうか』と[三]」。

ここでは、たしかに、「死んだ者がふたたびよみがえるようにならないであろうか」といわれるのと同じ意味を暗示することばとして置かれているのである。じっさい、そのはじめのほうのことばは、かれの敵がかれの死をおもいめぐらし計画したこと、そして、このことは、かれを見にやって来て、かれを欺くために去って行ったところのある者によって果たされたことを示している。ところで、このばあい、弟子たちのなかの反逆者となったユダのことを心に浮かべぬ者があるであろうか。それゆえ、かれらはその企てたところのことを成し遂げようとしていたゆえに、すなわち、かれを殺害しようとしていたゆえに、かれは、ふたたび起きあがる以上、かれらは虚しく無益な邪意によって殺そうとしているということを明らかにしているのである。そこで、つぎのことをいっているかのように、この句を付け加えたのである。

すなわち、「あなたがたは何という虚しいことをしようとしているのか。あなたがたの犯罪は、わたしにとっては眠りとなるであろう」。つまり、「眠っている者が、ふたたび起き上がるようにならないであろうか」ということである。

それにもかかわらず、かれらはとがめられることとなしにはそのような重大な悪事をなしえないことをつぎの句によって指示し、いうのである。「わたしが信頼し、期待した人。わたしの

パンを食べたその人でさえ、わたしにそむいてくびすをあげた」――すなわち、わたしを踏みつけた。「しかし、主よ」とかれはいう。「わたしをあわれみ、わたしを助け起こしてください。そうすれば、わたしはかれらに報いを返すことができます」(四)。いまやだれがこのことを否定しえようか。キリストの受難と復活ののち、ユダヤ人たちは戦さによる殺戮と破壊とによってその住まいから根絶されたのを見るときに――。

というのは、主はかれらによって殺されたのであるが、ふたたび起き上がり、その間に暫時の懲らしめをもって――つまり、キリストが生ける者と死せる者とを裁くために来られるとき、改めることのなかった者たちに留保された報いのことを考慮に入れないということで――かれらに報われたからであった。じっさい、主イエスご自身は、この者(ユダ)が裏切り者であるということを、パンを差し出すことによって使徒たちに示され、そのようにしながら、わたしたちの『詩篇』の句、すなわち「わたしのパンを食べていた者がわたしにくびすをあげた」を想い起こさせ、これがご自身において成就されたことをいわれたのであった。しかし、「わたしが期待した人」というのは、かしらにではなく、からだに相応する。

というのは、救い主ご自身が、すでにさきに「あなたがたのうちの一人は悪魔である」(五)といっておられた者について無知であられたわけがないからである。しかし、自分の肢体の役割を自分自身へ転移し、それら肢体に属しているところのものを自分自身に帰せしめるというのは、このかたのつねである。なぜなら、キリストは同時にかしらでもあり、からだでもあられるからである。だからして、それは福音書では「わたしが空腹のときに、あなたがたは食べさせて

くれた」となっており、それを説明して、「あなたがわたしの民のもっとも小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」（六）といっておられる。したがって、かれは、ユダが使徒たちの数のうちに含められたそのときに弟子たちがユダに置いていたところの希望をご自身に帰せしめて、自分が期待していた、といわれたのであった。

　さて、ユダヤ人たちは、自分たちが待望していた「油注がれた者（クリストゥス）」が死ぬことは期待していなかった。それゆえ、かれらは、律法と預言者たちが告知していたその人が、わたしたちのキリストであるとは考えず、だれであるか知らないが、自分たちの「油注がれた者」であるような人を考えているのである。それは死の受難とは縁の遠い、かれらの虚構の人なのである。かれらは、おどろくほどの愚かさと盲目さをもって、わたしたちが引用したことばが死と復活とを表示しているのでなく、たんに眠りと目覚めとを表示している、と主張するのである。けれども、『詩篇』第十五篇もかれらにたいして叫んでいる。「このゆえに、わたしの心はたのしみ、わたしの舌は喜ぶ。わたしのからだも望みのうちに安らかである。あなたがわたしの魂を陰府（よみ）に捨ておかれず、あなたの聖徒に腐敗を見させられないからである」（七）。

　だれか、自分のからだも望みのうちに安らかであるといえるであろうか。つまり、その望みとは、その魂が陰府（よみ）に捨ておかれず、すばやくそのからだにもどってよみがえり、死体が腐敗するのをつねとしているようには腐敗することはないということからくる望みのことである。三日目によみがえったかたを措いてだれがあろうか。いずれにしても、かれらの預言者であり王であるダビデについても、これをいうことはできない。『詩篇』第六十七篇も叫んでいる。

「わたしたちの神は救いをもたらす神である。死からのがれる道は主のものである」[八]。これ以上明らかに何をいうことができるであろうか。

救いをもたらす神とは主イエスのことであり、その名は「救い主」または「救い」を意味する。じっさい、この名の理由となるものは、処女からのその誕生の前に、「おとめがみごもって男子を産むであろう。その名はイエスとよばれる。かれは民をその罪から救うからである」[九]と告げられたとき、与えられている。かれの血は、かれらの罪の赦しのために流されたのであるから、かれがこの生からのがれる道をもたず、ただ死からのがれる道のみをもったというのは、まったく至当なことであった。

したがって、「わたしたちの神は救いをもたらす神である」といわれたとき、救いをもたらすのは死ぬことによってであるということが明らかにされるために、「死からのがれる道は主のものである」とつづけて述べられたのである。しかし、「主のものである」ということばは驚くべき調子によっていわれており、それはあたかも、「この死すべき生は、死の道による以外には主ご自身がそれからのがれ出ることはできなかったのだ」といわれているかのようである。

(一)「詩篇」三の五。

(二) 七十人訳では第四〇篇。現行では第四一篇である。

(三)「詩篇」四一の五以下。

(四) 同上、四一の九。

(五)「ヨハネによる福音書」六の七〇。

(六)「マタイによる福音書」二五の三五、四〇。
(七)「詩篇」一六の一九以下。
(八)同上、六八の二〇。
(九)「マタイによる福音書」一の二一。

第十九章

詩篇第六十九篇に示されるユダヤ人たちの頑迷さについて

けれども、ユダヤ人たちは、かくも明白なこの預言の証言にも、また、かくも判然とした、確実な成就へともたらされていったことがらにも、まったくそれに応順しようとはしなかったので、これにつづく『詩篇』のうちに記されているところのことは、疑いもなく、かれらにおいて成就されたのであった。この『詩篇』においても、キリストの受難に関係する出来事が、キリストの人格にもとづいて預言的に語られているので、その意味が福音書のなかで明らかにされているところのことが想い起こされてくるのである。すなわち、「かれらはわたしの食物に胆汁を入れ、わたしの渇いたときに酢を飲ませました(一)」といわれている。

いわばそのような祝宴または饗宴とでもいうべきものが、かれに提供されたのち、すぐに進んでいっている。「かれらの食卓がかれら自身の面前でわなとなり、報いとなり、落し穴となる

ように。かれらの目を暗くして見えなくし、かれらの背がつねに曲がっているように、云々」[二]。――これらは願望として語られたものではない。願望というかたちをとった預言的な予告である。それゆえ、もしもその目が暗くされて見えなくなり、このような明白な事実を見ることができないとしても、何の不思議があるであろうか。

かれらの背がつねに曲がっていて、地上的なものへ向かって傾いてしまっているので、かれらが天上的なものを眺めることがないとしても、何の不思議があるであろうか。というのは、これらの身体的なものに転移されたことばによって魂の悪徳が表示されているからである。

さて、(論議には)ある限界というものがあるであろうから、これら『詩篇』については、すなわちダビデ王の預言については、十分に述べられたものとしたいのである。これらを読んだ人びとは、そのすべてを知っていても寛大であってほしい。もしかして、わたしはより強力な証言を見すごしてしまっているかもしれないが、それを知ったり、判断したりしても、苦情をいわないでいただきたいのである。

(一)「詩篇」六九の二一。

(二) 同上、六九の二二。

第二十章

ダビデとソロモンの統治と業績、およびソロモンの書におけるキリストについての預言

このようなわけで、ダビデすなわち天上のエルサレムの子は、地上のエルサレムにおいて統治したのであったが、かれは神的な書の証言によって高く賞賛されている。それというのは、かれの過失は、救いに有益な謙遜の悔い改めをとおして、それほどの敬虔によってつぐなわれたので、そのため、かれ自身がつぎのように語っている者たちのなかに確かに入っているからである。「その不義が赦され、その罪がおおわれた者たちはさいわいである」(一)。こののち、その子どもであったソロモンが同じ民全体を治めたのであったが、かれは、上に述べたごとく、その父の存命中に統治をはじめたのであった(二)。かれは善き出発をしたのであるが、悪い終わりをもったのであった。

じっさい、知恵そのものが益したというより、知恵ある者たちの魂を疲れさせるところの事物によって、かれはむしろ損われたのであった。それは、いまも、そして今後も記憶されるべき知恵であり、また、あの当時もひろく賛えられていた知恵である。かれ自身も預言したことがその書物のうちに見出される。そのうち三つのものが正典の権威のなかに入れられている。

すなわち、「箴言」、「伝道の書」、「雅歌」である。しかしながら、他の二つの書——そのひとつは「知恵の書」とよばれ、他は「集会の書」とよばれる——は、表現の仕方がいくらか相似しているために、習慣によってソロモンのものという見解が保持されてきているが、しかし、学識ある者たちは、それはかれ自身のものではないことに疑いを入れない。けれども、教会、とくに西方教会はずっと以前からそれらを正典として受け入れているのである。

それらのうちの「ソロモンの知恵」とよばれるひとつの書には、キリストの受難がこの上もなく明瞭に預言されている。たしかに、つぎのようにいわれて言及されているのは不敬虔な殺害者らのことである。「正しい人をおとしいれよう。かれはわたしたちには邪魔者で、わたしたちのおこないを非難し、律法に反する違反でわたしたちを責め、教育に反する罪でわたしたちを非難するからである。かれは、自分が神にかんする知をもっていると主張し、みずから神の子とよんでいる。かれは、わたしたちの考えを責める者となった。わたしたちにとっては、かれは見るだに息ぐるしい。なぜなら、かれの生は他の人びとのそれとはちがっており、その進む道は不変だからだ。かれによるならば、わたしたちはつまらぬものと見なされ、汚れたもののから遠ざかるかのようにわたしたちの道から離れる。かれは正しい人の最期はしあわせだといい、神を父としていることを誇っている。

それゆえ、かれのいっていることが事実かどうか、見ていよう。かれにどんなことがおこるか試みよう。かれがどんな最期を遂げるか、わたしたちは知るであろう。かれが正しい神の子なら、神がかれを支え、敵対者の手から救うであろう。かれをあなどり、苦しめて、ためして

みよう。そうすれば、かれのほんとうの心がわかり、その忍耐が本物であるかどうかわかるであろう。かれにもっともはずかしい死の宣告を下そう。かれのいうところによれば、かれに援軍がくるそうだから。――かれらはこのように考えているが、しかし、それは誤りである。かれらの邪悪さがかれらを盲目にしているからである(三)」。

しかし、「集会の書」では、諸々の民の未来の信仰がこのように予告されている。「すべてのものの支配者であられる神よ、わたしたちをあわれみ、すべての民の上にあなたの恐れを送ってください。あなたの御手を異国の民の上にあげ、あなたの稜威(みいつ)を示してください。かれらの前で、わたしたちにあなたの聖なる力を示されたように、わたしたちの前で、かれらにもあなたの稜威を示してください。わたしたちがあなたを認めたように、かれらにもあなたを認めさせてください。なぜなら、主よ、あなた以外に神はいないからです(四)」。願望と祈りのかたちをとって、この預言がイエス・キリストによって成就したのをわたしたちは見るのである。しかしながら、これらの書は、ユダヤ人の正典のうちに含まれてはおらず、その反論に対抗するためにはそれほど確かなものとして持ち出されないのである。

他方、一般にソロモンの書として受けとられ、ユダヤ人によって正典のうちに入れられている三つの書へかえるなら、それらのうちにこれら二書に見出される同じようなものが、キリストとその教会とに関係していることを示そうとするなら、厄介な議論が必要となる。もしもいま、それをおこなうなら、わたしたちは本筋から逸脱してしまうことになるであろう。しかし、わたしたちは「箴言」の書のなかに、不信仰な者が「正しい人を地のなかへ不正な仕方で隠そ

う。陰府(よみ)のようにかれらを生きたままで呑みつくし、かれの記憶を地から取り去ろう。かれの貴重な貨財を獲得しよう」(五)といっているのを読むのである。これは、キリストとその貨財、すなわち教会に関するものであることは、厄介な説明をしなくても理解できるほど明瞭である。

じっさい、主イエス自身も、この種のことを福音書の譬えをとおして表現しておられるのであって、それは、悪しき小作人らが「あれは跡取りだ。さあ、これを殺してその遺産を手に入れよう」(六)といっているのである。同じ書のなかには、わたしたちがすでに先に触れた同じことが出ている。それは七人の子どもを産んだ石女(うまずめ)について取り扱ったとき、キリストが神の知恵であることを知っている人びとによって、ただちに、これはキリストとその教会にかんすることであると一般に解されている、と述べたことである。すなわち、このようにいわれる。「知恵は自分の家を建て、その七つの柱を立てた。また、犠牲をささげ、混酒器で酒を混ぜ合わせて食卓を備えた。そのしもべをつかわして、高い所から人びとを宴席へと呼びかけ、そしていった。『愚かな人はだれか。ここに来たれ』と。また、知恵のない者にいった。『来て、わたしのパンを食べ、あなたがたのために混ぜ合わせた酒を飲め』(七)」。

わたしたちはまちがいなくここに、神の知恵すなわち御父と共に永遠なるみ言葉を認めるのである。このかたは、ご自身のための家として処女の胎に人間のからだをつくり、あたかも肢体が頭に結び付けられるように、教会をそれに結び付け、その犠牲としての殉教者たちをささげられたのであった。かれはぶどう酒とパンとをもって食卓を備えられたのであって、そこにおいてはメルキゼデクの系列による祭司職もあらわれているのである。かれは愚かな者、知恵

のない者を招かれたのであった。なぜなら、使徒のいうごとく「かれは、つよい者を恥ずかしめるためにこの世の愚かな者を選んだ」(八)からである。しかし、これら弱い者にたいしてつづけていっている。「あなたがたは生きるために愚かさを捨てなさい。命を得るために悟りの道を求めなさい」(九)。あの食卓の客となることが、生命を得はじめることなのである。

「伝道の書」とよばれる他の書においても、「食して飲むことのほかには人間にとっての善はない」(一〇)といわれているが、これはつぎのことをいっていると解する以上により信頼に足る理解があろうか。すなわち、メルキゼデクの系統によって新しい契約の仲保者たる祭司ご自身がご自身のからだと血とを供されたこの食卓にあずかることであるとする理解である(一一)。というのは、それは、旧い契約のあらゆる犠牲にとって替えられる犠牲だからであって、それは、未来に来たるべきところのものの影によってささげられたものなのである。このために、『詩篇』第三十九篇においても、わたしたちは同じ仲保者の声を、その預言的な語りをとおして認めるのである。すなわち、「あなたは犠牲とささげものをのぞまれなかったが、わたしのためにからだを完成してくださった」(一二)。なぜなら、あらゆる犠牲とささげもののかわりに、そのかたのからだがささげられ、食卓にあずかる者に仕えてくださったからである。

じっさい、この説教者が、しばしばくり返し、しきりに強調する、食したり飲んだりすることにかんするこれらのことばにおいて、肉的な快楽の料理を味わうことを考えていたのでないことは、「悲しみの家にはいるのは、宴会の家にはいるのにまさる」といわれているところで明らかである。また、すこしのちのところで、「知恵ある者の心は悲しみの家のうちにあり、

愚かな者の心は饗宴の家にある」[一三]とあるのである。けれども、この書にかんして、より強調していわれるべきこととおもうのは、二つの国に関係するものであって、そのひとつは悪魔の国であり、他はキリストの国である。そしてそれらの国の王は、それぞれ悪魔であり、キリストである。「あなたはわざわいだ。あなたはたんなる若者を王とする地だ。君主たちは朝から宴会を催す。しかし、高貴な生れの王をもつ地よ、あなたはさいわいだ。その君主たちは恥をもたらすためにではなく、力を得るために、正しいときに御馳走を食する」[一四]。

かれは悪魔のことを、その年齢にしばしば見られる愚かさ、高慢、無思慮、厚顔、そのほかの悪徳のゆえに、「たんなる若者」[一五]とよぶ。それに対し、キリストのことを「高貴な生れ」とよぶのである。このかたは、自由の国に属する聖なる父祖たちの子――肉においては、かれらから生れられたかたである――なのである。かの国の君主たちは「朝から宴会を催す」のである。すなわち、正しい時間の前に食するのであって、それというのは、かれらは来たるべき世における時機を得た真の幸福を待望することなく、この現在の世における名声によって幸福にすることを急いで熱望する者であるからである。しかし、キリストの国の君主たちは、失望させることのないあの幸福のときを忍耐づよく待望しているのである。説教者は、かれらが「恥をもたらすためにではなく、力を得るために」食する、といっている。使徒が「希望は狼狽させない」[一六]といっているように、希望はかれらを欺くことはないのである。『詩篇』もまた、「あなたを待ち望む者は恥ずかしめられない」[一七]といっている。

しかしながら、「雅歌」は、その国の王と王妃――すなわちキリストと教会――の婚姻にお

いて、ある種の聖なるよろこびをうたっているのである。しかし、このよろこびは比喩的な衣に包まれているのであって、そのため、それはいっそう熱心に求められ、そして、それがあらわにされることは、いっそうのよろこびをもたらせるのである。同じ歌のなかで、「義しさがあなたを愛した」(一八)といわれている花婿と、「愛はあなたのよろこびのうちにある」(一九)といわれている花嫁とが明らかになるためである。さて、この仕事を終えるための配慮によって、わたしたちが言及しないまま通りすぎた多くの点が存在する。

(一)「詩篇」三三の一。
(二)本巻第八章参照。
(三)「知恵の書」二の一二—二一。
(四)「集会の書」三六の一—五。
(五)「箴言」一の一一以下。
(六)「マタイによる福音書」二一の三八。
(七)「箴言」九の一以下。
(八)「コリント人への第一の手紙」一の二七。
(九)「箴言」九の六。
(一〇)「伝道の書」八の一五。
(一一)「ヘブル人への手紙」九の一五。
(一二)「詩篇」三九の六。
(一三)「伝道の書」七の二以下。

(一四)　同上、一〇の一六、一七。
(一五)　adulescens.
(一六)　「ローマ人への手紙」五の五。
(一七)　「詩篇」二五の三。
(一八)　「雅歌」一の四。
(一九)　同上、七の六。

第二十一章

ソロモンののちの、ユダとイスラエルにおける王たちについて

ソロモンののち、ヘブライ人たちの他の王たちが、その諸々の言葉や行為の何らかの隠された意味をとおしてキリストと教会とに関係するところのことを預言したということはほとんど見いだされない。これは、ユダにおいてもイスラエルにおいてもそうである。あの民の二つに分けられたそれぞれの部分がそのように呼ばれていたのであって、それは自分の父親の王位を継承したソロモンの息子レハベアムの時代に、神がソロモンの罪のゆえにかれらを罰しられたときに分割されて以来のことである(一)。そのときから、十の部族は、ソロモンの従者であってサマリヤにおいてかれらのために王として立てられたヤラベアムによって引き受けられ、固有の

名としてイスラエルとよばれることになったのである。もっとも、この名はその民全体の名ではあった。

他方、二つの部族、すなわちユダとベニヤミンには、ダビデのためにその血統の王国がまったく絶えてしまうことのなきよう、エルサレムの都に服属するものとして残され、ユダという名が与えられたのであった。それというのは、このユダは、ダビデ自身がそこから出たところの種族であったからである。それにたいして、他の部族であるベニヤミンは、わたしが述べたように、同じこの王国に属することになったのであるが、それはダビデの前のサウルが出た部族であった。けれども、これら二つの部族は共に、すでに述べたようにユダとよばれ、そして、この名によって、自分たちの王をもつ十の部族が固有の仕方でよばれることとなったイスラエルから区別されたのである。

レビ族は祭司族として、王にではなく神に仕えるように定められた部族であったゆえに、十三番目の部族として数えられている。イスラエルの十二人の子の一つであるヨセフは、わたしたちも知るように、他の子らがおこなったようにそれぞれ単一の部族をおこしたのではなく、二つの部族、すなわちエフライムとマナセをおこしたからである。しかしながら、レビ族もまた、むしろエルサレムの王国に属することになったのである。かれらが仕えていた神の神殿がそこに存在したからであった。このようにして、この民の分割があってのち、ソロモンの息子であるユダの王、レハベアムがエルサレムで最初に統治し、そして、ソロモンの従者であるイスラエルの王ヤラベアムがサマリヤで最初に統治することになった。レハベアムが力ずくでい

わば分割された王国のあの部分を戦さによって追おうと欲したとき、預言者によって神のことばが臨み、これは自分がなしたことだといわれ、民はその兄弟とたたかうことを禁じられたのであった。[二] だからして、このことにおいては、イスラエルの王にも民にもいかなる罪責もなく、神の懲らしめの意志によって成しとげられたことであることが明らかである。それを知って、いずれの部分もたがいに平和のうちに安んじたのであった。分割を蒙ったのは、かれらの宗教でなく、王国のみであったからである。

(一)「列王紀上」一二の一以下参照。
(二) 同上、一二の二一以下参照。

第二十二章

ヤラベアムの偶像崇拝について

ところで、イスラエル王ヤラベアムは、神がかれに王国を約束され、[一] それをかれに与えられたのであるから、神は真実なかたであることを是認したわけであるが、かれはその転倒した心のゆえに神を信じなかったのであった。かれは、民全体が神の律法にしたがって犠牲をささげるために行くよう義務づけられていた神の神殿を訪れることによって、その民が、かれから離れて王の家系であるダビデの系統へ戻ってしまうのではないかと恐れたのであった。[二] それで、

かれはその王国に偶像を建て、神の民をその忌むべき背信によって迷わせ、神の民を、自分と共に偶像の崇拝に巻き込むことによって欺いたのである。

しかしながら、神は、ひとりその王だけでなく、かれの不敬虔を模倣したかれの後継者たちやその民をも、あらゆる仕方で、預言をとおして咎めることをお止めにならなかった。たしかにその王国には、あの偉大で傑出した預言者たちが現れて数々のおどろくべきことをおこなったのであった。エリヤとエリシヤである。エリヤの「主よ、かれらはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をくつがえしました。ただわたしだけが残りましたが、かれらはわたしの命をねらっています(三)」ということばにたいし、その王国にはバアルの前でそのひざを屈めない七千人の人たちがいるという答えが与えられたのも、そこにおいてであった。

(一)「列王紀上」一二の二一以下参照。
(二)同上、一二の二六以下参照。
(三)同上、一九の一〇、一四、一七。

第二十三章

ヘブライ人たちの二つの王国の異なった状態について

わたしたちは、エルサレムに属したユダの王国において同じことを見出すのである。そこに

おいても、(ダビデの)あとを継承した王たちの時代にも預言者たちは絶えることがなかった。神は、必要なことを告知されるために、そして罪を譴責し、正義を教えるために、かれらをおくることを嘉せられたのであった。なぜなら、そこにおいても、たとえイスラエルにおけるよりもはるかに少なかったとはいえ、その不敬虔によってはなはだしく神をおこらせた王たちが出たのであった。その王たちは自分たちと同じような民と共に、その過失につり合った罰をもって懲らしめられねばならなかった。じっさいにここでは敬虔な王たちの功績はすくなからず賞賛されているが、しかし、イスラエルにおいては、王によって多少の差はあるが、すべての王が非難されていると読まれるのである。

したがって、二つの部分は、神の摂理が命じたり許したりするのにしたがって、ときには繁栄によって持ち上げられたり、逆境によって沈下させられたりして、さまざまな運命を経験したのであった。また、外部との戦いによるのみならず、かれら自身のあいだでの内戦によっても苦しめられたのであるが、それは、存在した確かな理由によって神の憐れみや怒りが明らかになるためであった。ついに、神の怒りが増し、かの民の全体がカルデヤ人によって打ち負かされ、自分の国土において滅ぼされただけでなく、その大部分がアッシリア人の地へ移されるに至ったのであった。まず、十の部族によるイスラエルとよばれた部分が、そしてのちにユダもまたそうであって、エルサレムとかの高名な神殿とが破壊されたのである。これらの地で、かれらは七十年間、捕囚の生活をおくったのであった。

この時期ののち、かれらは帰還することを得、破壊されていた神殿を再興した。かれらのか

なり多くの者はなおも異国の地にすごしたが、しかし、それ以後は、かれらは二つの王国とそれぞれの部分におけるそれぞれの王をもつことはなく、エルサレムにおいて君主は一人となった。至るところに散ったすべての者が、至るところから、そして、それがどこであろうと可能なかぎり、エルサレムに存在した神の宮へ定まった時に還ってくるようになったのである。(一)

(一) サマリアのアッシリアによる捕囚は前七二一年。ユダヤ人たちのバビロンへの追放は前五九六年。エルサレムの没落と二回目の追放は前五八六年。ペルシアによるバビロン捕囚は前五三八年であって、ユダヤ人は帰還をゆるされたのであった。

第二十四章

バビロニア捕囚から帰還後の預言者たち

ところで、バビロニアからの帰還につづく全期間において、その時期に預言の活動をおこなっていたマラキ、ハガイ、ゼカリヤ、そしてエズラののちには、かれらは、救い主の来臨に至るまで預言者をもつことはなかった。そのほかには、キリストの誕生が近いとき、ヨハネの父である別のゼカリヤとその妻エリサベツ、そしてキリストが生れてから、老シメオンとすでに高齢になっていた寡婦のアンナ、そしていちばんあとにヨハネそのひとがいるのみである。たしかに、ヨハネはキリストの到来を預言したわけではない。そのときにはキリストもかれも青

年であったからである。しかし、かれは預言的な認識によって、いまだそれと認められていなかったキリストを指し示したのであった。(二) 主ご自身が「律法と預言とはヨハネのときまでである」(三) といわれたのもこのゆえである。

これら五人の預言のことばは福音書によってわたしたちによく知られているところである。そこでは、主の母である処女自身がヨハネに先立って預言をおこなったのが見出されるのである。しかしながら、しりぞけられたユダヤ人たちは、これらの預言を受け入れなかったのである。ただし、かれらのなかの福音書を信じた無数の者が受け入れたのであった。というのは、その当時、イスラエルはたしかに二つに分けられていたからである。それは、預言者サムエルを通してサウル王にたいして不変の分割と予告されていたあの分割によるものである。マラキ、ハガイ、ゼカリヤ、そしてエズラについては、しりぞけられたユダヤ人たちもかれらを受け入れたのであって、かれらを正典の権威のうちに加えられるべき最後の人びとであるとしていたのである。

すなわち、これら預言者たちの書は、正典としての権威を保持している他の者たちの書――もっとも、かれらは偉大な多数の預言者のなかではごく僅かなものを記したにすぎないのであるが――のように残っているからである。かれらの預言のなかでキリストとその教会に関連しているいくつかのものは、この書に入れられるべきであるとおもわれるが、すでに、これほどまでにも長たらしくなってしまったこの巻に、これ以上積み上げることを避けるため、主の御助力を得て、つづく巻において果たすのがより適切であろう。

（一）「ヨハネによる福音書」一の二九―三七参照。
（二）「マタイによる福音書」一一の一三。

第十八巻

第一章

第十七巻までに論じられた主題について

わたしは二つの国、すなわちそのひとつは神の国であり、他はこの世の国であるが、それらの起源、経過、そしてそれらに定められた終極について記述することを約束したのであった。神の国は、それが人類に関係するものであるかぎり、この世の国のうちに寄留するものである。――これは、神の恩恵がわたしを助けてくださるかぎりにおいて、まずはじめに、神の国の創設者であるキリストよりも自分たちの神々を選び、この上もなく有害な嫉妬をもってキリスト教徒をはげしく憎むところの神の国の敵に反駁を加え、最初の十巻によってそのことをおこなってのちのことである。

このような仕方でいま述べたところの、この三つに分かたれた約束について、第十巻につづく四つの巻において、両方の国の起源が説明され、次いで、この仕事の第十五の一つの巻によ

って、最初の人間から洪水に至るまでの進展が描かれたのであった。そののち、二つの国は、それらが歴史におけるように、そしてわたしたちの書においてもなしたように、アブラハムのときにまで進展したのであった。しかし、父祖アブラハムの時代からイスラエル人の王たちの時代まで、そしてそれについては第十六巻において終わったのであるが、そこから、受肉された救い主の到来まで——それは第十七巻に達した——わたしの筆は神の国のほうの進展にのみ向けられてきたようにおもわれる。けれども、この国はこの世においてのみ経過を辿ったわけではない。じっさい、わたしたちが知るように、両方の国は、それらが同時に人類のうちに存在するように共にはじまったのであって、それらは共にその進展において時の移り変わりを経験してきたのであった。

しかしながら、わたしがこのようになしたのには理由があってのことであった。つまり、神の約束がいっそう明らかになりはじめたときから、その原初の約束が充たされたあの処女降誕に至るまで、相対立する他方の国によって中断されることなく、まず、神の国の発展をその経過の記述によってより明確に示すためである。神の国は、新しい契約の啓示に至るまでは、光のなかを進んだのではなく、影のなかを進んだのではあったけれども。

それゆえ、わたしは、わたしが省いたところのことをいま扱うべきであるとおもうのである。すなわち、アブラハムの時代からもうひとつの国がどのように進んだかということについて、読者が両方の国を考察し、たがいに比較対照することができるために十分と見られるかぎりにおいてそれに従事したいとおもうのである。

第二章

この世の国――アブラハムの生れて以後のその国の王たちと年代について

したがって、死すべき人間の社会は、地上の至るところに拡がっており、さまざまな地理的な状態にあるけれども、それぞれが自分の利益を追求し、その欲望の充足を求めながら、それにもかかわらず、なお、同じ一つの自然本性を共通とすることにより結合されているのである。しかし、追求されているところのものは、かなりの者を、おそらくはだれをも満足させはしないであろう。それというのも、それは真実の対象ではないからである。だからして、社会は一般に相対立して分かたれ、一つの部分が、それが優勢であるときには、他の部分を圧迫するのである。

すなわち、征服されたものは征服したものに屈従するのであって、かれらは支配権や自由よりも何ほどかの平和と安寧とを選んでいるのである。服従することよりもむしろ滅びることを好む者がいたら、その者には大きな驚嘆が表せられるほどである。じっさい、ほとんどすべての民族において、自然本性の声は、つぎのように鳴りひびいてきたのであった。すなわち、敗北の不運を蒙った者らは、戦いの荒廃によってすべてが破壊されることよりは、征服者の手に服従することを選ぶべきである、と。それで、それぞれの戦争において服従させたり服従させ

られたりするのは、そのようにさせる権能をもつ神の摂理なくしてはありえないのであるが、そのため、ある民族は支配を委ねられたり、ある民族は他民族の支配のもとに服したりすることになったのである。

さて、その共通の目的をこの世的な利益や欲望においているところの社会(わたしたちが一般に「この世の国」という名でよんでいる社会)は、きわめて多くの国に分かたれたのであったが、それらのなかで、二つの国が他のすべての国にぬきんでて名声を得たのをわたしたちは知るのである。まずアッシリア人のそれであり、次いでローマ人のそれである。これら二つの国は歴史的にも地理的にもたがいに区別される。前者がよりはやく、後者はよりあとであった。前者は東方に、後者は西方におこったのであった。そして、一方がはじまったのは、他方の終わりにすぐに続くというかたちをとったのである。他の王国や王たちはすべて、これらの王国のいわば付加物といえるのであろう。

このようなわけで、アブラハムがカルデア人の地に生れたとき、ニヌス(一)はすでに、その父親であるベルスのあとを継いで、アッシリアの第二代目の王として王位についていたのであった。そのときには、シキヨン人の王国も存在したのであるが(二)、それはまったく小さなものであった。けれども、あらゆることに類いなく博学であったかのマルクス・ウァルロは、その著作『ローマ人の種族について』を記しているが、その古い時代の基点として、シキヨン人の国の記述からはじめているのである。すなわち、シキヨンの王たちよりはじめ、アテナイ人へとすすみ、アテナイ人からラテン人へ、そこからローマ人へとすすんでいるのである。

しかし、ローマ創設の以前には、それらはアッシリア人の王国にくらべれば、取るに足りないものと記されているのである。ローマの歴史家サルスティウスもつぎのことを認めているのである。すなわち、アテナイ人たちはギリシアにおいてひじょうな名声を得たのではあるが、しかしながら、それは現実よりもむしろ評判によるものである、と。じっさい、かれは、かれらについて語っていうのである。――「わたしの判断によるなら、アテナイ人たちの偉業はたしかに大いなるものであり、感銘深いものである。とはいえ、かれらの重要性はその評判がもたらしているところよりもかなり小さなものであった。けれども、きわだった才能をもった著述家たちがそこに現れたがゆえに、アテナイ人たちのなしとげたことは無比なるものとして全地上に賞揚されたのである。

このように、ことをなした人びとの徳は、すぐれた才能の持主がことばによってそれを賞揚するその程度に応じて得られるのである」[三]。さらに、アテネの都市は、文学と哲学とから小さからぬ栄誉を受けとったのであった。なぜなら、それらの探究は、そこにおいて、ひじょうな繁栄を見せたからである。これに対し、支配力にかんするかぎり、初めの時期においては、アッシリア以上のものをもっていたわけではなかった。また、それほど広い範囲におよんでいたわけでもなかった。じっさい、いい伝えられているところによると、ベルスの息子ニヌス王は、リビュアの境界までのアジアの全体を征服したのであった[四]。つまり、アジアは地上の半分の大きさを占めるということを示しているが、全世界の第三番目の領域であるといわれる。たしかに、かれがその支配下におかなかった東方の民族はインドだけであった。そして、そのインド

でさえ、かれの死後、その妻セミラミス(五)によって侵されたのである。

かくして、これらの国のすべてにおいて、その民と支配者たちはアッシリアの支配を受けいれ、かれらが命ぜられたところのものはすべて実行したのであった。したがって、アブラハムはニヌスの時代に、その王国で、カルデア人のうちに生れたのであった。けれども、ギリシアの史実はアッシリアのそれよりもわたしたちにいっそう親しまれており、そして、ローマ人の古い起源を探査した人たちは、ギリシア人を経てラテン人へ、そして、かれらからそれ自身もまたラテン人であるローマ人へと時代の経過をたどったのであった。このゆえに、わたしたちはアッシリア人の王たちを思い出さなければならないのであって、そこにおいて、いわば最初のローマであるバビロニアが、この世にあって旅をつづける神の国と並行してどのようにその過程を進んできたのかを明らかにする必要があるのである。しかしながら、わたしたちが二つの国すなわちこの世の国と天上の国とを対照するためにこの仕事に挿入しなければならぬことがらは、むしろギリシアとラテンの源泉から取られねばならない。そこでは、ローマは第二のバビロンとして取り上げられるべきである。

それゆえに、アブラハムが生れたとき、アッシリアではニヌスが、シキヨンではエウロプスが第二代目の王であった。前者においては第一代目の王はベルス、後者においてはアエギアレウス(六)であった。しかし、神が、バビロニアを去ったアブラハムに、大いなる民がかれらから出るであろうこと、そしてその後裔においてすべての民の祝福が来るであろうこと、を約束されたとき、アッシリア人たちはそのときには第四代目の王を、シキヨン人は第五代目の王をもっ

ていたのであった。すなわち、ニヌスの息子がその母セミラミスのあとを継いでアッシリアの王位についていたのである。かの女は自分の息子によって殺害されたといわれているのであって、それは、母であるかの女が、近親相姦によってあえてかれを汚そうとしたという理由によるものである。

いくらかの人びとは、バビロンを建設したのはセミラミスであったと考えている。たしかにかの女はその都を再建したのであろう。しかし、わたしは、第十六巻において、それがいつ、どのようにして建てられたのかを述べたのであった。(七) さらに、その母親のあとを継いで王位についたニヌスとセミラミスとの息子も、ある権威者によってニヌスとよばれたということをわたしたちは知っている。が、一方で、他の者たちはかれのことを、その父親から取って、ニニュアスとよんでいるのである。シキヨンの王位は、その当時、テルキシオンによって占められていたのであった。その支配は、平静でよろこばしい時期であったので、その死後、かれを神として崇め、犠牲をささげたり、最初はその神のために設けられたといわれる競技を挙行したりしたのであった。

(一) 本書第四巻第六章、第十六巻第十七章参照。ニヌス王はアッシリアの首都ニネベの伝説的な建設者である。
(二) 本書第十六巻第十七章参照。
(三) サルスティウス『カティリナの陰謀』八。
(四) 本書第十二巻第十一章参照。

（五）セミラミスは伝説中のアッシリア女王。そのすぐれた才色をもって数多の都市を建設。平和に四十二年間統治したとされている。
（六）アエギアレウスはシキヨン市の創設者といわれる。
（七）第十六巻第十一章。

第三章

イサクおよびエサウとヤコブの生れたころのアッシリアとシキヨンの王たちについて

この時代にまた、神の約束の成就によって、百歳の父親にイサクが生れたのであった。かれはその妻サラ――かの女は石女（うまずめ）であり、老齢であって、そのときまでかの女は子孫をもつ望みを捨てていた――によるアブラハムの息子であった。そのころ、アッシリアの王は五代目の王位にあったアルリウスであった。イサク自身には、六十歳のときに双生児エサウとヤコブが生れたのであった。イサクの妻リベカがかれに生んだ子どもたちである。かれらの祖父アブラハムはまだ生きていて、そのとき百六十歳であった。アブラハムは百七十五年の生を完うして死んだのであるが、（一）それは、バレウスともよばれたより古いほうのクセルクセス（二）がアッシリアの王位についており、そして、トゥリアクス――ある者はトゥリマクスとも記している――がシ

キヨンで統治していた。かれらは第七代目の王たちであった。

アルゴスの王国は、アブラハムの孫たちの誕生のときに同時にはじまった。そこでは、最初の王イナクス(三)が治めていたのであった。ウァルロは、シキヨン人が自分たちの第七代目の王トゥリアクスの墓に犠牲をささげるのを習わしとしていた、と語っている。このことはたしかに見逃してはならないことである。さらに、アッシリアとシキヨンでは、それぞれの王すなわちアルマミトレスとレウキッポスとが支配しているときに、神はイサクにたいして語られ、その父親に与えられたと同じ二つの約束をかれに与えられたのであった。すなわち、カナンの地をかれの子孫たちに、そしてその子孫たちによるすべての民にたいする祝福とである。

まさに同じ約束が、かれの息子、すなわちはじめにヤコブとよばれ、のちにイスラエルとよばれたアブラハムの孫にも約束されたが(四)、それは、第九代目の王ベロクスがアッシリアを統治し、イナクスの息子フォロネウスがアルゴスの第二代目の王として統治していたときである。レウキッポスはまだシキヨンの王位に留まっていた。この時期に、ギリシアはアルゴリスの王フォロネウスのもとに、法と判決のためのある施設によっていっそう名を知られていたのであった。しかし、フォロネウスの弟ペグウスが死んでのち、その墓に神殿が建てられたのであって、そこにかれは神として祭られ、牛が犠牲としてささげられたのであった。

わたしがおもうのに、かれがこのように高い栄誉に値すると見なされたのは、王国のうちのかれの部分(かれの父がその存命中に支配するよう二人の息子に領土をあてがったのである)に、かれは神々を拝するため宮を建て、そして、月と年とを単位として時間の経過をどれほど測り

かつ数えられるか、観察することを民に教えたからであろう。かれのこれらの目新しさにおどろいて、まだ素朴であった人びとは、かれは死んで神となったと信じたのであった。あるいは、すくなくともそのことを欲したのであった。

じっさい、イオ(五)はイナクスの娘であったという話も存するからである。そしてかの女はのちにイシスとよばれたのであり、その結果、エジプトにおいて偉大な女神として拝されたのであった。もっとも、他の著述家たちは、かの女は女王としてエチオピアからエジプトへ来たこと、そして、かの女の支配は広範囲にわたり、かつ公正なものであったがゆえに、また、多くの有益なことを、とくに読み書きを確立したがゆえに、死後その地方において神的な栄誉がかの女に与えられたともいっているのである。その栄誉はきわめて大きく、もしもだれかが、かの女はただの人間であるといったなら、死の罪に値するものとされるほどであった。

(一) 「創世記」二五の七参照。
(二) ペルシア王。在位前四八五年から四六五年。ダリウス一世の子。エジプトとバビロンの反乱を鎮圧後、ギリシア遠征を企てた。
(三) アルゴスのイナクス河の神。オケアノスとテテュスの子。
(四) 「創世記」二八の一三、一四参照。
(五) イオはアルゴスのヘラの女神官で、イナクスとメリアの娘。ゼウスに愛されたが、ヘラの怒りを恐れてゼウスはかの女を若い牝牛に変えたが、けっきょくヘラに苦しめられることになり、世界をさまよい歩いてエジプトに来た。

第四章

ヤコブとヨセフの時代

アッシリアの第十代目の王バレウスおよびシキヨンの第九代目の王メッサプスが統治しており、そして、アピス[一]がアルゴスの第三代目の王であったとき、イサクが百八十歳で死んで、百二十歳となっていた双生児をのこしたのであった。メッサプスはある人たちによってケピスともよばれた人物である(すくなくともそれら二つの名が同一人物に属するものであり、また、それを記すに際して他の人物の名と混同していないならば)。さて、双生児の弟のほうであったヤコブは、わたしたちが述べている神の国に属していた。他方、兄のほうはしりぞけられたのであった。ヤコブは十二人の息子をもち、そのうちの一人はヨセフとよばれたが、かれはその兄弟らによってエジプトへ旅行していた商人に売られたのであって、このことはイサクの生存中におこったのであった[二]。

ヨセフは三十歳となったとき、耐え忍んでいた屈辱からもち上げられ、パロの前に立つことになった。それは、神的な霊感によってかれが王の夢を解釈し、その夢から、七年間の豊年があるであろうが、その豊かさは、つづく七年の不作の年によって消費しつくされるであろうと予告したからであった。このために王はかれを獄屋から解放し、エジプトのつかさとしたので

ある。かれをそこへ投げ入れたのは、かれ自身の汚れない貞潔さであった。[三] というのは、かれはその女主人との不貞に同意するのを拒んだとき、貞潔を勇敢にまもったからである。女主人はかれによこしまな愛情をもち、そして、信じやすいその主人に悪意の偽りを告げたのであった。かの女がかれを自分のほうへ引き寄せようとしたとき、かれはかの女の手に着物を置き残してまでそれをのがれて、貞潔をまもったのである。

さて、七年の飢饉のその二年目に、ヤコブは一族と共にエジプトの息子のところへやって来たが、[四] そのとき、かれ自身王に答えたところによれば、ヤコブは百三十歳であった。[五] ヨセフはそのときには三十九歳であって、すなわち、かれが王によって栄誉ある地位にあげられたときの年齢が三十歳であり、それに豊年であった七年と飢饉であった二年とが加えられているのである。

（一）アピスはイナクス河神の子ポロネウスとニンフのテレディケーとの子である。父のあとを継いでペロポネソス全土を支配し、この地はかれの名からアピアともよばれるようになった。暴君であったので殺され、死後神格化されてサラピスとよばれた。

（二）「創世記」三七の二五以下参照。

（三）同上、三九の七―二〇。

（四）同上、四六の一以下。

（五）同上、四七の九。

第五章

アルゴスの王アピスについて

アルゴス人の王アピスが船でエジプトへ渡ったのはこの時代のことであった。かれはその地で死んだとき、エジプト人の神々のなかのもっとも偉大な神であるセラピスとなったのであった。かれが死んでのちアピスからセラピスへこのように名が変わったことについて、ウァルロはまったく簡単な理由を与えているのである。すなわち、死者が入れられる棺は、ギリシア語では「ソロス」(一)とよばれ、いまではだれでもがサルコファゴス(二)とよんでいるのであるが、その神殿が建造される以前に、棺のうちに葬られたとき、人びとは葬られたかれを崇めはじめたのである。そこで、ソロスとアピスとが結び付けられて、まずソラピスとよばれ、次いで、よく起ることとであるが、一字が変化してセラピスといわれることになったというのである。

かれのばあいにおいても、かれのことをたんなる人間であったと主張した者はだれでも、死に値する負い目を負ったのであるという決定がなされたのであった。そして、イシスとセラピスとが拝されるほとんどすべての神殿において像も存在したのであった。それは指をその唇に押し当てているものであるが、沈黙を命じていると見られるのである。ウァルロは、これは、かれらが人間であったということは語ってはならないということを意味していると考えたので

あった。他方、エジプト人が、おどろくほどの虚偽によって欺かれて、かれの栄誉のために豊富な美味をもって飼育されたところのかの牛は、セラピスとはよばれず、アピスとよばれたのであって、それはサルコファゴスをもたずに生きているものとして崇められたからである。

この雄牛が死んだとき、同じ色の子牛、すなわち、白い斑点でもって同じようにしるしづけられた牛がつねに求められ、見出されたゆえに、かれらはそれを、かれらのために神により配慮されたある種の驚くべきことであると信じたのである。じっさい、かれらを欺くために、胎み、妊娠している雌牛に、その雌牛だけが見分けることのできる雄牛の像を示して、そこからして母牛の欲情が自分の子どものうちに形体的にそのしるしが現れるよう誘発することは、ダエモンらにとってはそれほど大したことでもなかったのである。ヤコブがまだらの色のついた羊と山羊を、まだらの色のついた枝を用いておこなったのも、同じことであった(三)。人間が現実の物体的なものや色によってなしとげうるところのことを、ダエモンらは、子を胎んでいる動物に虚構の形姿を示すことにより、容易におこなうのである。

(一) *σορός*.
(二) sarcophagus.
(三) 「創世記」三〇の三七以下参照。

第六章

ヤコブの死の時期におけるアルゴスとアッシリアの王たち

このようなわけで、アピスはエジプト人たちの王ではなくアルゴス人たちの王であったが、エジプトにおいて死んだのであった。その息子アルゴスがこの王位を継いだのであった。その名からして都市がアルギィとよばれ、さらにそこから民はアルギウスとよばれるようになったのである。それまでの王たちには、場所や民にこの名があてられてはいなかったのである。かれがアルゴス人を、エラトスがシキヨン人を支配し、他方、バレウスがまだアッシリアの王位にあったとき、ヤコブは百四十七歳でエジプトで死んだのであった。死が近づいたとき、かれは、息子たちとヨセフから出た孫たちとを祝福し、この祝福によってまったく明白にキリストについての預言をおこなった。すなわち、ユダを祝福して、かれはつぎのようにいったのである。「統治者はユダから欠けることはなく、また、指導者はその腰から離れることはない。かれのためにとっておかれたことがやってくるまでは。かれはもろもろの民の期待となるであろう〔一〕」。

ギリシア人が他の国から種子を運び込んで穀類を用いたり、また、耕作によって畑を維持したりしはじめたのは、アルゴスの統治の時代であった。アルゴスは、死ののち神と見なされる

ようになり、神殿や犠牲が立てられてその栄誉が称えられるようになった統治者であった。この栄誉は、かれの治世のときに、かれに先立って、電光に打たれたホルギュルスとよばれた一私人に与えられたのであって、それは、かれが耕作のためにはじめて鋤を雄牛に結び付けたという理由からである。

（一）「創世記」四九の一〇。

第七章

ヨセフが死んだ時期の王たち

ヨセフが百十歳でエジプトで死んだのは、(一) アッシリアの第十二代目の王マミュトス、シキヨンの第十一代目の王プレメウスの治世時代のことであり、また、それはアルゴスがまだアルゴス人の王位にあったときのことである。かれの死ののち、神の民は百四十五年間エジプトに留まり、いちじるしい増加を見せたのであった。かれらは、はじめのうち、ヨセフのことをよく知っていたエジプト人が死ぬまで静穏に生きていた。そののち、その数の増大は敵意を惹きおこして、かれらは疑いの目で見られるようになった。かくしてかれらは、迫害と耐えがたい奴隷の苦難を課せられ、圧迫を受けたのであって、それはかれらがその地から解放されるまでつづいたのであった（これらの災いのなかにも、かれらは神の恵みにより豊かにその数を増やし

ていたのである)[二]。その間、アッシリアとギリシアでは同じ王権が存続していたのであった。

(一)「創世記」五〇の二六参照。
(二)「出エジプト記」一二参照。

第八章

モーセの生れた時代の王たち

さて、第十四代目の王サフルス[一]がアッシリアの、そして第十二代目の王オルトポリスがシキヨンの、また、クリアソスがアルゴスの第五代目の王として統治していたときに、モーセはエジプトで生れたのであった。かれによって神の民はエジプトでの奴隷状態から解放されたのであるが、そこでは、かれらが自分たちの創造者の助けを切に望むために、このようにして訓育されることを必要としたのであった。いま挙げられた王たちが支配しているときに、プロメテウス[二]が生きていたとある人びとには信じられているのである。かれが人間を泥から形成したのだというのは、かれがきわめて知恵のすぐれた教師としてきこえたからである。しかしながら、かれの時代に存在していた賢者がだれであったのか、明らかではない。

かれの兄弟アトランス[三]は偉大な天文学者であったといわれる。そこからして、かれが天をになっているという伝説的な話がおこることとなった。しかしながら、かれの名をもつ山が存在

するのであって、むしろその山の高さが、かれは天をになっているという民間信仰の原因となったとおもわれる。多くの他の伝説的な物語りは、この時代のギリシアではじめてつくられたのであった。じっさい、アテナイ人のケクロプス(四)の統治のときに至るまで、そしてそれは、その都市がその名を与えられたときであり、また、神がご自身の民をモーセの働きをとおして導かれたときであったが、ギリシア人はいくらかの死者を神々の数のうちに入れたのであった。そのようなことが、ギリシア人たちの虚しく盲目の慣習であり迷信であった。

これら(神格化された死者)のうちには、クリアソスの妻メラントミスおよびかれらの息子フォルバスがいた。これはその父親のあとを継いでアルゴスの第六代の王となった人物である。さらに、第七代の王トリオパスの息子であるイアソス(五)や、第九代の王ステネラスがいる。このステネラスはステネレウスとかステネルスとか、いろんな著述家によって異なった名でよばれている。メルクリウス(六)もこの時期に生きたという話がある。かれはアトランスの孫であり、(アトランスの)娘マイアから生れた。この話は通俗的な書物においてさえ重んじられた。メルクリウスは多くの技芸に秀でた者としてよく知られ、それを人間に分け与えたのである。

ヘルクレスはまだアルゴス人たちの時代に属しているが、メルクリウスよりもよりあとであったといわれている。じっさい、ある著述家たちは、かれを時期的にはメルクリウスよりもよりさきにおいているが、わたしはかれらがまちがっているとおもっている。けれども、この二人の生れた時期がどうであるにしても、これらの古い話を書こうという気になった有力な歴史家たちは、つぎの点では一致しているのである。すなわち、かれらはいずれも、もともと人間

であったということ、そして、かれらがこの世の生をより快適なものとなしたということで可死的な人間に資するところがあったゆえに、人びとから神の栄誉を得たのだということ、である。それにたいして、ミネルウァ(七)はかれらよりもずっと古い時代に属しているのであって、じっさい、かの女はオギュゴスの時代に、トリトニスとよばれる湖の近くで若い娘の姿で現れたと伝えられているからである。そこからして、かの女はトリトニアともよばれたのであった。かの女はたしかに多くの技術の発明者であって、その素姓について知られるところ少ないため、それだけに容易に女神として信じられることになったのであった。

すなわち、かの女がユピテルの頭から生れたという伝説的な話は、詩的な空想物語の類に入れられねばならないのであって、歴史史実のうちに入れられるべきではないのである。オギュゴス自身がいつ生きていたのか、歴史家のあいだで意見は一致していないけれども、かれの時代にも大きな洪水があったのである。それはギリシア民族やラテン民族の歴史が知ることのなかったところの、あのあらゆる洪水のなかでも最大の洪水ではなかった。つまり、箱舟のなかに入ることがゆるされた者たちを除いて、だれも逃れることのできなかったあの洪水ではなかったが、しかし、のちにデウカリオンの時代におこった洪水よりはより大きいものであった。

ウァルロは、わたしがさきに述べたところの書(八)を、そこからはじめているのである。そして、かれはローマの歴史に至るのに、オギュゴスの洪水よりも古いことからは出発してはいない。すなわち、その洪水とは、かれの治世のときにおこった洪水のことである。しかし、わたしたちの年代記者たち、すなわちまずエウセビオス、次いでヒエロニュムスは、オギュゴスの洪水

は三百年以上もあとにおこったと記しているのであって、それはアルゴス人の第二代目の王フォロネウスがすでに王位にあったときである。たしかに、これら年代記者たちは、自分たちに先行するある歴史家たちに従ったのである。けれども、オギュゴスの時代がいつであったにせよ、すくなくともケクロプスがアテナイを統治していたときには、ミネルウァはすでに女神として崇拝されていた。その都市が再建ないし建設されたのは、そのケクロプスの治世においてであった。

(一) エウセビオスにしたがえばサファエルスともよばれる。

(二) ティタン神族の一人イアペトスとクリュメネあるいはアシア、あるいはテミスの子ども。アトラス(アトランス)、メイノティオス、エピメテウスの兄弟。ゼウスが人間に火を与えなくなって、人間が困っているとき、プロメテウスは太陽神の火を盗んで隠し、持ち帰って人間に与えたという伝説でよく知られる。

(三) アトランスはアトラスともよばれている。プロメテウスの兄弟で、天空を支えている巨人神。

(四) 伝説的なアテナイ初代の王。アッティカの大地より生れたとされて、下半身が蛇の姿となっている。

(五) イアソスはアルゴス王。トリオパスまたはアルゴスの子ども。かれは兄弟たちとペロポネソスを分割継承したとも伝えられる。

(六) メルクリウスはローマの商売の神。ギリシアのヘルメスと同一視される。アトランスの娘マイアの子ども。

(七) ミネルウァはイタリアの技術、職人の女神。ギリシアのアテナと同一視される。

(八) 本巻第二章。ウァルロの『ローマ人の種族について』である。

第九章

アテナイという名の起こりについて

さて、アテナイという名は、たしかにギリシア語でアテーナー[一]とよばれるミネルウァから出ている。ウァルロはその理由をつぎのように述べている。そのところにオリーヴの樹が突然に現れ、また、別の地点に水が噴出したのであった。これらの兆しが王をひじょうにおどろかせたので、かれはその意味を知ろうとし、何をなすべきであるかを問うために、デルポイのアポロンに使いをおくったのであった。アポロンはつぎのように答えたのであった。すなわち、オリーヴはミネルウァを、大量の水はネプトゥーヌス[二]を表示していること、そして、そこからしてその都市が象徴的に名付けられる所以となるところのこれらの神々のいずれからその名を取るかということは、市民の権限内に存するということ、である。

この神託を受けとって、ケクロプスは票決でことを決するために、男女両性のすべての者たちを召集したのであった（というのは、その当時、この同じ地においては、女も男と同じく公的なことがらの評議に参加する習慣があったからである）。そこで、問題が多数の人びとの前にさし出されたとき、男たちはネプトゥーヌスに、女たちはミネルウァに、それぞれ票決をくだしたのであった。ところが、女のほうが一人だけ男よりも数でまさったので、勝利はミネル

ウァに帰することになったのであった。

そこで、ネプトゥーヌスは怒り狂って、海の水を氾濫させてアテナイ人の地を荒廃させたのであった。——というのは、自分が満足するだけの水をあふれさせることなど、ダイモンにとってはまことに容易なことであったからである。

このようにして、自由学芸やかくも偉大な哲学者たちの母にして乳母であるところの、そしてそれによってギリシアのなかでも最大の栄光と名声を得たところの、かの偉大なる都市はダイモンらのもてあそぶところとなり、男女の神々のうちの二人の男女のあいだの抗争の結果、女の票による女の勝利からしてアテナイという名を取ることになったのであった。そして、打ち負かされた男神によって苦しめられたので、勝利者の勝利そのものも罰せられねばならなくなってしまった。ミネルウァの腕よりもネプトゥーヌスの水のほうをいっそう恐れたのである。勝利をおさめたミネルウァは、このような仕方で罰せられた女たちにおいて打ち負かされることになったわけである。この女神は、自分のほうへ票を投じた女たちを助けることができなかったので、かの女たちはそれから以後は投票の権利を失い、その子どもたちは母親の名を取るのを禁じられてしまったのであるが、ただ、かの女たちが「アテナイ人の女」とよばれる資格だけは確保することはできたのであり、そして、かの女たちの投票が男神にたいする勝利をもたらすことによって与えられる女神の名を付けることは得られたわけである。もしもわたしの話が他のことへと急がせることがなかったなら、これについてどれほど多くのことを語りうるであろうか。

(一)　'Αθηνᾶ.
(二)　ローマの古い神で、ギリシアのポセイドーンと同一視され、海の神となる。

第十章

アレオパゴスの名とデウカリオンの洪水について

しかしながら、マルクス・ウァルロは神々の名誉を汚すような空想的な物語りに信頼をおくことをのぞまないのであって、それというのは、かれはその威厳にふさわしくないような考えを抱くことをおそれたからであった。だからしてかれらは、使徒パウロがアテナイ人と論争したアレオパゴス、すなわち、そこからしてその町の議員たちが「アレオパギテス」という名を得たというその場所が、マルス――ギリシア語で「アレース」とよばれた――がその地で十二人の神々の判事たちの前で殺人ゆえに告訴され、そして、六票で無罪放免されたゆえに、そのようによばれるようになったのだ、と考えようとはしなかったのである。というのは、投票が等しかったとき、有罪よりも無罪放免を取るというのが習わしであったからである。

どちらかといえば、ひろく受けいれられていたこの考え方に相対して、かれは、この名の理由を、知られない文献の知識から、別の説明を構成しようとしたのであった。かれにとって、アテナイ人たちが「アレース」と「パゴス」(丘の意)とから、それがあたかも「マルスの丘」で

あるかのごとく「アレオパゴス」と名づけたのだ、などと考えてはならないのである。かれはそのことを、明らかに神々に対する冒瀆であって、訴訟や裁判は神々には相いれないものと見なしたのであった。マルスについて語られているところのこの話は、ユノ、ミネルウァ、そしてウェヌスの三神について語られている話と同様、虚偽であるとかれは主張する。三神は黄金のりんごを獲得するために、審判者パリスのもとに美の卓越性を競ったと語られているのである[四]。真実であれ、虚偽であれ、自分たちの咎められるべき悪行をたのしむところの神々を、そのような遊戯でもってなだめるために演じられるのであるが、その話は、劇場の拍手喝采のうちに歌われ、かつ踊られるのである。

ウァルロは、神々の本性や習俗にふさわしくないようなことを信じるのを快しとしないので、そのような話に信頼をおかないのである。にもかかわらず、かれはアテナイという名について神話的な説明の代りに歴史史実的な説明を示している反面、その書のなかに、ミネルウァに対抗したネプトゥヌスのあのような大きな争いを取り入れているのである。つまり、その都市がネプトゥヌスよりはむしろミネルウァの名によってよばれたというあのことである。かれらはあの不思議なものを誇示して張り合ったとき、評定をもちかけられたアポロンはあえてかれらのあいだで決着をつけようとはせずに、神々のあいだのこの争いを終結させるために、ちょうどユピテルがいま述べた三人の女神たちをパリスのもとへおくったように、これを人間に委託したのであった。そこにおいて、ミネルウァは投票によって勝利を得たのであるが、しかし、かの女に票を投じた女たちが罰を受けることによって打ち負かされたのであった。かの女は、自分

に敵対する男たちにはアテナイという名をおくことができていながら、味方である女たちのために「アテナイ人の女」という名を確保することはできなかったのである。ヴァルロの記すところによれば、この時期に、ケクロプスの後継者であるクラナオスがアテナイを支配していたとき、しかしそれはまた、わたしたちの著述家エウセビオスとヒエロニュムスによれば、ケクロプスがまだ王位にあったときであるが、「デウカリオンの洪水」として知られる洪水がおこったのであった。(五) 災いがもっともひどかった地の部分をかれが支配していたからである。けれども、この洪水はエジプトおよびその近隣の諸地域にはけっして達しなかったのであった。

(一) 「使徒行伝」一七の一九以下参照。
(二) Ἄρης.
(三) ポセイドンとニンフのエウリュテーの子ハリロティオスを殺害したかどで、ポセイドンによってアレイオス・パゴス(Ἄρειος Πάγος)の法廷に訴えられた。アレオパゴスは元来「アレースの丘」の意である。
(四) ペレウスとテティスの結婚式に神々が集まったときに、争いの女神エリスは、もっとも美しい女神に与えるといって黄金のりんごを神々のあいだに投げ入れ、三女神がこれを争ったといわれる。ゼウスはトロイア王プリアモスの子であるパリスに審判を命じたのであった。
(五) ゼウスが堕落した人類に怒って大洪水をおこしたが、プロメテウスの子デウカリオンは箱舟を建造して水上を漂ったと伝えられる。

第十一章

モーセがエジプトから民を導き出したのはいつであったか

さて、モーセは、アテナイの王ケクロプスの治世のまさに終らんとするその時期に、エジプトから民を導き出したのであった。それは、アッシリアにおいてアスカタデスが、シキヨンにおいてマラトゥスが、アルゴスにおいてトリオパスが、それぞれ支配していたときであった。モーセがシナイ山で神から受け取った律法を民に伝えたのは、民が導き出されたときのことであったが、この律法は旧い契約とよばれている。この世の約束をもつものだからである。新しい契約はイエス・キリストをとおしてもたらされたのであって、それにおいて天の国が約束されたのであった。

この秩序は、神へ向かって生を前進するところのそれぞれの人間においてもいとなまれるのと同じように、保持されねばならなかったのである。これについて使徒が「最初にあったのは、霊のものではなく、肉のものであって、そののちに霊のものがくるのである」といっているごとくである。「第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る」(二)というのは真実だからである。モーセは沙漠において四十年間民を治め、幕屋や祭司職、犠牲やその他の秘義的な重要なことを多く制定して、有形的に遵守さるべきものの象徴をとおしてみずからキリストを

預言してのち、百二十歳で死んだのであった。

ヌンの子ヨシュアがモーセのあとを継いだ。かれは民を約束の地へ導き、この地を確保していた諸族を征圧してのち、神の権威によって民をその地に定着させたのであった。かれはモーセの死後、二十七年間民を治めた。そして、かれも死んだのであるが、それは、アミュンタスが第十八代の王としてアッシリアにおいて、コラクスがシキヨンの第十六代の王として、ダナウスがアルゴスの第十代の王として、そしてエリクトニオスがアテナイの第四代の王として、それぞれ支配していたときであった。

（一）「コリント人への第一の手紙」一五の四六以下。

第十二章

この時期にギリシアに導入された虚偽の神々の祭礼について

この時期、すなわちイスラエルのエジプトからの脱出から、その民が約束の地を受けとることへ導いたヌンの子ヨシュアの死に至るまでの時期に、虚偽の神々の栄誉を称えるための祭礼がギリシアの王たちによって確立された。それは、洪水とそれからの人類の解放、そしてまた、人間がはじめに高地へ移住し、のちに平地へもどったあのときの苦難にみちた生活の記憶を、多くの儀式によって想いおこさせるものであった。じっさい、ルペルクスたちが聖なる道を上

ったり下ったりすることは、そのように解釈されたのであって、かれらによって、水の氾濫ゆえに高い山に向かい、氾濫が引くことにより低地へふたたびもどった人びとが象徴されているわけである。

リベル・パテル(二)ともいわれて死後にひとりの神と見なされたディオニュソスが、アッティカの地においてかれをもてなした者にぶどうを示したといわれるのは、この時期のことである。同じころに、デルポイのアポロンのために音楽の遊戯が設けられたのであった。それは、かれの怒りをなだめるためであった。ギリシアの地方はかれの怒りのために不毛で苦しめられたと考えられたのである。それというのは、ダナオス王(三)が戦いでその地方を攻略し、アポロンの神殿に火を放ったとき、人びとは神殿をまもらなかったからであった。かれらはこの遊戯を設けるようアポロンの神託によって勧められたのである。しかし、アッティカにおいては、アポロンのために祭りを最初に設けたのはエリクトニオス(四)であって、それはたんにアポロンのためだけでなく、ミネルウァのためでもあった。そこでは、オリーブ油が勝者に賞として授与されたのであるが、それは、リベルがぶどうを導入したごとく、ミネルウァがオリーブを発見したという伝承によるものであった。

これらの年に、エウロペ(五)がクレタ人の王クサントスによって拉致されたという話がある。もっとも、クサントスの名については、他の人びとによって別の名が付けられてはいるが、いずれにしても、その結果、ラダマントス、サルペドン、ミノスが生れたのであった。これらの者は同じ女(エウロペ)によるユピテルの子どもであるという話がひろく受けいれられている。け

れども、そのような神々の崇拝者たちは、わたしたちがクレタの王について語っているところのことを歴史史実的に真実であると見ているのであるが、しかし、ユピテルにかんする話、すなわち、詩人たちのテーマになったり、劇場でもてはやされたりして、ひろく人びとに好まれているような話は、虚しいつくりごとだと考えているのである。つまり、それがたとえ虚偽のものであっても、神々の罪行によって、諸々の神霊たちをよろこばせるために、これらの見世物の源泉として扱おうとしているのだ、というわけである。

　同じころ、ヘルクレスはシリアで名声を保っていた。これは疑いもなく、わたしたちがさきに語ったのとは異なった人物である。じっさい、ある程度秘められた歴史においては、リベル・パテルもヘルクレスも幾人か存在したといわれている。十二の巨大な事績が数え上げられているのは、たしかにこのヘルクレスであるが、しかし、それら事績のうちにアフリカのアンタエウス殺害[六]は数えられない。それは別のヘルクレスに属するものだからである。人びとはその書のなかでオイタ山上でのヘルクレスの自滅の話を語っている。そこにおいてかれは自分を火のなかに置いたのであって、それというのは、病がかれを無力にして、多くのものを征服したときに示したところの力をもってそれを耐えることができなかったからである。王というよりはむしろ暴君であったブシリス[七]が自分の神々に客をいけにえとして用いたのはこのころのことであった。かれはエパトスの娘リビュアを母とするネプトゥヌス[八]の子であった。

　しかし、わたしたちは、神々が責められないために、ネプトゥヌスがそのような愚行を犯していたとけっして信じてはならない。そのような話題は、神々をなだめるための材料として、

詩人や劇場に当てがわれるべきなのである。アテナイ人の王エリクトニオスの両親はウルカヌスとミネルウァであったといわれ、ヌンの子ヨシュアの死はかれの最晩年であったということが確められている。けれども、人びとはミネルウァが処女であったことを欲するがゆえに、両者が争っているうちにウルカヌスが興奮して自分の種子を地に放射し、そこからして生れた人間が、そのような理由でこの名を与えられたという話がある。というのは、ギリシア語で「エリス」ἔρις は争いを意味し、「クトーン」χθών は土を意味するのであって、エリクトニオスはこの二つの名から合成されたものだからである。

しかし、かなり学のある者たちは、これを否認して、そのようなことをかれらの神々から取り払おうとしていることを認めねばならない。かれらは、この空想的な考えはアテナイのウルカヌスとミネルウァの両方によって共有されているところの神殿に捨てられていた子どもを発見したことからおこった、と主張するのである。子どもは未来の偉大さを予示する蛇のとぐろにまかれていたのであった。神殿が二人の共有のものであったために、そしてその両親が知られなかったので、その子どもはウルカヌスとミネルウァの息子といわれたのであった。にもかかわらず、この史実的な話よりも、むしろあの伝説めいた物語りのほうが、名前の由来をよりよく説明している。しかし、それがわたしたちにとってどんな意味をもつというのであるか。

後者は誠実な書物によって信心深い者たちを教導し、もう一方の話は欺くことを目的とした見世物によって汚れたダエモンらをよろこばせているのである。しかしながら、これら信心深い者たちも、かれらを神として崇めて、神々にかんするこれらのことを否定していながらも、

神々をそのすべての罪過から浄めることはできない。というのは、かれらがあたかも知恵ある者のごとくに否定しているところのことを不面目な仕方でおこなうその見世物を要求する神々に演じて見せ、そして、神々はこの偽りと不面目なことをよろこんでいるのだからである。たとい、空想的な物語りが神霊たちの虚偽の罪過をうたっているとしても、すくなくとも虚偽の罪過をよろこぶことは真の罪過なのである。

(一) ルペルクスはローマの古い森の神ファウヌスと同一視される。二月十五日はルペルカリア祭として獣類がかれに供された。

(二) リベルについては、本書第六巻第九章等に出てきたが、生産と豊穣の神である。ギリシアのディオニュソスと同一視された。ディオニュソスはアッティカのイカリアでぶどうの栽培を伝授したとされる。

(三) ダナオスはベロスとアンキノエとの子どもで、父親よりリビア王国を与えられたが、兄弟アイギュプトスと争い、かれを恐れて船を建造して逃れ、途中ロドスに寄航、アテーナの神殿を建造した。そこからアルゴスに来て、王位を譲られた。

(四) エリクトニオスは神話的なアテナイの王。かれはアフロディテに捨てられていたので、その結果、欲情のとりことなり、本文の中にも出てくるとおり、女神を追いかけたが、女神に拒まれて、その精液は女神の脚に撒かれた。女神は怒ってこれを髪の毛で拭き取り、地に投げたので、大地が身籠ってエリクトニオスが生れたと伝えられる。

(五) エウロペはテュロスの王アゲノルとテレパッサの娘である。ゼウスに恋されたが、クレタ島に上陸して、ラダマントス、サルペドン、ミノスが生れたといわれる。のち、クレタ王の妻となった。

(六) アンタエウスはポセイドンとガイアの子どもである。巨人でリビアに住み、通行人に格闘を挑み、勝っては殺していたが、ヘルクレスは逆にアンタエウスを投げて殺したと伝えられる。

(七) ブシリスはポセイドンとリュシアナッサの子で、エジプト王。暴君で外国人を毎年ゼウスの祭壇に供したが、ヘルクレスによって殺されたとされている。

(八) ネプトゥヌスはギリシアのポセイドンと同一視されるローマ神。海の神といわれている。

(九) ウルカヌスはローマの火の神。ムルキベル(火除けの神)とも称されている。

第十三章

判事(師士)の時代のはじめにおこった伝説的な物語りについて

ヌンの子ヨシュアの死後、神の民は判事(師士)たちをもったのであった。その期間に、かれらは交互に、罪の返報としての辛苦の謙虚さと慰めの繁栄とを経験したのであって、それは神の憐れみによるものであった。トリプトレムス(一)についての空想的な物語りがつくられたのもこの時代のことであった。すなわち、ケレスの命令で、かれは翼をもつ蛇にのり、飛びながら、ひじょうに貧しい地方に穀粒を与えた、というものである。ミノタウロス(二)についての話もある。それはラビュリントスに閉じ込められた怪物のことであって、人間が一度入れば出口がわからなくなり、迷路から脱け出ることなくさまようのである。ケンタウロス(三)については、馬と人間

との本性が結合されたものである。ケルベロス(四)については、下界にいる三つの頭をもつ犬であ
る。フリュクソスとその妹ヘレ(五)について、かれらがどのようにして雄羊の背にのって飛んだか
という話。蛇の頭髪をもったゴルゴン(六)について、かの女を見た者をかの女は石に変えてしまっ
た。ベレロポン(七)について、かれはいかにしてペガサスとよばれる翼をもった空飛ぶ馬にのって
飛んだのかという話。アンピオン(八)について、その竪琴の甘美な音色によって石を魅惑し、自分
のほうへ引き寄せたという話。工人のダエダロス(九)とその息子イカロスについて、かれらは自分
に合わせた翼で飛んだのであった。オイディプス(一〇)について、かれは人間の顔をした四足獣のス
フィンクスとよばれたある種の怪物を身投げさせて死へ追いやったのであるが、解くことがで
きないものとしてかの女によってつねに差し出されていた謎を解いたのである。ヘルクレスに
よって殺されたアンタイオスについて、かれは地の子であったが、そのために、かれは地に倒
されるといつもいっそう強力になって立ちあがったという話。そしておそらく、わたしが見落
したほかの話もあるであろう。

マルクス・ウァルロが、かれの『ローマ人の種族について』の第二巻をそれでもって終えて
いるところのトロイア戦争の時代までに、これらの神話的な物語りは人びとの工夫によって虚
構されたものであって、じっさいにおこった出来事を含んでいるところの歴史を、便宜的に用
いながらも、それらが神々を中傷するようなことに結び付かぬようにしているのである。

しかしながら、さらにわたしたちは、ユピテルの淫蕩のために強奪された美少年ガニュメデ
ス(一一)の物語りをもっている。この汚れた罪はタンタロス王によって犯され、物語りはユピテルに

帰せしめている。あるいはまた、ユピテルが黄金の驟雨の姿でダナエ(一二)の閨へ入ろうとしたという物語りがあるが、これは、女性の貞節は黄金によって滅ぼされるということと解される。このような物語りがだれによって考案されたにせよ、そしてそれが、ほんとうになされたことであるにせよ、虚構されたことであるにせよ、あるいは、他の者にかんする事実であるが虚構の上でユピテルに帰せられるものであるにせよ、このような欺瞞を耐えることができる人間の心について、どれほど悪しきものと考えていたか、ことばで表わすこともできない。ところが、それらは好ましいものとして、重んじられもしたのである。

　まったく、人びとはジュピターを熱心に崇拝すればするほど、かれについてあえてそのような物語りを語った者たちをきびしく罰すべきであった。ところが、じっさいには、これらのつくりごとを考案した者に憤りをおぼえようともせず、かえって、神々の怒りを招くことを恐れて、劇場でこのようなつくりごとを演じようとさえしたのであった。ラトナ(一三)がアポロンを生んだのはこのころであった。それは、わたしたちがさきに述べたアポロン、すなわち、その神託が一般的に聞き求められているアポロンのことでなく、ヘルクレスと共にアドメトゥスに仕えたところのアポロンのことである。それにもかかわらず、それが神であるとつよく信じられていて、多数の、というよりは、ほとんどすべての人びとが二人を同一のアポロンであると見なしている。ちょうどそのころ、リベル・パテルもインドで戦いをおこなっていたのであった。かれはその軍勢のうちに多くの女性をもっていた。かの女たちはバッカイとよばれたが、その勇気よりも狂気によってよく知られている。

たしかにある人びとは、このリベルは打ち負かされて捕えられたといっており、また、他のいくらかの人びとは、かれは戦いでペルセウスによって殺害されたとして、その埋葬の場所のことまで記しているのである。にもかかわらず、バッコスの聖なる儀式が、それはむしろ冒瀆的なものであるが、かれの名において、いわば神の名において設けられたのであって、それは不浄なダエモンらによるものであった。そののち何年も経て、元老院は儀式の狂気じみた淫らさを恥じて、ローマ市内では禁じてしまったのであった。同じ時期に、ペルセウスとその妻アンドロメダが、死後、天に受けいれられたと信じられ、人びとはかれらの像を星座によって指示し、かつその名をよぶことを恥じもしなければ、おそれもしなかったのである。

（一）トリプトレムスはエレウシスの王。ケレオスとメタネイラとの子。デメテル（ケレス）はかれに竜の乗物を与えて、麦の栽培を世界の人びとに教えるべく旅立たせたといわれる。

（二）ミノタウロスは牛頭人身の怪物である。ミノス王はダエダロスに迷宮をつくらせ、その中にミノタウロスを閉じ込め、アテナイから人間の子どもを連れてきてミノタウロスに供したと伝えられる。

（三）ケンタウロスは馬身で腰から上が人間になっている怪物である。

（四）ケルベロスは冥府の入口の番犬。三頭で尾が蛇の形をしており、首のまわりに無数の蛇の頭が生えていると伝えられた。

（五）フリュクソスとその妹ヘレはアタマスとネペレの子。いけにえにされようとして、黒海の東端にあるといわれた伝説的な王国コルキスへ金毛の羊に乗って逃れたとされる。

（六）ゴルゴンはポルキュスとケトの娘。醜怪な顔をもち、頭髪は蛇、歯は猪のごとく、大きな黄金の翼をもち、その眼は人間を石に化す力があったといわれる。

（七）ベレロポンはコリントス王シシュポスの子であるグラウコスの子。リュキア王イオバテスはベレロポンを殺そうとして怪獣キマイラ退治を命じたが、かれは神馬ペガサスに乗って高くとび、キマイラの背を射て退治し、また、かれを待ち伏せていたリュキア人の勇者らをも殺したと伝えられる。

（八）アンピオンはゼウスとアンティオペの子。テーバイ王、大伯父リュコスに山中に捨てられ、羊飼いによって育てられた。のち、ヘルメスより竪琴を授かり、その名手となる。テーバイ市の城壁をつくるとき、かれの楽の音に石がおのずから動いたと伝えられる。

（九）ダエダロスは「巧みな工人」の意である。ミノスの怒りに触れて、息子イカロスと共にラビュリントスの迷宮内に幽閉されたが、翼をつくり、脱出。イカロスはあまりに高くとびすぎて、太陽の熱で翼の膠が溶解、海中に墜落して死んだ。ダエダロスは、鋸や斧、また船のマストなどの発明者とも伝えられている。

（一〇）テーバイの創設者カドモスの後裔にあたり、ライオス王の子である。かれは知らずして実父ライオスを殺害、怪物の差し出す謎を解いてテーバイの王となる。その結果、かれは知らずして母親を妻とすることとなる。のち、自分の素姓を知って、みずから盲目となる。

（一一）ガニュメデスはトロイアのトロスの子。もっとも美しい少年で、神々はゼウスの酒盃の捧持者として天上にさらい、そのかわりに父親に神馬を与えたと伝えられる。

（一二）ダナエはアルゴス王アクリシオスとラケダイモンの娘エウリュディケとの娘。アクリシオスはかの女によって殺されるであろうとの神託を受けたので、青銅の部屋にダナエを幽閉したが、ゼウスが黄金の雨に身を変じて、ダナエの膝に流れ入り、かの女と交わったと伝えられる。

（一三）ラトナはギリシア名レートー。ティタン部族のコイオスとポイベとの娘。ゼウスに愛されて、アポロンとアルテミスとを生んだ。

第十四章

神学的詩人たちについて

同じ時期を通じて、「神学者」ともよばれた詩人たちが現れたのであった。(一)かれらは神々にかんするうたをつくったからであった。けれども、そのような神々は、偉大な人間ではあったが、やはり人間にすぎなかった。(二)それとも、真実の神がおつくりになったこの世界の諸元素であるか、あるいは、創造者の意志と自分たち自身の功績にしたがって権能と力とのうちに秩序づけられたものかであった。この詩人たちは、そのむなしいつくりごとのうたのなかで、もしかして唯一にして真なる神にかんして何ごとかをうたうことがあったとしても、かれらはいずれにしても、神々ではないところの他のものと共に神を崇めることにより、そして、一なる神にのみ帰せられるべきつとめをそのようなものたちにささげることによって、正しい仕方で神に仕えることをせず、自分たちの神々にふさわしくないところのつくりごとを差し控えることもできなかったのである。――オルペウス、(三)ムサイオス、(四)リノスなどの詩人のことである。

これらの神学者たちが神々を拝したのは真実である。かれらが神々の代りに拝されたわけではなかったが、しかし、どういうわけかはわからないが、不信仰な者たちの都市はいつも、冥界の神聖な、というよりも瀆神的な儀式に、オルペウスをしてそれにかかわらせているのであ

る。イノ(五)とよばれたアタマス王の妻およびその息子メリケリテス(六)は、みずからのぞんで身を海に投じて滅びたのであるが、人びとの意見によれば、かれらは神々のうちに入れられているのである。ちょうど、その時代の他の人間たち、すなわちカストルやポルルクス(七)がそうであったごとくである。じっさい、ギリシア人はメリケリテスの母をレウコテアとよび、ラテン著述家たちはかの女をマトゥタとよぶのであるが、いずれもかの女を女神と見なしているのである。

(一) ヘロドトスはホメロスやヘシオドスをそのようによんだ(二の五三)。
(二) 本書第四巻第二十七章参照。
(三) オルペウスはホメロス以前の最大の詩人で音楽家。オルペウス教の創設者。『神統記』などをはじめ、多くの詩がかれのものといわれているが、しかしそれはヘシオドスの亜流であるとされている。かれのうたには獣も草木もききほれたという。かれの竪琴は天上にのぼって星座となり、かれ自身はエリュシオン(英雄たちなど神々に愛された者が死後、幸福な生をいとなむ野)に赴き、人びとをたのしませているといわれる。
(四) ムサイオスはホメロス以前の伝説的詩人。オルペウスまたはつぎに出ているリノスの弟子とされている。かれの名のもとに伝わる神託集があった。
(五) カドモスとハルモニアの娘。アタマスの後妻。海の女神レウコテアと同一視される。
(六) イノとアタマスの末子。アタマスが狂って子どもたちを殺したとき、イノは息子メリケリテスを抱いて海に投身したが、ポセイドンによって海の神に変えられたと伝えられる。
(七) カストルとポルルクスはゼウスとレダの子である。かれらのことをディオスクロイ(ゼウスの息子たち)とよぶ。カストルは戦術に、ポルルクス(またの名をポリュデケスという)は拳闘の技にすぐれ

ていた。かれらは姉妹のヘレネがアテナイの英雄テセウスに奪われたとき、アテナイに攻め入り、ヘレネを奪い返したといわれている。

第十五章

アルゴス王国の終わりとラウレントゥム王国におけるピクスの統治のはじまり

その時代を通じてアルゴスの王国は終結し、アガメムノンの都市ミュケナイに移された。そして、ラウレントゥム王国がはじまったのであるが、そこではサトゥルヌスの息子ピクスが最初に王位についたのであった。(一) これは、ヘブライ人たちのもとでは、デボラという女性が判事（師士）であったときである。(二) けれども、かの女をとおしてはたらいたのは神の霊であった。じっさい、かの女は預言者でもあったからである。その預言はわたしには十分明らかではないので、長い説明なくしてはそれがキリストにかんして告げられたものであることを証明することはできない。このようなわけで、ラウレントゥムの人たちはすでにイタリアにおいて支配力をもっていたのであるが、かれらから、ギリシア人以後のローマ人の起源がより明らかにたどられることになる。しかしながら、アッシリアの王国はなお存続していたのであって、そこでは、ピクスがラウレントゥムの最初の王となったとき、ランパレスが第二十三代の王となっていたのであった。

ピクスの父親であるサトゥルヌスにかんしては、かれが人間であったことを否定する人たちは、そのような神々を拝する者らがどのように判断しているかを見るがよいであろう。かれについて他の著述家は、かれが息子ピクスの前にイタリアで統治していたと記している。ウェルギリウスもまた、かなりよく知られた一節でつぎのようにいっている。

かれは高き山々に散らされたる野生の
種族を集め、かためて、
かれらに法を与え、
その名を選んでラティウムとよんだ。
かつてかれがその境の地にあり、
安全に身をひそめていたゆえに。
その治世のもと、黄金の時代が
存在したといわれる。(三)

しかし、これらのことは詩的な虚構であったと見なされている。そして、ピクスの父はむしろステルケスであったと主張されている。かれは動物の糞で土地を肥やすという方法を見つけたきわめて巧みな農夫であった。それは、かれの名からステルクゥスとよばれる。ある人びとはこれをステルクティウスとよんだのであった。また、かれをサトゥルヌスとよぶことにした理由が何であれ、このステルケスまたはステルクティウスは、たしかに農耕にかんする功績ゆえに神とされたのであった。

同じようにかれらはその息子ピクスをも神々の列に数え入れたのであった。かれらは、かれがよく知られた占者、戦士であったと主張している。ピクスはラウレントゥムの第二代目の王ファウヌスという子どもをもった。この人物もまた神である。あるいは神であった。トロヤ戦争の前には、死者にたいしてこのような神的な栄誉を与えていたのであった。

(一)　ピクスは「木つつき」の意であるが、ローマでは、この鳥の木をつつく音は予言のために重要視されていた。ローマ神話では、かれは農耕の神サトゥルヌス(または本文にも出てくるとおり、ステルケスともよばれる)の子どもで、ファウヌスの父、ラティヌスの祖父とされている。

(二)　「士師記」四の四以下参照。

(三)　ウェルギリウス『アエネイス』八の三二一―五。

第十六章

トロヤ滅亡後のディオメデスの神格化について

さて、トロヤのあの破滅がやってくるのであるが、その破滅は至るところでうたにうたわれ、子どもたちにもよく知られている。それは、その大きさと、それを記した著述家たちの卓越した表現とのゆえに、ひじょうによく語られる出来事となり、また、ひろく知られることになった。これはファウヌスの息子ラティヌスの治世のときにおこったのであるが、かれの名からし

てその王国はラテン人の王国とよばれはじめ、ラウレントゥムという名は絶えることとなった。ギリシアの征服者たちが破壊されたトロヤをあとにして自分たちの祖国へ帰ったとき、かれらはさまざまな種類の恐ろしい災いによっていためつけられ、苦しめられたのであった。それにもかかわらず、かれらもまた、かれらのうちのある者を神々のうちに加えて神々の数を増したのであった。

じっさい、ディオメデス（二）でさえ、神にさせられたのであった。かれは神によって課せられた罰によってかれ自身の国へ還るのを妨げられたといわれている。かれの仲間らが鳥に変えられたことは、いわれのない詩人の空想物語りではなく、歴史的な事実として証拠だてられている。しかし、想像の上ではひとりの神とされたけれども、まちがいなくかれは、自分でその仲間らを人間へとふたたび回復することはできなかったし、また、天上の王国に新しく加えられた者として、自分の王であるユピテルにそれを求めて達成することもできなかったのであった。

それればかりか、かれの神殿がアプリアのガルガヌス山からそれほど遠くないディオメデスの島にあって、その鳥たちが神殿のまわりを飛びまわり、そこに住みつき、そして、くちばしに水をいっぱい含んで撒き散らすというようなきわめて不思議な忠誠ぶりを見せているという。ギリシア人やギリシア人の系統から出た者たちがそこにやってくると、鳥たちはおとなしくなるだけでなく、その上にきてじゃれつきさえするのである。ところが、他民族の者を見つけるなら、その頭上に飛んで、致命的ともなるほどの危害を加えて傷つけるという。じっさい、鳥たちはこの戦闘に十分な固く巨大なくちばしで武装しているとうわさされているのである。

（一） ディオメデスはホメロスの作品において、アキレウスにつぐ英雄として描かれている。トロヤの物語りでは、アルゴスの兵を八十隻の船にのせて出陣、智勇兼備の武将で、オデュッセウスと行動を共にする。のちにイタリアに来て、ダウヌス王の娘を娶り、ダウニア王となってここで世を去った。かれの名によってディオメデスの島とよばれた島に葬られ、かれの部下たちは鳥と化したと伝えられる。

第十七章

ヴァルロが述べている人間の変身についての信じがたい話

さらにヴァルロはこれに加えて、他のものと同じような信じがたい話に言及している。それは、ウリクセスの仲間たちをも獣に変身せしめたあの偉大にしてこの上もなくよく知られたキルケや、また、運命に導かれてある湖水を渡り、そこで狼に変えられたアルカディア人にかんするものである。アルカディア人は自分たちと同じような野生の獣と一緒に、その地方の荒果てたところに生きたのであった。しかし、もしもかれらが人間の肉を食べなかったなら、九年ののちに湖を泳いでもどり、ふたたびもとの人間に変えられるのである。（一）さらに、かれはデメネトス（二）とかいう名をはっきり挙げている。アルカディア人たちが自分たちの神リュカイオス（三）に子どもを犠牲としてささげるのをつねとしていたのであるが、デメネトスはその犠牲を食したので、そこで狼に変えられてしまったのである。そして、十年してかれは本来の形姿にもどさ

れ、拳闘士として訓練を積んで、オリンピア競技で賞を獲得したのである。

この同じ歴史家は、アルカディアにおいては、リュカイオスがパン・リュカイオスとかユピテル・リュカイオスというように姓が付けられているのは、人間の狼へのこの変化ゆえであってそれ以外ではないと考えている。それは神的な力によってのみおこるのだと見なしているのである。というのは、「狼」(四) はギリシア語では「リュコス」λύκος といわれるからであって、そこからして、リュカイオスという名へ転じられたのは明らかである。かれは、ローマ人ルペルキ(五)も、その起こりを、これらの神秘的なことから出ているものとし、いわばそれらのことが種子となっているというのである。

(一) プリニウス『自然誌』八の二二。
(二) この名はほかでは見られない。
(三) リュカイオスはアルカディアの同名の山に祭られたゼウスの呼称。この山ではリュカイオスのために祭りが催されたが、そこでは犠牲にささげられた人間の肉を食べた者は、九年間狼に変身するという伝えがあった。
(四) ラテン語の lupus.
(五) 本巻第十二章参照。

第十八章

これらの変身について、わたしたちは何を信じるべきであるか

しかし、ダエモンらのこれほどの嘲弄にかんして、これらの話を読む人は、それについてわたしたちが何をいおうとするか、おそらく聞くことを期待するであろう。わたしたちは、「バビロンの中から（一）」逃れ出るべきであるという以外に何をいうことができるであろうか。この預言的な指示は霊的に理解されるのであって、いうまでもなくそれは、不信仰な天使と不信仰な人間との社会であるこの世の国から、「愛によってはたらく（二）」ところの信仰の歩みによって進みつつ、生ける神へ避難すべきである、という意味である。たしかに、このもっとも低い世においてはダエモンのうちにより大きな力を見るのであるが、それを見れば見るほど、わたしたちがいっそう堅固にそのかたをとおしてもっとも低いところから高きところへと登りつくことのできるあの仲保者によりすがらねばならないからである。

というのは、もしもわたしたちが、これらの話を信じてはならないといっても、今日でさえ、この種のことはまちがいなく聞いたのだ、とか、それらのことを直接見聞したのだ、と主張する人びとが見いだされないわけではないからである。じっさい、わたしがイタリアにいたとき、わたし自身がその国のある地域からそのようなことを聞いたものであった。そこでは、これら

の悪しき術に習熟している宿の女主人たちは、自分たちがそれをのぞんだり、それが可能となったとき、旅人たちにチーズを与えるのをつねとしていたといわれる。このようにして、その客たちはただちに駄獣に変えられ、あらゆる種類の必需品を運び、そしてそののち、かれらがその仕事を完了したとき、かれらはふたたび自分自身にもどったというのである。とはいえ、かれらの心には、動物的なものでなく、理性的で人間的なものが保ちつづけられたのであった。これは、アプレイウスが『黄金のろば』と題する書物のなかで、(三)自分に起こったこととして記ししていることであるが、くすりを一服飲むと、その者は人間の心をもったままでろばになるというのである。しかし、これは事実であるかも知れないし、虚構であるかも知れない。

この種の話が虚偽であるか、それとも、すくなくとも異常なものであって、信頼されないのは当然のことである。しかしながら、わたしたちは、全能であられる神は、罰するという仕方によってであれ、助けるという仕方によってであれ、のぞまれるすべてのことをなされるというまったき確信をもって信じなければならないのである。他方、ダエモンらは(かれらは天使的な被造物ではあるが、いまではそれ自身の悪しき意志によって邪悪なものとなっているのであるから)、神が許容されるところのことのほかに、その本性に属する力によっては何ごともなしえないのである。神の裁きはしばしば隠されたものであるが、けっして不公正なものではないのである。ダエモンらは、わたしたちがいま問題にしているような何らかの芸当をじっさいにおこなうとしても、もちろん存在を有するものを創造することなどはないのであって、真実の神によってつくられた存在をたんに見かけの上でのみ変化させて、そうでないもののごと

くに見せているにすぎないのである。
このようなわけで、魂はいうまでもなく、からだも、ダエモンの技巧や力によって動物の肢体や輪郭へと変えられるというようなことは、いかなる理由によっても信じてはならないのであって、かえって、それは人間の幻影なのだと信じるべきである。その幻影は、想念や夢のなかで、無数の種類のものをとおしてさまざまに変化するのであり、そして、それは物体ではないが、おどろくほどの速さで物体の姿とよく似た形をとるのである。人間の身体の感覚が眠っていたり抑圧されたりするときに、何かわからないがことばで表わすことのできない仕方で物体的形象となって他の人びとの感覚にもたらされるのである。
このように、人間のほんとうの身体そのものはどこか他のところに横たわっており、たしかに生きているのではあるが、しかし、眠りのときよりもはるかに深く、また重苦しく昏睡状態に陥っているような感覚に閉ざされていることを意味している。その間、幻影は何らかの動物に似た形態をもって他人の感覚に現れ、人は自分自身もそのような状態にあって荷物を運んでいるのだと自分におもわれるのであって、それはちょうど夢でそのようなものを見たりすることがあるごとくである。けれども、この荷物がほんとうの物体であるばあいには、それは人間をからかうためにダエモンらによって運ばれているのである。人間は一方では荷物のほんとうの物体を、他方では駄獣となった虚偽の身体を識別しているのである。
たとえば、プラエスタンティウスとかいう名の人物がいたのであるが、かれは自分の父親におこったことを伝えているのである。すなわち、父親は、自分の家のいくつかのチーズのなか

に入っていたくすりを一服飲んで寝台に横になった。そして、あたかも眠っていたかのようであった。しかし、どうしても目を覚ますことができないでいた。何日かして、目を覚まし、眠っていたかのように自分の経験を夢として物語ったのである。かれは馬になり、他の荷物を運ぶ動物と共に、レティカといわれている穀物(レティア[四]へ輸送されるゆえにそのようによばれた)を軍人たちのところへ運んだのである。じっさいに、そのとおりのことがおこったことがわかったのであるが、すくなくともかれにとって、それがたんなる夢のごとくにおもわれたのであった。

また、他の人はつぎのように伝えている。かれは夜に、自分の家で休む前に、ある哲学者が自分のところへやってくるのを見たのであった。それはかれにはよく知られていた人物であった。この哲学者は、かれがかつて尋ねたときに説明しようとはしなかったところのプラトンの哲学について、いくつかのことをかれに説明したのである。そこで、かれは、哲学者の家で質問したときに説明しようとはしなかったことを、なにゆえ他人の家でやってくれることになったのか、問うたのであった。その哲学者は答えて、「わたしはやってはいない。わたしは自分がやったという夢を見たにすぎない」といったのである。これによって明らかなのは、ある人間が眠りのなかで見たところのことが、他人には幻影というすがたをとって示される、ということである。

これらの話は、わたしたちが信ずるに値しないと考える人びとによって語られたものではなく、わたしたちに偽りを語っているとはおもえない報告者によって語られたものである。それ

ゆえに、ひろく語られたり、文書に記録されているこのようなことは、それがじっさいにおこったとすれば、いまいったような仕方でおこることもあったとおもわれるのである。つまり、アルカディアの神々によって、というよりも、むしろダエモンらによって、人間が狼に変えられることがよくあったということや、

ウリクセスの仲間を魔力によって変えた(五)といわれるキルケの芸当のことである。しかし、ディオメデスの鳥たちは、その種を、相継ぐ子孫を通じて保持していくと伝えられているので、わたしは、かれらは人間の変身によってできたのではなく、さらわれた人間たちの代わりをしているのだと考えている。それはちょうど、雌鹿がアガメムノン王の娘イピゲネイア(六)の身代りとなったのと同様である。

というのは、この種のたくらみは、神の判断によって許容されたダエモンらにとっては、それほど困難もなくおこなわれうるのだからである。けれども、かの処女はのちに生きて発見されたので、雌鹿がかの女の身代わりに置かれたということは容易に知られたのであった。それにたいして、ディオメデスの仲間たちは突然に姿を消して、そののちどこにも現れず、悪しき天使らの復讐によって滅ぼされたのであって、それゆえに、かれらはそのような鳥に変えられてしまったと信じられているのである。つまりその鳥というのは、その種類のものが見出される遠い場所から別の地点へとひそかに連れてこられて、突然かれらの身代わりとされた鳥のことである。

その鳥がくちばしで水を運び、ディオメデスの神殿に注ぐということ、また、ギリシア系の

人びとにはこびへつらうが、外国人に向かっては襲撃するということ、——これらのことはダエモンらが刺激を与えてそのようにさせているとしても不思議ではない。ディオメデスが神になって、人間をこのような仕方で欺くことができるのだと説得することは、ダエモンらの利となるからであって、それは、人間が多くの虚偽の神々を拝し、唯一にして真の神をあなどり、神殿や祭壇、犠牲や祭司など(それらが正しいものであるばあいは、唯一にして真の神にのみ帰せられる)によって、死んだ人間たち、すなわち生きていたときでさえ、真に生きていたわけではないような者たちに専心するためである。

(一) 「イザヤ書」四八の二〇。
(二) 「ガラテヤ人への手紙」五の六。
(三) アプレイウス(二世紀頃のアフリカ生れの哲学者)については、本書の第四巻第二章参照。
(四) アルプスとドナウ川とのあいだにはさまれた地域。
(五) ウェルギリウス『選詩』八の七〇。
(六) イピゲネイアはアガメムノンとクリュタイムネストラとの娘。トロヤ戦争時、アガメムノンはギリシア軍中の最大の予言者カルカスのことばによって、オデュッセウスとメネラオスに迫られて娘をアキレウスと結婚させるという口実で呼びよせ、犠牲に供せんとしたところ、アルテミスがそれをあわれみ、鹿を身代りとし、かの女をタウロス島へさらって行ったと伝えられる。

第十九章

アエネアスのイタリア到着

さて、トロヤが奪われ、破壊されてのち、アエネアスはトロヤ人の生き残った者たちを運ぶ二十の船と共に、イタリアへやって来たのであったが、その時期には、そこではラティヌスが支配していた。また、メネステウスがアテナイ人のもとで、ポリュピデスがシキヨン人のもとで、そしてタウタネスがアッシリア人のもとで、それぞれ王として統治していたが、ヘブライ人のもとではラブドンが判事(士師)であった[一]。ラティヌスの死ののち、アエネアスが三年間統治したのであったが、ペラスゴスがすでにシキヨンの王となり、サムソン[二]がヘブライ人の判事となっていたことを除いて、上述の地では同じ王たちが支配していた。サムソンはおどろくべき力の持ち主であったので、ヘルクレスだと見なされていたのであった。ラテン人たちは、アエネアスが死んでのちその姿が見られなかったので、かれを自分たちの神々のうちに加えたのであった。

サビニ人たちもその初代の王を自分たちの神々のうちに登録した。その名をサンクス、または、ある人びとはサンクトゥスとよんだのであった。アテナイ人の王コドロス[三]が、かれの国の敵であったペロポネソス人に自分を殺させるため、その正体を隠して、かれらに身を晒し、そ

れを果したのもこの同じ時期であった。このようにして、かれは祖国を救ったといわれているのである。というのは、ペロポネソス人は、かれらがアテナイ人の王を殺害するなら、そのときには勝利者とはならないであろうという神託を受けていたからである。そこで、コドロスは貧乏人の姿で現れてかれらを欺き、かれらを刺激して自分を殺させるよう口論を吹っかけたのであった。そこからしてウェルギリウスは、「コドロスのけんか」(四)といっているのである。

アテナイ人たちはかれをも、その栄誉ゆえに犠牲をささげて神として崇めたのであった。アエネアスの息子シルウィウス(五)——かれはその国の第三代目の王アスカニウスの母親であるクレウサから出たのではなく、ラティヌスの娘ラウィニアからアエネアスの死後に生れた息子といわれる——がラテン人の第四代目の王、オネウスがアッシリア人の第二十九代目の王、また、メラントスがアテナイ人の第十六代目の王、そして祭司エリ(六)がヘブライ人の判事であったとき、シキヨン人の王国は消滅したのであった。それは九百五十九年間つづいたと伝えられている。

(一)「士師記」一二の一三以下参照。ラブドンはアブドンともよばれる。

(二) サムソンはイスラエルの士師のうちの最後の、もっとも特色ある人物である。かれの一生はペリシテ人とのたたかいであったが、神の力を与えられて多くの勝利を得た。しかし、最後にデリラとの愛に惑わされて神の力を失った。

(三) コドロスは伝説的なアテナイの王。メラントスの子。父のあとを継いで王となったが、敵がデルポイの神託によってアテナイ王を殺さなければ勝利を得るであろうと告げられていたことを知って、貧しい身なりをしてみずから敵陣に近づき、けんかを吹っかけてわざと殺された。敵はこれを知って軍

を引いたと伝えられる。

(四) ウェルギリウス『選詩』五の一一。

(五) アエネアスとラウィニアの子ども。アスカニウスはラウィニウムを義弟にゆずり、アルバ・ロンガ市を築き、死後この市をもシルウィウスにゆずった。シルウィウスのあとを祖父と同名のアエネアスが継いだ。

(六) 士師時代の終わりのころの士師(判事)のひとり。祭司でもあった。かれは「神の人」ともよばれるようになったサムエルを、その幼少時代に訓育。エリは四十年間イスラエルをさばいた。

第二十章

判事(師士)の時代以後のイスラエルの王位について

その後まもなく、同じ王たちがいま述べた地において支配しているときに、判事(士師)の時代は終わり、イスラエル王国はサウル王をもって開始された。それは預言者サムエルの時代であった。その時期から、ラテン人の王たちはシルウィウスという名でよばれはじめたのであるが、最初にシルウィウスといわれたのは、まちがいなくアエネアスの息子であった。そしてかれののち、かれの後継者たちは、与えられた固有の名前の上にこの姓を加えることを忘れなかった。それは、ずっとのちに、カエサル・アウグストゥスの後継者たちがカエサルという姓を

付けられて行ったのと同じである。ところで、サウルがしりぞけられて、かれの血統からはだれも王位を継ぐことはなくなって、サウルの死後ダヴィデが王国を継ぐことになった。(一) それはサウルが王権を得てから四十年ののちのことであった。

その時期に、アテナイ人たちは、コドロスの死後に王制を止めて、国家のことがらを管理するために行政官をもちはじめることになった。ダヴィデもまた、四十年間統治したが、そののち、息子のソロモンがイスラエルの王となった。(二) かれはエルサレムにあのよく知られた神の宮を建設したのであった。また、その時代にラティウムにアルバが建設され、そのとき以来、王たちは、同じラティウムの地域を統治したが、ラテン人の王とよばれる代りにアルバ人の王とよばれるようになった。ソロモンのあと、その息子レハベアムが継承したが、かれのもとでその民は二つの王国に分割され、それぞれの国がその王をもつことになったのであった。

(一)「サムエル記下」二の四参照。
(二) 同上、五の四参照。

第二十一章

神格化された者を含むラティウムの王たちについて

神とされたアエネアスののち、ラティウムは十一人の王をもったが、そのうちのだれも神と

されることはなかった。しかし、アエネアスの第十二代目の後継者であったアウェンティウスは、戦いで打ち倒され、そして、いまもなおかれの名でよばれているあの山に葬られたのであったが、のちに人びとはかれを、自分たちのためにつくった神々の数のうちに数え入れたのであった。たしかにある人びとは、かれが戦いで殺されたと記すことを欲せず、かれは姿を消したといったのであった。また、その山はかれの名によって名付けられたのではなく、鳥の到来（アウエントウス・アウイウム）からアウェンティヌスとよばれるようになったというのである。

この王ののち、ラティウムで神とされたのはローマの建設者ロムルスのみである。これらの者のあいだに二人の王が見出されるが、その最初のほうは、ウェルギリウスの詩句によれば、

その次にくるのはかのプロカ。
トロヤの民族の誇り（一）。

とうたわれている。この者の時代には、すでにある意味でローマは誕生しようとしていたので、あらゆる王国のうちでも最大のものであったアッシリアは、その長くつづいた時代の終わりに来ていたのであった。じっさい、ニヌスの父親ベルス、すなわち、初代としてその小さな領域において支配力をもつことで満足していた王の時代を数え入れるなら、およそ千三百五年ののちに、支配権はメディア人へと手渡されたわけである。

ところで、プロカスはアムリウスの前に王であった。さらに、アムリウスはその兄弟のヌミトルの娘――レアという名でよばれる――をウェスタの乙女とした（二）。かの女はイリアともよばれ、ロムルスの母親であった。人びとは、かの女がマルスによって双生児を生んだと主張する

が、そのようにして人びとはかの女の汚辱を栄誉あるものとなし、また、それを弁護しようとするのである。人びとは、その幼児たちが遺棄されてのち雌狼によって養われたということを証拠として引用するのである。それというのは、かれらは、この種類の動物はマルスに属すると考えられたからであって、そのため、雌狼はその幼児たちに主人であるマルスの息子たちを認めたゆえに、かれらに自分の乳房を与えたのだ、と考えているのである。しかしまた、つぎのようにいう者もいなかったわけではない。すなわち、遺棄された子どもたちが泣き叫んで横たわっていたとき、はじめに、だれであるかは知られないが、ある売春婦によって拾い上げられ、子どもたちはその乳房をはじめて吸ったのであって（「雌狼（ルパ）」という名は売春婦に用いられており、そこからしてその評判の良くない家は今日でも「狼の巣（ルパナリア）」とよばれている）、そののちに、かれらはファウストゥルスという名の羊飼の世話となり、その妻アッカによって養育されたというのである。

しかし、神が、残酷にもこれらの幼児たちを水のなかに捨てるように命じたその王たる人間をとがめるために、その者をとおしてかくも偉大な国を建設しようとされたところのその子どもたちを助けて、ご自身の神的なはからいによってかれらを水から救出し、野生の動物に養育されることを欲しられたのだとしても、何が不思議であろうか。ラティウムの王国では、アムリウスのあと、その兄弟のヌミトルが継承したのであった。かれはロムルスの祖父である。それによってかれはのちに、自分の孫ロムルスと共に統治することになったのである。

（一）　ウェルギリウス『アエネイス』六の七六七。

（二）アムリウスはアルバの第十五代目の王。プロカスの子どもで、ヌミトルの兄弟である。父は遺産を二人に分けたが、王国を受けたヌミトルはアムリウスによって追い出される。しかし、ヌミトルの娘レアの双生児ロムルスとレムスによって王位を奪われ殺されることになる。

第二十二章

アッシリア王国の終わりとともにはじまったローマの建設

多くのことにかかずらうことを避けるために述べるとすれば、ローマの都は、いわば第二のバビロンとして（二）、そして、いわば第一のバビロンの娘として建設されたのであった。この都をとおして世界を征服し、国家にかかわることがらと法との一つの社会へ導き、長くかつ広い平和を確立することは、神の嘉されるところであった。というのは、すでにそのときには、強力で勇壮な人民、戦いに熟達した種族が存在していたからであって、かれらは容易に屈服するような種族ではなく、両方の側の大きな危険と荒廃、そして小さからぬ恐るべき困難を伴ってでも征服される必要があったのである。アッシリア王国がほとんどアジアの全体を服属させたときには、それが戦いによって成し遂げられたとはいえ、それほど大きな残酷さと困難もなく達成されたのであった。それというのは、諸民族はまだ抵抗するだけの熟練を積んではおらず、また、それほど多くもなければ、強力でもなかったからである。

たしかに、ニヌスがインドを除くアジアの全体を服属させたときは、ただ八人の人間だけがノアの箱舟によって逃れたあの大きな、そして全体的な洪水ののち、千年以上経過していたわけではなかった。それにたいして、ローマは、わたしたちがローマ人の支配力のもとに服属させたことを知っているところの東方と西方のすべての種族を、それほど早く、かつ容易に征服したのではなかったのであって、なぜかといえば、ローマは徐々に強大になっていったので、どの方向に勢力拡張をおこなうにしても、諸種族に出会ったときには、相手は強力で好戦的であったからである。

　このようなわけで、ローマが建設されたときには、イスラエルの民は約束の地に七百十八年をすごしたのであった。そのうちの二十七年はヌンの子ヨシュアの時代に属し、つづく三百二十九年は判事(士師)の時代に属している。さらにまた、その国に王制が存在しはじめてから三百六十三年が経過していたのであった。このときのユダの王はアハズ(二)とよばれた。あるいは、他の人びとが推算するところによれば、それはアハズの後継者ヒゼキヤ(三)であった。この人物はきわめて敬虔な王であったとされており、ロムルスと同じ時代に支配したことになる。他方、イスラエルとよばれたヘブライの民の国では、ホセアが支配しはじめていたのであった。

（一）　本書第十六巻第十七章参照。

（二）　アハズはユダ王国の王(前七三五年から七一五年まで在位)。シリア、エフライム戦争でエルサレムが連合軍に包囲されたとき、イザヤの反対にもかかわらず、アッシリアに神殿の宝を贈り、援助を乞うた。

(三) ヒゼキヤはアハズの子である(前七一五年から六八六年在位)。二十五歳で王位を継ぎ、即位後、宗教改革を断行した。

第二十三章

エリュトライのシビュラとキリストにかんする預言

ある人びとは、エリュトライのシビュラが預言をおこなったのもこのころのことであると伝えている。[一] ウァルロは、シビュラは一人ではなく、複数であったとわたしたちに報じているが、エリュトライのシビュラは、たしかにキリストについてあることを記したのであった。わたしたちもこれをはじめにラテン語で読んだのであるが、それは粗野なラテン語によるあぶなっかしい韻律の詩句であった。わたしたちはのちに知ったことであるが、これは、名の知られないある訳者の未熟さのせいであった。

さて、わたしはこのことを、総督でもあったかの著名な人物フラキアヌス[二]との会話のなかで認めたのである。かれはすぐれた雄弁と深遠な学識の人であった。わたしたちがキリストについて会話を交わしていたとき、かれはエリュトライのシビュラのうたであるといって、ひとつのギリシア語写本をわたしに示したのである。かれは、そのなかのある箇所で各行の頭をつらねたなら次のように読まれることを示したのであった。「イエスウス・クレイストス・テウ・

フュイオス・ソテール(三)」。これはラテン語で「イエスス・クリストゥス・デイ・フィリウス・サルウァトール(四)」(イエス・キリスト、神の御子、救い主)となるのである。

各行の頭の文字が、わたしたちの述べたような意味となるこの詩句は、あるひとによって訳されたより健全なラテン語によれば、つぎのごとくである。

(I) 裁きの日のしるしに、地は汗の雫(しずく)をたらすであろう。
(E) 永久(とわ)に支配せんとして、ひとりの王が天の座から来るであろう。
(S) すなわち、地を裁くためにかれは肉のうちに現存する。
(O) だからして、不信仰者も信仰者も神を見ることができるであろう。
(U) この神は、この世の終わりのとき、聖徒たちと共に天の高みにおられる。
(S) 魂は肉と共にそれらを裁かれる神の御前に出るであろう、
(CH) 地がいばらの茂みに厚く覆われたまま打ち捨てられているときに——。
(R) いまや人間たちの偶像もその財宝も、すべてがしりぞけられるであろう。
(E) 火は大海と天空に燃え上がり、地を焼きつくすであろう。
(I) そして、忌むべきあのアウェルヌスの門を打ち砕くであろう。
(S) けれども、自由の光がすべての聖徒たちの肉に注がれ、
(T) 永遠の焔が罪人らを焼きつくすであろう。
(O) 隠れた行為を明らかにしながら、そのときだれもが秘密を語るであろう。
(S) そして、神はすべての者の胸を開き、光のうちへもたらされるであろう。

(TH)そのとき、嘆きの声が立ちのぼり、だれもが歯ぎしりをすることであろう。
(E)太陽の光条は消え失せ、星々の輪舞は沈む。
(O)天は巻き上げられ、月光は色あせる。
(U)丘は低くせられ、谷は高められる。
(U)人間の世界には高さも深さもなくなり、
(I)山は平地に等しくされ、
(O)青い大海はすべての動きを止めて、地は砕かれるであろう。
(S)泉も流れも同じように火によって涸れ果てる。
(S)けれどもそのとき、
らっぱの音が高みにひびきわたるであろう。——悲し気に、沈痛な調子で。
(O)悲惨な所業とさまざまな労苦とを嘆きながら。
(T)地は裂け、タルタロスは深淵をあらわにする。
(E)そしてそのとき、王らは神の前に一つとなって立たせられるであろう。
(R)天からは火の川と硫黄の流れが潮のごとくに落ちてくるであろう。

とにかくギリシア語からラテン語へと訳されたこれらの詩句は、順番に読まれる頭の文字によってできあがったあの本来の意味(イエス・キリスト、神の御子、救い主)を完全に伝えることはできなかったのである。なぜなら、ユプシロン(Υ)の文字がラテン語において位置を占めるべきところでは、それと同じ文字ではじまって、しかも意味に適っているようなことばが見

いだされなかったからである。第五番目、第八番目、そして第十九番目がそのような三つの行である。そのため、それら三つの行の最初の文字を順番につないで読むということをしないで、その代りにその箇所にユプシロン(Υ)を置いて順番に読んでいくなら、五つのことばから成る一つの句が表わされてくる。すなわち、「イエス・キリスト、神の御子、救い主」である。しかし、これはラテン語としてでなくギリシア語として語られたばあいに限ってのことである。

ここには二十七の詩句がある。二十七は三の立方体である。三の三倍は九であり、九の三倍は、形体が平面に高さを加えて上がっていくように、二十七となるからである。もしもわたしたちがこれら五つのギリシア語、すなわち「イエスウス・クレイストス・テウ・フュイオス・ソテール」――ラテン語の「イエスス・クリストゥス・デイ・フィリウス・サルウァトール」――の最初の文字を結び付けるなら、「イクトゥス」(五)ということばになる。これは「魚」のことである。この名詞については、秘義的な意味でキリストが解される。キリストは、いわば海の深処とでもいうべきこの可死性という深淵のなかで、生きて、すなわち罪なくして、存在されたからである。

さて、このシビュラは、それがエリュトライのものであるか、それともある人びとが信じたがっているようにクマエのものであるか、いずれにせよ、そのうたの全体のなかに、そしてこれはそのごく小さな断片であるけれども、虚偽の神々やつくり上げられた神々の崇拝にかんすることがらは何もない。じっさい、かの女はそれらの神々やその礼拝者たちに対してはつよく反対しているので、明らかにかの女は神の国に属する人びとのなかに入れられるべきとおもわ

れるのである。ラクタンティウスもまた、[六]シビュラのキリストにかんするいくらかの預言を、そのとおりに表現しているわけではないけれども、自分の著作のなかに挿入している。[七]かれ自身はそれらを別々に引用しているが、しかしわたしは、かれが残している多くの短かい断片を一つの長いものであるかのように一貫したことばに置いてみようとおもい立ったのである。

かれはいう。「そののち、かれは不信仰な者らの邪悪な手のうちに落ちたのであった。かれらはその汚れた手で神に平手打ちを加え、その不浄なる口から毒のあるつばを吐いた。けれども、かれはまっすぐな意志によってかれらの打つ手に自分の聖なる背を差し出した。かれは拳で打たれても黙しているであろう。かれが御言（みことば）として来ていること、また、どこから来ているかということを知ることのないように。それは、下界にいる者たちに語りかけ、とげのある冠をかぶせられるためである。かれらは食糧の代りに胆汁を、喉の渇きに酢を与えた。これがかれらの見せようとした冷遇の食卓なのである。

あなた自身はその愚かさのゆえに、あなたの神が死すべき者の心を嘲られるとき、その神を認めることがなかった。かえって、あなたはかれにとげのついた冠をかぶせ、いとわしい胆汁を混ぜたのだ。しかし、神殿のとばりは裂け、真昼に夜となって三時間、深い暗黒がおおうことであろう。かれは眠りに落ち、三日間その死を死ぬであろう。そしてそのとき、かれは下界から戻る最初の人となり、呼び戻された者たちに復活の始めを示して、光のもとにやって来るであろう」。

ラクタンティウスは自分の議論のなかに――その議論というのは、かれが証明しようと志し

ているところのことがらが必要としているとおもわれるものである——シビュラのこの証言を、それぞれ別々に挿入しているのであるが、わたしたちのほうは、それらを間を入れることなく一つの連続したものに置き替えて、ただ最初の文字によって区別されるよう配慮したのであった。ただし、それは写字生がよく気を付けてそれを忘れることがないとしての話であるが——。なお、ある人びとは、エリュトライのシビュラはロムルスの時代に存在したのではなく、トロヤ戦争の時代に存在した、と記している。

(一) シビュラの預言については本書第三巻第十七章にも述べられた。シビュラはアポロンの神託を告げる巫女のことであるが、ウァルロは、前四世紀に複数のシビュラが存在したと記しており、ペルシア、リビア、デルポイ、キメリア、エリュトライ、その他の地を含め、十名をあげている。

(二) このフラキアヌスは、アウグスティヌスの『アカデミア駁論』一の一八に出てくる人物と同一と見られる。

(三) *Ἰησοῦς Χρειστὸς Θεοῦ Υἱὸς Σωτήρ.*

(四) Iesus Christus Dei Filius Salvator.

(五) *ἰχθύς*(piscis——魚)。

(六) ラクタンティウスは二五〇年から三一七年。アフリカ生れのキリスト教護教家、修辞学者。『神学綱要』他を著わした。

(七) 『神学綱要』四の一八—一九。

第二十四章

ロムルスの同時代に出た七賢人およびロムルスの神格化について

ロムルスが王位にあった同じ時代に、ミレトスのタレスが生きていたと伝えられている。(一) かれは神学的詩人たち——そのなかではオルペウスがもっとも有名であった——のあとに出た七賢人の一人であって、かれらは「ソフォイ」(二) すなわちラテン語で「知恵ある人びと」とよばれたのであった。そのころ、民の分割によってイスラエルとよばれることになった十の部族がカルデア人によって征服され、その地へ捕囚となって連れ去られた。ユダという名でよばれていた二つの部族は、ユダヤの地に残存しており、エルサレムを王国の座としていたのであった。

ロムルスが死んで、かれもまた姿が見えなくなったので、だれもがよく知るとおり、ローマ人はかれを神々のうちに加えたのであった。このようなことはすでに停止されていたので(のちにカエサルの時代におこなわれるようになったのであるが、それは誤まった信仰によるものではなく、ただ諂いによるものにすぎなかった)、キケロはロムルスに大いなる賛辞を贈っているのである。(三) つまり、人びとが容易に誤まりのなかに陥るような粗野で無知の時代にではなく、すでに洗練され教養ある時代にこの栄誉が与えられたというわけである。もっとも、この時代には、哲学者たちの精妙で巧妙なおしゃべりは、まだ沸き上がってもいなければ、また、

はびこってもいなかったけれども。

しかしながら、たとえのちの時代が死んだ人間を神に仕立て上げることをしなくなったとはいえ、かれらはなお、昔の人びとによって立てられたこれらの神々を拝し、神々として保持したのであって、そのことを止めたわけではなかった。じっさい、いにしえの人びとがもっていなかった諸々の像を用いて、虚しく不敬な迷信の誘惑をいよいよ増すに至ったのである。これは、かれらの心のうちにはたらく不浄なダエモンらの所業となすべきであって、ダエモンらは人を迷わせる奸計や神託などによって人びとを欺き、そのため、いっそう洗練された時代には神々の悪行にかんするつくり話はつくられたわけではなかったにしても、それらのつくり話が虚偽の神霊への忠誠の行為として、見世物のなかで破廉恥にも演じられていたのであった。

ロムルスのあとはヌマ(四)が支配したのであるが、かれはその国が多数の神々の守護を必要とするという考えをもっていた。もちろん、虚偽の神々である。けれども、かれ自身はその多数のうちに登録されるという栄誉を得ることはなかった。かれは、天が神々の大群によってぎっしりと詰まっており、そこに自分が入る余地を見つけることができない、とでもおもったのであろうか。かれがローマで支配していた同じ時期に、サモスのシビュラが存在しており、また、ヘブライ人のもとではマナセ(五)の治世がはじまったといわれる。この者は不敬虔な王で、預言者イザヤを殺害したと伝えられる。

(一) タレスについては本書第八巻第二章参照。

(二) *σοφοί.*

(三) キケロ『国家論』二の一〇。
(四) ヌマはローマ第二代目の王であるが、かれについてはすでに本書第二巻第十六章にも触れられた。
(五) マナセの在位は前六八七年から六四二年。父ヒゼキヤとは逆に、悪政をおこない、偶像崇拝を奨めた(「列王紀下」二一の二〇以下参照)。

第二十五章

七賢人とバビロニア捕囚時代の哲学者たちについて

さて、ヘブライ人たちのもとではゼデキヤ(一)が支配し、ローマ人たちのもとではタルクィニウス・プリスクス(二)がアンクス・マルキウスのあとを継いで支配していたとき、ユダヤ人の民は捕囚となってバビロニアに連れて行かれたのであって、エルサレムとソロモンによって建設されたあの神殿は破壊されていたのであった。(三) ユダヤ人たちの不義と不信のためにそれをとがめた預言者たちは、このことがかれらにおこるであろうことを予告していたが、とくにエレミヤは追放の年数までも明示したのであった。

七賢人の他の一人、ミテュレネのピッタコスが生きていたといわれるのはこの時期のことである。他の五人は、すでに触れたタレスとこのピッタコスが加えられて七人となるのであるが、神の民がバビロニアに捕囚となっていた時期に生きたと記している。それらは、アテナイのソ

ロン、ラケダイモンのキロン、コリントのペリアンドロス、リンドスのクレオブロス、そしてプリエネのビアスである。

この五人はすべて、神学的詩人たちの時代ののちに「七賢人」として知られたのであるが、それは、かれらがその生活の様態において賞賛さるべきものであって他の人びとよりまさっていたからであり、また、いくつかの道徳的な教訓を短かい格言にまとめたからである。しかし、かれらは、ソロンがアテナイ人たちにある法を授けたと伝えられることを除いて、文字にとどめた記録を後世に残さなかった。タレスは自然学者であったが、かれはその教説を書にして残したのであった。ユダヤ人の捕囚の時代に、アナクシマンデル、アナクシメネス、クセノファネスが自然学者としてよく知られている。ピタゴラスもその当時の人であって、そのころからかれらは哲学者たちとよばれるようになったのである。

(一) ゼデキヤは南王国ユダの最後の王(前五九七年から五八六年)である。ユダ王国はバビロニアによって滅ぼされることになる。第一回エルサレム陥落後、ネブカドネザルによって王位にあげられゼデキヤと改名(「列王紀下」二四の一七以下)。のち逃亡せんとしたが逮捕されて、ネブカドネザル王の前に引き出され、眼前で自分の子が殺される悲惨な運命に会うことになる。

(二) タルクィニウスは前七―六世紀のエトルリア系のローマ王。在位は前六一六年から五七九年。生地エトルリアのタルクィニからローマに来て王となったと伝えられる。

(三) ユダ王国は前五九七年にバビロニアに降服し、王をはじめ兵士、上流階級、職人など、多くが捕囚となる(「列王紀下」二四の一〇以下)。さらに、五八七年、エルサレムは完全に滅ぼされ、住民のほとんどが捕囚となった。このバビロニア捕囚はイスラエル史を二分する大きな出来事であった。

(四) ソロンは前六四〇年から五六〇年頃のアテナイの政治家、詩人。貴族と平民との間の争いの解決につとめ、国家の大改革をおこなった。負債の帳消し、財産評価制など、多くの法を制定した。プルタルコス『英雄伝――ソロン』参照。
(五) アナクシマンデル、アナクシメネスについては、本書第八巻第二章参照。
(六) クセノファネスについては、本書第七巻第十七章参照。
(七) ピタゴラスについては、本書第八巻第二章参照。

第二十六章

ユダヤ人の捕囚の終結とローマ人の王の支配からの解放

同じころ、カルデアとアッシリアをも支配していたペルシア王キュロス(一)はユダヤ人の捕囚をかなり軽減して、神殿をあらためて興すために五万人を帰還させた。(二)しかし、かれらは最初の基礎づくりをしはじめ、祭壇を建てたにすぎなかった。というのは、かれらの敵が侵入してきたとき、かれらは十分にその仕事を進めるだけの力をもってはおらず、ダリウス(三)の時代にまで延期されたからであった。

この時期に『ユディト書』に描かれている出来事がおこった。(四)もっとも、ユダヤ人はこの書をその正典のうちに受けとることをしなかったといわれる。ペルシアのダリウス王のもとで、

エレミアが預言していた七十年を満たされ、やがて捕囚は解かれて、ユダヤ人たちに自由が回復されたのであった。これはローマの第七代目の王タルクィニウスが王位にあったときのことである。かれが追放されたのち、ローマ人たちも自分たちの王の専制から解放されはじめたのであった。

この時代までイスラエルの民は預言者をもっていた。それは多くの数であったが、そのうち、ごくわずかな者の書き物だけがユダヤ人やわたしたちのもとに正典として残っているにすぎない。先の巻を閉じるときに、わたしはこれらの預言者たちについてこの巻でいくらか記述することを約束したのであったが、(五) いま、それを果たすべきであるようにおもう。

(一) キュロスはクロスともよばれ、ペルシア王国初代の王である(前五四九年から五二九年在位)。かれは前五四九年メディアの束縛を脱して以後、リディアやギリシアのイオニア諸都市を征服し、インドの境にまで勢力がおよんだ。前五三九年にはついにバビロンに入城した。バビロン捕囚のユダヤ人たちには寛大な政策をとり、エルサレム帰還をゆるした。

(二) 「エズラ書」六の一以下参照。

(三) ダリウス王(前五二二年から四八六年まで在位)は、ギリシア遠征に失敗したが、バビロンのユダヤ人捕囚にたいしてはキュロスの寛大な政策を持続し、治世第二年目に、エルサレム神殿再興を妨害することを禁止した。

(四) 「ユディト書」は旧約外典中の一つである。ユディトというユダヤの婦人が民族の危急を救わんとして美貌を利用して敵方に入り込み、敵将を討ちとるという物語りがある。この書は文学的技巧にすぐれた書とされている。

（五）　本書第十七巻第二十四章末尾参照。

第二十七章

アッシリアの崩壊とローマの興隆の時代の預言者たち

このようなわけで、これらの預言者たちの時代をよく見ることができるよう、すこし前の時代にかえろうとおもう。十二人の預言者たちの最初におかれている預言者ホセアの書のはじめには、つぎのように記されている。「ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの世に、ホセアに臨んだ主のことば（一）」。アモスもまたウジヤの治世の時期に預言したと記している（二）。かれは、同じ時期に生きていたイスラエルの王ヤラベアムの名を加えている。

イザヤも、その書の冒頭で、ホセアが置いたそれら四人の王を置き、かれがその王たちの時代に預言した、と序言している。かれは、いま述べた預言者アモスの子であるか、それとも、より一般的に伝えられているように預言者でない同名の他の人物の子であるか、いずれにせよ、アモスの息子であった。ミカもまた（三）、自分が預言をおこなったという時代として、ウジヤの治世のあとのこの時期を挙げているのである（四）。じっさい、かれはホセアによっても名が挙げられた三人のつづく王、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの名を挙げているのである。これらの預言者たちは、その文書によって同じ時代に同時に預言していたことがわかるのである。かれらには、

ウジヤの治世のヨナと、ウジヤのあとを継いだヨタムがすでに支配していたときのヨエル[五]も加えられてくる。

しかし、これら二人の預言者たちの時期は、かれら自身の書においてではなく、『年代記』[六]において見出されるのである。かれらは自分たちの時代については黙しているからである。この時期は、ラティウムの王プロカスあるいはその前任者であったアウェンティヌスから、すでにローマの王であったロムルスあるいはその後継者であるヌマ・ポンピリウスの治世のはじめにまでおよんでいる(たしかにユダの王ヒゼキヤはこの時期にまで支配していた)。アッシリア王国が滅亡してローマ王国がはじまったときに、二人の預言者はあたかも二つの預言の泉のごとくに湧き出たのであった。

これはすなわち、アッシリア王国の最初の時期にアブラハムが現れてその子孫においてすべての民が祝福されるという約束を明白に受けとったように、西方のバビロン(ローマ)のはじまるころに[七]、そしてそのバビロンの支配のあいだにあの約束を成就されるキリストが来られることになったのであるが、そのころに、預言者たちの口は開かれたのであって、それは、語りによってのみでなく、文書によっても、未来におこるべきかくも大いなる出来事に証言を与えるものであった。王制が存在しはじめたときから、イスラエルの民に預言者が欠けることはほとんどなかったけれども、その預言者たちはただかれらの益のためにのみ存在したのであって、かれらは異教徒の民には何も伝えなかった。しかし、のちに異教徒の民にも益するような、いっそう明白な預言の記録が手渡されるようになったときは、異教徒の民を支配すべきであった

この都の建設がおこなわれはじめたときであった。

(一)「ホセア書」一の一。

(二)「アモス書」一の一参照。アモスは前八世紀のユダ出身の預言者。かれは故郷ユダの地を離れ、北王国イスラエルの聖所ベテルにおいて当時の王ヤラベアム二世の政治と、当時の宗教的・社会的堕落とを激しく攻撃する。アモスの預言活動はごく短かい期間であったと考えられる。

(三) ミカはイザヤと同時代の預言者で「ミカ書」の著者。預言の開始は北イスラエル王国が滅亡する直前と見られる。前七二五年から七〇〇年頃である。

(四)「ミカ書」一の一参照。

(五) ヨエルという名は旧約中に十数人出てくるが、もっとも有名であるのは、預言書ヨエル書の著者である。ベトエルの子であるが、エルサレムの市民であったと推察される。詳しくは知られない。

(六) エウセビオスの書。

(七) アウグスティヌスはローマを西方のバビロンとよんだが、それについては本書第十六巻第十七章参照。

第二十八章

キリストにかんするホセアとアモスの預言について

さて、預言者ホセアはたしかに深遠なことを語ったのであるが、それだけに洞察するのに骨

が折れる。しかし、わたしたちの約束を果たすために、かれの書からいくらかの箇所を選び、ここに引用しなければならない。かれはいう。「さきにかれらが『あなたがたはわたしの民ではない』と告げられたそのところで、『あなたがたは生ける神の子である』とよばれるようになるであろう」(一)。使徒たちもこれを、以前は神に属してはおらなかった異邦人の民をよび出すところの預言的な証言と解しているのである(二)。異邦人の民自身は霊的にはアブラハムの子どもであり、それゆえにイスラエルとよばれるのは正当であるから、かれはつづけてつぎのようにいうのである。「そしてユダの子らとイスラエルの子らとは同じところに集まるであろう。そして、かれら自身のためにひとりの長を立てて、その地からのぼってくるであろう」(三)。

わたしたちがこのことをいま説明しようとするなら、その預言的な雄弁の香りがうすめられてしまうことになるであろう。しかしながら、あの隅の石と二つの壁のことを想いおこしたいとおもう。ひとつはユダヤ人から、いまひとつは異邦人の民から成る壁のことである。前者は「ユダの子ら」の名によってよばれ、後者は「イスラエルの子ら」の名によってよばれるのであるが(四)、いずれも同じところで、同じ頭(かしら)によって身を支え、「その地からのぼってくる」と認められるのである。さらに、いまキリストを信じようとはしない肉によるこれらイスラエル人たちも、のちには信じるようになるであろうこと、すなわち、かれらの子らが信じるようになるであろうこと(じっさい、これら不信仰な者たちは、死んだとき、「自分の行くべきところ」へ行くであろうから)——このことを、同じ預言者はつぎのようにいって証言しているのである。「なぜなら、イスラエルの子らは多くの日のあいだ、王もなく、君もなく、犠牲もなく、

祭壇もなく、祭司もなく、祭儀もなく生きるであろうからである」(五)。

ユダヤ人たちがいま、このようにあることをだれが見ないであろうか。しかし、かれが付け加えていっているところのことに耳を傾けようとおもう。「そしてそののち、イスラエルの子らは還ってきて、その神、主と、その王ダビデとをたずね求め、終わりの日に主とその恵みとにおどろかされるであろう」。この預言よりも明白なものはない。ダビデ王の名によってキリストが表示されていると解されるからである。なぜなら、使徒がいうように、「かれは肉によればダビデの子孫から生れた」(六)のだからである。

この預言者は、つぎのようにいうとき、預言にふさわしい荘重な仕方でキリストの復活は三日目におこるであろうことをも予告したのであった。「かれは二日ののち、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる」(七)。使徒が「もしもあなたがたはキリストと共によみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい」(八)といっているのは、これにしたがっているのである。

アモスもつぎのようにいうとき、このことについて預言しているのである。「イスラエルよ、あなたの神によびかける備えをせよ。見よ、わたしは雷に力を与え、風を創造し、人びとにその油注がれたかたを告げる者だからである」(九)。そして、他の箇所でいっている。「その日には、わたしはダビデの倒れた幕屋をおこし、その破損をつくろい、崩れたところを興し、これを昔のように再建する。それは残った者、わたしの名でよばれるすべての民が、わたしを求めるようになるためである。このことをなされる主はいわれる」(一〇)。

（一）「ホセア」一の一〇。
（二）「ローマ人への手紙」九の二六。
（三）「ホセア書」一の一一。
（四）「エペソ人への手紙」二の一四、二〇参照。
（五）「ホセア書」三の四、五。
（六）「ローマ人への手紙」一の三。
（七）「ホセア書」六の二。
（八）「コロサイ人への手紙」三の一。
（九）「アモス書」四の一二、一三。
（一〇）同上、九の一一、一二。

第二十九章

キリストと教会についてイザヤは何を預言したか

預言者イザヤは十二人の預言者たちの書のなかにはない。十二人は小預言者とよばれているが、それは、かれらの教説が、長い書き物を構成したゆえに大預言者とよばれる者たちにくらべて、短かいものであったからである。後者のなかのひとりがイザヤである。わたしはかれを上に述べた二人に結び付けることにする。かれらは同じ時代に預言したからである。ところで、

イザヤは不正をとがめ義しさを教え、罪の民に来たるべきわざわいについて予告したなかで、キリストと教会とについて、すなわち、王とかれの建てたところの都市についても、他の預言者よりも多くの預言をおこなったので、ある人によって、預言者というよりはむしろ福音史家であるといわれたほどである。(二) しかし、この仕事の境界を付す必要があるため、わたしはここでは多くのなかから一つを引用しようとおもう。

父なる神に代わってかれは語っている。「見よ、わたしのしもべは悟り、高められ、栄誉を与えられる。多くの者があなたを見ておどろいたように、あなたの姿は人びとによって栄光を奪われ、あなたの栄光は人びとによって奪われるであろう。多くの民はおどろき、王たちはかれの前にその口を閉じる。なぜなら、かれらはかつて伝えられなかったことを見、聞いたことのない事実を悟るのだから。

主よ、だれがわたしたちの聞いたことを信じるであろうか。主の腕はだれにあらわされたのであるか。わたしたちはかれの前で告げ知らせた。小さな子どものように、かわいた土から出る根のように成長した。かれには見るべき姿もなく、威厳もない。わたしたちはかれを見たが、かれは見るべき姿ももたず、優美さももたなかった。その姿には威厳はなく、すべての人びとよりも衰えている。かれは打たれて、弱さを耐えることを知っている。また、かれは、顔をおおって忌み嫌われる者のように、見下され、侮られた。じつにかれはわたしたちの罪をにない、わたしたちの悲嘆をになった。しかし、わたしたちは考えた、かれは神に打たれ、苦しめられたのだ、と。

けれども、その人は、わたしたちの不義のために傷つけられ、わたしたちの罪のために弱くされたのであった。わたしたちはかれにおいて平安を教えられ、かれの傷によって癒されたのだ。わたしたちはみな羊のようにさまよい、人間は自分の道から迷い出た。主はわたしたちの罪のためにかれを引き渡されたのであった。その人は苦しみを負わせられたゆえに、口を開かなかった。ほふり場にひかれていく小羊のように、毛を刈り取る者の前で黙す羊のように、声を出すことなく、自分の口を開かなかった。かれは卑しさのうちに低くされていたが、かれを裁く者は持ち上げられていたのであった。

だれがかれの行末を悲しむであろう。かれの生は地から取り去られたのだからである。かれはわたしの民の不義によって死へと導かれた。わたしはかれの埋葬のために邪悪な者たちをつかわし、かれの死のために富める者たちをつかわす。かれは不義をなさず、その口には偽りがなかったので、主はかれを打たれる手から放免しようとのぞまれた。

もしもあなたがたが罪のためにあなたがたの魂を与えるならば、末長く子孫を見るであろう。主はかれの魂を悲しみから連れ出され、かれに光を示し、かれのうちに悟りをつくり、多くの人びとに仕える者たちを義とし、かれ自身がかれらの罪をになうであろう。そのゆえに、その人は多くのものを相続し、強い者たちの獲物を分かちとる。それは、かれが死に至るまで自分の魂を手渡し、不義なる者たちの数のうちに入れられ、多くの者の罪をにない、かれらの罪のためにとりなしをしたからである[二]」。——これはキリストについての預言である。

さらに、それにつづく教会についての預言に耳を傾けたいとおもう。イザヤはいう。「子を

産まなかった石女よ、よろこべ。産みのくるしみをしなかった者よ、よろこびの声をあげよ、うたい呼ばわれ。捨てられた女たちの子どもらは夫のある者の子どもらよりも多いからである。あなたの幕屋の場所をひろげ、住まいの幕を張りひろげよ。惜しむことなくあなたの綱を延ばし、あなたの杭をしっかり打ち込めよ、右に左にのびるまで。あなたの子孫はもろもろの民を相続し、あなたは捨てられた町に住みつくであろう。混乱させられたからといって、恐れてはならない。非難されたからといって、恐れることはない。あなたは永遠の混乱を忘れ、若きときの汚辱を想い出すまいから。なぜなら、主があなたをおつくりになり、その御名は万軍の主といわれ、そして、あなたをあがなわれるかたはイスラエルの神、全地の神ととなえられるからである」(三)。――しかし、これで十分であろう。このなかには説明されねばならない点もいくらかあるが、わたしの考えるところでは、それらは十分に明らかであるので、敵対する者でさえ、不本意ながらそれらの意味を認めざるをえないことであろう。

(一)　ヒエロニュムスのことであろう。
(二)　「イザヤ書」五二の一三―五三の一二。
(三)　同上、五四の一―五。

第三十章

ミカ、ヨナ、ヨエルの預言は新約聖書と合致していることについて

預言者ミカはキリストを高い山の姿で描いてこのようにいう。「最後の日になって、主の山が現われ、山々の頂きに立てられ、もろもろの峰よりも高くあげられるであろう。もろもろの民はそこへ急ぎ、多くの民はそこに来ていう。『さあ、わたしたちは主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。かれはその道をわたしたちに教え、わたしたちはその道を歩もう』と。律法はシオンから出、主の御ことばはエルサレムから出るからである。かれは多くの民のあいだに裁き、遠いところまでつよい国々を責める(一)」。

この預言者はキリストが生れられた場所についても予告している。「そしてベツレヘム、エフラタの家よ、あなたはユダの氏族のうちでいと小さき者であるが、あなたのうちからイスラエルの君となる者がわたしのために出る。かれが出るのはずっと前から、永遠の日からである。それゆえ、かれは産婦がその子どもを産み落すまでかれらを渡しおかれるであろう。そして、かれの兄弟たちの残った者はイスラエルの子らのもとに帰るであろう。かれは主の力によって立ち、その群れを養い、その神の名の栄光のうちにいるであろう。いまや、かれは大いなる者となって、地の果てにまでおよぶからである(二)」。

ヨナの預言のほうは、言説によるものというよりは、むしろかれ自身の受難によってキリストを預言したのであった。じっさい、かれは、ことばによってキリストの死と復活とを知らせるよりも、このような仕方でいっそう明らかに預言したのであった。というのは、かれは怪物の腹のなかに入れられ、三日目にもどったというのであるが、(三)それは、キリストが三日目に下界の深みからもどってこられるということを意味するのでなければ何であろうか。

ヨエルの預言はすべて、キリストとその教会に関連したものであるということを明らかにするためには多くのことを説明しなければならない。けれども、一つの句だけは見すごしてはならない。それは、キリストによって約束されたように聖霊が信ずる人びとの上に下ったのであるが、そのときに使徒が引用したものである。(四)すなわち、「そののちわたしはわたしの霊をすべての肉なるものに注ぐ。あなたがたの息子、娘は預言をし、あなたがたの老いたる者たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日に、わたしはわたしの霊をわたしのしもべ、はしために注ぐであろう(五)」。

(一)「ミカ書」四の一―三。
(二)同上、五の二―四。
(三)「ヨナ書」一の一七、二の一〇参照。
(四)「使徒行伝」二の一七参照。
(五)「ヨエル書」二の二八、二九参照。

第三十一章

オバデヤ、ナホム、ハバククの書に見られるキリストの救いにかんする預言について

小預言者オバデヤ、ナホム、ハバククの三人は、自分自身の時代を語ってはいない。(一) また、かれらがいつ預言をおこなったか、エウセビオスやヒエロニュムスの『年代記』には見出されない。たしかにオバデヤは、かれらによってミカと一緒におかれてはいるが、しかし、ミカがいつ預言したか、かれらの文書にもとづいて確定するような時代について示された箇所においてではない。わたしがおもうのに、これは、他の人の著作を不注意に筆写する筆記者の誤りによっておこったものであろう。しかし、わたしたちは、わたしたちのもっている『年代記』の写本のなかに、他の二人の預言者にかんする記述を見出すことができなかったのである。

とはいえ、かれらは正典のなかに入れられているのであるから、わたしはそれらを見すごすべきではない。オバデアは、その書いたものにかんしていえば、すべての預言者のなかでもっとも短かい。かれはエドムすなわちアブラハムの孫でありイサクの息子の兄のほうであって拒絶せられたエサウの子孫に反論して述べ立てているのである。もしもわたしたちが、部分によって全体を理解するというような語りかたで、このエドムを異邦人たちの代わりとして置かれ

ている者であると受けとるなら、わたしたちは、オバデアがとくに「しかし、シオンの山には救いがあり、聖なる所があるであろう[二]」といっているのは、キリストについての預言であると認めることができるのである。そして、すこしのちに、この預言の終わりで、「こうして、救われた者たちはエサウの山をまもるためにシオンの山にのぼり、王国は主のものとなるであろう」といっている。

じっさい、このことは、シオンの山から救われた者たち——すなわち、ユダヤ人のなかでキリストを信じた者たち、とりわけ使徒と認められる人たち——がエサウの山をまもるために上ったときに成就されたことは明らかである。かれらがそれをまもったのは、福音を宣べ伝えて、信ずる者となった者たちに救いをもたらすことによってでなければ、どのようにしてであったろうか。そのようにして、かれらは暗闇の力から救い出され、神の王国へ移されたのであった。これは、「王国は主のものとなるであろう」ということばをそれにつづけて加えることによって表現されている。というのは、シオンの山はユダヤを意味しているからである。そこにおいて、キリスト・イエスであられるところの救いと至聖所とが予告されたのである。他方、エサウの山はイドマヤ(エドム)[三]であって、それによっては異邦人の教会が表示されている。そして、さきに説明したように、シオンの山から救われた者たちは、主の王国となるようにそれをまもるのである。これはおこる以前には不明瞭であった。しかし、信仰者でこの出来事を認めない者がだれかいるであろうか。

さて、預言者ナホムは、というより、かれをとおして神はつぎのようにいっている。「わた

しは彫像および鋳像を除き去る。そしてあなたの墓を設ける。見よ、よきおとずれを告げ、平和を伝える者の速い足が山々の上にあるからである。ユダよ、あなたの祭りの日を祝い、あなたの誓願を果たせよ。なぜなら、いまからはもう、それ以上投げ捨てられて古きものへ移ってしまうことはないからである。まったく滅ぼされ、取り除かれてしまった。あなたを苦難から解き放ち、あなたの顔に息を吹きかける者がやってくる」(四)。下界から上がってきて、ユダ――すなわちユダヤ人の弟子たち――の顔に聖霊を吹きかける者はだれであるか。福音書をおぼえている者ならだれでも想い出すであろう。

祝いの日が古きものへ移ってしまうことのありえぬように霊的な意味で新しくされた者たちは、新しい契約に属しているのである。さらに、彫像や鋳像、すなわち偶像や虚偽の神々が廃棄されたのは、その福音によってである。わたしたちはすでに、それらがいわば忘却の墓に引き渡されたのを見ている。それによってもわたしたちはこの預言が成就したのを認めるのである。

ハバククにかんしては、かれがつぎのようにいうとき、来たるべきキリストの来臨以外の何ごとかについて語っていると解することはできない。「主はわたしに答えていわれた。読む者に会得されるように、この幻を板の上に明らかに記せ。この幻はまだ定められた時を待ち、そしてそれは終わりに実現され、虚しくはならない。もしもそれがおそければ、それを保持していよ。それはかならず臨む。滞り(とどこお)はしない」(五)。

(一) オバデヤについては、かれがユダヤ人であったこと以外詳細は知られていない。ナホム、ハバクク

について も、その書の表題以外には知られない。いずれにしても、かれらは前七世紀の預言者である。
(二)「オバデヤ書」一七以下。
(三) エドムはエサウを先祖とする部族の名であるが、ヘブライ語のエドムはギリシア語でイドマヤと読まれ、死海の南からアカバ湾にいたる地域をさしている。
(四)「ナホム書」一の一四—二の一。
(五)「ハバクク書」二の二、三。

第三十二章

ハバククの祈りとうたのなかに含まれている預言について

さらに、うたと一つになっているその祈りにおいて、かれがつぎのようにいっているのであるが、それはただ主キリストにたいしてのみ語っているのである。(一)「主よ、わたしはあなたのことを聞き、そして恐れました。主よ、わたしはあなたの御業(みわざ)を見て、ひじょうに恐れます」。これは、人間の新しくそして突然の救いについての予知によっておこされたところのことばでは表わせないおどろきでなくて何であろうか。「二つの生きたもののあいだで、あなたは認められる」というのは、二つの契約のあいだでのことであるか、それとも、二人の盗賊のあいだでのことであるか、あるいは、山において会話を交わしていたモーセとエリヤのあいだでのこ

とであるか、これらのことでなければ何であろうか。

「年が近づくとあなたは知られ、ときがやってくるとあなたはあらわれたもう」というのは説明の必要もないであろう。「わたしの魂は怒りによって乱されたときにも、あなたはあわれみを想いおこさせられる」というのは、みずから、その属するところのユダヤ人たちを自分の身に引き受けて表わしているものと解する以外にない。というのは、かれらは大きな怒りによって乱されてキリストを十字架につけたとき、かれはあわれみを想いおこさせられて、「父よ、かれらをおゆるしください。かれらは何をしているのか、わからずにいるのです」[二]といわれたからである。また、「神はテマンからこられ、聖なるひとは陰をなす濃密な山からこられる」とある。

「テマンからこられる」ということばを他の人は「南西から」とか「南東から」とか訳したのであった。これによって意味されているのは真昼のことである。すなわち、愛（カリタス）の熱と真理の光輝である。しかし、「陰をなす濃密な山」というのは多くの意味に解されうるであろうが、わたしはそれを、キリストを預言している聖なる諸書の深さをあらわすものと解したいのである。たしかにそこには、たずね求める者の心を悩ます「陰をなす濃密な」多くのものが存する。けれども、理解する読み手がそこにキリストを見出すときには、キリストはそこから「こられる」のである。

「かれのちからは天をおおい、その賛美は地にみちた」とあるのは、『詩篇』[三]に「神よ、みずからを天よりも高くなし、あなたのみさかえを全地の上にあげてください」といわれている

ところのことでなければ何であろうか。「その輝きは光のようである」とあるのは、かれの声望がかれを信ずる者たちを照らし出すということでなければ何であろうか。「角はその手にある」とあるのは、十字架の戦勝記念碑のことでなければ何であろうか。(四)「そしてかれはその力強さの堅固なる愛を固められた」というのは説明の必要もないであろう。「かれのことばはその御顔の前に行き、そしてそれは足のあとから平原へ出て行くであろう」とあるのは、「かれがここに来られる以前にさえ、かれはあらかじめ告げ知らされており、そこから向きを転じられたあと、かれが知らされた」ということでなければ何であろうか。

「かれは立って、地は動かされた」とあるのは、かれがわたしたちを助けるために立ち留まられ、地は信ずるために動かされたということでなければ何であろうか。「かれは見られた。そして諸々の国民(くにたみ)はおののかされた」とあるのは、これはすなわち、かれがあわれみをもたれ、民を悔い改めへと導かれたということであろう。「山々ははげしい力によって粉々にされた」、これは「高慢な者の傲慢は奇跡の力によって砕かれた」ということである。「永遠の丘は沈んだ」、これは「永遠に持ち上げられるためにしばらく低くされた」ということである。

「わたしは、その労苦の代償としてかれの入場を見た」、これは「永遠の報酬なくして愛の労苦はないことを見た」ということである。「エチオピアの天幕とミデアンの地の天幕はおどろき恐れる」、これは「あなたの不思議なおこないを知って突然おどろいた人びとが、ローマの支配下になかった民でさえ、キリスト教徒の民のうちに入る」ということである。「主よ、あなたは川に向かって怒られるのか、川に向かって憤られるのか。そして海に向かって立腹さ

れるのか」、これは「かれはいま世を裁くために来られたのではなく、世がかれをとおして救われるためにかれは来られた[五]」ということを意味している。「あなたは馬に乗り、そして、あなたの乗馬は救いである」、これは「あなたの福音史家があなたを運び、かれらはあなたによって導かれる。そして、あなたの福音はあなたを信ずる者たちにとって救いとなる」ということである。

「あなたは王笏の上にあなたの弓を張られたと主はいわれる」、これは「あなたはその裁きによって地の王たちをも恐れさせる」ということである。「地は川によって裂かれる」、これは「宣教者のことばの流れによって人びとの心はあなたの告白へと開かれる」ということである。「あなたの衣服ではなく、あなたの心を裂け[六]」といわれているのは、その人びとにたいしてである。

「民はあなたを見るであろう、そして嘆くであろう」というのは、「かれらはその悲嘆によって幸福な者となるであろう」ということでなければ何であろうか。「あなたは歩まれるとき、水を撒き散らされる」というのは、「あなたが歩まれるとき、いたるところであなたを知らせる人びとによって、あなたは教えの流れをこちらにもあちらにも撒き散らされる」ということである。

「淵はその声を発する」、これは「人間の心の深みはその人に思われているところのことをことばに表わす」ということでなければ何であろうか。「その想いの深み」というのは、いわばさきのことばの説明である。というのは「淵」のことだからである。

そして「その想い」は、「ことばに表わす」、すなわち、わたしがいったように「その人に思われているところのこと」が補われなければならない。じっさい、「想い」は、心がそれを保持もせず隠しもせず、告白することによって吐き出したところのひとつの直感だからである。

「太陽はのぼり、月はその定められたところにとどまった」、これは「キリストは天にのぼられ、教会はその支配のもとに秩序づけられた」ということである。「あなたの投げ槍は光のなかへ出ていくであろう」、これは「あなたのことばは暗さのなかへと発せられるのでなく、明るさのなかへと発せられる」ということである。「あなたの武器の閃きの光輝のなかに」というのは、かれはご自身の弟子たちに「わたしが暗やみであなたがたに話すことを、明るみでいいなさい(七)」といわれたからである。「あなたの脅かしによってあなたは地を小さくされる」、これは「その脅威によって人びとを小さいものにされるであろう」ということである。「あなたは憤って諸々の民を踏みつけられた」、なぜなら、「あなたは復讐によってみずからを高める者らを踏みつけられるから」である。「あなたは、あなたの民の救いのため、あなたの油注がれた者を救われるために出て行かれた。あなたは悪しき者の頭に死を送られた」、これらについては何の説明も必要ないであろう。

「あなたはなわ目を首まで上げられた」とあるが、ここでは知恵の善きなわ目の意味に解されうるのであって、わたしたちの足がかれの足枷のなかに、わたしたちの首がかれの首輪のなかにはめ込まれるのである。「心がおどろいたことには、あなたは切断なさった」に、わたしたちは「なわ目」を補おうとおもう。というのは、かれは善きなわ目を起き上がらせ、悪しき

なわ目を切断したからである。これについては、「あなたはわたしのなわ目を解かれました」[八]といわれている。そしてこれが「心がおどろいたことには」、すなわち「不思議な仕方で」なのである。「力のある者らの頭はそれによって動かされる」とあるのは、「そのおどろきによって」ということである。「かれらは貧しい者がひそかに食べるように、口を大きく開ける」とある。

すなわち、ユダヤ人たちのなかの勢力のある者たちが、主のおこないとことばとにおどろかされて、そのもとにやって来たのであるが、福音書が伝えているように、かれらは教えのパンに飢えた者たちであり、ユダヤ人を恐れてひそかにパンを食べたのであった。

「あなたは多くの水をかき立てて、海のなかへあなたの馬を駆った」とあるが、「多くの水」は「多くの民」のことにほかならない。というのは、もしもかれらのすべてがかき立てられていなかったら、ある者が恐れによって回心したり、他の者が怒って迫害したりはしなかったであろうからである。「わたしは見た。そしてわたしの心はわたしの唇の祈りのひびきに震えた。震えはわたしの骨に入り、わたしのからだはわたしの下方でわなないた」。

かれは自分のいったことに注意し、自分自身の祈りに脅かされたのであった。かれはそのことばを預言的な仕方で注ぎ出し、そのうちに来たるべきものを見出したのであった。というのは、かれは多くの民の動揺に教会に差し迫っている患難を見たからである。ただちにかれは自分自身をその教会の一員と認め、いわば、「希望のゆえによろこび、患難のもとに耐える」[九]人びとに属する者であるかのように、「わたしは患難のうちに安らう」といったのであった。こ

の世の寄留者としてでもなければ天上の祖国を求める者としてでもなく、自分の肉的な血のつながりにある邪悪な民からまったく遠ざかって、「寄留者として旅をつづけるわたしの民のところへのぼっていくため」である。「なぜなら、いちじくの樹は実を結ばず、ぶどうの樹は実らず、オリーブの樹の産物は虚しくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる」。かれは、キリストを殺すことになっていた民族が、霊的な豊饒な富を失うのを見たのであった。それをかれは預言的な流儀で、その地の産物によって象徴的に描いたのである。その民がこのような怒りを受けたのは、神の義を知らず、自分の義を立てようとしたからであって[一〇]、それゆえにかれはつづけてつぎのようにいうのである。

「しかし、わたしは主によってたのしみ、わたしの救いの神によってよろこぶ。主なる神はわたしの力であり、わたしの足を仕上げられる。かれは、わたしがかれのうたによって勝利を得るようにわたしを高いところに置かれた」。ここでいわれているのは、明らかに『詩篇』のなかでも同じことがいわれているあのうたにかんするものである。

すなわち、「主はわたしの足を岩の上に置き、わたしの歩みを真直ぐにされた。主は新しいうたを、わたしたちの神にささげるうたを、わたしの口のなかに送り込まれた[一一]」。このようなわけで、主のうたによって勝利を得る人は、自分自身をほめたたえるのではなく、神をほめたたえてよろこぶ人なのである。「誇る者は主を誇る[一二]」ためである。しかし、ある写本では、「わたしの神なるイエスにおいてよろこぼう」となっているのであるが、こちらのほうが、原文をラテン語に置き替えようとして、わたしたちにとっていっそう親しみぶかくまたいっそうよろ

こぼしくよばれるこの名前を用いなかった人のものよりも、より好ましいとわたしにはおもわれるのである。

(一) 「ハバクク書」三の二以下。
(二) 「ルカによる福音書」二三の三四。
(三) 「詩篇」五七の五以下。
(四) 角は「詩篇」のなかでもしばしば用いられる。それは強さや勝利を象徴するものであった。
(五) 「ヨハネによる福音書」三の一七。
(六) 「ヨエル書」二の一三。
(七) 「マタイによる福音書」一〇の二七。
(八) 「詩篇」一一六の一六。
(九) 「ローマ人への手紙」一二の一二。
(一〇) 同上、一〇の三。
(一一) 「詩篇」四〇の二、三。
(一二) 「コリント人への第一の手紙」一の三一。

第三十三章

キリストと異邦人の召命にかんするエレミヤとゼパニヤの預言

エレミヤはイザヤのように大預言者の一人であって、わたしがすでに多くその書いたものから引用した他の者のように小預言者の一人ではない。さて、エレミヤはヨシヤ(一)がエルサレムで支配していたときに預言をおこなったのであるが、それはアンクス・マルティウスがローマ人のもとで支配していたときであり、ユダヤ人の捕囚がすでに差し迫っていたときであった。(二)かれの預言活動は、かれの書いたものから知るように、捕囚の五箇月目にまでおよんでいた。(三)小預言者の一人であるゼパニヤは、かれとつながりをもたせられる。(四)じっさい、かれ自身がヨシヤの時代に預言したということを語っているからである。(五)ただし、どれだけの期間であったかは語ってはいない。

そこで、エレミヤは、アンクス・マルティウスの時代のみならず、ローマ人が第五代目の王としてもったところのタルクィニウス・プリスクスの時代にも預言したわけである。というのは、捕囚がおこったとき、かれの支配はすでにはじまっていたからである。エレミヤはキリストについて預言して、「わたしたちの鼻の息である主なる油注がれたる人は、わたしたちの罪によって捕えられた(六)」といっている。かれはこのようにして、キリストがわたしたちの主であられ、わたしたちのために苦しみを受けられたということを短く示しているのである。さらに、別のところにおいてもいっている。「これがわたしの神である。だれをもかれと比べることはできない。かれは知恵の道をのこらず見出し、それを、そのしもべヤコブおよびその愛するイスラエルとに伝えられた。こののち、かれは地にあらわれ、人びとのうちに住まわれた(七)」。ある人びとはこの証言をエレミヤに帰せしめずに、バルクとよばれたかれの筆記者に帰せし

めている[八]。けれども、エレミヤの書いたものであるとするのがより一般的である。さらに、同じ預言者はキリストについて語っている。「見よ、わたしがダビデのために正しい若枝をおこすときがくる。かれは王として治め、知恵ある者となり、地に公正と正義をおこなうであろう。その日ユダは救いを得、イスラエルは安心して住むであろう。その名は『わたしたちの義しい主』とよばれる[九]」。

かれは異邦人の召命についても語っている。それはおこるべきこととして定められていたが、いまや成就されたのをわたしたちは見ている。かれはこのようにいっている。「主、わたしの神、悩みのときのわたしの避けどころ。もろもろの民は地の果てからあなたのもとに来ていうのです、『わたしたちの先祖は偽りの像を拝しましたが、それには何ら益はありませんでした』と[一〇]」。しかしながら、ユダヤ人たちは——キリストはかれらによって殺されねばならなかった——キリストを認めようとはしなかったことを同じ預言者は示唆している。すなわち、「心はすべてのものよりも重い。そしてかれはひとりの人間である。だれがかれを認めるであろうか[一一]」というのである。この預言者は、キリストを仲保者とするところの新しい契約にかんしてわたしが第十七巻で引用したことばの著者でもある[一二]。じっさい、「主はいわれる、見よ、わたしがヤコブの家に新しい契約を立てる日がくる[一三]」といっているのはこのエレミヤであり、また、その他のこともそこに見いだされるのである。

この点について、わたしは、エレミヤと時代を同じくした預言者ゼパニヤによってなされたキリストにかんする預言をここに用いようとおもう。「主はいわれる、来たるべきわたしの復

活の日まで、わたしを待つがよい。わたしの決意は、諸国の民を集め、もろもろの王国を集結することである(一四)」。さらに、「主はかれらにとって恐るべきかたとなられる。主は地のすべての神々を追い払われるであろう。すべての人は、おのおの自分のところから出て、かれを拝するであろう。もろもろの国民(くにたみ)の島々もすべて(一五)」。そしてそのすこしあとのところで、「そのとき、わたしは、民とその子孫において言語を変えるであろう。それは、すべてかれらに主の御名を呼ばせ、ひとつの軛(くびき)のもとに主に仕えさせるためである。かれらはエチオピアの川々のかなたから来て、わたしに犠牲をささげる。かの日には、あなたは、わたしに背いてなしたすべての不敬虔なことのために恥ずかしめられるということもない。なぜなら、そのとき、わたしはあなたからあなたの不正の歪みを取り除くからである。あなたはもはや、わたしの聖なる山の上で傲り高ぶることはない。わたしはあなたのうちに柔和にしてへりくだる民を残らせる。イスラエルの残された者は主の御名を恐れ敬うであろう(一六)」。これが他の箇所においても預言されているところの「残された者」である。使徒もまたこれを引用したのであった。「イスラエルの子らの数は海の砂のようであるとしても、残された者だけが救われるであろう(一七)」。じっさい、その民のうちの残された者がキリストを信じたのであった。

(一)　ヨシヤは南王国ユダの王で、父アモンが暗殺されたのち八歳で即位した(在位は前六四〇年から六〇九年)。かれが成人に達したときは、アッシリアの衰退期にあたっていた。かれは宗教改革をおこなったが、政治的に見れば、それはアッシリアからの独立運動のひとつであった。かれは偶像破壊に着手したが、それはユダ王国内にとどまらず、かつての北王国イスラエルの聖所ベテルやサマリヤに

までおよんだ。やがて、バビロニアとエジプトとの対立抗争にまき込まれ、けっきょくヨシヤの政治的、宗教的運動は終わりを告げることとなる(「列王紀下」二三)。

(二) 南王国ユダにおいて多くの住民が捕囚となったのは前五八六年にはじまっている。

(三) 「エレミヤ書」一の三参照。

(四) 小預言者、大預言者については、本巻の第二十八章、第二十九章の本文にて述べられたが、ゼパニヤは前七世紀末の小預言者である。かれはヨシヤ王の改革およびエレミヤの預言活動に先立って預言活動をおこなった。

(五) 「ゼパニヤ書」一の一参照。

(六) 「哀歌」四の二〇。

(七) 「バルク書」三の三五—三七。

(八) バルクはエレミヤの預言の筆記者である。エレミヤの口述にしたがってその預言を巻物に記し、主の宮の上の庭でこれを民に読み聞かせたといわれる。

(九) 「エレミヤ書」二三の五以下。

(一〇) 同上、一六の一九。

(一一) 同上、一七の九。

(一二) 本書第十七巻第三章。

(一三) 「エレミヤ書」三一の三一。

(一四) 「ゼパニヤ書」三の八。

(一五) 同上、二の一一。

(一六) 同上、三の九—一一。

（一七）「イザヤ書」一〇の二二、「ローマ人への手紙」九の二七。

第三十四章

キリストと教会についてのダニエルとエゼキエルの預言について

さらに、バビロニアの捕囚がじっさいにおこった時代には、その当初、ダニエル(一)とエゼキエル(二)が預言をおこなったのであった。かれらのうちダニエルは、キリストが来られて、苦しみを受けられる時期を年数を示して明らかにしたのであった。これを計算によって証明するのは長くなるであろうし、また、それはわたしたちの以前に他の人によってなされていることである。しかし、キリストの権能とその教会についてはこのように語られているのである。「わたしは夜の幻のうちに見ていると、見よ、人の子のような者が、天の雲に乗ってきて、日の老いたる者のところにまで来ると、その前に導かれた。かれに主権と栄光と国とが与えられ、すべての民、種族、言語がかれに仕える。かれの権能は永遠の権能であって、それは移りゆくことがなく、その国は滅びることがない(三)」。

エゼキエルもまた、預言的な流儀で、ダビデによってキリストを表示している。なぜなら、キリストはダビデの子孫から肉を取られたのだからである（キリストは「しもべのかたち」によって人間となられたのであるが(四)、そのかたちのゆえに、かれは神の子とも神のしもべともよ

ばれるのである)。かれは父なる神に代わってかれのことを預言的につぎのように予告する。「わたしはわたしの家畜の上にひとりの牧者を立てる。かれはかれらを養う。それはわたしのしもべダビデである。かれはかれらを養い、かれらの牧者となるであろう。主なるわたしはかれらの神となり、わたしのしもべダビデはかれらのうちにあって君となる。主なるわたしはこれをいう(五)」。

そして、他の箇所ではつぎのようにいっている。「ひとりの王がかれらすべての者の王となって統治するであろう。かれらはこれ以上二つの民とならず、ふたたび二つの国に分れることはない。かれらはまた、その偶像、その忌むべきこと、そのもろもろの不義によって汚されることはない。わたしはかれらを、その罪を犯したすべての場から救い出して、かれらを清める。かれらはわたしの民となり、わたしはかれらの神となる。そして、わたしのしもべダビデはかれらの王となり、かれらすべての者のためにひとりの牧者となる(六)」。

(一) ダニエルは前七世紀から六世紀、「ダニエル書」の主人公である。前六〇五年にネブカドネザル二世の捕囚としてバビロニアに連れ去られたが、知恵にすぐれ、この異教の地にあっても正しい信仰を失わず、律法に忠実な生活を守り通した。

(二) エゼキエルは、前六世紀、ユダヤの預言者。前五九七年にユダ王エホヤキンと共にバビロン捕囚として移住させられ、五年後に預言者として召命を受けた。バビロニアにおいて二十年間預言活動をおこなったが、パレスチナ以外の地で活躍した最初の預言者である。エレミヤは精神的、内面的な面を強調したが、エゼキエルは比較的静かに教えるというかたちで活躍、祭司的立場から祭儀にも関心を

示し、のちのユダヤ教の成立に大きな影響を与えた。
(三)「ダニエル書」七の一三以下。
(四)「ピリピ人への手紙」二の七参照。
(五)「エゼキエル書」三四の二三以下。
(六) 同上、三七の二二以下。

第三十五章

三人の預言者――ハガイ、ゼカリヤ、マラキの預言について

捕囚の終わりに預言した三人の小預言者たちが残っている。ハガイ、ゼカリヤ、マラキである。これらのうち、ハガイはキリストと教会について、短かく、しかしきわめて明白に預言しているのである。「万軍の主はいわれる。やがてわたしは天と地と海と乾いた地とを震わせる。わたしはすべての国民(くにたみ)を震わせる。すべての国民(くにたみ)によって待ちこがれられていた者がくる(一)」。わたしたちはこの預言が部分的に成就したのを見ているが、部分的には終末に待望するのである。すなわち、キリストが受肉されたとき、かれは天使や星の証言によって天を震わせられたのであった。かれは、まさに処女降誕のうちにある重要な奇跡によって地を震わせられたのであった。キリストは島々や全地において伝えられたので、海や乾いた地を震わせられたので

あった。そのようにして、すべての国民が信仰へと揺り動かされたのをわたしたちは見るのである。けれども、それにつづく「すべての国民によって待ちこがれられていた者がくる」といわれているところのことにまできたとき、そのかたの最後の来臨が待望されているのである。そのかたが待望される者たちによって待ちこがれられるかたとなるために、かれはまず信ずる者たちによって愛されるかたでなければならないからである。

ゼカリヤはキリストと教会とについていう。「シオンの娘よ、大いによろこべ。エルサレムの娘よ、よろこびの声をあげよ。あなたの王はあなたのところにくる。かれは義しい王であって、救い主である。かれはいと貧しく、ろばに、ろばの子である仔馬にのる。かれの権能は海から海におよび、大川から地の果てにまでおよぶ(三)」。福音書のなかにこの預言が成就されたのを読むのであるが、それは主キリストが旅にこの種の荷を運ぶ獣を用いられたときである。この預言が、その箇所に十分に足りると見られるかぎりにおいて、そこに引用されている(三)。

他の箇所で、この預言者はキリストの血による罪の赦しについて、預言の霊によって語りかけている。「あなたはまた、あなたの契約の血によって、水のない湖からあなたの捕われ人たちを解き放たれました(四)」。かれがこの「湖」によって何が理解されるべきであるか、正しい信仰にしたがってもさまざまに判断されうるであろう。しかしながら、わたしには、乾き切った、いわば不毛の人間の悲惨さの深さという意味以上によりよい意味はないようにおもわれる。そこには義の流れはなく、不義の泥のみが存在する。これについては、たしかに『詩篇』のなかにも、「主はわたしを悲惨の穴(池)から、泥の沼から引き上げられた(五)」と述べられている。

マラキは、わたしたちがキリストをとおして拡げられたのを見ているところの教会について預言して、神の代弁者としてユダヤ人たちにたいしてこの上もなく明白に語っている。「わたしはあなたがたをよろこばない。あなたがたの手からささげ物を受けない。日の出るところから日の没するところまで、国々のうちでわたしの名は大いなるものとされている。また、どこでもわたしの名のために犠牲がささげられ、ささげ物が供されている。これは、わたしの名が国々のうちに大いなるものとされているからである、と主はいわれる」(六)。

わたしたちは、この犠牲がメルキゼデクの系列によるキリストの祭司職をとおして、日の出るところから日の没するところまで、至るところで神にささげられているのを見るのである。ところが、「わたしはあなたがたをよろこばない。あなたがたの手からささげ物を受けない」と告げられたそのユダヤ人たちは、自分たちの犠牲が絶えてしまったことを否定しえないのである。預言を読み、かつそれが成就したのを見ているその事実が、キリストご自身によるほかには成就されないのに、なにゆえユダヤ人たちはなおも別のキリストを待望するのであろうか。

そのすこしあとのところで、マラキは神の代弁者としていう。「かれとのわたしの契約は生命と平安との契約である。わたしは、かれが真にわたしを恐れ、わたしの名の前に畏れ敬うことをかれに与えた。真理の律法はかれの口にあり、平和のうちに導きながら、かれはわたしと共に歩いた。そしてかれは多くの者を不義から立ち返らせた。なぜなら、祭司の唇は知識をまもり、かれらはかれの口から律法を求めるからである。かれは全能の神の使者だからである」(七)。キリスト・イエスが全能の神の使者といわれたからといって、わたしたちはおどろいてはなら

ない。

というのは、かれが、それにおいて人間のもとに来られたその「しもべのかたち」のゆえに「しもべ」とよばれたのと同じように、かれが人びとに知らせられたところの福音のゆえに「使者」とよばれるのだからである。じっさい、このギリシア語を訳すならば、「福音」は「よき知らせ」のことであり、「使者」は「知らせる人」のことである。じっさい、キリストについてマラキはさらにいうのである。「見よ、わたしはわたしの使者を送る。かれはわたしの前で道を備える。あなたがたが求めているところの主と、あなたがたのよろこぶ契約の使者とが、たちまちその宮に来る。見よ、使者は来る、と全能の主はいわれる。その来る日にだれが耐ええよう。そのあらわれるときにだれが立ちえよう(八)」。

この箇所において、かれはキリストの最初の来臨と第二の来臨とを予告しているのである。すなわち、第一の来臨は、明らかに、「かれは、たちまちその宮に来る」というとき、それについていっているのであって、それはすなわち、ご自身の肉への来臨である。そのことにかんしては、福音書のなかでキリストが「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちにそれをおこすであろう(九)」といわれたのであった。他方、「見よ、使者は来る、と全能の主はいわれる。その来る日にだれが耐ええよう。そのあらわれるときにだれが立ちえよう」というのは、第二の来臨に即していわれているのである。「あなたがたの求めているところの主と、あなたがたのよろこぶ契約の使者」といっているところのことについては、預言者はまちがいもなく、ユダヤ人たちでさえ、かれらが読んでいるところの聖書にしたがってキリスト(メシア)を求め、

のぞんでいるということを意味している。

けれども、かれらの多くは、自分たちの求め、のぞんでいたところのかたが来られたことを認めなかったのであった。かれらは先立つ報いによって心が盲目になっていたからである。預言者は「契約」ということばを強調している。つまり、さきのところで「かれとのわたしの契約」といっており、ここではキリストのことを「契約の使者」とよんでいるのである。これは、疑いもなく、とこしえの祝福がそれにおいて約束された新しい契約のことと受けとるべきであって、たんに時間的な報いを約束した旧い契約のことではない。人びとの多くが、その弱さのゆえに、このような事物の報酬のために神に仕えるのである。そこで、かれらは、不信仰な者がそれらのものを豊富に得ているのを見るとき狼狽させられるのである。

同じ預言者が、善き者にのみ与えられるところの新しい契約の永遠の至福を、よこしまな者にもしばしば与えられているところの旧い契約の地上的幸福から区別しているのもこのことのゆえである。かれはいう。「主はいわれる、あなたがたはわたしに荒々しいことばをあびせかけた。しかもあなたがたは『わたしたちはあなたにどんな傷を与えたか』という。あなたがたはいった。『神に仕える者はすべて虚しい。わたしたちが神の命令をまもったからといって、そしてまた、全能の神の前に悲嘆しながら歩いたからといって、いったい何の益があろうか。いま、わたしたちは外国人を祝福された者としよう。不正をなした者たちはみな、ふたたび栄えている。かれらは神に逆らっていながら、無害とされている』。これらのことは、主をおそれる者たちによって、そのそれぞれの隣人に発せられたことばである。主はこれに耳を傾け、

これを聞かれた。そして、主をおそれ、その御名を敬う者たちのために、主の前に覚え書きが記録された(一〇)」。この書き物によって意味されているのは新しい契約のことである。

最後に、これにつづくところのことに耳を傾けたいとおもう。「全能の主はいわれる。わたしがそなえている日に、かれらはわたしのものとなるであろう。わたしは、人が自分に仕える子を選ぶようにかれらを選ぶ。あなたがたは身を転じなさい。そうすればあなたがたは、義しい者と不義なる者、神に仕える者と神に仕えない者とのちがいを見るであろう。見よ、その日は来る。かまどのように燃える日が来る。それはかれらを焼き尽くして、すべての異国人と悪しき者とはわらのようになる。来たるべき日がかれらを燃やし尽くす、と全能の主はいわれる。かれらには根も枝も残らない。

しかし、わたしの名をおそれるあなたがたには回復がある。あなたがたはおりから放たれた仔牛のように跳び出してよろこびはねまわるであろう。あなたがたは邪悪な者を踏みつける。かれらはわたしがおこなうその日に、あなたがたの足の下で灰のようになるであろう。主はこのようにいわれる」。これは審きの日といわれるのである。それについては、神がおのぞみであれば、適切な箇所でより十分に述べることにしようとおもう。

(一)「ハガイ書」二の六、七。
(二)「ゼカリヤ書」九の九以下。
(三)「マタイによる福音書」二一の五参照。
(四)「ゼカリヤ書」九の一一。

(五)「詩篇」四〇の二。
(六)「マラキ書」一の一〇以下。
(七)同上、二の五以下。
(八)同上、三の四。
(九)「ヨハネによる福音書」二の一九。
(一〇)「マラキ書」三の一三以下。

第三十六章

エズラとマカベア書について

この三人の預言者、ハガイ、ゼカリヤ、マラキのあと、民がバビロニアの隷属から解放された同じ時期にエズラも書を著わしたのであった。(一)かれは預言をおこなう者というよりも、むしろ史実の記述者として扱われる(「エステル記」とよばれる書がそうであって、この書には、神を賛美するため、この時期からそれほどへだたってはいないもろもろの出来事が見出されるのである)。さて、数名の若者たちのあいだでおこった問題にかんする論議のなかで、エズラがキリストのことを預言しているのではないかと解されるところがある。(二)その問題とは、もろもろの出来事のなかで、もっとも有力な要因は何であるか、というものである。ひとりは王であ

るといい、他の者は酒であるという。第三の者は女であるといったのであるが、それは、女たちは多くのばあいに王たちを支配したからであった。しかしながら、この第三の男は、真理がすべてのものにまさって勝利を得るものであることを証明したのであった。

わたしたちが福音書をよく見るなら、キリストが真理であられることを悟るであろう。[三] 神殿の再興ののち、この時期からアリストブロス[四]のときまで、王は存在せず、地方行政官(総督)が存在したのであった。この年代の計算は「正典」とよばれる聖なる書のうちには見出されず、「マカベア書」を含む他の記録のうちに見出される。[五] これらの書は、ユダヤ人のもとではそうではないが、教会によって正典として扱われている。キリストが肉のうちに来られる以前、神の法のために死に至るまでたたかって、苛酷で戦慄すべきわざわいのもとに耐えた殉教者たちの、荒涼たる、そして驚嘆すべき受苦のゆえである。

(一) エズラはバビロニア生れのユダヤ人で、祭司、学者でもあった。「エズラ記」、「ネヘミヤ記」の中心人物である。その書によれば、かれはアロンの家系に属する祭司で、バビロン捕囚から帰還するユダヤ人たちをエルサレムに導いた指導者であった(前四五八年または三九七年)。

(二) 「第一エズラ記」三の一—四の四一(外典)。

(三) 「ヨハネによる福音書」一四の六。

(四) アリストブロス(二世)は、ローマ時代のユダヤ人たちの王。アレクサンデル・ヤンネウス(前一〇三年—七六年)の息子で、ポンペイがその王国を奪うまで王であった。

(五) 「マカベア書」はアンティオコス四世、エピファネス治下のユダヤ教迫害を中心としたユダヤ教とヘレニズムとの抗争を扱った諸文書。マカベアと名のつく文書はギリシア語訳には四つある。それら

は外典・偽典として扱われる。

第三十七章

預言者は異教の哲学者たちに先行したことについて

　このようなわけで、その書がほとんどの民にすでに知られるようになっていたわたしたちの預言者の時代に、そしてそれからかなりのちに異教の哲学者たちが出て来たのである。わたしは哲学者という名称でよばれているところの哲学者たちのことをいっているのであって、それというのは、この名称はサモスのピタゴラスからはじまったからである。かれはユダヤ人たちが捕囚から解放された時代に有名となり、また認められるようになったのであった(一)。それゆえ、他の哲学者たちは預言者たちよりかなりのちのことであったことが知られる。事実、その当時のもっとも名の知られたすべての哲学者たちの師であって道徳哲学ないし実践哲学とよばれる分野において主要な位置にあったアテナイのソクラテスでさえ、『年代記』ではエズラのあとにおかれているのが知られている。ソクラテスの他の弟子たちよりもはるかにすぐれた人とされたプラトンの誕生は、さらにそれよりのちのことであった。

　かりに、わたしたちが、これらの哲学者たちに、まだ「哲学者」とはよばれなかったような初期の人びとを加えるとしても、これらの人びとでさえ時代の先行性という点では、わたした

ちの全預言者に先行することはない。初期の人びとというのは、七賢人やタレスのあとを継いで事物の自然本性の探求に熱心であることによってかれに倣った自然学者たち、すなわち、アナクシマンデル、アナクシメネス、アナクサゴラス、そして哲学者の名称を最初に得たピタゴラス以前の幾人かの人びとのことである。じっさい、他の人びとがあとにつづいたところのタレスは、ロムルスが支配していた時代に有名になったといわれている。それは、預言の流れがイスラエルの泉から全地にわたって流れるかれらの書のうちに噴出していたときであった。したがって、あの偉大な神学的詩人、オルペウス、リノス、ムサイオス、そしてギリシア人のうちにいただれか他の人びとだけが、[二]わたしたちがその書を権威あるものとしてもつところのヘブライ人の預言者よりも年代において先であったことが知られるのである。

しかし、これらの詩人でさえ、わたしたちの真の神学者、すなわち唯一の真の神を真実な仕方で公けに示し、また、その書が、わたしたちの権威ある正典において現在第一の場を占めているモーセよりも年代的に先行していたわけではなかった。[三]このようなわけで、ギリシア人にかんするかぎり、そして世俗の文芸がもっともはなばなしく開花したのはそのギリシアの言語においてであったけれども、かれらが自分たちの知恵をわたしたちの宗教——そこには真の知恵が見出されるのである——よりもすぐれているとはいわないまでも、すくなくとも、より古いと見られるということで喧伝する何の理由ももっていないのである。しかしながら、モーセの以前に、それはたしかにギリシアにではなく、たとえばエジプトのように異民族のうちにであったが、人びとの知恵といわれてもよいようなかなりの知識が存在していたことは認めねば

ならない。

そうでなければ、聖なる書のなかに「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれた」(四)といわれることがなかったであろう。確かに、かれはエジプトに生れてのち、パロの娘によって引き取られ養育されたそのときに、一般的な教養を与えられたのである。けれども、エジプト人たちの知恵でさえ、わたしたちの預言者の知恵よりも時代において先行することはできなかった。じっさい、アブラハムもまた、ひとりの預言者であったからである。(五)さらに、エジプト人たちがあたかも偉大なる女神のように死後に崇拝すべきであると見なしたイシスによって文字が伝えられる以前に、どんな知恵がエジプトに存在しえたのであろうか。さらに、イシスは、アブラハムの孫たちがすでに生れていたということが知られている時代にアルゴスを支配しはじめたイナクスの娘であると伝えられているのである。(六)

(一)　捕囚の終わりは前五三八年、ピタゴラスがその学派を創設したのは前五二九年、ソクラテスの生涯は前四六九年から前三九九年、プラトンの生涯は前四二八年から前三四九年である。なお、ピタゴラスについては、本書第八巻第一章、第二章を参照。

(二)　神学的詩人については本巻第十四章参照。

(三)　モーセによる出エジプトは前一二九〇年頃とされている。

(四)　「使徒行伝」七の二二。

(五)　「創世記」二〇の七参照。

(六)　本巻第三章参照。

第三十八章

その古さと真正性にたいする疑念のゆえに正典に入れられなかった書について

さらに、もっと昔にさかのぼるなら、わたしたちの父祖であるノアは、たしかにあの大洪水の以前に生存していたのであって、かれをひとりの預言者とよぶことは不当なことではないであろう。かれがつくり、それによってかれとその家族たちとが逃れたところのまさにあの箱舟が、わたしたちの時代のひとつの預言となったのであった。アダムから第七代目のエノクについてはどうであろうか。かれもまた、使徒ユダの正典となっている書簡において、預言したと伝えられているのではなかろうか。(一) しかし、これらの人びとの書がはなはだしく古い時代ののであるので、ユダヤ人によっても、わたしたちによっても、それらを権威あるものとして受け入れられることはなかった。時代があまりに古いために、真正性にたいして虚偽の要求が出されるのを恐れて、それらを偽典とするのが賢明であると見られたのである。というのは、これらの書には、識別をしないまま、自分たちが信じたいと願っているところのことを好みに合わせて信じる人びとによって真正な書であるとして持ち出されているいくつかのものが存在するからである。しかしながら、正典の純粋性はそれらを受けいれなかったのである。それは、神がよしとされた人びとの権威が拒否されたからではなく、これらの文書がその人びとのもの

であるとは信じられなかったからである。

これほど古いものであるという名目のもとに持ち出された書が偽典の取り扱いを受けているからといって、おどろく必要はないのである。たしかに、ユダヤの王やイスラエルの王の歴史のなかで、それもじっさいにおこった史実であって、それについては同じ正典の書によってわたしたちが信じているところのことがらであっても、その正典においては十分に説明されておらず、むしろ預言者たちが記した他の諸書に見出されるような多くのことが言及されているのである。あるばあいには、これら預言者たちの名も隠されてはいないのであるが、それにもかかわらず、これらの書は神の民によって受けいれられている正典のなかには見出されない。

わたしは告白するが、このことの理由はわかりかねるのである。ただ、わたしとして考えることは、とにかく聖霊がこれらの記述者にたいして宗教的権威に負うていることがらを啓示して、その記述者たちが、あるときにはひとりの人間として歴史的な探究に従事するという立場で書き、またあるときには預言者として神的霊感のもとに書く、ということであったのかもしれない。これらの書は区別されて、前者は記述者自身に帰せられるべきであり、後者はかれらをとおして語られる神に帰せられるべきであると判断される。このように、ひとつは知識の増大にかかわるものであり、他は宗教的権威にかかわるものである。正典はこの権威を保持するものとしてまもられたのである。正典の外部にある書は、たとえその書が真正な預言者の名のもとに持ち出されるとしても、知識を豊かにするという価値さえもってはいない。それらの書が属しているといわれている当の著者のものであるかどうか、不明確だからである。それらの

書に信頼が置かれないのは、このような理由からである。とくに、正典の諸書の信仰に反するようなことが読まれて、そのためにかれらのものでないことがまったく明らかなものについてはそうである。

(一)「ユダの手紙」一四。

第三十九章

ヘブライ語には当初から固有の文字があったということについて

このようなわけで、いくらかの人びとが、ヘブライ語は語ることばとしてのみヘベル(そこからしてヘブライ人という名がおこった)(一)によって保持され、かれからアブラハムへ手渡されたが、それにたいして、文字はモーセをとおして与えられた律法にはじまる、と考えているが、(二)これは信じられるべきではない。わたしたちはむしろ、ことばはその文字と相即して父祖たちのあの継承によってまもられてきたと信じるべきである。事実、モーセは、ヘブライ人たちが神の法の文字を知る以前に、民のうちに読み書きをするために指導する者を指定したのであった。これらの者たちは聖書では「グラマトエイサゴイ」(三)とよばれているのである。これはラテン語で「文字を誘導する者」(四)ないしは「文字を導き入れる者」(五)といってよいであろう。かれらは、文字を誘導する、すなわち、何らかの仕方で学ぶ者たちの心のうちに文字を導入する、あ

るいはむしろ、学ぶ者たちを文字へと導く、ということによるのである。

それゆえ、いかなる種族といえども、神の知恵がそこに内在するところのわたしたちの族長や預言者たちにまさってその知恵の古さを虚しくいいふらすべきではない。その学問の古さによって偽って虚しく誇るのをつねとしているエジプト人でさえ、かれら自身のどのような知恵をもってしても、わたしたちの族長の知恵よりも時代的に先行してはいなかったことが知られているのである。

じっさい、エジプト人たちは、かれらが文字を知る以前に、すなわち、イシスがその地へやって来てそれを教える以前に、(六) 著しい学識に習熟していたなどとあえて主張する者はいないのである。さらに、知恵という名でよばれているところの注目すべき学識についても、主として占星術やそれに類する他のことがらの教授以外に、どれほど大したことをしたのであろうか。それらはつねに、真正なる知恵によって人びとの心を照らすというよりは、むしろ人びとの才能をはたらかせるのに有効であったのみである。

じつに、人びとがそこからして幸福となるところのものを教えると公言する哲学にかんしても、トリスメギストゥスとよばれるメルクリウスのころであって、(七) その種のものがその地に目立つようになったのは、たしかにギリシアの賢人や哲学者たちのはるか以前のことであるが、しかし、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そしてモーセ自身よりも当然あとのことである。かの偉大な占星家でプロメテウスの兄弟であるアトランス(八)――かれはこのトリスメギストゥス・メルクリウスを孫とする大メルクリウスの母方の祖父であった――が生存したのは、モ

ーセの生れたころであることが知られている。

(一) ヘベルについては、さきにノアの長子セムの系列にかんする議論のところで紹介された。「ヘブライ人」がかれの名にしたがってそのように名付けられて、いわば「ヘベライ人」となったという伝承を、アウグスティヌスは述べたのであった(本書第十六巻第三章)。

(二) 例えばアレクサンドリアのクレメンス。

(三) γραμματοεισαγωγούς. このことばそのものは七十人訳の「申命記」(一六の一八、二九の二〇他)に出てくる。

(四) litterarum inductor.

(五) litterarum introductor.

(六) 本書第十巻第三十七章参照。

(七) トリスメギストゥスについては本書第八巻第二十三章参照。

(八) アトランス(またはアトラス)については本巻第八章参照。

第四十章

エジプト人の知識の古さにかんする根拠のない主張について

それゆえに、エジプト人が十万年以上も以前に星の理論を理解していたといって、ある人びとがエジプトの学の古さについて根拠のない推測をたてて弁を弄するのはまったく無益なこと

である。かれらがその教師であるイシスから文字を習ったのは二千年を上まわらなかった前のことであるから、いったい、どんな書のなかにその年数を数えあげることができたのであろうか。これはウァルロが報告してくれているところであって、かれは歴史について軽視できない権威である。そしてまた、かれのいっていることは、神的な文書の真理に矛盾していないのである。じっさい、わたしたちは、アダムとよばれた最初の人間からまだ六千年も経過してはおらないと考えているのに(一)、確実なこの真理にこのように異なる、そして相反する年数の間隔を説得しようとしているのであるから、かれらは論駁されるべきであるというよりも、むしろ一笑に付されるべきであるといわねばならない。

　わたしたちがすでにわたしたちの眼前におこっているのを見ているような未来についても予告した人びとが語っているのであって、そのような語り手に信頼をおく以上によりよいことがありえようか。じっさい、歴史家たちの不一致それ自体が、わたしたちの保持している神的な歴史に矛盾しないその権威(ウァルロのような)により大きな信頼をおくべきであるということの十分な根拠を提供してくれているのである。さらに、地上の至るところに拡がった不信仰な国の市民は、きわめて深遠な学識をもった人びとの書を読むのであるが、それらのどの権威も軽視することができないもののようにおもわれ、いまの時代の記憶からはるかに遠ざかった出来事にかんしてたがいに相違しているのを見出すのであって、かれらはそのいずれに信頼をおいてよいか知ることができないのである。

　それにたいして、わたしたちは、わたしたちの宗教に属する歴史が神的権威によって支えら

れているので、それに相いれないものはすべてまったく虚偽のものであることを疑わないのである。世俗的な文献のうちにある他のものは、どのようなものであっても、それが真実であるか虚偽であるかはともかく、わたしたちが正しく幸福に生きるために助けとなるような何の意義ももっていないのである。

（一）ここではアウグスティヌスは七十人訳の年数を採用している。それによれば、キリストの生誕は創造から五一九九年目におかれている。

第四十一章

哲学者たちの意見の不一致と聖書の調和について

さて、ここで歴史的な認識については通りすぎることとして、わたしたちがそこから本筋をそれることになったところの哲学者たち自身は、その探究において骨を折ったのであったが、しかしそれは、ひとが幸福を獲得するために適合した生をいかにしておくるべきであるかということ以外の何ごとも目ざしてはいなかったようにおもわれるのである。それでは、弟子がその師と一致せず、また弟子たち同志がたがいのあいだで一致しないのはなにゆえであるか。かれらが人間として人間的感覚や人間的推理力に頼って問い求めていったからではなかろうか。そこには、何らかの仕方で他人の見解に自己を委ねる者となるのではなく、むしろ自分自身

の教説や見解の案出者となって、各人が他の人よりもより賢明でより才知に長けていると見られたいという自己賞賛を熱心に求める気持があったのかもしれない。しかしながら、いくらかの人たちは、あるいはかれらのうちの大方の人たちは、真理への愛からして自分の師や弟子仲間から引き離されたのであって、それが真理であってもそうでなくても、自分が真理であると見なしたところのもののために争ったのだということをわたしは認めようとおもう。

わたしたちの著者たちは聖なる諸書の正典を確定し、限定づけたのであるが、それはいわれのないことではなく、すくなくとも、かれらのあいだに不一致があったなどとは考えてはならない。だからして、かれらがこれらの書を書いたとき、神がかれらにお語りになった、あるいは、かれらをとおしてお語りになったということが、学校や体育場で口論好きな議論にうつつを抜かしているたんなる一握りの連中によって信じられているのではなく、田舎においても都市においても、教養ある人によっても無教養な人によっても、かくも多くの人びとによって信じられているのも不当なことではないのである。

この著者たちは少数であった。それは、宗教に価値高くあらねばならぬところのものをあまりに沢山提供することによって安っぽくなるのを防ぐためであった。とはいっても、かれらが一致していることに何の不思議もないというほどの数の少なさであったわけではない。ものを書くのに苦労しながら自分の教説にかんする記録を残した多くの哲学者たちのあいだで、あらゆる点で意見の一致を見せている人びとを見出すようなことは容易ではないからである。このことを本書で示すにはあまりに時間がかかりすぎることになろう。

しかしながら、それがどのような学派であるとしても、ダエモンを崇拝するこの国において完全に是認されて、[一]それによってさまざまな、そして相反する意見をもった他の人びとがしりぞけられるに至ったような哲学の学派の創始者が存在するであろうか。アテナイ人はつぎのような学派をもっていたのではなかったのか。すなわち、人間的なことがらは神々の関心事には属さないと主張したエピクロス派、そして、その反対の見解を保持して人間的なことがらは助け手でありかつ擁護者である神々の導きと保護のもとにあると論じたストア派とである。だからして、わたしは不思議におもうのであるが、アナクサゴラス[二]が、太陽は燃える石であると語って、それが神であるということをまったく否定したという理由で告発されたのはなにゆえであるか、ということである。他方で、エピクロスは、太陽や他の何らかの天体が神であると信じることを拒否しただけでなく、ユピテルもほかのどんな神々も、人間の祈りや願望が達するような宇宙に住むことはけっしてないと主張して、同じ町で高名に輝き、静穏に暮したからである。

アテナイにおいてアリスティプス[三]は最高善を肉体的な快楽におき、同じ町でアンティステネスも人間はその魂の徳によって幸福になると論じたのではなかったであろうか。ここに二人の著名な哲学者が存在したわけであって、二人ともソクラテスの学徒であったが、生の最高のものを相異なって矛盾した目的においたのであった。ひとりは、賢者は国事を避けるべきであるといい、他のひとりは、賢者は政治的なことがらに参与すべきであるといったのである。かれらのいずれも、自分の学派をまもるために弟子たちを集めたのである。

明らかなかたちで、そして公然と、哲学者たちは人目につく有名な柱廊で、[四]体操場で、[五]小庭園で、[六]公的な、私的な場所で、それぞれ自分の見解を保持するために群れをなして争ったのであった。ある者は世界は一つであるといい、[七]他の者は無数の世界が存在するという。[八]ある者はこの一つの世界は存在しはじめるようになったといい、[九]他の者は世界のはじまりを否定する。ある者はそれは滅びるといい、[一〇]他の者はつねに存在するであろうという。[一一]ある者はそれは神の精神によって統宰されるといい、[一二]他の者は偶然の機会に依存するという。[一三]ある者は魂は不死であるといい、[一四]他の者はそれは可死的であるという。魂は不死であると主張した者のうち、ある者はそれはあらためて獣のなかにはいっていくといい、[一五]他の者はそのことをまったく否定する。他方、魂は可死的であると主張した者のうち、ある者はそれは肉体の死後すぐに死滅するといい、他の者は肉体の死後わずかの期間ないしはかなりの期間生きるが永久にではないという。ある者は究極的善を身体におき、[一六]他の者は精神のうちに、また他の者はそのいずれにもおいたのであった。ある者は外的な善を精神と身体とに加えたのであった。ある者は身体の感覚はつねに信頼されうるものであると考え、[一七]他の者はつねに信頼されうるとはかぎらないと考える。[一八]さらに他の者はそれはけっして信頼されうるものではないと考えるのである。[一九]

　哲学者たちのあいだに、これらの、そしてこのほかの数え切れないほどの見解の不一致があるのである。不信仰な国のどんな民が、どんな元老院が、政治的などんな権威やどんな職が、かつてこれら相異なる考えかたのあいだに判決を下そうとし、それらのあるものを是認し、受容し、他のものをしりぞけ拒もうとしたのであろうか。その国は、見解を異にする人びとの論

争を判断もつけないまま乱雑に胸のうちへ擁してきたのではなかったであろうか。しかも、これらの論争は、田畑や家、あるいは何らかの金銭にかかわる問題について不一致であったわけではなく、わたしたちが悲惨な生をおくるのか、それとも幸福な生をおくるのかということを決定するところのものについての不一致なのである。ここでは、何らかの真実が語られたとしても、虚偽の主張もまた同じ資格をもっているわけである。このような国がバビロンという象徴的な名を受けとるのもけっしていわれのないことではない。じっさい、すでにわたしたちが語ったのを想いおこすように、(二〇)「バビロン」は「混乱」と訳されるのだからである。矛盾対立する誤謬によっていかにたがいにたたかい合っても、それは、その国の支配者であるダエモンにとっては関心の外にあるのであって、この支配者は、かれらの多くの、そしてさまざまな不敬虔の功績に応じて、かれらの見解のすべてを等しく所有しているのである。

それとは対照的に、神の言葉が委ねられたところのあの民族、あの民、あの都、あの国家、あのイスラエル人たちは、たしかに偽預言者と真の預言者とを同等に認めてひとつに混合するようなことはなかった。かえって、たがいのあいだで一致し、何ら不一致を示さなかったこれら預言者たちは、聖なる書の真正の著者として認められ、また保持されたのであった。これらの預言者たちはかれらの哲学者なのであった。すなわち、人びとにとってかれらはまさしく知恵を愛する人であり、神学者、預言者、そして誠実さと敬虔の師なのであった。

かれらにしたがって賢明であり、生を生きた者はだれでも、たんなる人間によってではなく、これらの人びとをとおして語られた神によって賢明であり、生を生きたのであった。もしもこ

れらの書において神聖冒瀆が禁じられているとすれば、それは神が禁じられたのである。もしも「あなたの父とあなたの母を敬え」(二二)といわれているとすれば、神が命じられたのである。もしも「あなたは姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない」といわれているとすれば、これらのことやそのほかの同じようなことも人間の口によって発せられたのではなく、神のことばが託された者の口によって発せられたのである。

これらの哲学者たちのある者は、自分たちが考えた諸々の虚偽と並んで真実なものも見ることができたのであって、かれらは労苦の多い議論によってそれらの真実を悟らせようと努めたのであった。すなわち、神がこの世界をおつくりになったこと、ご自身が最高の摂理によってそれを統宰しておられること、徳の高貴さ、祖国への愛、友情の忠実さ、諸々のよきはたらき、品性ある習慣、に属するところのすべてのことにかんする真理である。とはいえ、かれらはなお、これらすべてのものがそれへと向けられるべき目的やその規準については無知であった。しかしながら、わたしたちのあの国においては、預言的な、すなわち神的なことば(それは人間によって伝えられたのではあるが)によって民に勧められたのであって、論争好きな議論によって教え込まれたのではなかった。そのため、それらのことを知るようになった者は、人間の才能がつくり出したものを軽蔑することを恐れたのではなく、神によって発せられたことばを軽蔑することを恐れたのである。

(一) ダエモン崇拝(daemonicola)については、同じことばをアウグスティヌスは『告白』のなかでも用いている(『告白』第八巻第二章)。

（二）本書第八巻第二章、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』二の八参照。
（三）本書第八巻第三章参照。
（四）ストア学派。
（五）アリストテレス。
（六）プラトンのアカデミアの森やエピクロスの庭園。
（七）プラトン、アリストテレス、ストア学派。
（八）アナクシマンデル、エピクロス学派。
（九）プラトンやそれ以後に出たフィロン。
（一〇）プラトンやストア学派の一部の哲学者。
（一一）ストア学派の汎神論。
（一二）ストア学派。
（一三）エピクロス学派。
（一四）プラトン。
（一五）ピタゴラス学派。
（一六）本書第八巻第七章参照。
（一七）エピクロス学派。
（一八）プラトン主義者。
（一九）新アカデミア派の懐疑論者たち。
（二〇）本書第十六巻第四章。
（二一）「出エジプト記」二〇の一一以下。

第四十二章

異邦人の益のために神の摂理によって旧約聖書がヘブライ語からギリシア語に訳されたことについて

エジプトのプトレマイオス家の王の一人も、この聖なる書を知り、それを所有したいとしきりに願ったのであった。この事情は以下のとおりである。――「大王」とも名付けられたマケドニアのアレクサンドロスの侵略は、けっして長くはない期間におどろくほどの勢力拡大をおこなったのであって、(一)東方の他の諸国のうち、ユダヤにもはいってそれを手に入れたとき、(二)かれはアジア全体、というよりもほとんど全世界を、ひとつには武力をもって、ひとつには恐怖をもって支配下に置いたのである。この大王の死ののち、かれの廷臣たちはこのひじょうに広大な帝国を自分たちのあいだで所有せんとして分割したのであるが、それは平和的な仕方によるものではなく、むしろ、それらすべての荒廃をもたらそうとして戦いによってその帝国を消散してしまったのである。そのときから、エジプトはプトレマイオス王朝のもとに属することとなり、ラゴスの息子であるところのその最初の王は、多くの捕われ人たちをユダヤからエジプトへ移したのであった。

しかしながら、かれの後継者で、別名フィラデルフォスともよばれているいま一人のプトレ

マイオス(三)は、最初のプトレマイオスが服従させて連れて来たところの人びとを自由にして、祖国へ帰還することをゆるしたのである。(四)それに加えて、かれは神の宮に王家の贈り物をおくって、当時の祭司長であったエレアザルあてに、ひろく知らされてたしかに神的な書であるという評判を耳にしていた聖書を送ってくれるよう求めたのであった。(五)かれはそれを、かれが建設した世に名高い図書館に入れたいと切望していたのである。祭司長がヘブライ語の写しを送ると、それにたいしてかれは翻訳者をも要請した。そこで、十二の部族からそれぞれ六名ずつ、二つの言語すなわちヘブライ語とギリシア語とにひじょうに秀でた七十二人の学者が送られた。現在、慣習によって確立されて「七十人訳(セプテュアギンタ)」とよばれているものがかれらの訳である。

伝承によれば、かれらの訳のことばにおける一致は、じつに不思議な、おどろくべきものであって、明らかに神によって霊を吹き込まれたものであるといわれる。それは、かれらがこの仕事に従事したとき別々に坐ったのであるけれども(というのは、そのようにしてプトレマイオスはかれらの信義をたしかめようとおもったからである)、同じ意味を表示したり、同じだけの重要さをもちうるような、ただの一つのことばにおいても、あるいは、ことばの順序においても、かれらのあいだに相違が見られなかったほどである。あたかもただ一人の翻訳者が存在したかのように、かれらの訳は一つのものとなっていたのである。かれらのすべてに一つの霊が存在したからであった。このようなわけで、かれらは神からのかくも不思議な賜物を受けたのであって、それは、このような仕方で、これらの聖書の権威が人間的な権威ではなく、神の権威であることが推奨されるためである。事実、それは神の権威なのである。そしてこれは、

いつかキリストを信ずるようになるであろう異邦人に益となるためであった。わたしたちはすでにこのことが果されているのを見ている。

(一) アレクサンドロス大王は前三三六年に王となり、前三二三年、三十二歳の若さで死亡した。
(二) アレクサンドロス大王のユダヤ侵入については、のちにこの巻の第四十五章においても触れられる。前三三二年のことである。
(三) プトレマイオス二世(通称フィラデルフォス)のこと。前二八五年から二四六年まで在位。プトレマイオス一世の子で、アレクサンドリアにファロス島灯台、ムセイオン(学士院)、図書館などを建設したということで知られる。
(四) ヨセフス『ユダヤ古史』一二の二、四参照。
(五) セプテュアギンタについては本書第八巻第十一章、第十五巻第十三章参照。

第四十三章

他のどの訳よりもすぐれていると見なされた七十人訳の権威について

かの聖なる神のことばをヘブライ語からギリシア語へ移した他の翻訳者たちがいたことはほんとうである。たとえば、アクィラ(一)やシュンマクス(二)、そしてテオドティオン(三)である。また、訳者が明らかでなく、そのゆえにそれは訳者不明の「第五版」とよばれているところのあの訳も

存在する。けれども、教会はこの七十人訳を唯一のものであるかのように受けいれたのであった。ギリシア語を話すキリスト教徒の民もそれを用い、かれらのほとんどが、何か他の訳があるかどうか知らない。この七十人訳からラテン語へ訳されたのであったが、ラテン語を用いる教会はそれを保有している。(四) もっとも、わたしたちの時代には、学識深く、三つの言語の精通者である司祭ヒエロニュムスをもつことになったのであって、(五) かれは同じ聖書をギリシア語からでなく、ヘブライ語からラテン語へ移したのであった。

ところで、ユダヤ人たちは、かれの深い学識にもとづく労苦の所産に信頼をおいて、七十人の翻訳者たちはいくつかのところで誤りをおかしている、と主張するのである。しかしながら、このような重要な仕事のために当時の最高の祭司であったエレアザルによって選ばれたこれほど多くの人びとの権威にたいしては、だれをも優先させるべきではない、というのがキリストの教会の判断である。なぜなら、それらの人びとのうちに、疑う余地もなく神の霊であるところの唯一の霊が現れなかったとしても、そして、七十人の学者たちが、人びとが習慣上よくおこなうように自分たちの訳語を相互に交換し合ってひとつにまとめ、かれらすべてによって是認されたものがそこに残ったとしても、かれらにたいしてただ一人の翻訳者が優先されてはならないからである。しかし、神性のしるしがかれらのうちに現れたのはこれほどに確かであるので、だれか他の人がこれらの聖なる書をヘブライ語から他のどのような言語へ訳するとしても、その人が真実な人であるなら、あの七十人の翻訳者たちと合致することであろう。もしも合致しないとおもわれるばあい、わたしたちは、預言の崇高さは他方の訳のうちにあると信じ

るべきである。

というのは、預言者たちが神のことばを語ったときにかれらのうちに存在したまさに同じ霊が、七十人の者たちがそれを訳したときにも、かれらのうちに存在したのだからである。その霊は、あたかも預言者が二つのことを語ったかのごとくに、神の権威によって他のことも語ることができたのである。というのは、両方を語ったのは同じ一つの霊だからである。霊はまた、同じことをちがった仕方で語ることもできたのであって、それらを正しく理解できる者には、ことばは同じでなくても、同一の意味が明らかになるためである。霊はあることを差し控えたり、あることを付け加えることもできたのであった。このようにして、翻訳者がその仕事においてことばに縛られて人間の奴隷的苦役によって成し遂げるのではなく、その仕事が、翻訳者の心を満たし導いたところの神の権能によってなされたことが示されるためである。

いくらかの批判者たちは、(六)七十人訳のギリシア語本はヘブライ語原典から改訂されねばならないと考えた。もっとも、かれらは、ヘブライ語原典にはなく、七十人訳に記載されているものをあえて除去することまではしなかった。ただ、ヘブライ語には見出されて、七十人訳には見出されないところのものを付け加えただけであって、それらの句の頭のところにアステリスクス(七)とよばれる星じるしを付すことによって、それらを示したのであった。他方、ヘブライ語には見られず、七十人訳によって記載されたものについては、同じようにして、その句の頭のところに水平の線を引いて、ウンキア(分数)(八)が書かれるときのようにしるし付けたのであった。多くのラテン語写本もこのしるしをもっており、ひろく行き渡っている。

しかしながら、省略されたり付け加えられたりしているのではなく、異なった仕方で表現されているものについて、つぎのことを知るには両方の本をよく見てみるのでなければ不可能である。すなわち、それが原典からかけ離れたものではないけれども何か他の意味を示そうとしているのか、それとも、それは異なった仕方で表現されてはいるけれども同じ意味を示そうとしているのか、ということである。それゆえ、もしもわたしたちが、これらの書のうちに人間をとおして神の霊が語ったもの以外の何ものも見ないとするなら、そしてわたしたちはそうするのでなければならないが、ヘブライ語本に見られて七十人の訳者のもとには見られないところのものはすべて、神の霊が翻訳者たちをとおしてではなく、預言者たちをとおして語ることをのぞまれたのだということである。

逆に、七十人訳に見られてヘブライ語本に見られないものはすべて、同じ霊が、預言者たちをとおしてではなく、むしろ翻訳者たちをとおして語るのをのぞまれたのだということであって、そのようにして両者とも預言者であることを示そうとしているのである。すなわち、霊はこのような仕方で、のぞむままに、あることをイザヤをとおして、他のことをエレミヤをとおして、また、他のことをそれぞれの預言者をとおして語ったからである。この霊は同じことを、この預言者、あの預言者をとおして異なった仕方で語ったのであった。さらに、両方の本に見出されるところのことはすべて、一つの同じ霊が両者をとおして語ることを欲したのであるが、しかし、そのようにして、前者は預言することによって先に立って示し、後者は預言的に翻訳することをもってそのあとにしたがったのである。なぜなら、真実と和合とをもって語ったと

き、平和の同じ一つの霊がその預言者たちのうちに現存していたように、たがいに協議し合うことはなかったけれども、なお一つの口によるのでもあるかのようにそのすべてを訳したとき、霊は明らかに翻訳者たちに現れたからである。

(一) アクィラについては、すでに本書第十五巻第二十三章における「創世記」の解釈にかんする箇所で触れられた。アクィラは二世紀前半、旧約聖書をギリシア語に訳した学者である(同上の箇所の注一三参照)。

(二) シュンマクスは二世紀の後半、旧約聖書を読み易いギリシア語に訳した。オリゲネス(一八五年—二五四年)は、ひとりのキリスト教徒である女性から、シュンマクスの書の写を得た。二〇〇年頃に書かれたものである。

(三) テオドティオンはテオドトゥスともよばれ、一八〇年頃にヘブライ語を参照して七十人訳を改訂した。

(四) アウグスティヌス『キリスト教の教え』二の二二参照。

(五) アウグスティヌスの生涯は三五四年から四三〇年までであり、ヒエロニュムスは三四六年から四二〇年までである。

(六) 例えばオリゲネス。

(七) asteriscus.

(八) ウンキア(uncia)はオンス(十二分の一ポンド)を示す。

第四十四章

ニネべの滅亡の意味について

しかし、だれかが「預言者ヨナがニネべの人びとにどのようにいったのか。『三日を経たらニネべは滅びる』といったのか、それとも『四十日を経たらニネべは滅びる』といったのか」(一)と問うかもしれない。じっさい、この預言者は、切迫していた滅亡にかんする脅威をもってその都市を恐れさせるために遣わされたのであるが、この両方のことがそのとき預言者によって語られなかったことを、だれが見ないであろうか。もしもそれが三日目に滅びることになっていたのなら、四十日目に滅びることはなかったのは確かであり、もしも四十日目に滅びることになっていたのなら、三日目に滅びることはなかったのは確かである。それゆえ、ヨナがこれらのうちのいずれを告げたのであるかとわたしに問われるなら、わたしはむしろ、これは、ヘブライ語写本に「四十日を経たらニネべは滅びる」と読まれているところのものであるとおもうのである。

それからずっとのちに仕事をした七十人の翻訳者たちは、たしかにそれとはちがったことをいうことができたのであった。けれどもそれは、そのことがらに関連したものであり、異なる表示によるものではあるけれども同一の意味において符合するのである。これは、読者がいず

れの本の権威も見下げることなく、たんなる歴史的事実の地平からみずからを起こして、その歴史的事実そのものがそのために書かれたところの意義を求めるよう促しているのである。たしかに、これはニネべの都市におこった出来事である。しかし、それはその都市の限界をこえた他のことをも意味するのである。それはちょうど、その預言者自身が三日間鯨の腹のなかにいたという事実と同じであって、それはなおも別のことを意味しているのである。すなわち、すべての預言者の主であられるかたが、三日間、陰府の深淵におられるであろうということである。

それゆえに、その都市によって異邦人の教会が象徴的に預言されていると受けとるのが正しいとすれば、すなわち悔い改めによって壊滅されて、かつてあったようなものではもはやなくなるということ、これは、ニネべによって象徴的に演じられている異邦人の教会において、キリストをとおして果たされたということ、とかいわれていることにおいて、まさにキリストご自身が意味されているとか、三日経って、とかいわれていることにおいて、――と受けとるのが正しいとすれば、四十日経って、キリストは復活されてのち四十日間その弟子たちと共にすごされ、それから天にのぼられたからであり、三日経って、といわれるのは、かれは三日目によみがえられたからである。

ただ歴史的事実にのみ固執することをしきりに願っている読者を、いわば七十人の翻訳者たちがそのまどろみから目ざめるよう刺激し、預言者たちはある意味で預言の深さをたずね求めるようにうったえているのである。要するにかれらは、「四十日のうちにそのかたをたずね求め

よ。そのかたにおいてあなたは三日をも見出すことができるであろう。前者をその昇天において、後者をその復活において発見するであろう」といっているのである。それゆえに、これら両方の数によって、そのひとつは預言者ヨナによって、いまひとつは七十人の翻訳者の預言によって、まったく適切な仕方で意味表示がなされているのである。そして、いずれも同じ一つの霊が語っているのである。

わたしはあまり長たらしくなるのを避けようとおもう。それで、七十人の翻訳者たちがヘブライ語本の真理からそれていると考えられて、しかも正しく理解されたときには一致しているのが見出されるような多くの例によってこのことを証明することは止めることにする。だからして、わたしも自分の分に応じて使徒たちの跡をたどるのであって、それというのは、使徒たち自身が両方から、すなわちヘブライ語本と七十人訳とから預言的な証言を引用しているのだからである。それで、両方を権威あるものとして用いられるべきであると考えたのである。両方は一つであり、神によるものだからである。しかし、いまは、わたしたちに残されているところのことを、なしうるかぎり追っていこうとおもう。

（一）「ヨナ書」三の四。ヘブライ語とウルガータでは四十日とあり、七十人訳では三日とある。

第四十五章

神殿の再興および預言者の不在の時期からキリストの生誕の時期に至るまでのユダヤ民族の不幸な運命について

ユダヤの民が預言者をもたなくなってのち、すなわち、バビロンにおける捕囚ののちに神殿が再興されて以前より良くなることが期待されていたまさにその時期に、かれらは以前よりも劣悪になったのであった。じっさい、肉によるその民は、預言者ハガイによって「主の家ののちの栄光は、前のよりも大きい」(一)と語られた預言をこのような意味に理解したのであった。しかし、これは、「わたしはすべての国民(くにたみ)を震わせる。すべての国民(くにたみ)によって待ちこがれられていた者がくる」(二)といっているところで明らかにキリストにかんする約束をおこなっているところで、新しい契約についていわれたことであることをすこし前に証明したのであった。

ここのところでは、七十人の訳者は別の意味を与えたのであった。それは、かれらの預言者的権威によって頭(かしら)にとってよりも、むしろからだにとって、すなわち、キリストにとってよりも、むしろ教会にとってふさわしい意味であって、つぎのようにいっているのである。「主によってすべての国民(くにたみ)から選ばれたところのものが来る」。この「もの」とは「人びと」のことであって、その人びとについてはイエスご自身が福音書のなかで、「招かれる者は多いが、選

ばれる者はすくない(三)」といっておられる。

すなわち、神の家は、新しい契約をとおして、諸々の民から選ばれた「生ける石」によって建てられるのである。(四)それは、ソロモン王によって建設されて捕囚ののちに再興されたところのあの神殿よりもはるかに栄光にかがやくものである。それゆえ、かの民はそのとき以後預言者をもたず、異国の王たちの手によって、さらにはローマ人自身の手によっても、数多くの不幸のもとに苦しめられたのであるが、それは、ハガイのこの預言があの神殿の再興によって成就されたのだ、などと見なすことのないためである。

そののち多くを経ないうちに、アレクサンドロスがやって来たので、(五)その民は征服されたのであった。かれらはあえて抵抗しようとはせず、したがって、まったく容易に服属して平和を受けいれたので、そこにはたしかに荒廃はなかったが、しかし、神の家はかつてかれらの王の自由な力のもとにあったときのような大きな栄光をもつことはなかったのであった。じっさい、アレクサンドロスは神の宮にいけにえをささげたのであったが、(六)かれは真の敬虔をもって神の礼拝へ回心したわけではなく、不信仰な虚栄によって、神を虚偽の神々と一緒に拝すべきだと考えていたのであった。

そののち、上において触れたことであるが、(七)ラゴスの息子プトレマイオスは、アレクサンドロスの死後、囚われ人をそこからエジプトへと移した。その後継者プトレマイオス・フィラデルフォスは、ひじょうな寛大さをもってかれらをそこから帰還させたのであって、すこしまえにわたしが語ったように、わたしたちが七十人訳の聖書をもつことになったのはかれによるの

である。次いでユダヤ人たちはマカベア書にくわしく記されているように、戦いによって消耗しつくしてしまったのである。そして、エピファネスともよばれるアレクサンドリアの王プトレマイオスによって捕囚とされた。さらに、シリアの王アンティオコスによって多くの、きわめて苛酷な不幸のもとにおかれて偶像崇拝を強いられ、その神殿自体は異教徒たちの冒瀆的で迷信的な儀式でみたされたのであった。(八) しかしながら、マカベウスともよばれるかれらの精力的な指導者ユダは、アンティオコスの将軍を敗走させ、あの偶像崇拝のすべての汚濁から神殿を浄化したのであった。(九)

ところが、それからまもなく、アルキムスとかよばれる人物が、(一〇) 功名心からであるが、祭司の家系ではないので本来は不可能であった大祭司となった。それからおよそ五十年の期間がつづいたが、そのあいだ、ユダヤ人はある点で繁栄を得たけれども、平和ではなかった。そのあと、アリストブロスが王冠を自分のものとし、ユダヤのあいだで最初に王と大祭司の両方をかねたのであった。

じっさい、それ以前、バビロニアの捕囚からの帰還と神殿の再興ののち、ユダヤ人は王をもたず、その代わりに司令官または州の統治者をもったのであった。事実、王たる者は首長権によって命令するがゆえに州の統治者とよばれうるのであり、また、軍の指揮者であるがゆえに司令官とよばれうるのである。しかし、州の統治者または司令官であるところの者が王ともよばれるということにはならないのであって、アリストブロス(一一)がそうであった。かれのあとをアレクサンドロス(一二)が継いだのであるが、かれもまた王と大祭司とを兼ねていた。かれは民にたい

して苛酷な支配者であったと伝えられる。かれのあと、その妻であるアレクサンドラがユダヤ人の女王となった。[二三] そしてかの女の時代からいっそう重い不幸がつづいたのであった。じっさい、アレクサンドラの息子たち、アリストブロスとヒルカヌスは支配権をめぐってたがいのあいだで争闘し、イスラエルの民に逆らってローマの武力にうったえたのであった。それというのも、ヒルカヌスが自分の兄弟に対抗してローマ人の助けを求めたからである。[二四] そのときにはすでにローマはアフリカを征服し、またギリシアをも征服していた。さらに、世界の他の諸地域の広範な支配者でもあった。しかし、ローマは、自分自身の重みを担うだけの力をもたないもののごとくに、ある意味で、自分自身の大きさによって難破していたのであった。

じっさい、内部での深刻な争闘となり、そこから同盟国との戦いへ進展し、そののちまもなく内乱となったのであって、はなはだしく力を減じ、疲弊していたので、君主によって統治される国家体制の変更がなされねばならない状態が切迫していた。それゆえ、もっともよく知られたローマ人の指導者ポンペイウス[二五]が軍隊と共にユダヤへ侵入して都市を奪ったとき、神殿を開きはしたが、それは祈願をささげることにもとづくものではなく、勝利者の権利にもとづくものであった。かれは大祭司のみ入ることがゆるされていた至聖所に近づいたが、それは、畏敬する者としてではなく、神聖を汚す者としてであった。かれは、ヒルカヌスを大祭司に認証し、アンティパトロスを総督という名でよばれていた管理者として隷従せしめた民の上に置いてのち、アリストブロスを拘束して連れ去ったのである。それからは、ユダヤもまたローマの属領となるのである。そのあと、カッシウスは神殿をも略奪した。[二六] それから数年経って、かれ

らは外国人のヘロデ(一七)を自分たちの王として持たされることになったが、キリストが生れたのはかれの治世のときである。すなわち、族長ヤコブの口をとおして預言の霊によって表示されていたときが満ちて、そのときがいまや到来したのであった。ヤコブはいう。「そのことが取っておかれたかたがやってこられるまで、王笏(君主)はユダを離れず、立法者の杖はその腰から離れることはない。そのかたはもろもろの民の期待である(一八)」。

このようにして、ユダヤ人たちの君主は、かれらが外国の王の最初のものとして受けいれたこのヘロデのときまで離れることはなかった。それゆえに、いまや新しい契約のもとに約束されたところのことが取っておかれたかたとして来られて、もろもろの民の期待となるべきときが到来したのである。忍耐の謙遜をもって裁きを甘受するためにやって来られたとき、もろもろの民がまずそのかたを信ずるのでなければ、その光り輝く権能によって裁きをおこなうためにそのかたが到来されることを期待するのは、そしてわたしたちはそのかたがそのように期待されていることを知っているが、不可能である。

(一)「ハガイ書」二の九。
(二) 同上、二の七、本巻第三十五章参照。
(三)「マタイによる福音書」二二の一四。
(四)「ペテロ第一の手紙」二の五より取られている。
(五) 前三三二年のこと。
(六) ヨセフス『ユダヤ古代誌』一一の八の五参照。

(七) 本巻第四十二章。

(八) ヨセフス『ユダヤ古代誌』一二の七の一―六参照。

(九) 「マカベヤ第一書」七の五以下、およびヨセフス『ユダヤ古代誌』一二の九参照。

(一〇) アルキムスはシリア王によって大祭司に指名された。エルサレムにおける非愛国的党派の指導者としてマカベウスに対抗した人物。

(一一) アリストブロスはヨハネス・ヒルカノスの息子で、ハスモン家の最初の王であった父親によって大祭司に任命され、父親の死後、ユダヤの統治者となった(前一〇六年)。

(一二) アレクサンドロス・ヤンネウス(前一〇二年から前七五年)。かれは軍の力を借りてパリサイ派を遠ざけた。

(一三) アレクサンドラが支配したのは前七九年から六九年までである。かの女が死んだとき、二人の息子すなわちヒルカノスとアリストブロス二世とのあいだで後継者争いが生じた。

(一四) 前六四年のことである。

(一五) ポンペイウス(前一〇六年から前四八年)はローマ共和政末期の政治家であり将軍である。かれはのちにシリア・ユダヤを併合した。

(一六) カッシウスではなく、クラッスス(前一一四年から前五三年)である。かれが神殿を略奪したのは前五三年のことである。

(一七) ヘロデ大王(前三七年から後四年在位)は、前四〇年にローマ皇帝アウグストゥスによってユダヤ王に任命され、前三七年エルサレムを陥れて、ユダヤの王として君臨、才能はあったが、残忍な行為もおこなった。

(一八) 「創世記」四九の一〇。

第四十六章

御言の受肉による救い主の誕生とユダヤ人の離散について

このようなわけで、ヘロデがユダヤにおいて支配していたが、ローマ人のもとでは国家の体制に変化がおこって皇帝の統治が世界的な平和を確立したとき、あらかじめ告げられた預言にしたがって、[一]キリストがユダヤのベツレヘムに生れられたのであった。かれは、目に見られるかたちとしては人間のおとめから出た人間であるが、隠れた現実においては父なる神から生れた神であった。これは預言者がつぎのように予告したところのことであった。「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルととなえられるであろう。これは『神われらと共にいます』と訳される」[二]。かれはかれ自身において神が知られるようになるため、多くの不思議なわざをおこなわれたのであって、そのうちのいくつかを福音書はかれのことを知らせるのに十分とおもわれるだけ保持しているのである[三]。

それらの最初のものは、このように不可思議な仕方で生れられたという事実である。また、それらの最後のものは、死者からよみがえったからだと共に天にのぼられたという事実である。しかし、ユダヤ人たちは、かれが死んでよみがえるよう定められていたゆえに、かれを信じようとしなかったのであるが、ローマ人の手によっていっそう悲惨な荒廃を蒙り、すでに外国人

の権力下にあったところの自分たちの王国から追い出され、根絶され、全地に離散したのであった(じっさい、至るところ、かれらが見出されないところはない)。かくして、かれら自身の聖書の証言によって、わたしたちがキリストについての預言をでっちあげたのではないという証しをわたしたちのためにもつことになったのである。かれらのうち多くの者が、キリストの受難のまえと、とくにその復活ののち、この預言を考慮して、かれを信じるようになったのであるが、かれらについて、「イスラエルの子らの数は海の水のようであっても、そのうちの残りの者だけが救われる」と予告されている。

しかし、あとの者はまったく盲目とされるのであって、かれらについてつぎのように予告されている。「かれらの前の食卓をわなとなし、罰とつまずきの石にしてください。かれらの目を暗くして見えぬようにし、かれらの背をつねに曲げてください」。それゆえに、ユダヤ人がわたしたちの聖書を信じないときに、かれらが盲目の目で読んだかれら自身の聖書が、かれらにおいて成就したのであった。もしかして、シビュラの名のもとに公けにされているところのキリストにかんするあの預言や、ユダヤの民にはかかわりのない他のだれかの預言——そういう預言があったとして——は、キリスト教徒によって虚構されたものである、と主張するかもしれない。

わたしたちにかんしては、わたしたちに敵対する者の諸々の書から提出されるもので十分である。というのは、かれらがこれらの書を所有かつ保持することによって、かれら自身の意に反してわたしたちに差し出されるこの証言ゆえに、わたしたちは、キリストの教会が至るとこ

ろへ拡げられていく、そのすべての民族にかれら自身も散らされていることを認めるのだからである。じっさい、かれらも読んでいる『詩篇』のなかに、まさにこのことについて前もって知らされている預言がある。それはつぎのように記されている箇所である。「わたしの神、そのあわれみはわたしを迎えられる。わたしの神はわたしの敵においてそれをわたしに示された。かれらを殺さないでください。かれらがいつかあなたの法を忘れるようなことがないために。あなたの力によってかれらを散らしてください(九)」。

このように、神は教会にたいしてご自身のあわれみの恵みをその敵対者であるユダヤ人において示されたのであった。それというのも、使徒がいうように、「かれらの過失は異邦人にとって救いを意味する(一〇)」のだからである。それゆえに神はかれらを殺すようなことはなさらなかったのである。——すなわち、かれらはローマ人によって征服され圧迫されたけれども、ユダヤ人としての存在を無にしてしまうことはなさらなかった。それは、かれらが神の法を忘れて、わたしたちが論じているところのことについての証言としての効力を失うことがないためである。それゆえに、「かれらを殺さないでください。かれらがいつかあなたの法を忘れるようなことがないために。あなたの力によってかれらを散らしてください」というだけでは不十分であって、「かれらを散らしてください」ということも付け加えねばならなかったのである。というのは、もしもかれらが聖書のこの預言と共に自分たちだけの地に住んで至るところに住んでいないなら、至るところに存在する教会は、かれらをあらゆる民のもとで、キリストについてあらかじめ与えられていたところの諸々の預言の証人として用いることはできないであろう

からである。

（一）「ミカ書」五の二参照。
（二）「イザヤ書」七の一四、「マタイによる福音書」一の二三。
（三）「ヨハネによる福音書」二〇の三〇、三一参照。
（四）すなわちヘロデ王の一族。
（五）紀元後七〇年にはそのような状態にあった。
（六）「イザヤ書」一〇の二二、「ローマ人への手紙」九の一七。
（七）「詩篇」六九の二二、二三。
（八）本巻第二十三章参照。
（九）「詩篇」五九の一〇、一一。
（一〇）「ローマ人への手紙」一一の一一。

第四十七章

イスラエル民族のほかに神の国の民は存在したのであるか

それゆえに、だれであろうと外国人が、すなわち、イスラエルの民の生れではなく、また、あの民によって聖書の正典の記録のうちに受けとられることもなかったような人が、キリストについて何ごとかを預言したことがわかって、わたしたちの知るところとなったか、あるいは、

わたしたちが知っていたなら、わたしたちはそれを、これまでの引用の上にさらに積み重ねて用いることもできるであろう。たとえそのようなものが現れなくとも、それがどうしても必要だというわけのものではなく、これらのことが他の民族にも啓示されて、その民族にもこれを予告するよう促された人びとが存在していたと考えることは不適当ではないのである。そのような人も、同じ恵みにあずかっていた人であろう。あるいは、それにあずかってはいないが悪しき天使らによって教えられていた人であるかであって、この霊も、ユダヤ人たちが認めなかったところのキリストが現に存在されたとき、このかたを認めたことをわたしたちは知っている[二]。

ユダヤ人自身も、イスラエルの兄[三]がしりぞけられてその系統が存在しはじめたかのときから、イスラエル人のほかにだれひとり神に属する者はなかったとあえて主張するとはおもわない。神の民という名を固有のものとしてよばれる民が他に存在しなかったというのはほんとうのことである。けれども、かれらは、他の民族のうちにも、地上的な結び付きによるのではなく、天上的な結び付きによって、真のイスラエル人すなわち上なる祖国の市民に属する者が存在したということを否定しえないであろう。なぜなら、このことを否定するとしても、聖なる、そしておどろくべき人物であるヨブの例によってまったく容易に確証されるからである。かれはその生れでもなければ、改宗者すなわち新しくイスラエルの民のうちに加えられた人でもなかった。かれはエドムの種族から出た人で、そこで生れ、そこで死んだのであった。かれの時代においてその義と敬虔についてかれと同等の者はだれもなかったという賞賛が、神的な語りに

よって与えられているのである。〔三〕わたしたちはかれの年代を『年代記』〔四〕のうちに見出さないけれども、かれの書――その書をイスラエル人たちはかれの功績のために正典の権威のうちに受けいれた――から、かれがイスラエル(ヤコブ)よりも三代のちの時期に属していたと推定している。この一つの例からして、他の民族のうちにも、霊的なエルサレムに属する者として神にしたがって生き、神によみせられた人びとが存在したことをわたしたちが知るのは、疑いもなく神のはからいである。

このことが、「神と人とのあいだのただ一人の仲保者、人なるキリスト・イエス」〔五〕について神的な啓示を受けとった人以外の他のだれかにも許されているとは信じるべきでない。このかたは、すでにその到来がわたしたちに知らされているとおりに、肉において到来されるであろうことが昔の聖徒たちに予告されていたのであって、このかたをとおして、同じ一つの信仰が、神の家であり神の宮であるところの神の民に定められているすべての者を神へと導くのである。しかし、イエス・キリストによる神の恩恵にかんするユダヤ人でない者たちの預言はすべてキリスト教徒のでっちあげと見なされるかもしれない。

したがって、それがどこの国であろうと外国人とこのことについて議論しようとするばあい、かれらをわたしたちの立場につかせるために論駁するには、かれらがほんとうに理解する眼をもっているなら、ユダヤ人たちの書に記されているキリストについての予告を持ち出すこと以上により確かな方法はないのである。かれらが自分の住む場所から追われて、この証言のために全地に離散したということによって、キリストの教会がいたるところで増大したのだからで

ある。

(一)「マタイによる福音書」八の二九、「マルコによる福音書」一の二四、「ルカによる福音書」四の三四。
(二) エサウのこと。エサウの弟ヤコブは神秘的な宗教体験ののち、名を「イスラエル」と改めた。
(三)「エゼキエル書」一四の一四─二〇参照。
(四) エウセビオスとヒエロニュムスの『年代記』。
(五)「テモテへの第一の手紙」二の五。

第四十八章

神の家の未来の栄光にかんするハガイの預言はキリストの教会において成就されたことについて

神のこの家は、木や石、そして他の高価な材料や金属で建てられたあの最初の家よりもいっそう大きな栄光をもつものである。したがって、ハガイの預言(一)は、あの最初の神殿が更新されることによって成就されたわけではなかったのである。というのは、更新されてからそれ以来、その神殿は、かつてソロモンの時代にもっていただけの栄光をもったとはけっして示されないからである。むしろ、かの家の栄光が減じられたことは、何よりも預言が止んだことにおいて、

次いでローマ人の手によっておこなわれた最後の破滅にまで至ったその民の大きな災いによって明証されているのであって、それは上に言及されたところのことからわかるとおりである。(二)

ところで、新しい契約に属するわたしたちのこの家は、それが、信じかつ新しく創られた者たち――生ける石たち(三)――によって建てられたものであって、これらの石がいっそう価値あるものであればあるだけ、より大きな栄光にかがやいている。それは、ほかならぬ預言者のことばによって「新しい契約」とよばれる第二の契約を象徴しているがゆえに、かの神殿の更新をとおして象徴されていたのである。それゆえ、神が、いま述べた預言者をとおして「わたしはその所に平和を与えよう(四)」と語られたとき、この「所」は象徴化されたものであり、それによって表示されているところの「所」が解されねばならない。そこで、再興される「その所」によって表示されているのはキリストによって建てられるべきであった教会である。「わたしはその所に平和を与えよう」というのは、ただ「わたしはその所が象徴的に示しているところのその場所に平和を与えよう」という意味にのみ受けとられるものである。

というのは、すべて象徴的な意味をもつものは、何らかの仕方で、それが表示しているところのものについての役割を演じているとおもわれるからである。たとえば、使徒によって「その岩はキリストであった(五)」と語られているのであるが、ここでいわれているその岩は、まちがいもなく、キリストを象徴したのであった。したがって、新しい契約のこの家の栄光は、旧い契約の以前の家の栄光よりもより大いなるものであり、また、それが奉献されるそのときには、いよいよ大いなるものとして見られるであろう。

というのは、そのときには、ヘブライ語本に読まれるように「すべての国民によって待ちこがれられていた者がくる」からである。かれが最初に到来されることは、まだすべての国民によって待ちこがれられたわけではなかった。なぜなら、かれらは信じていなかったからには、だれを待ちこがれるべきであるかを知らなかったからである。七十人訳においても（この書自身、預言的な意味をもっているのであるから）「すべての国民から主の選ばれた者がやってくる」とある。すなわち、そのときには、選ばれた者のみがくるのである。その者たちについて使徒は「世界のつくられる前からかれ（キリスト）にあってわたしたちを選び(六)」といっている。たしかに、「招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない(七)」と語った建築者自身が、それ以後はけっして倒壊の恐れのない家を明示しようとしているのである。それは、招かれてきたのであるが婚宴の席から放り出されたような者たちによって建てられたものではなく(八)、選ばれた者たちによって建てられたものである。けれども、いまは、教会は脱穀場でもみがらをふるいわける風によって分けられるような者によってみちているときである。したがって、この家の栄光は、そこにいる者たちがだれも、つねにいるようになるときに見られるであろうほどの輝きを見せているわけではない。

(一)「ハガイ書」二の七。
(二)本巻第四十五章。
(三)「ペテロへの第一の手紙」二の五。
(四)「ハガイ書」二の九。

（五）「コリント人への第一の手紙」一〇の四。
（六）「エペソ人への手紙」一の四。
（七）「マタイによる福音書」二二の一四。
（八）同上、二二の一一以下参照。

第四十九章

教会における選ばれた者としりぞけられた者との混合について

それゆえに、この邪悪な世においては、そしてこの悪しき時代においては、――そこでは、教会は、いまの自己を低めるということによって未来の高みを準備しつつあるのであり、また、もろもろの恐れの苦しみや悲嘆の痛み、そして労苦の重みや試みの危険によって訓育されているのであって、そのよろこびがすこやかなものであるときは、ただ希望によってのみよろこぶのである、――このような状況においては、しりぞけられた多くの者たちが善き者たちと混じり合っているのであって、両者はいわば福音の網によって集められているのである。[一] そして、この世においては、あたかも海におけるごとく、岸に到達するまで、すなわち、悪しき者たちは善き者たちから分離されて、善き者たちにおいては自分たちの宮に存在する者として「神がすべての者にあって、すべてとなる[二]」ときに到達するまで、両者は区別されることなく網に囲

まれて泳いでいるのである。それゆえ、わたしたちは、『詩篇』の「わたしは告げ知らせ、そして語った、『かれらは数えることができないほど多くなる』と」〔三〕といった人のことばをいまや認めるのである。かつて最初にその前触れとなった人ヨハネの口をとおして、次いでご自身の口をとおして「悔い改めなさい、天国は近づいたからである」〔四〕といわれて以来、このことがいまやおこっているのである。キリストは弟子たちを選ばれて、かれらを「使徒」ともよばれたのであった。〔五〕かれらはその生れにおいて賤しく、地位もなく、教育もない人びとであったので、かれらのうちに、あるいはかれらの行為のうちに偉大なものがあるとすれば、それらはすべて、キリストご自身がかれらのうちにあられて、かれらのうちにはたらかれるのである。

キリストはかれらのなかに一人の者をもたれたのであって、かれは悪しき者であったが善くお用いになった。〔六〕それは、ご自身の苦しみの定めを成就し、かつご自身の教会にたいして邪悪な人びとを忍耐すべきことの範を示されるためであった。その肉体的な存在をとおしてなさねばならぬかぎり、聖なる福音を蒔かれて、苦しみを受け、死んで、よみがえられたのであった。その苦しみによって、わたしたちが真理のために何を耐えねばならないかということを、また、その復活によって、わたしたちが永遠のうちに何を希望せねばならないかということを――罪の赦しのためにその血が流されたというその深遠なる秘義については何も語ることはないが――示されるためであった。

それからこの地上で四十日間弟子たちと共にすごされ、かれらの注視のうちに天にのぼられて、その十日後に約束しておられた聖霊をおくられたのであった。当時、信じていた者たちへ

の聖霊の到来についての最大の、そしてもっとも重要なるしるしは、かれらのだれもがあらゆる民族の言語で語ったということである。そのようにして、カトリック教会の一性がすべての民のうちに存在するであろうこと、そして、そこからしてすべての言語で語るであろうことを表示しているのである。

（一）「マタイによる福音書」一三の四七―五〇参照。
（二）「コリント人への第一の手紙」一五の二八。
（三）「詩篇」四〇の五。
（四）「マタイによる福音書」三の二、四の一七。
（五）「ルカによる福音書」六の一三。
（六）悪しき者が善用されることについては、のちに第五十一章において詳述される。

第五十章

福音の告知はその告知者の苦しみによっていっそう力づよいものとなったことについて

次いで、「律法はシオンから出、主のことばはエルサレムから出る」（一）というかの預言にしたがって、また、その復活ののち、いたくおどろかされた弟子たちに「かれは、聖書を悟らせる

ためにかれらの心を開いていわれた、『こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人のなかからよみがえる。そしてその名によって罪のゆるしを得させる悔い改めがエルサレムからはじまって、すべての民に宣べ伝えられねばならない』[二]という主キリストご自身の予告にしたがって、ことがなされたのであった。さらに、弟子たちがかれの最後の来臨について問い求めたとき、かれは答えていわれたのであった。「時期は、父がご自身の権能によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。けれども、聖霊があなたがたの上にくだるとき、あなたがたは力を受けとって、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、そして地の果てに至るまでわたしの証人になるであろう」[三]。教会はまずエルサレムから拡がって、ユダヤとサマリヤの多くの人びとが信じるようになると、他の民にもおよんだ。福音は、キリストご自身が灯火のように備えられた人びとによって伝えられたのであった。かれはことばによってかれらを調えられて、聖霊によって火をつけられたからである。キリストはその弟子たちに、「からだを殺しても魂を殺すことのできない者らを恐れてはならない」[四]といわれた。かれは恐れによって冷たくなることのないように愛（カリタス）の火によって燃えたのであった。

最後に、受難の前と復活のあとに、かれを見たり聞いたりした弟子たちによるのみならず、かれらの死ののちにも、あとにつづく者たちによって恐ろしい迫害やさまざまな責め苦、殉教者たちの死のなかに、福音は全世界に公けに知らされた。神はしるしや明証、力のさまざまなはたらきや聖霊の賜物によってそれを確証されたので[五]、もろもろの国民（くにたみ）は自分たちのあがないのために十字架にかけられたそのかたを信じるようになり、悪魔的な狂暴さによって流された

殉教者たちの血を、キリスト教的な愛をもって尊び、また、自分たちの法によって教会を荒廃させたほかならぬ王たちも、自分たちの救いのために、無情な仕方でこの地から除去せんとしたその御名に従うようになり、いまは虚偽の神々を――その神々のために真の神の礼拝者がこれまで迫害されてきたのであるが――迫害しはじめたのである。

(一)「イザヤ書」二の三。
(二)「ルカによる福音書」二四の四五以下。
(三)「使徒行伝」一の七以下。
(四)「マタイによる福音書」一〇の二八。
(五)「ヘブル人への手紙」二の四参照。

第五十一章

カトリック信仰は異端者たちによって鍛えられたことについて

しかしながら、ダエモンらの神殿が捨てられて、人類が自由を得させる仲保者の御名を求めて駆けよるのを見て、悪霊は、みずからキリスト教徒の名を担っていたけれども、キリスト教の教えに反抗するために異端者たちをそそのかしたのであった。かれらは、あたかも何の譴責もなくして無差別に神の国のうちに抱えられることができているかのごとくであって、それは

ちょうど、混乱の都市がたがいに異なって矛盾し合う見解をもつ哲学者たちを無頓着に保有していたのと同じである。(二)まさにこのように、キリストの教会には、ある不健全で歪んだことを考える者たちや、あるいは、健全で正しい考えをもつであろうという望みのもとに、譴責されても、頑強に拒否して、自分たちの有害で致命的な教えを正そうとはせずに、それをまもることに固執する者たち、――これらの者たちが存在したのである。かれらは異端者となり、別れて外へ出て行ったとき、それは教会を鍛えるのに役立つところの敵対者のうちに入れられるのである。

じっさい、そうであっても、かれらはその邪悪さによってキリストに属する真正なカトリックの肢体にとって益するものとなるのである。というのも、神が邪悪な者をも善用され、「かれを愛する者たちのために共にはたらいて万事を益となるようにしてくださる」(三)からである。すなわち、教会のあらゆる敵対者たちがいかなる誤謬によって盲目となり、邪悪さによって堕落しているとしても、かれらが身体的な仕方で苦しみをもたらす力を受けとっているときには、教会はその忍耐力を鍛えるのである。また、悪しき考えによって反抗されるときには、教会はその知恵を鍛えるのである。さらに、かれらは善意や慈善においてさえ教会を鍛えるのであって、それは、説得力のある教えのかたちをとるのであれ、あるいはきびしい教導のかたちをとるのであれ、敵対者におこなわれるときには、愛はかれらにたいしても示されるようになるためである。

このことによって、不信仰なあの国の首長たる悪魔でさえも、この世にあって旅をつづける

いのである。疑いもなく神の摂理は、教会が逆境の事態に面して砕けることのないよう幸せな事態を慰めとして与え、また、幸せな事態によって頽落することのないよう逆境の事態を訓育として与える。そのようにして、いずれかのことを他によって和らげるのであって、ここにおいてのみわたしたちは、『詩篇』の「わたしの心のうちにわたしの悲嘆が多くなるにしたがって、あなたの慰めがわたしの魂をよろこばせました(三)」といっているあのことばの源泉を認めるのである。ここから、使徒も「希望においてよろこび、患難に耐えなさい(四)」というのである。

じっさい、同じこの教師が「キリストにあって信心深く生きようとする者はみな、迫害を受ける(五)」といっているそのことばがいつか真実でなくなるようなときがあるのだ、などと考えてはならない。なぜかといえば、外部にいる者たちが粗暴ではなくなって静穏になったように見えたり、また、じっさいにそうなったりして、大きな慰めを——とくに弱い人びとに——差し出すとき、それにもかかわらず、内部には敬虔に生きている者たちの心を破滅的な習慣をもって苦しめるところの多くの者が存在するからである。そのような者たちゆえに、「キリスト教徒」や「カトリック」という名が損われているからである。この名が、キリストにあって信心深い生を生きたいとおもっている人びとにいとおしまれていればいるだけ、内部の悪しき者たちによって、信仰深い者たちの精神が切望するほどにはその名がいとおしまれていないことを悲しむのである。

異端者たち自身も、キリスト教徒の名と秘跡という名、および聖書と使徒信経を所有してい

ると考えられるとき、かれらは信仰深い者の心のうちに大きな悲しみを惹きおこすのである。キリスト教徒でありたいと欲している多くの者たちが、かれらの不和によってとまどいをおぼえさせられるのもこのゆえである。また、中傷する多くの者たちは、異端者のうちに、キリスト教徒の名を損うような材料を見いだすのもこのゆえである。というのも、これら異端者たちもある仕方でキリスト教徒とよばれているのだからである。このような、あるいはこの種の不面目な行為や人間の誤謬のために、キリストにあって敬虔に生きたいと願う者たちは、身体的な暴力や身体上の苦痛を忍ぶことはないけれども、迫害を受けるのである。

じつにかれらは、この迫害をその身体に受けるのではなく、その心に受けるのだからである。だからして、『詩篇』は、「わたしの心のうちにわたしの悲嘆が多くなるにしたがって」といっているのであって、「わたしのからだのうちに」といっていないのである。しかしさらに、神の約束は不可変と考えられる。そしてまた、使徒は、「主は御自身の者たちを知っておられる。というのは、主はあらかじめ知っておられた者たちを、御子のかたちに似たものとしようとしてあらかじめ定めてくださったからである」[六]という。これらのうちのだれも滅びることはありえない。だからして、『詩篇』で「あなたの慰めがわたしの魂をよろこばせました」とつづけているのである。悪しきキリスト者あるいは偽りのキリスト者の行為によって迫害される信仰深い者の心のうちに生じるその悲しみは、それが愛（カリタス）から出ているからには、悲しむ者たちにとって益となるものである。かれらを苦しませる者らが滅びること、他の人びとの救いを妨げること、このようなことを願うような考えをのぞまぬ愛である。

最終的に、そのような人びとの矯正からさえ大きな慰めが生じるのである。この慰めは、敬虔なる者たちの魂に溢れるのであって、それは、自分たちの滅びのことを考えたときにかれらを苦しめたところの苦痛と同じほどの大きさの悦びを伴うものである。このように、教会は、この世にあって、この悪しき時代にあって、巡礼の旅をつづけているのである。その旅は、キリストが肉において現存された時代および使徒たちの時代からはじまっただけではなく、不信心な兄弟によって殺された最初の義なる人、アベルからはじまって、この世の終わりに至るまで、世の迫害と神の慰めとのあいだにつづいていくのである。

(一) 混乱の都とはバビロンのこと。第十六巻第四章参照。
(二) 「ローマ人への手紙」八の二八。
(三) 「詩篇」九四の一九。
(四) 「ローマ人への手紙」一二の一二。
(五) 「テモテへの第二の手紙」三の一二。
(六) 「ローマ人への手紙」八の二九。

第五十二章

十回の迫害ののち、反キリストの時代になお一回おこるとされる迫害について

それゆえに、わたしは、若干の人びとがかつて考えたり、あるいはいまなお考えているつぎのことを無造作に口にしたり信じたりすべきではないとおもうのである。――教会は、反キリストの時代までに、すでに忍んできた数、すなわち十回をこえて、(一)それ以上に迫害を受けることはないのであって、かれらは、最初の迫害はネロによって、第二はドミティアヌスによって、第三はトラヤヌスによって、第四はアントニヌスによって、第五はセヴェルスによって、第六はマクシミヌスによって、第七はデキウスによって、第八はヴァレリアヌスによって、第九はアウレリアヌスによって、第十はディオクレティアヌスによっておこなわれたと数えるのである。

かれらはつぎのように想定する。すなわち、神の民がエジプトの地から脱出をはじめるまえに、エジプトの十の災いがあったという事実は、反キリストの最後の迫害を象徴的に示すものであって、これは、エジプト人がヘブライ人を執拗に追ったとき紅海で滅んだあの第十一回目の災い(二)――神の民は乾いた地を渡ったのであるが――に相応するものと見なされるべきである、ということである。しかしながら、わたしは、エジプトにおけるこれらの出来事が迫害の預言的な象徴であったわけではないと考える。このように考える人びとは、それぞれの場合についで正確に、そして精巧に比較対照しているように見えるが、しかし、かれらはそれを預言的霊によってなしたのではなく、人間精神の推理によってなしたのであって、それは、ときとして真実に至ることもあろうが、ときとして的はずれとなることもある。

このように考える人びとは、主ご自身が十字架にかけられたところの迫害にかんして何かい

もしもかれらが、数えられるべき事例は、ただからだにかんするもののみであって、頭(かしら)が襲われ殺された事例は除外さるべきであるとして、この迫害は数のうちに入れないと考えるなら、キリストが天にのぼられてのちにおこった事例についてはどうなるのであろうか。それはエルサレムでおこったことであった。そこでは至福者ステファノは石で打たれたのであった。ヨハネの兄弟ヤコブは剣で虐殺されたのであった。使徒ペテロは殺されるために投獄され、天使によって救い出されたのであった。信者仲間たちは敗走し、エルサレムから散らされたのであった。のちに使徒パウロとなったサウロは教会を荒らしたのであった。サウロ自身、かつてかれが迫害していた信仰を伝えるようになったとき、かつてかれがおこなったのと同じようなことを受けたのであって、それは、ユダヤにおいても他の民族においても、かれが熱情に燃え立ってキリストを告げ知らせたいずれのところにおいてもそうであった。

うべきものをもっているのであろうか。その数のどこにそれを入れるつもりであろうか。

教会が成長していくにつれて、そのすべてを述べるにはあまりに長くなるであろうような、この上もなく恐るべき迫害のなかでネロの時代に至ったのに、なにゆえにネロから順序立てていくべきであるとおもわれたのであろうか。もしもかれらが、王たちによっておこなわれた迫害を数のうちに入れるべきであると考えるのなら、主の昇天ののちにも、もっとも苛酷な迫害をおこなったヘロデもまた王であった。さらに、かれらが十のうちに数え入れていないユリアヌスについて、どのように答えるのであるか。この人物は、キリスト教徒たちに、自由学芸を教えたり学んだりすることを禁じて教会を迫害したのではなかったろうか。

かれのもとで、かれのあと第三代目の皇帝となった大ヴァレンティニアヌスは、キリスト教信仰を告白する者となったが、軍隊の地位を奪われたのであった。わたしは、ユリアヌスについて、ひとりのきわめて信仰深くかつ確固とした若者にたいしておこったことを除いて、アンテオケでしようとしたところのことを省略しようとおもう。多くの人びとが捕えられて拷問にかけられたとき、この若者はまずはじめにそれを受けて一日中苦しめられたのであるが、かれが鉤爪（かぎ）のあいだに裂かれて苦しんでいるあいだ、賛美のうたをうたいつづけていたのであった。皇帝は、かれの自由で晴朗なことにいたくおどろいて、畏敬の念に打たれて、他の者を迫害するときいっそうの不面目で赤面させられるのではないかとおそれたのであった。最後に、わたしの記憶によれば、さきに触れたヴァレンティニアヌスの兄弟でアリウス派のヴァレンスは、東方の地方において、大きな迫害によってカトリック教会を荒らしたのではなかったろうか。

教会が成長し、全地にわたって果実を実らせるようになったとき、他の民族のあいだでは同じ迫害を受けないときにも、ある民のあいだでは王たちから迫害を受けることがあったと考えないのは、どういうことであろうか。また、ゴート人の王がゴートの王国においておどろくべき残忍性をもってキリスト教徒たちを迫害したとき(七)、そこにはカトリック教徒のほかには存在しなかったというので、それは迫害とは見なされてはならないということであろうか。これらの多くは殉教の冠をかぶせられたのであった。それは当時、そこにおいてまだ子どもであったが、それらの出来事を見たことを猶予なく想いおこしたある兄弟から耳にしたことである。

ペルシアで最近おこったところのことについてはどうであるか。キリスト教徒にたいする迫

害が沸騰し(すくなくともそれはすでに沈静したとしても)、かなりの逃亡者たちがそこ(ペルシア)からローマの城市へ逃れてきたのではなかったろうか。[八]

これらのこと、あるいはこの種のことについておもいめぐらすとき、わたしは、教会が鍛えられるために受けねばならなかった迫害の数に限度が付せられうるとはおもわない。けれどもまた、キリスト教徒たちが疑っていないところのあの最後の迫害は別として、王たちによる他の迫害がおこるであろうと断定するのもすくなからず性急なことである。したがってわたしは、いずれの側にもそれを支持したり反対したりすることなく、この問題について決定を下すことは控えるのである。ただ、これらのいずれかに決定を下すような大胆な推定を放棄するにとどめよう。

(一) 十の迫害については、アウグスティヌスの友人でもあったオロシウス(四世紀から五世紀の司祭、歴史家)にはじめて見られる。キリスト教徒はつねに公けに認められない党派として追及を受け、また、皇帝礼拝の拒否ゆえに迫害の対象となった。しかし、それらは一般に、局部的で一時的なものであった。ネロの攻撃(六四年)はローマに限定されていたとおもわれるが、そこではキリスト教徒は火の犠牲者となった。「黙示録」は明らかに皇帝礼拝の拒否ゆえのドミティアヌス(八一年から九六年)のもとにおける迫害に触れている。トラヤヌス、アントニヌス、セヴェルスは直接迫害をおこなった者とされているわけではないが、マクシミヌスはセヴェルスの寛容な政策を逆転させた。帝国における大規模な迫害はデキウス帝のもとでおこなわれた(二五一年)。ヴァレリアヌスも政情不安のなかで迫害を命じた。ディオクレティアヌスは三〇三年、突如キリスト教迫害を命じ、教会の破壊や聖書などの焚書をおこなった。

（二）「出エジプト記」一四の二三以下参照。
（三）「使徒行伝」七の六〇参照。
（四）同上、一二の二参照。
（五）同上、一二の四―一一参照。
（六）同上、一二の一参照。
（七）三七〇年のことである。
（八）四二〇年のことである。

第五十三章

最後の迫害の時期について

反キリストによって加えられるであろうあの最後の迫害は、たしかに、現存されるイエスご自身によって絶やされるであろう。というのは、「かれは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう（一）」と記されているからである。ここでは、「それはいつおこるのか」という問いがつねに出される。けれども、この問いは適切なものではない。これを知ることがわたしたちに益をもたらすのなら、弟子たちがキリストに訊ねたときに、師である神ご自身にまさってよりよく答えるかたがいたであろうか。

かれらはキリストのそばにいたとき、それについて黙していたのでなく、かれご自身に問うていったのであった。「主よ、あなたがイスラエルのために国を復興なさるのはこの時ですか」[二]と。しかし、かれは「時期は、父がご自身の権能によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない」と答えられた。この答えを与えられたとき、かれらはけっして時間や日、あるいは年について問うたのではなく、時期について問うたのである。それゆえ、この世に残されている年数を数えたり、それに限界を付したりしようとすることは虚しいことであって、それというのは、これを知ることは、わたしたちのおこなうところではないということを真理の口からきいているからである。しかし、ある人たちは、主の昇天と最後の来臨とのあいだには、四百年、五百年、あるいは千年あると主張したのであった。

かれらのそれぞれが、自分の見解をどのように根拠づけているのかということを示すことはあまりに長くなろう。また、その必要もないことである。というのは、かれらは人間の推測を用いて、正典となっている聖書の権威から決定的な証言を引いているわけではないからである。事実、このことについて、かかる計算をおこなうすべての者にたいして、「あなたの指をゆるめて、休ませなさい」と命じられているのであって[三]、これは、「父がご自身の権能によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない」といっておられるかたが命じられたのである。

しかし、これは福音書のことばであるがゆえに、多くの偽りの神々を拝する者らが、キリスト教がどれほど長くつづくのであるか、ダエモンの答えによって明らかにしようとすることを

抑止しなかったのも不思議ではない。これらの異教徒たちは、キリスト教がかくも大きな迫害によって一掃されることがなく、かえってそれによっておどろくほどの増大を遂げたのを見たとき、それがどこから出たのであるかは知らぬが、ある種のギリシア語の詩句を考え出したのであって、それはいわば、伺いを立てた者にたいして与えられる神託のことばのごときものである。そのなかで、かれらは、冒瀆という違反の申し立てからキリストを無罪としているのではあるが、しかし、ペテロが魔術を用いて、(四)キリストの御名が三百六十五年間崇められるであろうということ、また、その年数が満たされればすぐに終わりにするようにしたこと、を付け加えているのである。

何という博学なる心であることか。キリストを信じようとはしないのに、キリストについてそのようなことを信じる高い教養のある才知よ。弟子であるペテロがその師から魔術を学んだことはなかったのであるが、それにもかかわらず、師のほうは無罪で、弟子のほうが魔術をおこない、その魔術的技巧で、自分自身の名よりもキリストの御名のほうが崇められることを好んだというのである。それも、みずから労苦と危険とをはらって！　もしもペテロが魔術師として、世界がそれほどキリストを愛するようにしたのなら、無罪のキリストをしてこのように自分を愛せしめるためにいかなることをおこなったのであろうか。

したがって、かれらは自分自身で答えるがよかろう。そして、できるのなら、あの上からの恩恵によって世が永遠の生命のためにキリストを愛するようになったということを悟るがよかろう。そして、ペテロが永遠の生命をキリストから受けとるため、また、かれのために一時の

死を受けるほどにまでキリストを愛するようになったのは、その恩恵によるのである。さらに、このようなことを予告することができても、それを避けることのできない神々はどんな神々であるのか。この神々は、一つの魔術、および一つの冒瀆的な魔術的行為――かれらのいうのには、それによって一歳の子どもが殺され、切り裂かれて、忌まわしい儀式で葬られたのである(五)――に屈し、けっきょく、自分たちに敵対する側の人びとをしてこのように長い期間にわたって力を加えさせ、これほどの多くの大きな迫害の恐るべき残忍さにも抵抗によらず忍耐によってなお存在させ、自分たちの像や神殿、儀式や神託を投げ倒させるに至ったのである。

最後に、このような罪ある行為によってそそのかされ、強いられて、このようなことを与えることになったところの神はだれであろうか。それはたしかにわたしたちの神ではなく、かれらの神であるが。――というのは、この詩句がわたしたちに知らせるごとく、ペテロが自分の魔術を用いてその期間を定めたのは、何らかのダエモンにたいしてでなく、ある神にたいしてであった。キリストをもたない者らがもっている神とは、このような神なのである。

(一) 「テサロニケ人への第二の手紙」二の八。
(二) 「使徒行伝」一の六以下。
(三) 指で数えることはこみ入った経過のことであった。
(四) ペテロの魔術については、次の第五十四章および第二十二巻第二十五章にも出てくる。
(五) キリスト者は、しばしば嬰児殺しのかどで責められた。

第五十四章

キリスト教は三百六十五年以上はつづかないであろうと主張する異教徒の愚かな虚言について

もしもその年月がまだ過ぎ去っていないなら、わたしたちはこれと同じような他の多くの議論を積み上げることができるであろう。その議論とは、虚構された占いによって予告され、ひとを惑わす愚劣さによって信じられている年にかんするものである。じっさい、キリストの御名の礼拝は、かれの肉における現存、および、その使徒たちによって確立されたときからはじまって、すでに三百六十五年はいくらか前に完了しているのである。それなら、なにゆえにこの虚言を反駁するために他の論拠を求めねばならないのであろうか。わたしたちはこの期間の出発点として、キリストの生誕をとることはできない。なぜなら、その幼年時代や少年時代にはかれはまだ弟子をもっていなかったからである。かれが弟子をもちはじめたそのときから、キリスト教の教えと宗教は、疑いもなくかれの肉による現存をとおしてひろく知られるようになったのである。それはすなわち、ヨハネの奉仕によってヨルダン川で洗礼を受けられてのちのことである。

このゆえに、かれについてかの預言が先行しているのである。「かれの支配は海から海へ、

川から地の果てまで及ぶであろう」[一]。けれども、かれの受難と復活のまえには、キリスト教信仰はまだすべての人びとにとって明確なものとなっていたわけではなかった(もちろん、復活においては明確なものとなったのであって、なぜなら、使徒パウロがアテナイ人に語ってこのようにいっているからである。「いまや、神は、どこにいる人でも悔い改めねばならないことを命じておられるときである。なぜなら、神は、死者からかれをよみがえらせ、すべての人にその信仰を示されたかたによって、義をもってこの世界をさばくために日を定められたからである」[二])。

したがって、このことはこの問題を解くために、わたしたちによい出発点となるであろう。とくに、そのときにも聖霊が与えられたからである。それはちょうど、第二の律法、すなわち新しい契約がそこからはじまるべきであったところのあの国において、キリストの復活ののち聖霊が与えられるべきであったごとくである。すなわち、旧い契約とよばれる第一の律法はモーセをとおしてシナイ山から来たのであるが、それにたいして、キリストをとおして与えられるべきであったこの第二の律法にかんしては、「律法はシオンから出、主のことばはエルサレムから出る」[三]と予告されているからである。

だからして、キリストご自身もいわれたことであったが、悔い改めは、かれの御名において民のあいだに伝えられなければならないのであるが、それはエルサレムからはじまるのである[四]。このようにして、十字架につけられ、よみがえられたイエス・キリストを人びとが信じるようになるために、この御名の礼拝がはじまったのはエルサレムにおいてであった。この信仰はエ

ルサレムにおいて熱と化したのであって、数千人の人びとがおどろくほどの迅速さをもってキリストの御名に回心するという注目すべき開始ぶりであった。(五) かれらは、自分たちの持ち物を貧しい人びとに分配せんとして売り払い、聖なる決意と燃えあがる愛とによって、みずからのぞんで貧しさを得、ユダヤ人たちの血に渇いたざわめきにかこまれながら、武装された力によってでなく、より力づよい忍耐によって、死に至るまでも真理のためにたたかう備えをなしたのであった。

もしもこのように成し遂げられたことがいかなる魔術的なわざにもよらないのであれば、なにゆえ異教徒たちは、これと同じことが、ここではたらいた神の力によって全世界に成し遂げられると信じるのをためらうのであろうか。かりに、エルサレムにおいてかくも多くの人びと――その人びとはキリストを捕えて十字架にかけたり、捕えたときに嘲笑した人びとである――が、キリストの御名の礼拝に燃え立たせられたのがペテロの魔術的なわざによるものだとしても、三百六十五年が終わりとなるときには、その出発点となる年そのものがいつであるかということが問われなければならない。さて、キリストは二人のゲミヌスが執政官であったときの四月二十五日に死んだのであった。(六)

かれは、使徒たちが自分たちの体験にもとづいて証明しているように、それから三日目によみがえられたのであった。それから四十日ののち、かれは天にのぼられた。そして十日ののちに、すなわち復活ののち五十日目に、聖霊をおくられたのであった。そのとき、使徒たちの宣教によって三千人の人びとが信じたのであった。(七) したがって、わたしたちが信じかつ真理がそれを

保持しているように、御名の礼拝がおこったのはそのときである。それは聖霊のはたらきによるものである。しかし、愚かな不敬虔は、それがペテロの魔術的なわざによるものと虚構したり考えたりしたのである。

また、すこしのちに、ある乞食が、生れつきかたわであったので施し物を乞うために他の人びとによって運ばれて神殿の入口のところに来たのであるが、このペテロのことばに接し、キリストの御名によって癒され、自分の脚で跳びはねたとき、この不思議なわざを見て、五千人の人びとが信じたのであった。[八] それからのち、教会は信じる人びとの数がつぎつぎと増えて成長して行ったのである。このことによって、あの年の出発点となった日も推定されるのである。すなわち、聖霊がおくられた日は五月の十五日[九]である。

それゆえに、執政官を数えてみることによって、三百六十五年はホノリウスとエウテュキアヌスの職任期であったその同じ十五日に満ちたことがわかるのである。[一〇] さらにその翌年、マリウス・テオドルスが執政官であったとき、[一一] ダエモンらの神託や人びとのつくり話にしたがえばキリスト教はすでに存在しなくなっていたはずである。しかもなお、わたしたちが知っているように、アフリカのもっともよく知られた、そしてもっとも重要な都市カルタゴにおいて――他の地方で何がおこったか調べる必要はないが――皇帝ホノリウスの廷臣であったガウデンティウスとヨウィスとが、四月の暦の十四日前に虚偽の神々を破壊し、偶像を砕いたのであった。[一二]

そのときから今日に至るまで、ほとんど三十年のあいだに、[一三] キリストの御名を礼拝する者がどれほど増えたか、だれか見ない者があるであろうか。とくに、あの占いの予言をあたかも真

なるものであるかのように考えて、さきには信仰から阻止されていたが、その年数が満ちたのちに、それが愚かなたわごとであることを知って多くの人びとがキリスト教徒となったことを。――それゆえ、キリスト教徒でありかつキリスト教徒とよばれているわたしたちは、ペテロを信じるのではなく、ペテロが信じたところのそのかたを信じるのである。わたしたちはキリストにかんするペテロの説教によって教化されるのであるが、ペテロの呪文によって毒されはしない。わたしたちはかれの魔術によって欺かれるのではなく、かれの善行によって助けられるのである。このキリストは永遠の生命へ導く教えによってペテロの師であられたのであって、そのかたはわたしたちの師でもあられるのである。

しかし、いまやわたしたちはこの巻を閉じなければならないときとなった。わたしたちは、二つの国、すなわち地の国と天上の国について、その歴史のはじめから終わりまで入り混じりながら、この可死的条件のうちにいったいどのような進展をもったのか、わたしたちに十分と見られるかぎり明示してきたのであった。それらの国の一つ、地の国は、それが欲するとおりに、どのようなものからでも、人間たちからさえ、虚偽の神々を自分たちのためにつくったのであって、その神々に犠牲をささげて仕えたのであった。他方、いま一つの国、すなわち、この世にあって旅をつづける天上の国は、虚偽の神々をつくらず、かえってそれは神によってつくられて、それ自身が神の真の犠牲となるのである。

しかしながら、これら二つの国は、最後の審きによって分けられるまで、異なった信仰、異なった希望、異なった愛（アモール）をもって、同じようにこの世的な善を用い、同じようにこの世的な

悪に苦しむのである。そして、それぞれがけっして終わることのない終わりを受けとるのである。これら二つの国の終極について次に論じなければならない。

(一)「詩篇」七三の八。本書第十七巻第八章参照。
(二)「使徒行伝」一七の三〇、三一。
(三)「イザヤ書」二の三。本巻第五十章参照。
(四)「ルカによる福音書」二四の四七。
(五)「使徒行伝」二の四一参照。
(六)三月二十五日のことである。
(七)「使徒行伝」二の四一参照。
(八)同上、三の一以下参照。
(九)キリストの十字架上での死が三月二十五日、三日目によみがえり、それから数えて五十日目が五月十五日となるわけである。
(一〇)三九八年。
(一一)三九九年。
(一二)三九九年の三月十九日とされている。
(一三)アウグスティヌスがこの巻の執筆を完了したのは、けっきょく四二六年から四二九年(三九九年に三十年を加える)の頃と推定されることになる。

アウグスティヌス 神の国(四) 〔全5冊〕

1986年6月16日 第1刷発行 ©

定価700円

訳 者 服部英次郎(はっとりえいじろう)
藤本雄三(ふじもとゆうぞう)

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・製本 法令印刷